

第242図 小豎穴出土の石器 (1/3 4065:1/9 4066~4075:1/2)

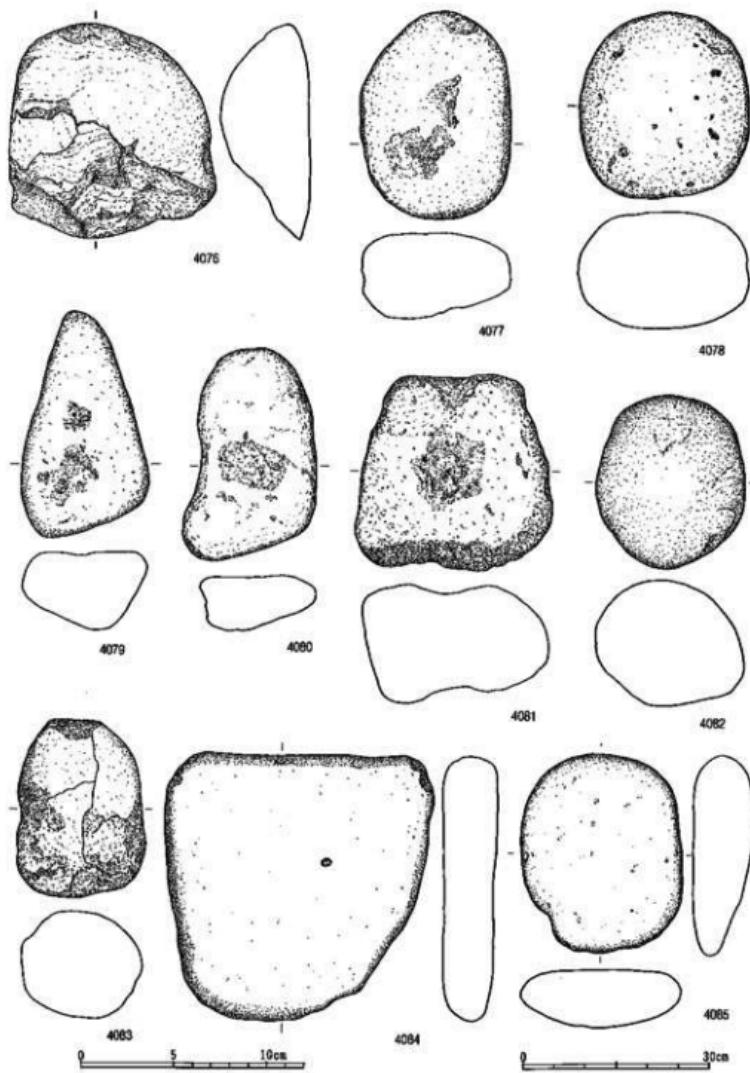
4060~4075:13号小豎穴 4061~4063:7号小豎穴 4064:34号中近世小豎穴

4065:14号小豎穴 4066~4070:9号小豎穴 4071~4072:3号小豎穴

4073~4074:11号小豎穴 4075:13号小豎穴

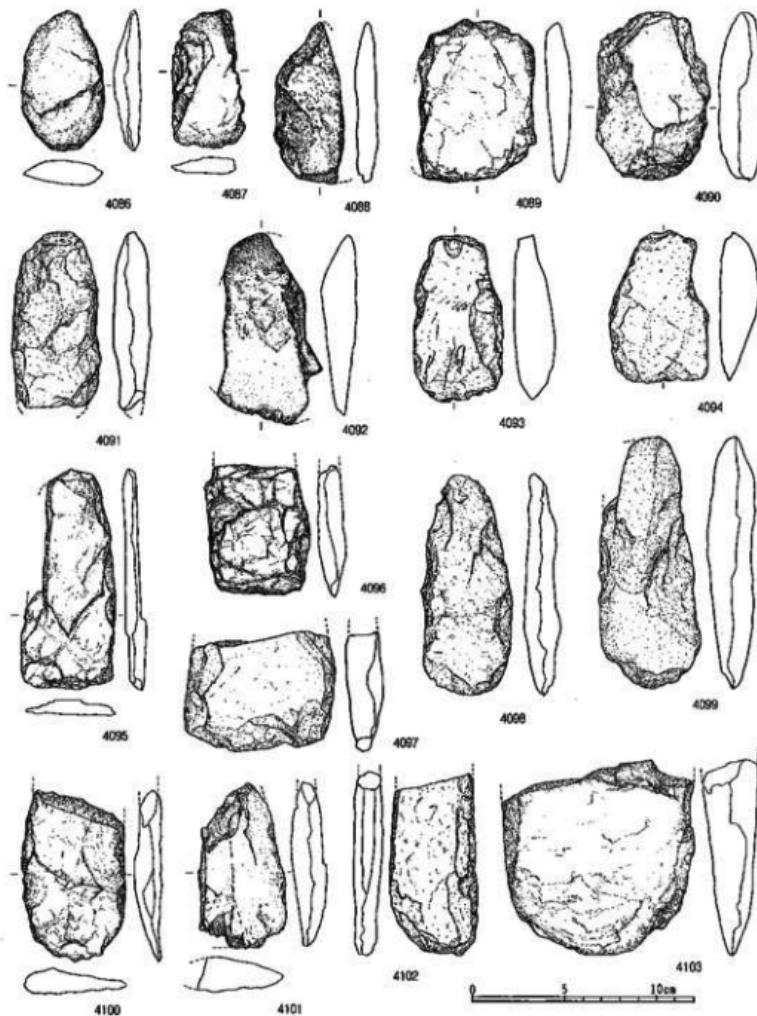
4060~4061:輝石安山岩 4062~4065:輝石角閃石安山岩 4066~4069~4071~4075:黒曜石

4070:珪質頁岩 4063:鈍頭鉛綠色岩 4064:閃綠岩



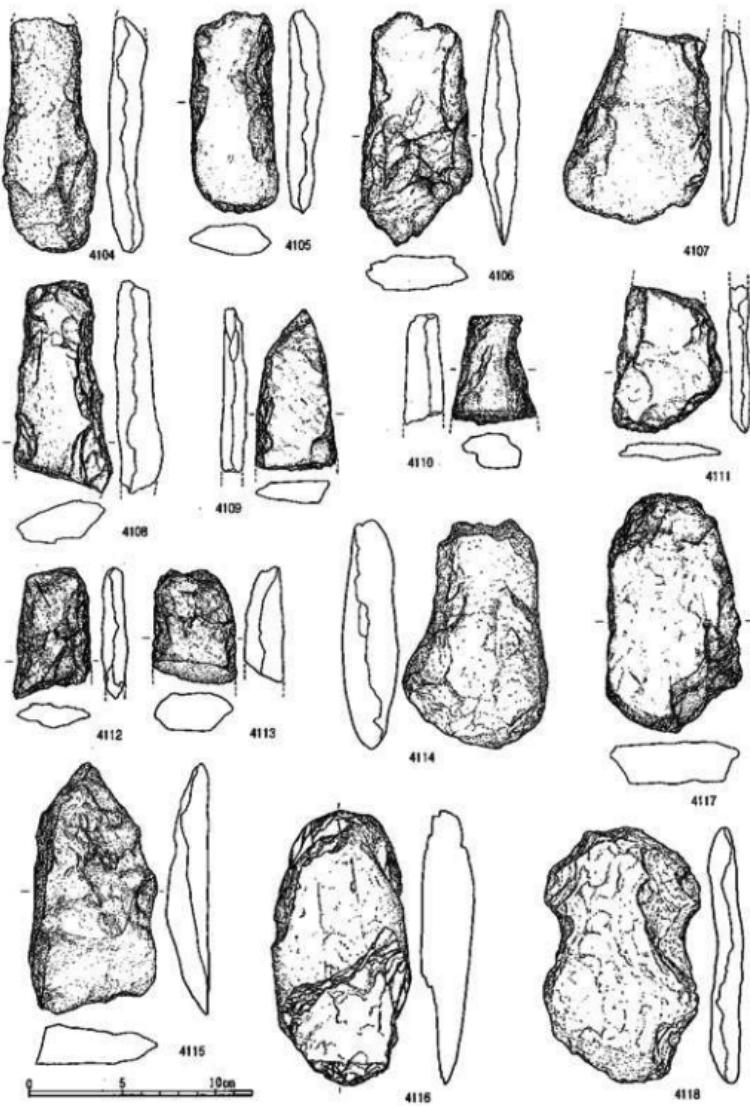
第243図 2号住居址内集石中の石器 (1/3 4085:1/9)

4076: 硬砂岩 4077-4081-4082-4085: 鹿石角閃石安山岩 4079-4083-4084: 海緑岩 4078: 鹿石安山岩  
4080: 緑泥片岩



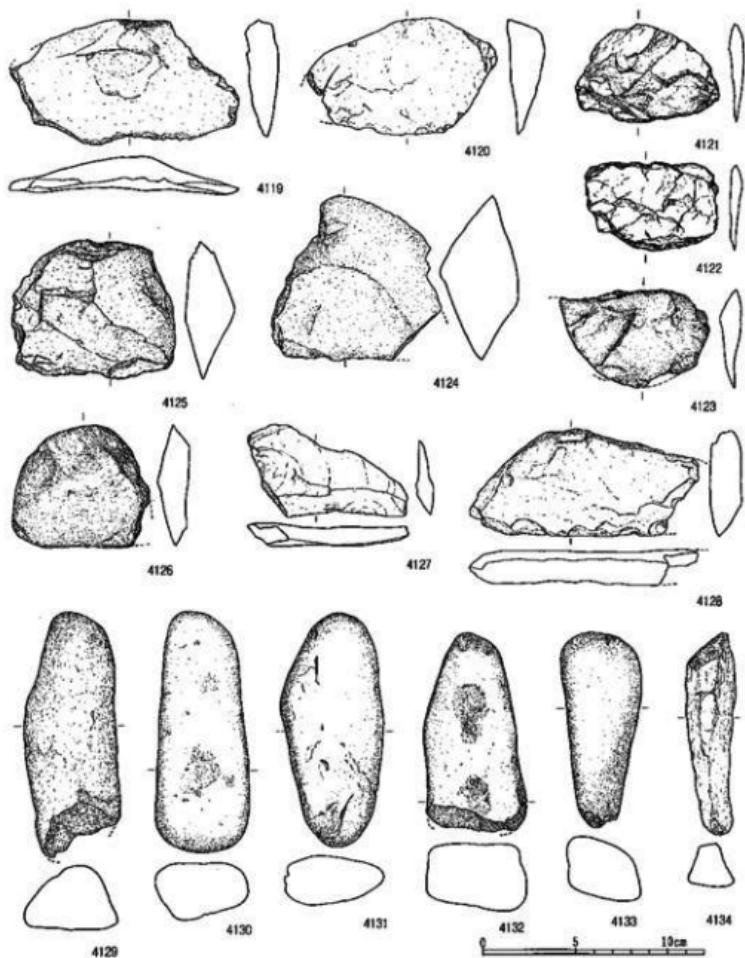
第244図 遺構外出土の石器 (1/3)

4086-4093・4096: 粘板岩 4087: 砂岩質ストレート 4088: 砂岩質ホルンフェルス  
 4089-4095: 粘板岩ホルンフェルス 4090-4092・4094-4097-4099-4100-4101: 硬砂岩  
 4103: ホルンフェルス



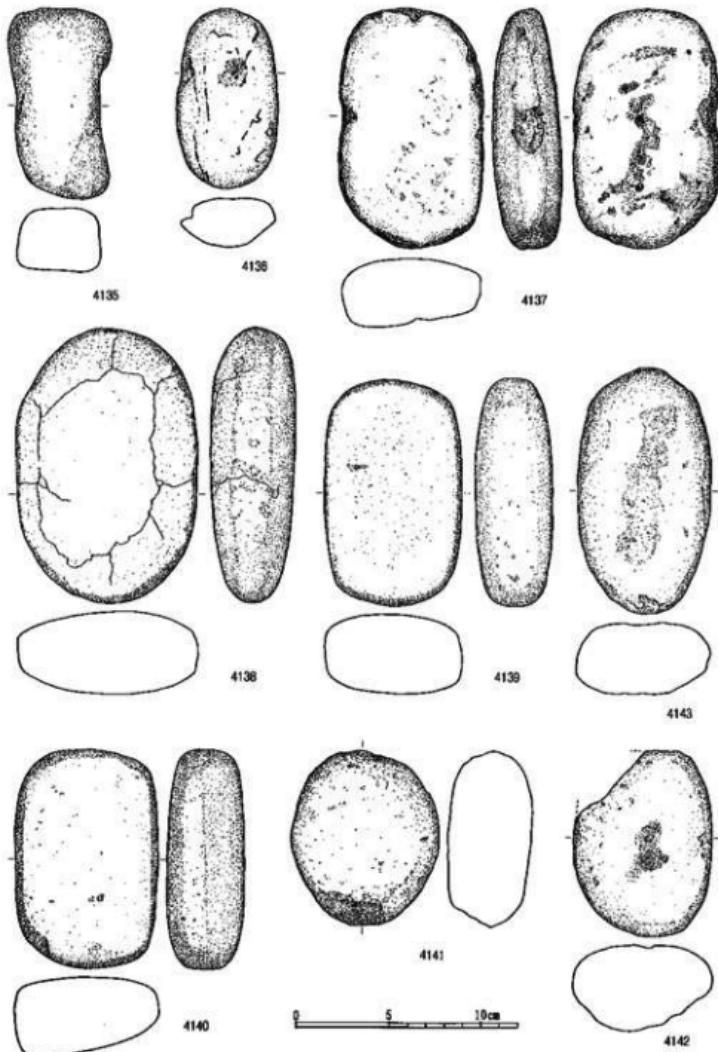
第245図 遺構外出土の石器 (1/3)

4104-4105-4107-4109-4111-4113-4117-4118: 硬岩  
4106-4108-4114: 粘板岩ホルンフェルス  
4110: ホルンフェルス 4115-4116: 粘板岩



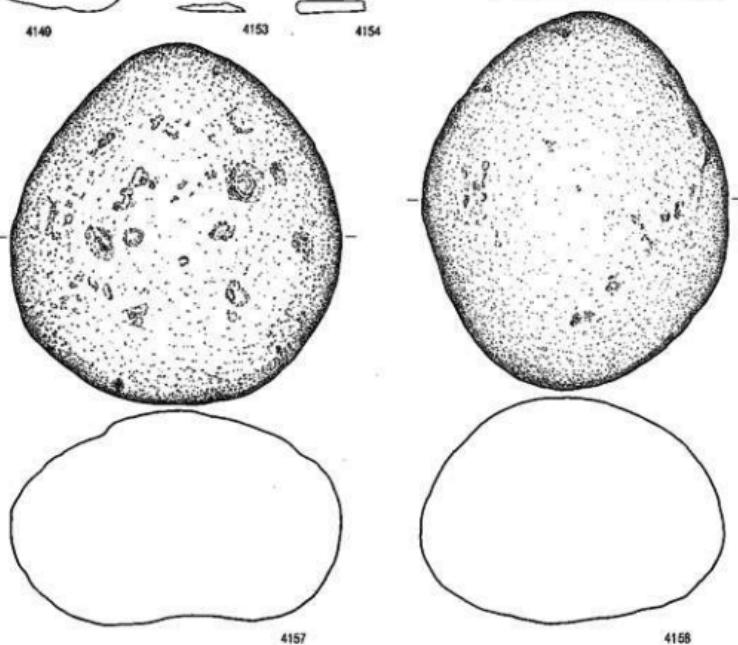
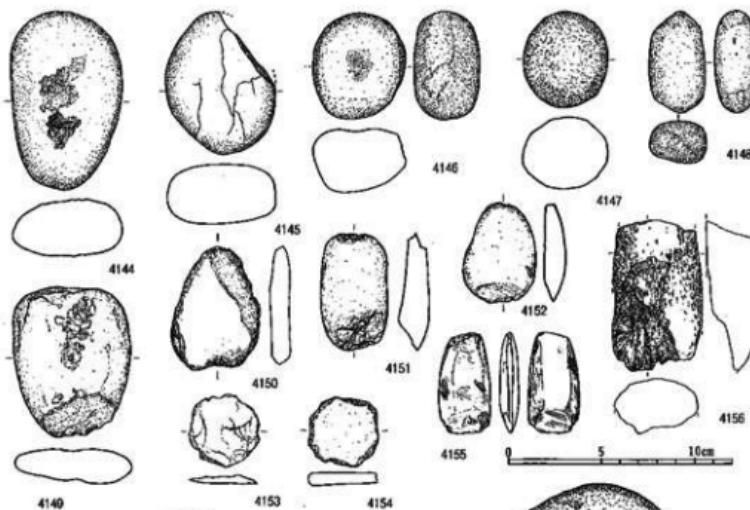
第246図 遺構外出土の石器 (1/3)

4119-4127：頁岩 4120-4123：ホルンフェルス 4121-4122：ストレート 4124～4126・4131-4133・4134：硬砂岩  
4128：粘板岩ホルンフェルス 4129：石英斑岩 4130-4132：輝緑岩



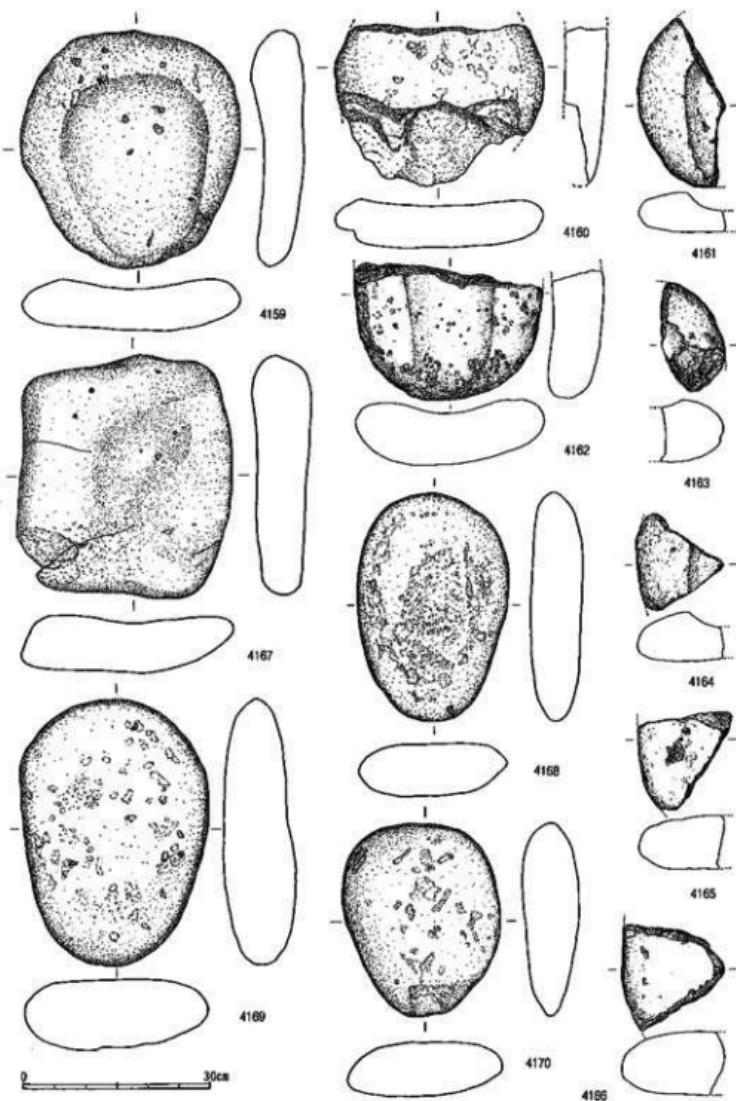
第247図 遺構外出土の石器 (1/3)

4135・4136：硬砂岩 4143：輝石角閃石安山岩 4137～4142：輝石安山岩



第248図 遺構外出土の石器 (1/3)

4144-4146~4148-4157：輝石角閃石安山岩 4145：輝緑岩 4150：スレート質粘板岩 4149-4151-4152：緑色岩(?)  
4153：粘板岩 4154：砂岩 4155：蛇紋岩 4156：輝緑豪灰岩 4158：輝石安山岩

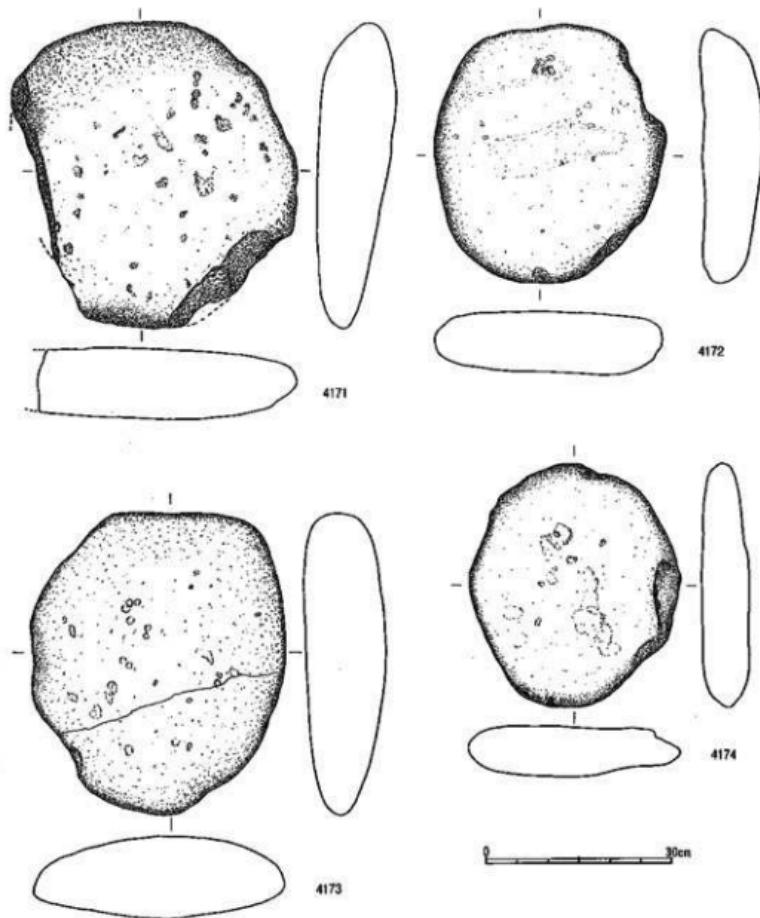


第249図 遺構外出土の石器 (1/9)

4159~4161・4163・4165・4168~4170: 鮎石安山岩

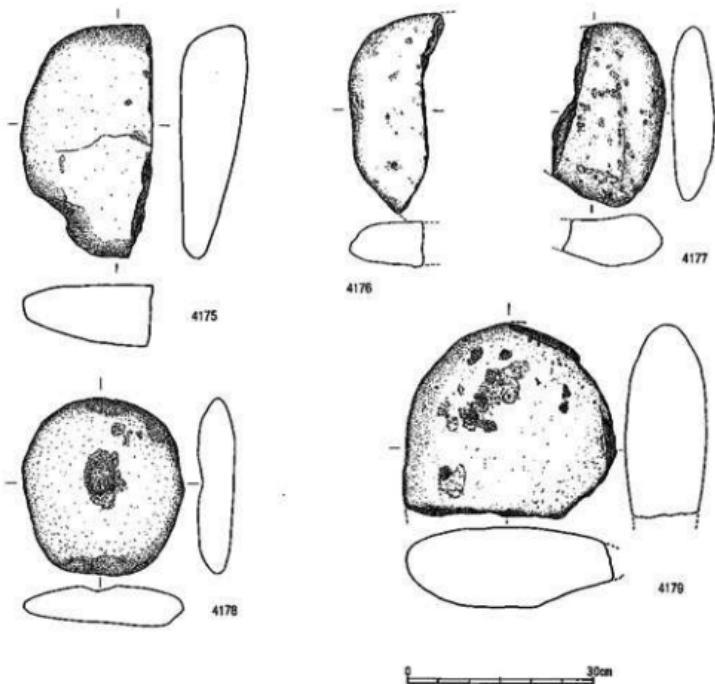
4162・4164・4166: 鮎石角閃石安山岩

4167: 鮎緑岩



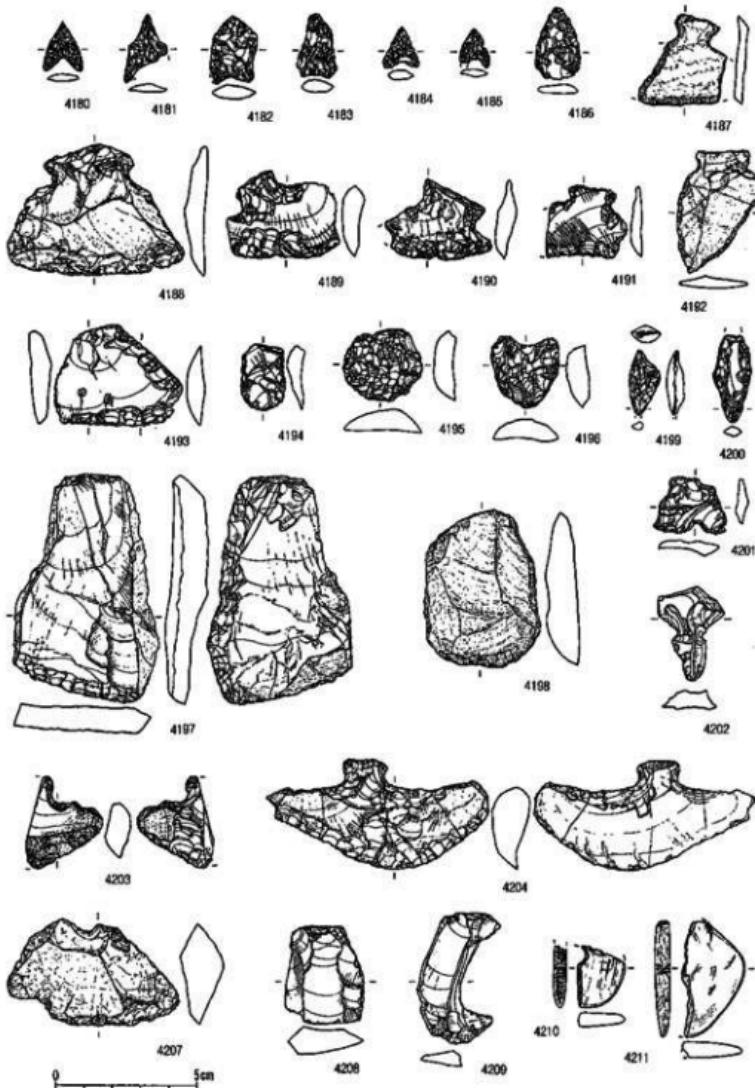
第250図 遺構外出土の石器 (1/9)

4171~4174：輝石角閃石安山岩



第251図 遺構外出土の石器 (1/9)

4175-4176:輝緑岩 4177-4178:輝石安山岩 4179:輝石角閃石安山岩



第252図 遺構外出土の石器 (1/2)

4180~4186・4189~4191・4193~4196・4199~4203・4208・4209: 黒曜石 4187・4198: ホルンフェルス  
4188・4192・4204: 真岩 4190~4207: チャート 4197: 珠質真岩 4210・4211: 浅石

## 二、土 器

前期初頭から前葉の上器が多量に出土した。前期初頭の下吉井式段階では、沈線または押し引きの沈線による波状文を有す典型的な下吉井式土器と、縦状に粘土紐を貼り付けて纖維を混入する在地系の土器がみられ、両者が共存している。主体を占めるのは後者である。これに東海地方を中心にもつ木島式と北関東方面に中心をもつ花積下層式が伴出している。該期の住居址は7軒を発掘したが、いずれの住居址も、土器の量は多くはなかった。そのほかは、実は、前葉の中越式の住居址から一緒に出土している。

前期前葉の中越式段階では、いわゆる尖底土器を主とする中越式が主体をなす。唯一、完全な状態で見つかったのは、4号址から伏せられた状態で発見された土器と、34号址から出土した小形の壺である。これ以外は、床に横になるなどして潰れているものがいくつかみられたが、全形を止めるのは3点にすぎない。その他はみな破片で、堆土中に散らばっていた。すべて中越式の新しい段階のものである。素文の深鉢が圧倒的に多く、格子目または垂下粘土紐を有する土器がそれに次ぐ。また、纖維を混入する中越式の個体がかなり目につく。そして、関東地方に中心をもつ関山式と東海地方に中心をもつ木島式、それに在地系の神ノ木式が伴出している。

これらのうち特に注目されるのは、初頭の土器群のあり方である。中越式を主体とする住居において、初頭の住居と同じ量が混在していて、それらの土器群が、意外にも矛盾のない型式的なまとまりを有していることである。

全体で46個体を図化した。このうちおよその形に復元できるものは27個体で、他の19個体は大形の破片から図化したものである。

なお、これら以外に、遺構を伴わない前期後葉の土器が少しと、晩期終末期の土器1点および両手分の破片が出土している。

### 1号住居址（第253図 1・2）

1は植物質の纖維を多く含み、文様とも整形痕ともつかない浅い条痕文を有す。2は木島式で、三~四本の櫛歯状の施文具で条線を引いている。本址からはこのほかに、中越式の破片5点が出土した。

### 2号住居址（第253図 3~22, 318図 23）

3~11は中越式。3は少しだけ纖維を含んでいるようだ。外面にはわずかに煤がついている。4と6の外面には煤が厚くこびりつく。6は棒状の施文具で、わりと目の細かい格子目を引いている。10の内壁にはお焦げがついている。土器23は乳房状の尖底部。外壁の膚は荒れてざらつくが、内壁はしっかりしている。12・13は櫛歯状の施文具の先を押し当てている。神ノ木式

の特徴的な施文手法の一つである。14~19は地文が縄文のもの。14は組紐、15は結束縄文の原体を施文している。16~18は無節の原体を羽状に施文している。19は撚りの異なる原体を転がして羽状にしている。左撚りは多条縄文の原体。多量の纖維を混入する。口唇は厚ぼったく、丸みがある。内壁はやや疲れている。20・21はあまり目立たない条痕がつく。20はやたらに分厚い。22は纖維の混入した無文の口縁部。

主体をなすのは前期前葉の中越式で、神ノ木式と関山式が併出している。そして僅かだが、条痕のつく下吉井式の在地系土器の破片がある。纖維を含む縄文の19は前期初頭に属すかもしれない。

### 3号住居址（第254図）

1~10は中越式。1・2・5の口唇には刻みがつく。2の外壁には煤が付着している。4は波状の口縁部で、頂部に細い垂下粘土紐がつく。外面にはお焦げか煤の炭化物がみえる。6の外面には継位の器面調整痕が残る。7の内面はやや疲れている。8の内面には、お焦げが残着している。11は無節の原体を四本束ね、真ん中で結節した零段の縄目が、鎖を連ねたようにきれいに出ている。神ノ木式である。

細い隆線の間を押し引きしている12は下吉井式の破片で、膚が荒れてくたびれています。13・14は木島式。両方とも粘土紐の上を貝殻の背で押さえ引いている。これらの他、出土した土器片はすべて中越式に属す。

本址は前期前葉の中越を主とし、神ノ木式を僅かに含む。

### 4号住居址（第256図、319図 27）

1~9は中越式。1と2は同一個体で、口縁は小波状となる。胎土には金雲母と長石が多量に含まれる。色調は肌色にちかい。3は口縁が輪積み一段分だけ直立する、やや変わった器形を呈する。5には金雲母と長石が多量に含まれている。口唇には刻みがつく。色調は橙色。6の格子は目が細かい。7は両面に格子がつき、外面は鋭利な、内面は先の太い施文具でそれぞれ引いている。そしてすんぐりとした垂下粘土紐を貼りつけている。8の内面はすこし凸凹している。9は器壁の薄い土器で、胎土に長石を多く含んでいる。10~12は纖維の混入する無文の土器。11は底部付近で、器壁がやや疲れている。12の内面は膚荒れしている。

13~15は多条縄文の原体を転がしている関山式の破片。14の底部はすこし上げ底になっている。15にはコンパス文がみられる。16・17は同一個体か。17の外壁には煤が付着している。18は条痕文の破片で、かなり脆くなっている。19は口縁のすぐ下に、織状に粘土紐をまわし深い斜めの刻みを入れている。3号址同様、ほかはすべて中越式の破片が出土している。

土器27は、底を欠かれて伏せられた状態で出土した。胎土には長石と石英の微細な粒と、植物の纖維を含んでいる。口縁の四箇所は、小高く厚めな波状になっている。表裏とも整形は縦で凸凹している。内壁の底部付近には、お焦げが薄い膜になって残っている。少し時期は遅る

### 縄文時代の遺構と遺物

が、佐久町の後平遺跡でも花積下層式から関山式への移行期頃の同様な出土状況の報告がされ<sup>(3)</sup>ている。

土器の主体は前期前業の中越式で、関山式がいくらか含まれる。

#### 5号住居址（第257図 1～9）

1～4は中越式。1の口唇部は鋸歯状の刻みとなっている。2は細い条線が二本引かれている。4は長石の微細な砂が目立つ。5は繊維を混入する波状の口縁部。6は繩の条の方向を変えて、羽状にしている。7は擦痕状の条線が斜めにつく。8は結束の繩文原体を施文した神ノ木式。9は小形土器の破片で、連弧状に引いた沈線の下に、平行線の格子目を引いている。

本址は中越式と神ノ木式が併出している。

#### 6号住居址（第255図）

1～7は中越式。1の外壁は墨で、皮一枚飛んでいる。2の外面には煤が付着している。3はやや薄手で口唇の大きい破片。4の内壁にはお焦げが残り、割れ口にも入り込んでいる。6の内面は膚荒れしている。7は灰色に焼き上がっており、この辺りの粘土ではないようだ。8～11は地文に繩文を施文しているもの。8・9は粗糲。10は無筋、11は単筋の原体を転がしている。11を除いて内面の仕上げは丁寧。12は無文で繊維を混入する。13は指頭による整形痕を残し、内壁は膚荒れしている。

14～17は条痕が施されていて、焼成はいずれも良好。17は斜めに条痕を施文したのち、沈線を引いている下吉井式の破片。18はつぶれた粘土紐の上を、貝殻の背で細めの条痕を引いた木島式の破片。

土器の量は少ないが、中越式が多い。そして関山式および下吉井式と木島式の破片がある。

#### 7号住居址（第258、259図、320図 39）

1～16は中越式。1は金雲母と長石の砂粒を多量に含んでいる。外面には煤が薄く付着している。2と5は垂下降帶がはがれている。3は金雲母と長石の粒が多量に混入していて、内面はやや疲れている。4は小突起の部分。6の色調は灰色にちかく、内面は凹凸が少し残る。この辺りの粘土ではなさそうだ。7～14は格子目のつく土器。11の垂下降帶は鶏冠のように大きい。格子目は7・8・11・14のように狭いものが大半であるが、9のように広いものもある。15・16は無文の胴部で、15の内壁にはお焦げが僅かに残している。16は金雲母と長石の粒が多量に含まれる。

17～20は繊維を含み、地文が繩文のもの。17と18は羽状に、19は燃りのあまい原体を転がしている。20の内面にはお焦げがついている。21～23は繊維を含む口縁部の破片。21には長石の粒が目立つ。内面はきれいに整形されている。22と23は内外面ともに凸凹している。22は小波状の口縁部。24～27は条痕がつくもの。26はやたらに分厚い。27は条痕というより条線というほうが合っている。その上に横位の浅い沈線様の文様が引かれている。

28~32は、口縁直下に粘土紐を擁状に巻き付けるのを特徴とし、植物質の纖維を多量に混入している。28の粘土紐の上は軽く押さえている。30~32には斜めの刻みがみられる。33は、表裏および凸帯にまで貝殻条痕が付けられている。焼成は良好。34・35は繩文地のもの。34の口唇は爪の先のように尖って外反している。近年注目されている塚田式と思われる。<sup>(4)</sup> 35は口縁直下に一条の低い隆線がつき、その下に繩文をついている。

36~42は、櫛歯や割った竹管状の工具で縦方向に文様をついているもの。天神山式の文様要素を継いだものと考えられる。36~38は同一個体か。内壁の下方が黒く変色し、ややくたびれている。25号址にも櫛歯状工具による曲線文の破片がある。42は胴部の最大径あたりで、文様の末端がみえる。これは纖維を含んでいない。早期末業に位置づけられるこれらはあまり例がないが、茅野市の天狗山遺跡などに同類の破片を見ることが出来る。<sup>(5)</sup>

43~46は木島式の破片。47は、口縁部に櫛歯状の工具による列点文がつけられている神ノ木式の破片。

土器39は西壁よりの床に横たわっていた。口縁が直立する口径の大きな土器で、胎土に長石・石英の粒と多量の纖維を混入する。器面全体に成形時の指揮さえの凹凸がのこる。また器表には胎土が硬くなつてから成形したのだろう、縦方向に砂粒と粘土が動いている。

この他に、本址からは整理箱で二箱分の土器が得られたが、中越式と前期初頭の纖維土器の割合は2対1である。前期初頭の下吉井式の在地系土器または並行期の破片が多くみられ、注意される。

#### 8号住居址（第261、262図、318図 14・16）

1~9は中越式。3にはがっしりとした垂下隆帯がつく。6は三本組、8・9は半割の竹管で格子目を引いている。10・11は櫛歯状の施文具で斜めに引いた区画に、繩文を模した文様を列点状に充填している。10は神ノ木式の破片で、上半部には撫糸の圧痕がみられる。

12~15は繩文を地文とするもの。12は組紐。14は撫糸の圧痕。17は附加条。他は単節の繩文で、15は撫糸の違う繩を結束して、羽状にしている。16の先端はループ状に丸まっている。15の外壁には媒が付いている。12は関山式、他は神ノ木式か並行期の破片であろう。19~26は無文もしくは条痕の破片。21には纖維が入っていない。22の外面は縦に筋状の整形痕が残る。26の条痕は綫杉状になっている。

27~35は木島式。27は粘土紐の原形がわかるが、ほかは皆つぶれている。33は、粘土紐を貼ったことに意味があるのかと思わせるほど、平たくつぶれている。粘土紐の上を棒状の工具で引く27・31と、貝殻の背で引く28~30、先端を押し当てる木島Ⅱ式の32がある。33~35は胴部の破片で、貝殻腹縁で細線を引く34と、櫛状工具で条線を引く33と35がある。36は口唇部に連続して押し当てる刻みがつく。木島式の新しい段階の破片であろう。37は口唇部に浅い刻みを入れている。38は、二種類の爪形を右向きと左向きに交互につけている。

## 縄文時代の遺構と遺物

39～41は、表裏に条痕をつけて地文としている。39は二列の波状文が、41にも二本の細めな平行線が付けられている。40もおそらく二本組の波状文となろう。42は二本組の粘土紐を波状に貼りつけ、その上をかるく押している。粘土紐の下には、左下がりの沈線が見えている。これらは下吉井式。43～48は、縦状に粘土紐を貼り付けている一群。45はこの群には珍しく、隆帯から下には縦方向の条線がついている。49は口縁部の直下が肥厚している。これらは下吉井式の在地系土器の破片である。

土器14は、住居の堆土上層から出土した深鉢。胴部中ほどから緩く外反する該期の一般的な器形で、下半部を欠失する。内壁は全体に疲れている。外壁の上半部はうっすらと煤け、胴下半の割れ口に沿って3cmの幅で赤褐色に変色し、肩が荒れている。

土器16は、柱穴2と焼との間から出土した。肩部のやや張った深い鉢。口縁部の外面は主に横、器形の変換点から下方は斜めに整形している。胎土に植物纖維を混ぜている。

本址からは、中越式のほかに在地系の神ノ木式と関東地方に中心にある関山式の破片が1点出土している。破片では、中越式と前期初頭の下吉井式と下吉井式の在地系土器そして木島式が同量程度、混在して拮抗している。

### 9号住居址（第260図、318図 21、319図 28、320図 37）

1は中越式の破片。内外面とも丁寧に器面調整している。2・3は纖維を混入する無文の破片。2は全体に肩が荒れてざらつく。3は波状口縁部で器面調整痕が残る。4の原体は客段で、末端を縛ってあるようだ。5は粘土紐が斜めであることから、波頂部にちかい部分と思われる。内外面とも丁寧な整形で平滑である。神ノ木台式の破片であろうか。

土器21は胎土に纖維を混入する小型の深鉢である。口唇の一部分は、削ぎ落とすように整形されて鋭角になっている。外壁の下方は肩が荒れて赤褐色から橙色に、いっぽう内壁の下方は黒褐色に変色している。

土器28は深鉢の胴部で、焼成の良好な破片。内壁の下方は、お焦げのこびりつきが顕著に残る。いっぽう外壁の上部には、煤がかさぶた状に付着している。

土器37は東角際の床面から若干浮いて横たわっていた。小形土器の口縁部の破片。胎土に少量の纖維を含む。焼成が不十分なのか、芯が黒色で纖維が完全に焼けていない。外壁の口縁に近いところに、エゴマ大あるいは黍大の実が抜けた痕がある。中越式の素文の尖底土器には、纖維を含むものとそうでないものの二者がある。

本址の主体は前期前葉の中越式で、纖維を含む個体が多い。

### 10号住居址（第263図）

1は表裏に擦痕状の条線を有し、細めな隆帯がつく。焼成は良好。2・3は縦状に粘土紐をめぐらす一群。2は波頂部に近い部分。いずれも、擦痕状の条線が表裏につく。4・5の外面には縦位の条痕がつく。6は無文の纖維土器で、下部が内外とも荒れている。7～9・14・15

は縄文地の破片。7は口唇がやや肥厚する。8は細い縄を巡った縄文原体を羽状に転がしている。花積下層式と目される9の膚は全体に疲れている。14は爪形を真似たものか。一段の原体を爪形に曲げて、一回一回押さえながらずらしている。15は4本を結束した原体を転がしている神ノ木式の破片。

10~13は木島式の破片で、器壁は薄く内面は凸凹している。11は櫛齒の条線が弧状または直線的に描かれている。17~20は中越式。19は範状の工具で格子目をひいている。20は底部で、内面はやや黒く変色しているが、外面は肌色を呈し消耗はしていない。16は小さな爪形を何段かつけている器壁の薄い破片。

本址は、下吉井式の在地系土器が主体を占めている。

#### 11号住居址（第264図）

1は器壁の薄い波状の口縁で、口唇に粘土を貼ったのち、斜めに刻みを入れている。類似のものは、先に6号址の17にみた。2は口縁に平行して沈線が引かれ、その下に二本の波状沈線がある。沈線は強弱をつけて結節沈線ふうに引いてある。全体に膚が荒れて消耗している。3は二本組の弧線文が左右から合わさった文様の下部。沈線は櫛齒状になるように押し引いている。

4~8は範状に粘土紐をはりつけている一群。4の隆帯には条痕がついていて、平べったくなっている。5の隆帯はねじり紐のよう。胴部には、擦痕状の条線が縱方向についている。内面はいくらくか凸凹している。4・5は下吉井式でも古い要素を有している。6の平べったい隆帯には、斜めに条痕がみられる。外壁には全体に煤がついている。7の粘土紐は丸みがあつてやや太い。その下手には浅い条痕が縱についている。内面は荒れている。8の口唇部は先が尖り、外反する。これらは下吉井式の破片である。

10~15は条痕のつく、6・7と同類の胴部破片と思われる。10の内面は荒れている。11~15の内面は、横に調整がされている。9は繊維を含んだ無文の口縁。18・19は木島式。18は粘土紐を貼り付けたのち、貝殻の背で斜めに条線を引いている。口唇は腹縁を当てて刻みを付けている。19は薄手の破片。上方から垂下する隆帯が左右に分かれる波頂部で、低い隆帯が一周するものと思われる。木島II式か。20は中越式の口縁。細い二本組の沈線が斜めに引かれている。色調は橙色。

本址の主体をなすのは前期初頭の土器群であり、典型的な下吉井式と範状の粘土紐を付した下吉井式の在地系土器、そして木島式が出土している。17は花積下層式でよいかもしれない。

#### 12・13号住居址（第266、267図、319図 36、320図 45、321図 1~3）

1~18は中越式。1には煤が付着している。2は金雲母を多量に含む。3は粘土気がなくななり、かなりくたびれている。5の外面には器面調整の痕跡が残っている。6は金雲母や長石の粒が目につく。7の器面調整は器壁が硬くなつてから行っているらしく、やや難である。9の

#### 縄文時代の遺構と遺物

垂下墻帯は、やや丸みがあってすんぐりとし、10は細くすらっとしている。格子目は、二本の平行線で引く9、細い施文具で大きめの12、わりといい加減な11などがある。

14と15は胴部の下半部。14の外面は橙色に変色し、肩も荒れてざらざらしている。16~18は繊維を混入していて、いずれも内面が荒れている。19・20は条痕のつくもの。21は口唇に細かな刻みと、口縁部に四段の爪形文をついている。内面には煮滓が炭化してうっすらとつく。

22・24は瓶状に粘土紐を貼り付けている。その下には、細い条線が引かれている。23は、粘土紐の間をなぞるように凹線にして、それも強弱をつけながら押し引き文ふうに引いている。24の上側には、刷毛状の浅い沈線の波状文がわずかに確認できる。内面は膚荒れしている。22~24は下吉井式である。

土器36は繊維を多く混入する無文の尖底土器の破片。大粒な長石の粒を含んでいる。成形時の指押さえの凸凹がすこし残るが、内外面とも刷毛状のもので施して仕上げている。器膚は全体に疲れている。いま見た8・9号址同様、繊維を含む素文の深鉢である。

25~27は関山式。25は多条縄文の原体を転がしたあとに、平行線やコンパス文を施し、瘤状の貼り付けをしている。26は地文に組紐の原体を施文したのち、コンパス文を引いている。いずれも整形は丁寧。27は組紐、28・29は結束、30・31はループ文で、多条縄文の原体を施文している。32~34、37・38は結節した原体を転がし、37は多条縄文の原体を付している。

39~44は櫛歯状の列点文を有する、神ノ木式の破片。焼成は良好で堅く焼き締まっている。45~57は集縛面の上面から出土した土器片。46~52は細い粘土紐を貼り付け、その上に縄文や細線文を充填している諸磧b式の破片。どれもみな器面調整は丁寧で、平滑に仕上げている。53~56も縄文地。53は多条縄文、55は無節の原体を転がしている。56の原体は附加条のようだ。57は底部の破片。

土器45は櫛歯状の列点文と組紐で構成された神ノ木式の大きな破片。表裏ともきれいに整形されている。口縁部の直下に補修孔が穿たれている。焼成は良好で堅い。内壁の下方はザラザラして膚が疲れていて、外壁にはうっすらと煤がついている。

第321図1・2は諸磧b式の猪頭突起。1の獸面は略されている。2は獸面の輪郭や鼻孔、口と飛び出た目の表現など、優れている。3は口縁がラッパ形に開く大形の深鉢。脛の辺りから底部にかけては、直接接合しない。器面の整形はきれいで、平滑に仕上げている。煤やお焦げなどの痕跡はみられない。諸磧c式。これら諸磧期の3点は堆土中の集縛面から出土した。

主体を占めるのは中越式であるが、神ノ木式が相当含まれる。そして僅かであるが、関山式の破片がある。また中越式の無文の深鉢には、繊維を混入している個体がいくつか見られる。

#### 14号住居址（第268図）

1~10は中越式。1は口唇に細かな刻みを有す。内外の器面調整はきれいだが、内壁の半分より下は膚が荒れている。2と3は金雲母と長石を多量に含む。3の内面は凸凹が残る。4は

口唇と内面の縁に刻みを入れている。5は小形の波状口縁。6は底部。内壁は黒く変色し、お焦げが輪積みと平行して残着している。底面の摩耗などはない。7の口唇は少し尖る。

8~10は格子目のつく口頸部。9は単線で、10は二本の平行線で引いている。11~16は無文で繊維を含んでいるもの。11には斜めの沈線が一本だけみえる。12の外面はやや疲れている。13は肩が荒れてざらつく。14の外面は煤けて黒くなっている。15の口縁部は表裏に浅く条痕がつく。16の外面は煤荒れがひどい。17・18は木島X式とされる破片で同一個体か。器面全体に格子目が付けられているようだ。頸部に半割りした竹管の押し引きがある。外面には煤が厚くへばりついている。

19は多条縄文やループ文をつけたのち、竹管でコンパス文を引いている。20は同一個体か。内面の調整は特に丁寧である。関山式の破片である。21は目の細かな単節縄文がつけられている。22は木島式。23~25は下吉井式の破片。24の隆帯の間は棒状のもので押し引くようにしている。25は先の歎らかな施文具で、波状に押し引きをしながら四列の沈線を施している。

本址からは整理箱で二箱ほど出土したが、殆どが中越式の素文の深鉢片である。これらに関山式と木島式が含まれる。また片手分の下吉井式が出土している。

#### 15号住居址（第269図、317図 6）

1~7は中越式。1の口縁は緩い波状をなす。内外には凸凹が残り、輪積みの箇所が膨らんでいる。外面には煤が薄く付着している。2の内面には炭化した煮滓がつく。3は金雲母と長石を多く含む薄手の破片で、沈線が一本だけみえる。4は小突起がつく。5と6の外面には、煤がべったりとつく。7は金雲母と長石を多量に含む。

8~14は無文で繊維を含んでいるもの。10を除いて口唇は尖り気味に整形されている。器面の調整は普通で、凸凹が少し残るものが多い。13の内面は黒く、外面は肌色に変色している。15は多条の単節縄文が、16は撚糸文が施文されている。17~19は籠状に粘土糰を貼り付ける一群で、17は継、18・19は斜めの刻みがつく。器面調整は19が最も丁寧で、他は凸凹が少し残る。20~22は条痕のついている破片。21は櫛齒状の斜線が引かれている。

23~27は木島式。23は隆帯上を貝殻あるいは櫛齒の先で押している木島II式の破片であろう。28は波頂部付近。継めの隆帯には、刻みがつけられている。29は弧状に二本の沈線が引かれるだけの単純なもの。11号の3と同類で、沈線の下手は鋸齒状になっている。下吉井式の破片で粘土気が無くなり、脆くなっている。

土器6は柱穴3の南西脇の床上に横倒しで残されていた。胎土に金雲母と大粒な長石の粒を多量に含む。外反する口縁部には細めの垂下降帯が4個所つく。その部位には幅7mmの刷毛の先で撫でるように引いた格子目がうっすらとみえるが、ひどく肩が荒れているために、殆ど失われている。したがって実測図には格子目を入れられなかった。

このほか、本址からは整理箱で一箱分出土しているが、中越式の無文の土器片と繊維を含む

### 縄文時代の遺構と遺物

破片の割合は1対1である。纖維を含む破片は在地系の下吉井式土器と中越式の区別が難しく、混在して拮抗している。前葉の中越式には神ノ木式かそれに並行する土器15が伴うようである。

#### 16号住居址（第270図）

1～12は中越式。1は垂下隆帯が部分的に残る。色調は明褐色で、この辺の粘土ではないようだ。2と5は金雲母を多量に混入している。3は大粒の花崗岩の砂を含んでいる。4の口唇には刻みがつく。いずれも焼成は良い。6の器壁は薄く、口唇には細かな刻みがつく。7の内壁にはお焦げが少しだけ残っている。8と9はわりとしっかり器面調整している。

6と10～13は格子目などの文様がつき、11は櫛齒状の工具で格子を引いている。13は小形土器の破片で、蛇行する二本の平行沈線が密に付けられている。14～18は無文で纖維を含んでいるもの。15と16は長石粒を多く含み、両方とも内壁は荒れてざらざらしている。17は黄土色に変色し、膚も荒れてかなりくたびれている。18の内面は少し荒れている。19・20には条痕がつく。21は粘土分が多く、器面がつるつるとしていて焼成もよい。外面には煤が付着している。24は下吉井式の口縁部であろう。25は櫛齒状の施文具で蛇行沈線を引いている。天神山式の文様を継いだ在地の土器であろうか。26は木島式で、粘土紐の上を貝殻の腹縁で押している。27は粘土気が失われて脆い。神ノ木式の破片で、17号に同一個体の破片が出ている。

主体を占めるのは前期前葉の中越式で、神ノ木式がある。また縄文の土器片のうち、21は関山式あるいは神ノ木式に並行するものと思われる。そして中越式の無文の破片には、纖維を含んでいる個体がいくつかある。

#### 17号住居址（第271図、319図 25）

1～5は中越式。1は小突起の位置に垂下隆帯がつき、隆帯上を押さえている。2の口唇は薄く尖る。3は三本の櫛齒状の施文具で格子を引いている。4と5の内面は荒れている。6～10は無文で纖維を含む。8と10の外面には、煤が僅かに付着している。11は無節、12は単節、13は組紐、14は結束の繩が施文されている。13と14の内面はとくにきれいに仕上げている。15～19は櫛齒状の施文具で文様づけしている神ノ木式の破片。15は粘土分が多くしっかりとされているが、16は粘土気が失われて脆くなっている。別の破片が16号住居の27と接合した。

17と18は別な個体だが、文様構成は同じようだ。18は櫛齒の列点文の位置が最大径となり「く」の字に張っている。その上手には、櫛齒による波状文が引かれている。内面にはお焦げが僅かにつく。19は鏡餅状扁平石1187の下から出土した破片。器面調整は丁寧で、平滑である。20は口縁に三列の爪形をつけている。深鉢か浅鉢かわからない。上の坊式または清水ノ上式などに見られる爪形である。21は木島式の破片で、内面がやや荒れている。

土器25は平縁で尖底の深鉢。全体のおよそ3分の1が残存する。長石・石英粒が目立ち、纖維を混入している。指頭による成形痕が残り、器縁は凸凹である。焼成は良好で口縁部は煤けて黒く、それ以下は赤く変色している。底部に近いほど細かく割れて膚荒れしている。いっぽ

う内壁の下方には、お焦げが残着している。

主体をなすのは中越式で、神ノ木式・関山式が含まれる。そして纖維の混入する中越式の無文の破片が目立つ。

#### 18号住居址（第272図）

1～3は中越式。1は口縁が波状をなし、脇が膨れる一般的な形。金雲母がやたらに目立つ。内壁の下方が膚荒れしてざらつく。2は両面とも横位の撫で仕上げている。3は底部に近い破片。外壁は縦位の整形痕がよく残っている。また上半分が煤で黒くなっている。内壁はこれに対応し、下半分が黒変して少し荒れている。4は木島式の破片。粘土紐の上を貝殻の背で押さえて条線を引いている。また、口唇には貝殻の腹縁を押して刻みをついている。

本址からは、両手いっぱい分の中越式と木島式が1点出土した。

#### 19号住居址（第265図）

1は瓶状に平らべったい粘土紐を貼り付け、斜めの大きな刻みをついている。小波状の口縁になると思われる。2～4は纖維を多く含んだ条痕のつく破片。4は両面縦位の条痕を有す。これらは1の器種の胴部破片である。5～7は纖維を含む無文の破片。5は口径の小さな個体で、焼成はよくない。中越式と思われる。6は膚が荒れていて、内壁にはお焦げが厚くへばりついている。7の内面はざらざらして少し疲れている。8～11は木島式。8は平べったい粘土紐を貼ったあとに、貝殻の背で条線を引いている。木島Ⅱ式か。9の口唇には沈線が、10の口唇には刻みが施してある。器壁の薄い11は木島式と目される。

本址の主体をなすのは、纖維を多量に含んでいる下吉井式の在地系土器で、木島式が出てゐる。

#### 20号住居址（第273図、318図 15）

1～12は中越式。1と2には垂下隆帯がつく。1の隆帯上は指頭で押している。3の膚は荒れて消耗している。4の器壁は指押さえの凸凹が残る。5と7の口唇には刻みがつく。内面は膚荒れし、外面には煤が付着している。6の外壁は、皮革などに水をつけて撫でたらしく、べったりとして鈍い光沢を有す。13は貝殻の背で条線のような格子を引いている。器壁が薄く、灰色に近い色調であることから木島式と思われる。8・10は内面が荒れて少しざらつく。12は尖底部で内壁は黒く変色し、わずかにお焦げがついている。

15～17は口縁部で、纖維を含んでいるもの。15には、V字形に連続した沈線文が引かれている。中越式とするには肉厚で、異質な感じである。16は長石や石英の粒が目立つ。18～20は条痕のつく破片。18は内外それぞれ別な工具で条痕をついている。19は擦痕状に、20は貝殻の背で引いている。21は口縁に平行する一本の沈線と、その下に波状の沈線が引かれている。22は細めな粘土紐と沈線のつくもの。膚が荒れている。この2点は下吉井式の破片。23は異なる原体を結節した縄を施したもの。

## 縄文時代の遺構と遺物

土器15は柱穴2の近くに横たわっていた、平縁で無文の深鉢。全体のおよそ半分が残存する。金雲母・長石・石英の粒を多量に含む。焼成後の肩の色に赤みがないことから、粘土はこの辺のものではないようだ。成形時の指押さえの凸凹が少し残るが、内外とも撫でによる仕上げがされている。内壁は一皮むけてざらざらし、下半部は黒く変色してお焦げがついている。外壁は上半部にうっすらと煤が付着し、下半は褐色の膚を呈する。

出土した土器の主体は前葉の中越式である。これらの中には、纖維を混入する無文の尖底土器の破片が多く見られる。また僅かだが、前期初頭の下吉井式と在地系の下吉井式土器の破片も含まれる。

### 21号住居址（第274図）

1～9は中越式。1と2の口唇には刺みがつく。5の垂下陸帯は指頭のようなもので押さえている。6～8は格子目のつく口縁部。7と8は同一個体か。10～13は無文で纖維を含んでいるもの。10には斜線が一部見えている。

14～16は下吉井式。14・15は籠状に粘土紐を貼り付けているもの。15の地文には条痕が引かれている。16は横位に引いた条痕に、二本の浅い沈線が斜めに加えられる。僅かに纖維を含む。17は木島式。わりと薄手で、金雲母が目立つ。格子目になるのか判断できない。18は低い粘土紐を波状に貼り付けたもの。色調は肌色に近い灰色で、この辺りの粘土ではない。だいぶ消耗している。19～21は縄文地の破片。19の口縁部は少し肥厚している。外面の縄文は一部羽状に施し、口唇の内側にも転がしている。22は細い竹管で蛇行沈線を引いている。早期の天神山式の文様を真似た在地の土器か。23は竹管の先端を押し当てるもの。

この中には、纖維を混入する無文の尖底土器の破片がいくつかある。そして木島式の破片も含まれる。下吉井式の破片も僅かあり、花積下層式に似た縄文系も含まれる。

### 22号住居址（第281図、319図 33）

1～7は中越式。1から5には金雲母が多量に混入している。このうち1～3の外面には煤が付着している。6の器壁は薄く、四本組の格子目がつく。もしかすると纖維が入っているかもしれない。20号址の13とよく似ている。7の外面はやや膚荒れし、内面には焦げつきがみえる。焼成は良好。8～10は無文で纖維を含んでいるもの。9の内外面には、光沢のあるタール状のものがついている。10の焼成は悪く、器壁はかなりくたびれている。

11は長石がやたらに目立つ。12は条痕による器面調整がされ、内面にはタール状のお焦げのようなものが付着している。13は纖維を多く含んだ分厚い底部。内面には底から少し上がった部位から帶状に、タール状に炭化したお焦げのようなものがついている。14は下吉井式の破片。15は無節の縄文がつく。内壁の全面に焦げつきがみられる。

土器33は最大径が胴中位にあり、口唇部がすこし外反する、ざんぐりとした器形を呈する。平縁でなく僅かに波打ち、口唇には細かな刻みを入れている。胎土に長石、金雲母を多量に含

む。内外ともに成形時の指揮さえによる凸凹が残る。外壁は全体にすべっこく、上半部は特にきれいでにぶい光沢を放つ。内壁の下半は黒っぽく変色して膚も荒れ、外壁の下半は被熱により赤褐色に変色している。また口縁部付近の割れ口には、豆かそれに類する実が炭化して抜け出た穴が二箇所あり、外皮の一部が残っている。

出土した土器の主体は、中越式である。木島式の破片も出ている。縄文系の土器は、神ノ木式に比定されるのかもしれない。

#### 23号住居址（第276図 1～22）

1～9は中越式。1の内面には指揮さえの凸凹が残る。すらっとして形のよい垂下降帯は、すこし摘まんでいるようだ。3・4・6は底部付近。内壁にはお焦げがうっすらと付いている。7の外面は綺麗に撫でられている。8は木島式の破片。細く平べったい籠状の施文具で、大きめな格子を引いている。口唇に刻みを有する。9の器面は不平らで、竹管のようなものでやや乱雑に格子を引いている。纖維を含んでいるかもしれない。10は口縁に平行してつく粘土紐が剥げてしまっているようだ。11・12は条痕もしくは擦痕のある破片。11の焼成は良好。

13～17は下吉井式と並行期の在地系の土器片。13・17は縦状に粘土紐を貼り付けているもの。14は低い隆帯の間を沈線もしくは押し引きふうになぞったもの。15は波状の口縁部で、押し引きふうに沈線を引いているが、摩耗していくよく分からない。16は沈線を押し引いて、鎖風に連ねている。18・19は円を描くように平行沈線を引いている。18の内面にはお焦げが染みついでいる。少しだけ纖維を含む。20は附加条の縄文を横位に施文している花積下層式の破片。21は爪形文の薄い破片。22は木島式。細く平たい粘土紐の上から、貝殻の縁を当てて条線を引いている。

本址は、下吉井式と下吉井式の在地系土器および中越式である。

#### 24号住居址（第276図 23・24）

23は二本組の沈線が僅かにみえる。纖維を含む。24は、中越式の無文の破片で、積み上げ部分から割れている。本址からは、僅かこれのみの出土であった。

#### 25号住居址（第278～280図、317図 3・5・11、318図 13・17・18、

319図 26・31・35、320図 40・44・46）

1～24は中越式。1の内壁は荒れてざらつき、図の最下段から下方が黒く変色してくたびれている。2は竹管で平行線を引いている。4の内壁は幾分ざらつき、3と6には補修孔がある。7～9は外面ともきれいに器面調整をしている。10は小突起の位置につぶれた感じの垂下降帯がつく。11と12は四单位の波頭部に粘土紐を貼っている。13は平縁の内側からこぢんまりした垂下降帯がつく。14の器壁は凸凹して薄い。細身の垂下降帯がつく。斜線はこの上にも引かれている。口唇は尖り、刻みがつく。旧いタイプの破片と思われる。20も細い斜線がみえる。金雲母を多量に含む。14と20は色調が肌色から褐灰色で、この辺の粘土ではないようだ。22と

#### 縄文時代の遺構と遺物

23は底部付近の破片。いずれも内面の膚は荒れている。24はわりと尖る底部で、内面は黒く変色している。25は格子目を隆帯で区画するもの。脇部には調整時の擦痕が残っている。下吉井式の段階の土器片とおもわれる。

26~37は、無文で纖維を含んでいる。いずれも内外面ともに撫でのみの器面調整で、膚も荒れて凸凹が残るものが多い。27は粘土分が多く、器面のざらつきが少ない。30・31は同一個体か。整形時の縱方向の削りがしっかりと残っている。33の口唇には刻みがつく。35・36は厚めな土器。焼成は普通かやや不良。35の内面は荒れてかなりくたびれている。38~45は条痕のつく破片。38・42・44・45は施文具に貝殻を使用している。40は纖維が多く、模がいったような膚である。なかでも44と45は、丁寧に器面調整している。36号址の9および10と同類であろう。

46~52は縄文地のもの。46・47は纖維を含む。48は関山式の破片。51は単節、52は無筋の結束の原体を転がしている。

53は砂気が少なく、膚がべつとりしている。54は金雲母が目立つ薄手の破片で、爪形を浅くつけている。器面は全体に膚荒れし、ザラザラしている。55は平行沈線が横位につけられ、それを切るように縱に平行沈線をいれている。56~64は木島式。56は隆帯の上に縄文を加えている。木島Ⅱ式であろう。57~63は、平べったい隆帯の上に貝殻や櫛状の施文具で斜線を引いている。64は薄手の破片で、口唇に沿って円形の刺突を配し、その下に細い平行沈線を羽状につけている。木島式か。65~75は下吉井式。65は隆帯の上に二列の押引きがつく。表裏に条痕をのこしている。66は隆帯の間を押し引いている。67は二本の細めな隆帯がつけられている。表裏はとてもきれいに撫でて整形している。68は平行沈線を横方向に引いて、軸をとめて半回転させた、いわゆるコンパス文がつけられている。69~75は縦状に粘土紐を貼り付けているもの。69は波頂部で、垂下する隆帯の途中からは別な隆帯が蕨手状に巻くものと思われる。71の隆帯には格子、73のそれには斜めの刻みがつき、纖維を多量に含んでいる。76・77は櫛齒状の施文具で、蛇行するような縱方向の文様がつけられている。天神山式の文様を継いだ在地の土器であろうか。

この外に12個体を図化したが、多くは大きな破片での復元である。土器3は四単位の垂下隆帯を有し、口唇に刻みをつけている。粘土紐の部分が凸状になるだけの平縁と思われる。垂下隆帯は菊冠のようにすらっとして小高く、刻みを有する。器面の調整や整形は丁寧で平滑。内壁の下部は膚が荒れてざらざらとし、外壁はうっすらと媒が付いて下半は褐色~黄褐色に変色している。

土器5は小形の深鉢。垂下隆帯はずっしりとしていて、指で押されたのち、低い部分に爪型を突いている。補修孔が正面側と反対側に二箇所うがたれている。

土器11は、口縁が緩やかな波状を呈する小形の深鉢。口唇には丸みのある棒状の施文具を押しあり、連続して刻みをつけている。内外とも成形時の指押さえによる凹凸を少し残し、横位

または縦位に撫でて仕上げている。

土器13の口縁は平縁ではなく、わずかに波打ち、口唇はやや尖る。胎土には長石と石英の粒を多量に含む。内壁の上半部は指押さえの成形のままで、下半部は横撫での仕上げ。内壁の下端にはうっすらとお焦げがつき、対する外壁の下端は、赤褐色に変色している。

土器17は口縁がやや外反する無文の深鉢。胎土に長石・金雲母を多量に含む。内壁は成形時の指押さえのままで、凸凹してざらざらとしている。外壁はにぶい光沢を有する。

土器18は平縁で無文の深鉢。胎土に長石・石英の粒を多量に含む。成形時の積み上げ部分で割れている。内外とも指押さえのままで、横撫でして仕上げている。外壁は縱そして横の撫でのあとに、皮革に水を含ませて撫でたのか、にぶい光沢を有している。

土器26は柱穴1の近くから出土した。胴部下半から底部。胎土に金雲母・長石を含む。内外面とも横位に撫でて、きれいに仕上げている。外壁は皮革に水をふくませて撫でているようで、にぶい光沢を有する。

土器31の口縁は平縁で、口唇部が爪の先のように細くなり、やや外反する深鉢。胎土に細かい長石・右英の粒と少量の金雲母を含んでいる。内外とも指押さえの調整痕を残す。外壁の仕上げは、皮革に水を含ませて撫でたかのように、鈍い光沢を出している。内壁の下端は焦茶色に変色し、ざらざらしている。外壁は下端を除き煤が付着していて、底部に近くなるほど細かく削れている。

土器35の深鉢は最大径が胴部の中程にある。胎土には多量の砂が含まれ重量がある。成形時の指押さえの凸凹を少し残し、口縁部は縦位、胴部は横位に撫でて調整して仕上げている。内壁は全体に膚が荒れ、ざらざらとしている。

土器40の深鉢は最大径が口縁にあり、直線的に立ち上がる。胎土に石英・長石・金雲母を含んでいる。外壁は横位の撫でを全体に施し、内壁は全面一皮むけてざらざらとしている。

土器44はバケツ形に開く深鉢。口縁部と胴部は直接接合しない。岡上復元である。平たい口縁に小突起を四つ付し、突起のあいだを丸い竹管の背で押して、刻みをついている。底部はなく、尖底か平底か判断できない。調整は丁寧で、内外とも平滑にしてから、繩文原体を横位に施文している。原体は無節の左撫りで、末端を結節してある。全体に膚は荒れてざらざらとし、内壁の下半は褐色に変色、外壁の上半はうっすらと煤けている。また外面には、粟粒大と黍か稗粒大の種子が焼けて空になった穴が二箇所ある。

土器46は頭部が著しく括れた薄手の深鉢。四箇所に小突起を有し、わずかだが波状をなす。胎土は灰色系に焼きあがるもので、この辺りの粘土とは異なる。長石と少しの石英粒が含まれる。幅1cmの粘土の帯を積み上げ、輪積み線を残している。文様帶は括れから上にあり、口縁に沿って二列の押し引きをした後、突起の位置から縱に押し引き文をついている。括れには、拇指と人指し指で爪を立てながらつまみ出した刻みがある。そしてこの区画のなかに、刷毛状

## 縄文時代の遺構と遺物

の条線が矢羽根状に引かれている。器壁は内外ともに疲れている。

本址の主体は前葉の中越式で、関山式および木島式の新しい段階の土器が共存している。そしてかなりの割合で、初頭の下吉井式および下吉井式の在地系土器、それと並行関係にある沈線文系の土器、木島式の上器が混じっている。

### 26号住居址（第275図）

1～4は中越式。1にはがっしりとした垂下隆帯がついている。3はやや肉の薄い底部付近の破片。5・6は木島式の破片で平べったい粘土紐を貼ったのち、櫛歯状の工具で条線を引いている。

7・8は、北東の壁に接してある柱穴の北側から出土した。7は中越式の肩部破片。8は粘土紐を貼り付けたのち、縄文または綾杉文をつけている。諸磯式。

### 27号住居址（第282図）

1～10は中越式。1の内面には煮滓が、外面には煤が付着している。3～5は波状の口縁部。7と8には太くてがっしりとした垂下粘土紐があり、指頭で押された刺みがつく。11～16は無文で繊維を含んでいる中越式の破片。15には、調整時の削り痕が残っている。17は薄手の土器。口唇には浅い列点状の刺みがつけられ、頸部は上側の積み上げ部の端を押し引きしている。押し引きで画された上と下には、細い条線で「人」の字形に交差させた細線文がつけられている。内面には斑点状にお焦げが、外面には煮こぼれ滓と煤が付着している。類似の土器は25号址にあった。木島式XないしX段階とされるものである。18は花積下層式であろうか。異なる多条縄文の原体を羽状に転がしている。内外の器面調整は丁寧で、胎土に繊維を多く含む。20は櫛歯状の施工具による横方向の条線文が、21は縦方向の浅い条痕がつけられている。

主体をなすのは中越式で、この中には繊維を含んでいる無文の深鉢片がいくつかある。また木島式が出ている。そして初頭の花積下層式がある。

### 28号住居址（第292図）

1～3は縦状に粘土紐を貼り付けた一群で、いずれも波頂部のあたり。1の粘土紐には刺みがつき、3にも斜めの刺みがつけられているようだ。下吉井式の4は扁平な隆帯を貼り付けたのち、押し引きながら沈線を加えている。5～10は無文で繊維を含んでいる。

8はやや厚手。10は底部に近い部位。11は二本組の絡条体压痕のつく花積下層式の破片で、繊維を多く含んでいる。12・13は縄文地の破片。12は異なる單節の原体を転がし、縄目の方向を変えている。口縁部に弧状の沈線が引かれている。早期末葉の土器である。13も異なる單節多条縄文の原体を転がし、羽状にしている。14の口縁部には、やや尾を引くような二列の刺突が施され、口唇に刺みを有する。15・16は木島式の破片。15の口唇には、貝殻の腹縁をあてた刺みがある。いずれも貼りつけた粘土紐の上から、二本組みの並行する条線が引かれている。

これらの方に両手一杯分の土器が出土しているが、繊維を含む土器片が多くを占める。こ

これらの殆どが下吉井式の在地系土器であり、花積下層式と縄文系の破片および木島式が出ている。

### 29号住居址（第277図）

1は中越式の破片。外面は爆けて薄くなっている。2は木島式の破片で、内面には成形時の指押さえが残る。3は僅かに纖維を含む。本址から出土した土器は僅かこれだけである。

### 30号住居址（第284図）

1～7は中越式。2の外面には煮こぼれ滓が付着している。4は小さな突起がつく。8は櫛歯状の施文具で間隔の狭い格子を引いている。器壁は薄く、胎土は精選されている。木島式の破片。9は細い竹管で蛇行沈線を引いている。天神山式の文様を継いだ在地の上器か。10～17は無文または条痕文のつくもので、纖維を混入する。11と14・17は擦痕状に、13と16ははっきりとした条痕によって、器面の調整をしている。18は浅い太めな爪形と、細い爪形を重ねている。19は内外全面に横位の条痕がつけられている。20は隆帯を貼り付けた上に条痕をつけ、隆帯を二分するように押し引いて沈線を加えている。21は条痕をつけたのち、押し引きの沈線を引いている。19・21は下吉井式。

22～26は、瘤状に粘土紐を貼り付けているもので、纖維を多く含む。22は波頂部。23・24は二本組の隆帯で、斜めの刻みがついている。27は二本組の撻糸を巻いた絡条件を転がしている。花積下層式。28・29は木島式。28は平べったい粘土紐を貼り付けた後、条線を引いている。

本址は、初頭の下吉井式そして下吉井式の在地系土器と前葉の中越式が出土していて、初頭に属する破片は前葉のおよそ倍ある。

### 31号住居址（第285、286図、317図 2・7、318図 12・22、319図 32、

320図 38・43）

1～15は中越式。1は、胎土に多量の雲母や石英・長石を含む。内壁はくたびれてざらざらとしている。該期の深鉢の口縁が外傾もしくはやや外湾する器形が多い中にあって、3の器形は一風かわっている。13は細い櫛の先で、目の細かいきれいな格子目を引いている。15の格子目の下端には、爪で摘んだかのような列点文がある。中越式の古いタイプによくみられるものだ。16～23は纖維が混入する無文の土器。24～27は擦痕あるいは条痕のつくもの。27は文様を意識しているかもしれない。

28～31は花積下層式か。28の口唇はわりと尖り、その直下が僅かに厚ぼったくなるもので、28号住居の12もよく似た破片であった。29・30は異なる原体をもちいて、羽状もしくは菱形に条の向きをかえている。31は多条縄文の異なる繩を結節した原体で施文している。32は単節の原体を横位につけている。33は神ノ木式の波頂部で、口縁に沿って櫛書きの波状文が引かれ、その下には櫛歯を立てて突いた列点文がついている。34～42は木島式。

40～42は下吉井式段階に並行する木島式である。35と40・41は貝殻の背で、ほかは櫛歯状の

### 縄文時代の遺構と遺物

工具で隆線の上から条線をひいている。43・44は下吉井式。43は条痕を斜めにつけたのち、波状に押し引きの沈線を引いている。下方には斜めに隆帯がついていたようだが、大半が失われている。44は隆帯で区画した上手には、竹管で引いた二本組の波状沈線が、そして隆帯上には櫛齒の先端を押して、疑似縄文ふうに施文している。

45～55は楕状に粘土紐を貼り付けている。47は波頂部、46・48は波状部。48の隆帯はまるで鉗釜の鉗のように先が鋭くなっている。隆帯の下手には、櫛齒の条痕が斜めに引かれている。49も隆帯の下手に斜めの条痕がみえる。56は平行線で幾何学文を引いたのち、繊維を充填している。幾何学文は関山式に見られるものようだ。58はわりと薄手で、竹管の先を当てて列点状に施文している。

土器2は中越式の胴部で、割れ口の端に垂下粘土紐の一部が辛うじて残っている。垂下隆帯の下端あたりに器形の変換点がある。内壁の下部にはお焦げが残着し、外壁の下部は赤褐色～橙色に変色している。

土器7はほぼ平らな口縁に小さな突起を有する。頸部がしまり外反するように口縁が聞く。成形時の指押さえの凸凹が全体に残るが、器面調整は丁寧で、とくに外側は全体にすべすべとした鈍い光沢がある。内壁の中位から下にはお焦げが薄く付着している。いっぽう外壁はお焦げの線から上に煤が帶状につき、下方は赤褐色～橙色に変色している。

土器12は口縁が六単位の小波状をなす。胎土に長石の粒を多量に含んでいて、ずっしりと重い。成形時の隙の一段一段の積み上げがはっきりと確認できる。内壁には指押さえの凸凹が残っている。外壁は継ぎに仕上げの撫でがされている。焼成は良好で、固く焼き締まっている。内壁の下部は膚が荒れてざらつき、炭化滓がうすくついている。いっぽう外壁は、炭化滓がうすくついている部位から上に6cmの輻で帶状に煤が付着している。尖底部には灰がついですべすべしており、土器の据え方と何か関連しているようだ。なお48号址から出土した破片が接合している。

土器22は尖底の一部で纖維を混入する。色調はにぶい黄褐色。内壁は凸凹していて、荒れている。細かく割れていてひびも目立つ。

土器32は小形な深鉢。内壁は胴部から底部にかけて炭化滓がうすく残っている。また外壁の下方は、火熱を受けて橙色に変色している。

土器38は四単位の小波状を呈する。胎土に金雲母・長石・石英を多量に含む。内外ともに整形は丁寧で、外面は縱方向に撫でて仕上げているが、硬くなつてからのためか砂粒が長くひっぱられている。内壁の下端には焦げつきが薄く残着し、外壁はお焦げの上端より上に煤がついている。

土器43は小形の鉢。胎土に長石と石英の粒を多く含む。口唇はわりと尖る。外側は横位の撫でにより仕上げている。内壁は、全面皮一枚剥げて取れたようにざらざらとし、くたびれてい

る。外面には、煮こぼれの炭化滓がかさぶた状になって残っている。尖底部は、径4cmの範囲が他よりもすべすべしている。

主体を占めるのは中越式である。また前期初頭の下吉井式と下吉井式の在地系土器がかなりと、木島式および花積下層式が混在して拮抗している。中越式には纖維を混入した無文の尖底土器の破片もあり、並行する神ノ木式と関山式が僅かにある。

### 32号住居址（第287、288図）

1～6は中越式で、2～4には垂下粘土紐がつく。3は指頭で連続して押えている。7～12は無文で纖維を混入する。7には補修孔がみられる。8には二本組の斜線がみえる。9の口唇はわりと尖る。外面とも成形時の凹凸がわずかに残るが、横に撫でて整形している。

13・14は下吉井式で、隆帯上から強く押し引いて沈線を加える手法をとっている。15は口縁のすこしドが幾分厚くなっている。内壁はざらざらしてくたびれている。16～18は、蓋状に粘土紐を貼っているもの。16は丁寧に器面を撫でて整形している。17と18の内面には横位の擦痕がついている。19～26は縄文地のもので、19・20には纖維が含まれる。19は花積下層式で、口縁部がやや厚くなっている。20は多条縄文の原体を転がしている。21～23は異なる原体をもつて、条の向きを変えている。22は菱形に、23は羽状に施文している。24・25は無筋の原体を結節して横位に施文している。26は原体をやや斜めに転がし、条が横向きになるようにつけている。27は櫛歯をあてて疑似縄文ふうにしている神ノ木式の破片。

28～33は、無文または条痕文で纖維を混入している。どれもみな厚手である。32は整形時の削りか、器面が凸凹している。これらのほかに、条痕のつく纖維土器の破片が中越と同量出土している。34～36は木島式。いずれも成形時の指押さえの凸凹が残る。34の粘土紐の上は、櫛歯の先を突くように当てる。古い手法のようだ。35の外面下方は、煤けたのか黒褐色に変色している。36の粘土紐は平べったく、貝殻の背で条痕を引いている。37は、二～三本組の平行沈線による曲線が引かれている。かなり薄手の土器片。天神山式の文様を雜いだ在地の土器か。38は神ノ木式。櫛歯と多条縄文の原体を使って、文様を描いている。

本址は、中越式の破片が多いが、下吉井式の在地系土器がかなり含まれる。

### 34号住居址（第289図、320図 42）

1～3は中越式。1の口唇には円い棒を押し当てた刻みがつく。外面ともに、横位の撫でによる丁寧な器面調整がされている。3は整形時の凹凸が残る。外面には髪の毛がついていたらしい痕跡がある。4～6は縄文地のもの。4は附加条、5は組紐、6は単筋の原体を用いている。5は竹管で波状文を、6は沈線を引いている。5は関山式、6は神ノ木式であろう。7・8は無文で纖維の混入するもの。8は中越式の尖底土器の破片と思われる。9は下吉井式。整形時の浅い条痕をわずかに残し、強弱をつけながら2本組の波状文を引いている。頸部は腰帶を巡らし、その上を押し引いて結節沈線を加えている。10は蓋状に粘土紐をめぐらすもので、

## 縄文時代の遺構と遺物

繊維を多く含んでいる。

土器42は炉の西側の堆土上層から出土した。壺形土器のミニチュア品。外側は口縁が横、胴部が縱に施して仕上げている。壺の中からは何も発見されなかった。外面には茶褐色をした渋のようなものがついていて、少し光沢を有す。

これらのほかに本址からは、浅い整理箱に半分くらい出土している。中越式とそれ以外の繊維土器の割合は1対1である。繊維土器については、条痕のつくものが少なく、中越式と下吉井式の区別が極めて難しい。

### 35号住居址（第283図）

1は中越式。胎土に金雲母と長石の細かい粒を多く含む。2・3は無文で繊維を混入する。2は小さく波打つ波状の口縁部。3は底部付近で、積み上げの部分からとれている。4は木島式で、貝殻の背でべちゃんこな粘土紐の上に条痕を引いている。

このほかに上器は両手一杯分あり、前期初頭と前葉の土器が出ている。中越式の無文と繊維土器の割合は1対2で繊維土器の方が多く、繊維を混入する破片の中に無文の尖底土器が目につく。

### 36号住居址（第290、291図）

1～5は中越式。1は金雲母と長石の粒を多く含み、内壁はボロボロしてくたびれている。2は縦位に器面の調整がなされている。3は金雲母と長石の粒を多く含む。5は棒状の施文具で格子目を引いている。6～8は無文で繊維を混入する。6の口径はかなり大きい。7と8と22は多量の繊維を混入し、8は全体にくたびれている。

9～21は縦状に粘土紐を貼り付けている。9は表裏とも条痕による整形がきれいで、表側は明らかに文様を意識して斜めに引いている。10の口縁は波状をなし、凸帯で画された上方には、一本の波状沈線が引かれている。凸帯の下手は縦方向に撫でている。いっぽう内側は、横位の条痕が全面につけられている。11は波状の口縁部で、口縁に沿って粘土紐を貼り付けている。また波頂部からも粘土紐を垂下させている。12は隆帶上に櫛齒をあてて条痕をつけたのち、押し引きの沈線を引いている。15は横位の隆帶の上にV字形に粘土紐をつけている。16は波頂部付近で、縦条体を引いた条痕のようだ。内壁は荒れてざらざらとしている。17は条痕ふうの細線文が斜めに施されている。18～20は平べったい粘土紐に刻みがつくもの。18は二本ずつ櫛齒状に、19は斜めに、20は途中で向きを変えてつけている。20の内面は、浅い条痕を横方向に引いている。21はふっくらとした粘土紐をつけている。

23は櫛齒状の施文具で2本の蛇行沈線を引いている。繊維を含み、薄手で焼成は固い。早期天神山式の文様を継いだ在地の土器であろう。24～29は条痕のつく破片。24と25は同一個体かもしれない。25は両面に浅い条痕がつく。26は縦位に浅い条痕が引かれていて、内面は少し疲れている。28の内壁にはお焦げがついている。29は縦条体を使っているかもしれない。これら

は口縁に沿って縦状に粘土紐を這らす土器の胸部破片である。

30~32は地文に繩文がつくもの。30は無節、31と32は単節の原体を使っている。いずれも横位の撫でによる丁寧な器面調整がされている。花積下層式段階の破片であろう。33・34は木島式の破片で、33は平べったい粘土紐を貼ったのち、貝殻の背で条痕を引いている。口唇には貝殻の腹縁を押し当てたと思われる刻みがつく。

本址からは、整理箱で二箱分が出土した。主体を占めるのは、纖維を多く含む前期初頭の下吉井式の在地系土器であり、わずかではあるが前葉の中越式が含まれる。

### 37号住居址（第293図）

1~7は中越式。4の格子目は櫛齒か篦状の施文具を使って引いている。6には補修孔があげられている。8~13は無文で纖維を混入するもの。

14~15は下吉井式。14の口縁部は粘土を貼って厚くしている。条痕をつけたのち、二本組の太い沈線を押し引きながら鋸齒状につけている。15は口縁上下の隆帯のあいだに、半割した竹管で連弧状の平行線をついている。16の隆帯には斜めの刻みがしてある。17には櫛描きの曲線がみえる。施文具はよくわからない。18~19はこれらの胸部破片。20は繩文地で纖維をふくんでいる。花積下層式になろうか。21は木島式で、つぶれた粘土紙の上から貝殻の縁を使って下方に引いている。

主体をなすのは前期前葉の中越式で、纖維を混入する無文の尖底土器も多い。そして初頭の下吉井式および花積下層式と木島式の古い段階の土器が含まれる。

### 38号住居址（第294、295図、318図、24、319図、34）

1~9は中越式。1は全体にくたびれていて、内面は粘土気が失われている。2の外面は薄く焼けている。3の焼成は良好で、固く焼き結まっていて長細い重下隆帯がつく。外側は綱方向に撫でている。4は口径の小さな、小形土器の破片。内外とも丁寧に器面調整している。6の格子目の下には、同一の施文具で文様帶を画する列点文がつけられている。これは中越式の古い段階によく見られるものだ。色調は肌色にちかく、この辺の粘土ではないようだ。7は篦状の施文具で浅く、8は太い縁で格子目を引いている。9は底部付近で、外面の一部が焼けている。下端には煤がわずかについている。10は目の細かい格子目が引かれていて、纖維を含む。

11~14は無文で纖維を混入するもの。13は器膚がかなりくたびれているが、他はしっかりしている。12と14は丁寧に整形され、焼成も良好である。15は櫛齒状の施文具を突いて、列点文をついている神ノ木式の破片。16~31は地文に繩文地のもの。16・18・24~29・31は単節、17は結束の原体を転がしている。21~23・30は組紐、20は附加条の原体で、末端がループ状になる24~26・29がある。23は開山式か。

32は細い粘土紐を貼ったのち、斜めに刻みをついている。膚はきれいで、よく撫でて平滑にしている。33は低い隆帯に沈線または押し引きの沈線を引き、その上手に押し引きによる波状

### 縄文時代の遺構と遺物

文が引かれている。これらは下吉井式。34・35は縦状に粘土紐をめぐらすもので、34はその上に格子目の刻みを入れている。隆帯の下手はなにか条線のような文様がついている。36は地文に縄文を有する花積下層式の破片。瘤状の小さな突起が一つあり、その真上に焼成前に穿孔した小さな孔がある。瘤の下端には、撫り糸の圧痕がつけられているようだ。

37~39は無文で繊維を含み、38と40は固く焼き締まっている。40の表面は水拭きしたようにすべすべしている。41~44は条痕のつくもので、41と43は縦、42と44は横に引いている。45・46は細い粘土紐を貼り付けたのち、貝殻の背でその上を押さえ引いている。内面は成形時の指押さえによる凸凹が残る。45の色調は肌色にちかい明褐色で、この辺の粘土ではないようだ。下吉井式と木島式の折衷的な土器片。47は薄手で肩のきれいな破片。しっかりととした深い沈線が、斜めに引かれている。48は櫛齒状の施文具で、蛇行する沈線を引いている。天神山式の範疇に含まれる破片か。これまで見てきた同種の中では、器壁がいちばん薄い。

土器24は底があまり尖らずに立ちあがり、口縁が僅かに外反する平縁の深鉢。内外とも整形が丁寧で、外面はすべすべしている。内壁の下部には5cmの幅でお焦げがうすく残着し、いっぽう外壁の同じ部位は火熱により赤変している。残存率は3分の1程度。

土器34は南東の壁際に横倒しになっていた。丸みのある底で、最大径が肩部にある砲弾形の器形を呈する。器面調整は全体に丁寧。内壁の底部はいくらか荒れてざらざらしていて、いっぽう外壁の同じ部位は、赤褐色から橙色に変色している。地面と接する部分は、径6cmの範囲に灰が付着していて、僅かに白くなっている。

このほかに整理箱で一箱分が出土した。主体をなすのは前葉の中越式で、神ノ木式の縄文系の土器が出ている。それに初頭の木島式の古い段階のものと花積下層式の破片がある。また繊維を含む土器の多くは、下吉井式の在地系土器に属するものである。

### 39号住居址（第297図）

1~8は中越式の破片。5は棒状の施文具による単線の格子目が引かれている。6は垂下粘土紐を貼り付けたのち、指で押さえつけている。8は薄手の胴下半部。9は無文で繊維を含んでいる。10~17は縄文が施文されるもの。10・15は無節、他は単節。16は異なる縄を結束した原体を転がしている。17はループ文。18~21は条痕のつく土器で下吉井式段階の胴部。18以外は繊維を含んでいる。22は波状口縁の一部。外面と口唇には貝殻による条痕が施文され、内面は横に撫でている。23は隆帯を貼り付けたのち、それを二分するように沈線を入れている。隆帯の上には条痕が引かれている。22~24は典型的な下吉井式。22・23は同一個体か。24は平べったい隆帯を貼っている。

本址は前期前葉の中越式を主とし、神ノ木式と天神山式の縄文を施す一群が伴出している。また僅かだが、初頭の下吉井式がある。

## 40号住居址（第296図、318図 20）

1～7は中越式。1は平縁に爪の大きさほどの小突起がつく。外面は粘土が硬くなつてから調整なのか、筆でつけたような縦方向の撫でつけが残る。4は先の尖った施文具で、わりと目の細かい格子目を引いている。5は大きめな格子目。6は波状口縁の一部で、繊維を多く含んでいる。外面には、斜めに条痕が引かれている。7は無文で胎土に繊維を含む。

8～10は繊文地がつくもの。8は口縁が波状をなし、口唇に刻みを有す。菱形を意識してか、方向を変えて施文している。9・10は、一段ずつ原体を使い分けて羽状にしている。10は繊維を含まない。8～10は神ノ木式・関山式段階の破片であろう。11は隆帯を貼りつけたのち、押し引きながら沈線を加えている。12の胎土には大粒の長石が目立つ。また繊維を含んでいる。口縁に平行する隆帯と口唇には、斜めの刻みが施されている。13・14は条痕のつく破片。13は格子目状につけられ、文様として見えないこともない。両方とも繊維を含んでいる。15・16は木島式の破片。半べったり粘土紐の上を15は貝殻の背で、16は櫛歯状の施文具で引いている。17は2種類の異なる爪形を横位につけている。薄手の土器で、金雲母が目立つ。同じものが30号址からも出土している。

土器20は北角の近くから出土した。口唇に櫛歯状の刻みを有す。平縁ですんぐりとした器形をなす。内外ともに器面調整は丁寧で、焼成は良好。内壁の下半全体にはお焦げがうっすらとつき、いっぽう外壁は赤褐色に変色し、とくに下部の輪積一段分がひどく荒れている。上半部は煮こぼれの炭化滓と煤が残着している。

本址は、初頭の下吉井式の在地系土器を主とし、木島式の古い段階の土器が僅かに含まれる。また中越式もわりと多い。

## 41号住居址（第300図 1～9）

1・2は中越式。1の内面には成形時の指頭圧痕が残る。2の外面はやや整形があまく凸凹している。3～8は胎土に繊維を混入している。6は竹管で引いた浅い平行線が見える。5は下吉井式で、波状の口縁にそって二条の産帶が巡り、波頂部からは隆帯を一本垂下させて刻みを入れている。9は木島式の破片で、両面に成形時の指頭圧痕を残している。

本址から出土した土器は多くない。前期前葉の中越式と初頭が同量出土している。中越式の深鉢には繊維を含んでいるものが目立つ。

## 42号住居址（第298、299図、319図 30）

1～15は中越式。3・8の口唇には細かな刻みがついている。9は平行線による格子目、11は先端の尖った細い施文具で大きい格子目を引いている。16は波頂部で口縁は内傾する。胎土に繊維を含む。器面が硬くなつてから整形している。

土器30は、山形の小突起を有する小形の土器。僅かだが繊維を混入している。内外両面に成形時の指印さえが残る。肩は疲れていて、器面の調整ははっきりしない。内壁の胴部下半はざ

らざらしていて、いっぽう外壁の同じ部位は赤変している。

17は下吉井式。波頂部の真下あたりで、隆帯は条痕をつけたのち押し引きふうの結節沈線を加えている。18は波状の口縁部。口縁に沿って粘土縁を貼り、その下に波状沈線が引かれている。19は関山式。鋸歯状の平行沈線に梯子状に細線を充填し、刺状の突起を貼り付けている。刻みを有する二本の隆帯の下段は、零段多条の縄文原体を羽状に転がしている。20はLII縁部に平行して梯子状に粘土縁を貼っている大きな破片で、長石・石英の粒と纖維を多量に含む。内面は膚が荒れてざらざらし、疲れている。21・22は同一個体で胴部下半の破片。23・24は20と同種の土器片で、多量の纖維を含み、25には条痕がついている。

主体をなすのは前期前葉の中越式である。この中には、纖維を含んだ無文の尖底土器も僅かに含まれる。そして関山式が出ている。また下吉井式の在地系土器が混じっている。

#### 43号住居址（第300図 10～14）

10～13は中越式。13は細い平行線による格子目が引かれている。14は無文で纖維を含む。

#### 44号住居址（第300図 15～21, 319図 29）

15～17は中越式。15には太めな沈線による、日の大きな格子目が引かれている。18・19は条痕のつく破片。19は内面に条痕がつけられている。20・21は纖維を含んでいる。20の擦痕は文様に見えなくもない。21は積み上げの部分で剥げている。

土器29は、平縁で口縁に細かい刻みをつけている。胎土に長石の粒を多く含む。内壁は全体が膚荒れしていて、かなり消耗している。胴の中程から下は灰色に変色し、外壁の胴下半は赤褐色に変色している。

本址から出土した土器の量は僅かである。前期前葉の中越式が若干多い程度で、初頭の破片もある。

#### 45号住居址（第300図 22）

22の1点のみ。中越式の厚めな破片で、胴の下半部と思われる。

#### 46号住居址（第301図、第317図 9）

1は中越式。胎土に金雲母を多く含む。口縁部は爆ぜて剥落している。2は単節の縄文が施されている。3・4は同一個体で、附加条の原体を転がしている。纖維を多量に含む。5は口縁に沿って粘土縁を貼っているだけの単純なもの。胎土に長石の粒と纖維を多く含む。6・7は5と同種の破片で、纖維を多く含んでいる。8には擦痕状の条線がつく。8～11は木島式。8の隆帯上は貝殻の背で条痕が引かれている。9～11は竹管などによる平行線。10には補修孔がみられる。

土器9は四单位の波状をなして口縁が大きく開き、その中间も僅かだが波状になっている。同じ作りは56号址（土器8）にある。胎土に長石と石英の粒が多量に含まれる。内壁は指押さえの凹凸が残り、積み上げ部分はいい加減である。外壁はすこし凸凹していて、光沢を有す。

そして、岡で最下段の輪積み痕から下の内壁は、膚が荒れている。いっぽう外壁の所々には、煮こぼれたのか炭化滓がこびりついている。なお、部位を問わず細かく割れています。

前期前葉の中越式、それと関山式が同量出ている。また僅かだが、初頭の繊維を含んだ在地系の土器と木島式が混じっている。

#### 47号住居址（第302図 1～7）

1～5は中越式。1は胴部から底部にかけての破片で、外面の上半部には煤が付着し、内面の下半部にはお焦げがうっすらとついている。3には補修孔があけられている。4は胴部の上方で、細い線で引いた格子目がわずかに確認できる。6は燃りの異なる繩を結節した原体を使って、矢羽根状に施文している。7は繊維を多く含み、外面は擦痕状に器面調整している。

主体を占めるのは前期前葉の中越式で、関山式に並行すると目される縄文地の土器片が1点加わる。

#### 48号住居址（第302図 8～13）

8～10は中越式。8は金雲母が目立つ。成形時の指揮さえによる凸凹が残る。9は底部付近で内面にお焦げが付着し、10の外面にはうっすらと煤がついている。11は関山式で繊維を含む。口縁部には、無節のループ文が四段ついている。その下手には、櫛歯状の施文具でS字を連結するような文様をついている。12は異なる無節の原体を転がして、矢羽根状にしている。神ノ木式か。木島式の13は、粘土紐を貼ったのち、貝殻の背で条線を引いている。

主体をなすのは前期前葉の中越式で、関山式が伴出している。

#### 49号住居址

本址からは、磨り石3257が床上から20cm浮いて出土しただけで、土器などは出土しなかった。

#### 50号住居址（第303図）

1～8は中越式。1は波頂部に垂下粘土紐がついている。7は短い粘土紐を口唇の内側から貼っている。3の胎土には、多量の金雲母と長石の粒が含まれる。指揮さえの凸凹が少し残る。内外面とも横位の丁寧な撫でにより仕上げている。9は木島式で、内面には指揮さえの凸凹が残る。外面は貝殻の背でかるく引くように条痕をつけている。9～13は胎土に繊維を含む無文の破片。10・11は多量に含んでいる。12は長石の細かな粒を多く含み、内面はかなりくたびれている。13はしっかりととしていて、焼成も良い。14・15は口縁の先が強く外反する。多量の繊維を含む。15は板状の工具で条痕をつけていて、文様風に見える。

16は表裏に条痕がつく。17は木島Ⅱ式と目されるもので、粘土紐を貼りつけ、その上から貝殻の背で押さえるように条痕をつけている。口唇は貝殻の腹縁を立てて、突くように刻みを入れている。18～20は縄文地のもの。18は燃り系の圧痕、19は末端を結んだような原体を転がしている。2片とも繊維を含む花積下層式の破片。20は異なる零段の繩を結節した原体を転がしている。

## 縄文時代の遺構と遺物

前期前葉の中越式が主である。このなかには纖維を含んだ無文の尖底土器が含まれる。そして、初頭の下吉井式の在地系土器と木島式および花積下層式が含まれる。

### 51号住居址（第304図 1～6）

1～3は中越式。4・5は纖維を含む無文の破片。6は神ノ木式で、結束の原体を転がしている。同様な破片は3号址にあった。このほかに、片手分の中越式が出土している。遺物は少ないが、前葉の中越式が多く、神ノ木式が含まれる。

### 52号住居址（第304図 7～10）

7は中越式の口縁部。9・10は纖維を含む無文の破片。中越式の深鉢には、纖維を混入している個体がある。

### 53号住居址（第304図 11～15）

11～13は中越式。14・15は縄文地のもので、関山式または神ノ木式の破片であろう。15は多条縄文で、附加条の原体かもしれない。前期前葉の中越式に、縄文系の上器が僅かに加わる。

### 54号住居址（第305図 1～12）

1～6は中越式。1・2・5は金雲母が目立つ。1の内面は成形時の指押さえによる凸凹が残る。2の外表面は横位に器面調整して平らにしている。3は内外とも凸凹し、ややくたびれている。4は内外ともに丁寧に器面調整をして平滑に仕上げている。5にはすらっとした垂下降帶がつく。6には竹串のような施文具で、深くはっきりとした格子目を引いている。7は細い竹管状の施文具で、矢羽根ふうに交差させている。8は器壁の薄い底部付近のかけらで、内面には凹凸が残る。7・8は木島式か。

9の内面も凸凹していて、少し纖維を含む。10は口径の大きな個体の破片。纖維を多く含み、長石が目立つ。すこし凸凹するが、横位に撫でて器面の調整をしている。11は長石と石英の砂粒が多く含まれている。焼成は良好で、固く焼き締まっている。内外ともに横方向に器面調整をしている。口唇に浅い刻みを有す。そして外表面には、煮こぼれの炭化滓あるいは煤が付着している。神ノ木式の破片であろうか。12は花積下層で、小突起のつく波状部。擦り糸の圧痕が薄くついている。

このほかに整理箱で3分の1ほど出土したが、中越式の破片が圧倒的に多い。前期前葉の中越式と、神ノ木式の縄文系の土器が僅かに含まれる。中越式の中には、纖維を含む無文の尖底土器がいくらかある。

### 55号住居址（第305図 13～16）

13の垂下降帶は太くて厚く、指で押されたような刻みがつく。14と15は底に近い部分で長石の粒が目立つ。14の外表面にぶい光沢を有す。16は纖維を含む厚手の破片で、内外とも擦痕状の撫でによる器面調整がされている。

土器は片手分しか得られなかつたが、中越式が殆どである。

## 56号住居址（第306図 1～10, 317図 8）

1～4は中越式。1の口縁は微妙に波打っている。全体に膚がくたびれていて、外面には煤が付着している。2・3は波状口縁。2の外面は丁寧に器面調整している。3と4は凸凹していて、内面は共に荒れてくたびれている。3の外面には、煮こぼれの炭化滓がはりついている。5は幅広な二本組の平行沈線で格子目を引いている。焼成は良好で、器面も滑らか。

6は纖維を混入する無文の口縁部で、長石の粒が目立つ。内外ともに凸凹していて、膚は疲れている。7～9は木島式で、平べったい粘土紐を貼ったのち、櫛歯状の施文具で条線を引いている。7は内面にも斜線がつく。胎土に長石を含む。粘土はこの辺から採取できるものとは異なるようだ。10は下吉井式。条痕を斜めに引いた後、半割の竹簪を押し引きながら、七段の沈線を引いている。内面はきれいに仕上げである。

土器8は柱穴2と3のあいだの床から出土したもので、口縁が強く外反する。四単位の波状を呈するが、それぞれの四分点の位置と少しずれている。内壁は成形時の指揮さえ残して横位に、外壁は口縁のみ横位で他は縦位に撫でて仕上げている。外壁の上半部は煤け、とくに胴の中位は7cmの幅で帯状に濃く付着している。いっぽう内壁は、煤の下端の線から下部にタル状のお焦げが貼りついている。

本址からは、整理箱に3分の1ほど出土したが、中越式がやや多い。この中には纖維を混入する中越式の深鉢が数個体ある。そして初頭の典型的な下吉井式とそれに並行する木島式の土器片が、確かに混じる。

## 57号住居址（第306図 11～14）

11と12は纖維を含む無文の破片。成形時の凸凹が残る。12の内面は紫色～褐色に変色している。13は薄手で固く焼き結った下吉井式の破片。平べったい粘土紐の上には、単節の繩文がついている。その上手には、平行する2本の浅い蛇行沈線が引かれている。花積下層式と目される14は、無節の繩文原体を横に転がしていて、末端のはつれた部分がS字状についている。全体に器膚が疲れていて、内面はお焦げで黒く変色している。

このほかに両手一杯分ほどあるが、初頭と前葉の中越式はほぼ同量である。

## 58号住居址（第308図、317図 1・4、320図 41）

1～6は中越式。1の胎土には長石と金雲母がやたらに目立つ。器面の調整は丁寧で、内面は指揮さえのち横に撫でて、外面は皮革などに水をつけてこすったのか、にぶい光沢を有している。外面には煤が僅かに付着している。2には小突起がつく。内面は荒れてざらざらしている。焼成は良好。3は内外とも丁寧に器面調整されて、平滑である。口縁部は横、胴部は斜めに撫でている。4の外面は縦に撫でて仕上げている。内面は膚が荒れてざらつき、かなり疲れている。5の口縁はかなり外側に傾き、長細く先の尖る垂下隆帯を貼っている。外面は口唇まで煤が付着している。6は単線による日の細かい格子を引いている。内面にも斜線がつく。

焼成は良好。7～12は繊維を含む無文の破片。7は内外面ともきれいに撫でている。9は波状部。焼成はいまひとつで、全体に消耗している。

10は全体にくたびれ、内外ともにざらざらしている。色調は橙色で、二次的に火熱を受けているかもしれない。同一の破片がいくつもあるが接合しない。11は波状の部分。内面はわりと丁寧に撫でているが、外表面は凸凹していて、十分な調整とはいえない。12は胴部。内面はざらざらして黒く変色している。13は口縁が内側して、小突起がつくようだ。竹管状の施文具で蛇行懸垂文が引かれている。天神山式の文様を継いだ在地の土器であろうか。14は刃物で引いたような沈線がいくつもつく。焼成は良好で、固く焼き締まっている。15には太くがっしりとした粘土紐が蓋状に貼りついている。内面の膚は荒れて、剥げているところもある。16は一段の撫り糸を七周ほど巻いた絡糸体を、横そして縦の順に転がしている。

17～21は本址の北側を精査した際に出土した遺物である。17・18は中越式。17は指押さえの凸凹が少し残る。18は両面とも丁寧に器面調整をして仕上げている。19は文様ともつかない櫛歯による条痕が交差するように引かれていて、僅かに煤がついている。20は単節の縄文原体を転がしていく、端部がループ文になっている。整形は丁寧で、内面は磨きをかけたようにすべすべしている。21は組紐。内面はきれいに調整されている。

土器1は柱穴2の脇の床に横たわっていた。中越式の典型例。口縁はほぼ平縁で、四つの小突起とすらっとした垂下隆帯がつく。口唇には細かな刻みを有す。外壁の上部は横、下部は縦の撫でによる器面調整をしている。にぶい光沢があることから、皮革などに水をつけて撫でているようだ。内壁は底部付近の一部が縦位の、他は全面横位の丁寧な撫でによる調整がされている。外壁の胴部最大径から上半部には、煤が付着している。いっぽう、内壁は胴の下半が黒く変色している。そして最も黒変しているのは、底からすこし上がった輪積痕の二段目から四段目の部分である。

さらに注目されるのは外縁の底部で、輪積痕の二段目までがすべすべとしている。土器を据える際に、鐵や灰と擦れ合って生じたものと思われる。

土器4は小ぶりな土器で、四单位の波状部を呈し、ミミズ腫状の垂下隆帯がつく。胎土に金雲母と長石が多く混入している。色調は灰色で、この辺の粘土ではないようだ。内壁の下半にはお焦げが薄い膜になってつき、いっぽう外壁の上半部は煮こぼれの炭化滓と煤が付着している。底面は径4cmくらいの範囲がすべっこい。

土器41は柱穴1の脇の床から出土した。高さが10cmを少し超えるほどの小形土器。「し」の字状の垂下隆帯が四個つく。内外とも撫でにより仕上げているが、外壁には鈍い光沢があり、皮革などに水を付けてこすっているようだ。内壁は霧吹きをかけたように炭化滓が付着し、外壁は煤が全面についている。

主体を占めるのは前葉の中越式である。そして初頭の土器が僅かに混じる。

## 59号住居址（第309図）

1～9は中越式。1の格子目は太い竹串のようなもので、右下がりを引いてのち左下がりを引いている。2は1と逆の順に格子目をつけている。焼成は良好で、固く焼き締まっている。3は器壁が脆くなっていて、かなりくたびれている。焼成もよくない。4は内外面とも、丁寧に器面調整がなされている。内面の下方はお焦げで黒褐色に、外面の同じ位置は赤褐色に変色している。5の色調は灰褐色を呈し、この辺の粘土ではないようだ。整形はわりと丁寧である。6の内面は、殆ど一枚剥げてざらつく。7の内面はざらざらしてお焦げがうすくつき、外面は煤けている。8は底部にちかいところ。内面の下半にはお焦げがうすらとつき、外面は同じ部位が赤変している。また上半には、煤が帯状に付着している。9の底部はわりと球形にちかい。内面の下半にはお焦げがうすく付着し、外面は同じ部位から上方が煤けている。外壁の下方は爆ぜている。

10～15は、繊維を混入する無文または条痕のつく破片。口縁部の破片はどれも消耗している。10の口径はかなり大きい。12は浅く条痕を引いている。13の内面下半は膚があれて褐色に、外面の同じ部位は橙色に変色している。14は浅い条痕で、15は櫛歯状の工具で器面を撫でて調整している。15はやたらに分厚い。

16～18は縄文地を有するもので関山式。16は口縁に二本組の弧線文が引かれ、その下にループ文を転がしている。17は多条縄文の原体とループ文、18もループ文の原体を6段ほど転がしている。焼成はどれもみな良好で、固く焼き締まっている。16は外面の消耗が著しい。19は櫛歯状の施文具で文様を描いている。神ノ木式の破片。20は口唇の外側に粘土紐を貼り付け、そこに貝殻の背を押し当てている。木島II式であろう。21～23は、平べったい粘土紐を貼り付けたのち、21は櫛歯で22と23は貝殻の背で条線を引いている。

24は、押し引きの沈線で波状文を引き、波頂部からは三列の押し引きを下方につけている。器面の調整は丁寧である。下吉井式の破片。25は多量に繊維を含む。口縁付近に細い粘土紐を帯状に貼り付けている。

前期前葉の中越式のほかに、関山式と神ノ木式の縄文系の土器がある。中越式の深鉢の中には、繊維を混入する個体がいくつかある。また初頭の下吉井式と木島式が、僅かに出ている。

## 60号住居址（第310図）

1～7は中越式。1の外壁には煤が付着している。内壁は横塗でのままでざらついている。2・3は波状の口縁部。4の内面の輪積みから下方には、僅かだがお焦げが付着している。5は竹管状の施文具で目の大きい格子を引いていて、口唇にも同じ工具で刻みを入れている。6は口唇の割れ方から判断して、小突起がつくようだ。7は微量だが繊維を含んでいる。やや分厚く外面は凸凹していて、鈍い光沢を有す。同一の個体が両手分あるが接合しない。

8・9は繊維を混入する無文の口縁部で口唇が肉厚である。10～13の表裏には貝殻の背で引

### 縄文時代の遺構と遺物

いた条痕がつく。12と13は隆帯の上にも条痕を引いて文様の効果をあげている。隆帯の上手には二本一組の浅い平行沈線が波状に引かれている。典型的な下吉井式の破片。11はこれらの口縁部。14は壺状に粘土紐を巡らすもので、隆帯は平べったく、わりといい加減な刻みがつけられている。焼成は良好。15は単節の縄文原体を横に転がしている。口唇がやや尖り、直下が肥厚しているのが特徴的である。その部分にはS字の結節縄文が転がされている。中程にもつくが、上のとは異なる原体を使って条の向きを変え矢羽根状にしている。類似の土器は31号址-1、32号址-19など数片みられる。花積下層式であろう。16・17は地文に縄文が施文されるもの。16はループ文を5段ほど転がし、17は単節の原体を斜めに転がしている。関山式の破片であろうか。

18~23は木島式の破片で、時期に少し幅があるようだ。平べったい粘土紐を貼りつけた後、貝殻の背中で条痕を引いている。18は粘土紐に貝殻の腹縁を押している。古い要素であり、Ⅱ式と目される。19~22の外面には、煤が付着している。23は細い竹管を縫そして横に引いて文様を描き、口唇部にも貝殻の腹縁を引いて刻みをつけている。肌色に近い色調である。V式であろうか。

本址からは整理箱で一箱分の土器片が出土した。前期初頭の繊維を含む土器もありと混じっている。

### 61号住居址（第311図）

1~5は南東の壁際に纏まっていたもの。多量の繊維を含む。地文に縄文が施され、口唇には列点状の刻みがつく。口縁に平行して低めな隆帯が一周しているが、縄文はこの隆帯の上にも施されている。胴部下半と内壁はかなり荒れて、鬆が通ったかのようにボロボロしてくびれている。他に胴部下半の破片がかなりあるが、細かく割れていて直接接合しない。花積下層式であろう。6は繊維を含む無文の口縁部で、焼成はあまりよくない。

7は櫛歯状の施文具で波状文を引いている。内面は疲れていて、僅かにお焦げが残着している。8は斜めに条痕を施し、いくらか波状の沈線を引いている。ちょうど沈線の箇所が器形の変換点となっている。9は壺状の割りと太い隆帯を貼り付けている。色調は黒褐色で、焼成はふつう。7~9は下吉井式と思われる。10は器壁がうすく、内面が少し凸凹する木島式の破片。平べったい隆帯を貼り付けたのち、貝殻の背で条線を全体に入れている。

土器片は両手で二杯分くらい出土したが、繊維土器が多い。花積下層式が主体を成しているのは、唯一、本址だけである。木島式および下吉井式の土器片が、僅かに含まれる。

### 62号住居址（第307図、317図 10）

1~5は中越式。1の器壁は薄く、内面は凸凹して膚荒れしている。2~5は単線、3~4は櫛歯あるいは篠状の施文具で格子目を引いている。5には格子目の下端に列点状の刻みがついている。中越式でも古い段階の土器である。いずれも色調は肌色に近い。6~8は繊維の混

入する無文の破片で、6は横位に擦痕状の撫でがされている。7は表裏とも肩が荒れて、疲れている。8は幅広の箇状工具で内外を器面調整している。9・10には擦痕状の条線がつき、両方とも整形が不十分で凸凹している。内面は横、外面は縱方向に器面調整している。9の内壁には、タール状の染み付きがある。

11は隆帯を貼りつけた後に条痕を施し、隆帯を二分するように押し引きしている。12は条痕を施文後、平行する小波状の沈線を引いている。割れ口の下方は低い隆帯である。13は11とよく似ている。隆帯を貼りつけたのち、雑な押し引きをしている。これらは粘土気が失われて、くたびれている。11～13は典型的な下吉井式。14～16は、縦状の隆帯を貼りつけているもの。14は薄手の破片で、口唇は丸みを有する。15の隆帯は指で軽く押さえている。内面には横位の条痕がついている。17には多条繩文が隆帯上にも施文されている。61号址に類品があった。胎土に長石が目立つ。18は2本のわりと細く平べったい隆帯を貼り付けたのち、貝殻の背で条痕を付けている。木島式の破片。

土器10は、口縁が四単位の小波状を呈する。胎土に金雲母や長石・石英などを多量に含む。外壁の器面調整は乾燥が進んでから行っているらしく、砂粒が動いている。内壁の下方はお焦げが帯状にうすく付着し、いっぽう外壁は火熱を受け赤く変色しているようだ。その部位から上には、うっすらと煤がついている。

土器片は整理箱で一箱出土したが、すべて纖維を含む破片である。これらは前期前業と初頭に二分できそうである。

### 63号住居址

本址は2点の磨りうす以外に、土器片などは出土しなかった。

#### 1号建物址（第312図 1～3）

1は中越式。整形時の指押さえの凸凹を残しながら、薄く均一に積み上げている。金雲母と長石の細かい粒が目立つ。2は表裏とも凸凹していて、焼成はあまりよくない。3の外面には煤が付着している。これらの外に本址から出土した遺物は、纖維を含む小片が2点あるにすぎない。

#### 2号建物址（第312図 4～10）

4～8は中越式。4は脛部の下半部分で長石の砂が目立つ。5と6は底部に近い部分。外面は丁寧に器面調整されているが、内面は荒れてざらつく。5は黒く変色している。7・8は口縁部。7の左端は、垂下する粘土紐が剥がれてしまっている。8は薄手の破片で、外面には煤が僅かに付着している。9の内側には、器面調整時の条痕がみえる。10は貝殻の背で斜めに条痕が施されている。内面は凸凹して、いくらかお焦げが残っている。

本址からは両手一杯分だけ出土したが、中越式の破片ばかりである。

3号建物址（第313図）

1・2は同一個体か。二本組の平行沈線で格子目を引いたのち、口縁に二列の連弧文を重ねて描いている。3～5は纖維を含む無文の破片。3は内面にお焦げが、外面には煤が僅かに残着している。4は長石や石英の粒を多く含んでいる。5の内面は暗褐色に変色していて、少し疲れている。

6・7は下占井式。6は口唇とその下手に隆帯を巡らし、その間に文様をつけています。地文に条痕を引き、のちに押し引きによる波状の沈線文を充填している。半べたい隆帯にも、条痕が施文されている。外面には煤がうっすらとついている。口縁は低い波状となりそうだ。同様な破片が31号址から出ている。7は隆帯の上から押し引きの沈線を引いています。沈線の中はお焦げがついている。10は纖維を多く含み、兼状の隆帯が一周するもの。口唇部に斜めの刻みと、隆帯には鋸歯文風に浅めな刻みがつけられている。表裏には器面調整時の擦痕がついている。

8の表裏は横位の器面調整がよく残っている。焼成は良好で、固くしまっている。9の器面は意外と平らで、方向の疎らな条痕がついている。内面の器膚は被れています。11は零段の捺糸の絡条体を斜めに転がしている。粘土気が失われ脆くなっている。12は櫛齒状の列点文が横位につく神ノ木式の破片。13～15は木島式。13は細い隆帯の上および胴部に、貝殻の腹縁か櫛齒の先を当てるに疑縄文といえるもの。内面はいくらか凸凹している。木島Ⅱ式か。14の口唇には貝殻の腹縁を押し当てた刻みがつく。内面には器面調整時の指押さえの凹凸が残る。

本址は前期初頭が優勢で、僅かに纖維を含む中越式がある。

4号建物址（第314図）

1の外面には煤が僅かにつく。内面は崩壊している。2はやや内湾する口縁で、わずかに波状を成す。表裏とも凸凹していて、器面の調整は荒っぽい。内壁は膚がざらつき、砂粒が浮き出ている。3は纖維を多く含み単節の太めな縄文原体を横方向に転がしている。内面はひどく荒れて、鬆が通ったかのようにボロボロしている。61号址の1や2と同一個体かもしれない。4は口唇に兼状の隆帯を巡らすもの。隆帯の上には格子状に刻みを入れている。また隆帯の直下には、焼成前に穿たれた小孔が一つある。

出土した土器は僅かで、前期初頭と前葉が混じっている。

2号小竪穴（第315図 1）

1は木島式。貝殻の縁で条線を引いている。

3号小竪穴（第315図 15～17）

15の表裏はいくらか凸凹していて、内面は焦茶色に変色している。16は薄手で、内外とも少し疲れている。17は底部にちかいところ。内壁は爆ぜている。

## 4号小豊穴（第318図 19）

土器19は、住居址の西壁に重なっていた小豊穴の南隅に立てられていた。平縁で無文の深鉢。金雲母、長石、石英の小粒を多く含む。器面は平滑で、とくに外壁は皮革などに水をふくませ撫でつけているようで、にぶい光沢を放っている。

## 9号小豊穴（第315図 2~8）

2の内面は指押さえの凸凹が残るが、外面は丁寧に器面調整されている。3は底部付近。金雲母が目立つ。内面は膚が荒れてざらつく。4は内外とも横に撫でて仕上げている。外面はにぶい光沢を有す。5は下吉井式。隆帯を貼ったあとに条線をつけ、その中に押し引きの沈線を引いている。6はソーメン状の粘土紐を貼ったあとに、貝殻の腹縁を当てて押さえている。色調は肌色にちかく、この辺りから採取できる粘土ではないようだ。木島式。

7は繊維を多く含む、薄手の破片。零段の縄を巻いた絡条件を斜めに押し当てる。8は底部近くの破片で長石の粒が目立つ。内面の膚は荒れてざらつく。

ここからは、全部で両手分ほどの破片が出土したが、繊維の入った破片2点以外は、中越期の無文の破片である。

## 10号小豊穴（第315図 9~10）

9は繊維を含む、焼成の良好な破片。内面はやや凹凸している。10の外面には縦の条痕がつき、内面は横位に撫でている。ほかに片手分の破片が出土しているが、繊維を含んでいるものが多い。

## 11号小豊穴（第315図 11）

11は長石の粒が目立ち繊維を含んでいる。器壁は分厚く、器面調整は粗っぽい。内面は縦位の撫でで仕上げているが、凸凹が少し残る。外面は櫛歯状の工具で格子を引いている。このほかに中越式の小片が1片と、繊維上器のかけらが4片出土している。

## 9号住居址南側の小穴群一帯（第315図 12~14）

9号住居址の南側にあった小穴群の一帯から土器片が出土した。12と13の内面には、うすく煤がついている。14は器壁の薄い破片で金雲母を含む。竹管による平行沈線が引かれている。この外に片手分の土器が見つかっている。

## 遺構外出土の土器（第316図）

遺構外からは整理箱で一箱分が出土した。この中には晩期の土器片が数点含まれているが、圧倒的に前期初頭から前期前葉の土器片が多い。

1~15は、口縁に沿って縦状に粘土紐を貼り付けている。1は長石の粒が目立つ。紐の如く大きな隆帯で、口唇が垂れて下の粘土紐にかぶっている。口唇は等間隔に軽く押さえている。外面は器面調整時の浅い条痕が斜めについている。2は内外ともに横に撫でて仕上げている。隆帯直下は浅い条線が斜めにつく。3はやたらに分厚く、隆帯は太くがっしりしている。

隆帯には斜めに刻みがつけてある。

4の内面の仕上げは不十分で、凸凹している。口唇の刻みはかるく削いでへこみをつけたもの。5の隆帯のすぐ上には二本の平行する沈線が見えるが、器面調整時の条痕の一部か判断できない。粘土気が失せて、膚は荒れてざらつく。6の隆帯も斜めの刻みがあるが、V字なのか斜位なのかよく判らない。7は波状になる部分と思われる。沈線が何本か見えるが、五~六本が単位となり鋸歯文ふうにつくようだ。内側は横位の条痕による器面調整がなされている。8は波状になる薄手の破片で、口唇には刻みがつく。9は口縁がわずかに外反する。焼成はよくない。10は波状になる器壁の薄い破片で、隆帯の下手には刃先の鋭利な工具で刻みをついた二本組の沈線が見える。11の口唇は丸みを有す。浅い沈線が引かれている。12は口唇に沿って隆帯が貼られ、そこには格子の刻みをつけている。そして器面調整の擦痕が斜めに引かれている。

13は波頂部で、頂からは太い粘土紐が垂下し、格子に刻まれている。口唇には刻みがつく。14と15は繊維を含まない。14は「キ」の字形に二本の粘土紐を貼ったのち、口唇から縦に粘土紐をついている。粘土紐の上には縄文を転がし、そのあと二分するように沈線を引いている。器面調整は丁寧で、焼成も良い。15は平べったい隆帯を貼り付けたのち、条痕を全体につけている。その上手には二本組の沈線が見える。内面は横位の条痕で器面調整をしている。この2点は下吉井式。

16はやたらに分厚く、内外面ともに、浅めな条痕で器面調整をしている。外面の上方には垂下粘土紐が付くようだが、惜しいことに欠けてしまっている。粘土紐の脇は軽くなぞっている。内壁の下方は焦茶色に変色し、一方その外側は橙色に赤変している。全体にくたびれていて、とくに内壁の消耗は著しい。17は大方剥げてとれているが、横に貼った粘土紐がみえる。下方が荒れて消耗している。18は内外面とともに条痕による器面調整がされている。

19は附加条の縄文原体を矢羽根状に転がしている。器面調整は丁寧で、とくに内面は平滑にしている。関山式の破片であろう。20は地文に縄文を転がしたのち、竹管の斜めに平行線を数本引いている。これは19の附加条の文様を真似したものだ。21は金雲母や長石の粒を多量に含む。口唇とその直下に、小さな円形刺突が一列配される。焼成は悪く、膚も荒れている。22は三~四本の櫛齒状の工具で、入り組んだ曲線を引いている。焼成は良好で、固く焼き締まっている。天神山式の文様を受け継いだ在地の土器であろうか。23は内面が凸凹する薄手の木島式の破片。櫛齒状の工具で斜線を引いている。口唇は上から押してつぶしたように、すこし平べったくなっている。

24は金雲母を多く含む薄手の破片で内外とも凸凹し、外側は輪積痕を残している。それぞれ違う施文具で、右と左から交互に爪形を付けている。25は口縁部付近。平べったい粘土紐を口縁に平行して貼ったあと、全面縄文を施していく、下方は異なる原体を使って条の向きを変えている。花積下層式であろう。

最後に、直接遺構に関わらない遺物が僅かにある。12・13号址では集落の上面から諸磽式土器（第321図1～3）が出土しているが、それについては既に説明してある。

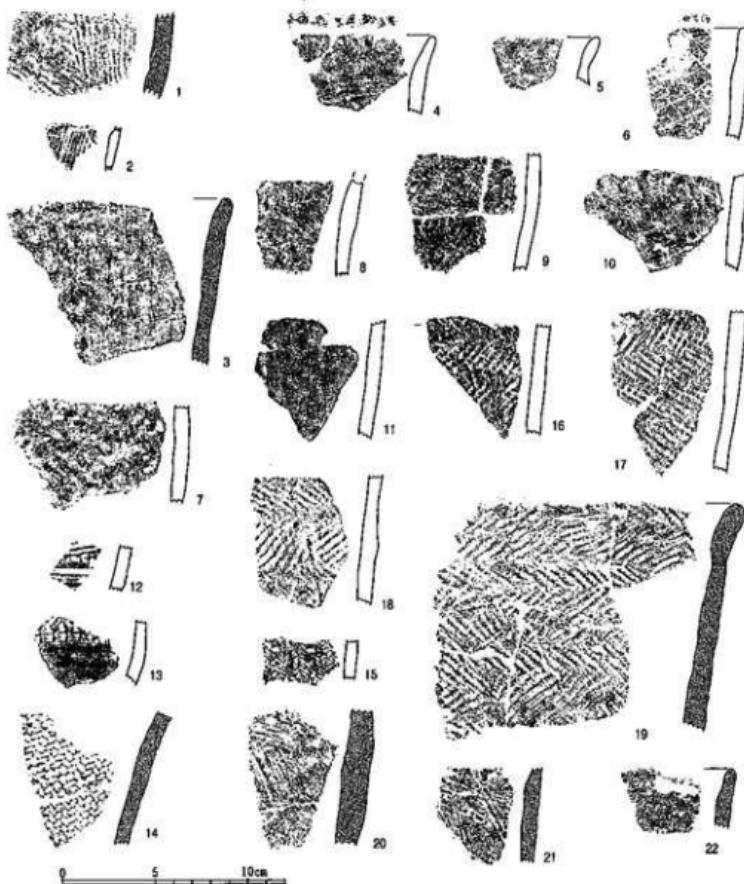
このほか26号住居址の調査にはいってすぐ、南側の発掘場の検出面の直下から、晩期最末大洞式の小形土器（第321図4）が出土した。これに伴う遺構は確認されなかった。そして出土地点が明確でないが、該期のものと目される紡錘車（第321図5）が遺構外から見つかっている。

小形の鉢形土器は、およそ2分の1個体。内外とも沈線による単純な文様がつく。器面は丁寧に磨かれている。紡錘車は土器片を利用してしたもの。中央には穿孔途中の穴があり、周縁は磨って整形している。

また晩期の土器は、遺跡全体で片手分が出土している。

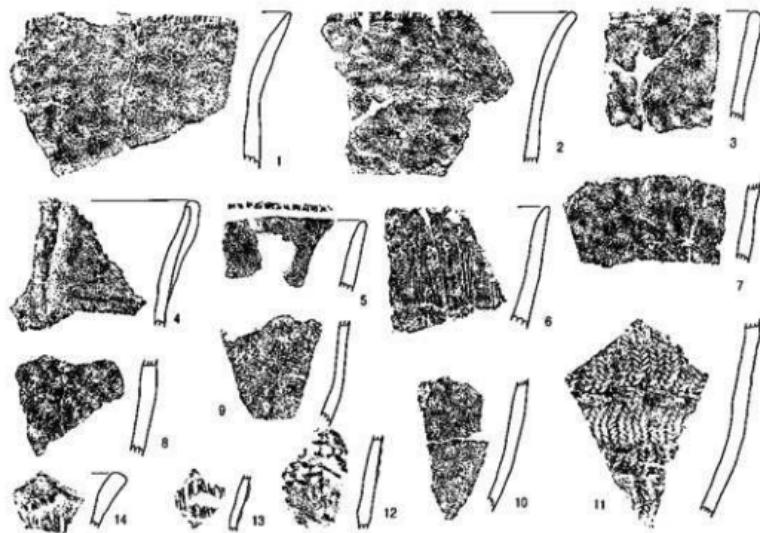
#### 注

- (1) 「唐波宮」 長野県富士見町教育委員会 1988
- (2) 岩崎孝治「第4章 阿久遠跡をめぐる諸問題 第3節 出土遺物の検討 3石器」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その5—』長野県教育委員会 1982
- (3) 「後平遺跡」 佐久町教育委員会 1978
- (4) 下平博行・賀田明「長野県に於ける縄文前期初頭縄文系土器群の編年」「早期終末・前期初頭の諸様相」 縄文セミナーの会 1994  
下平博行「塚田式の設定とその様相について」『塚田遺跡』御代出町教育委員会 1994
- (5) 「天狗山遺跡」 茅野市教育委員会 1993

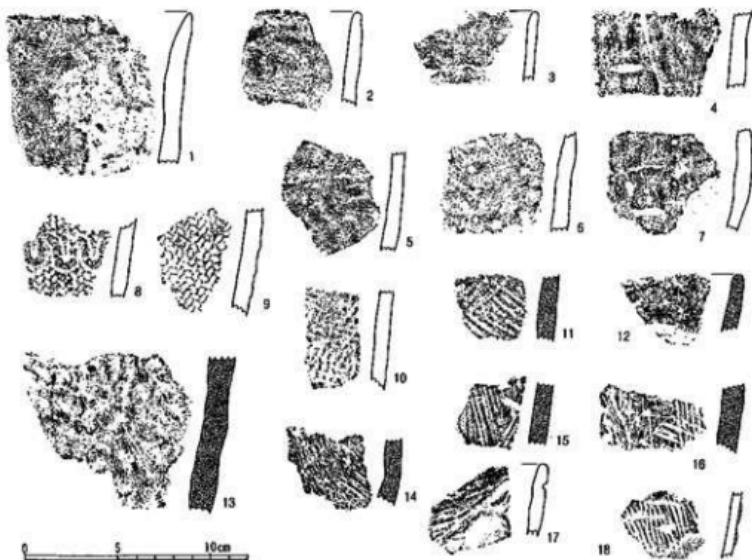


第253図 1, 2号住居址出土の土器 (1/3)

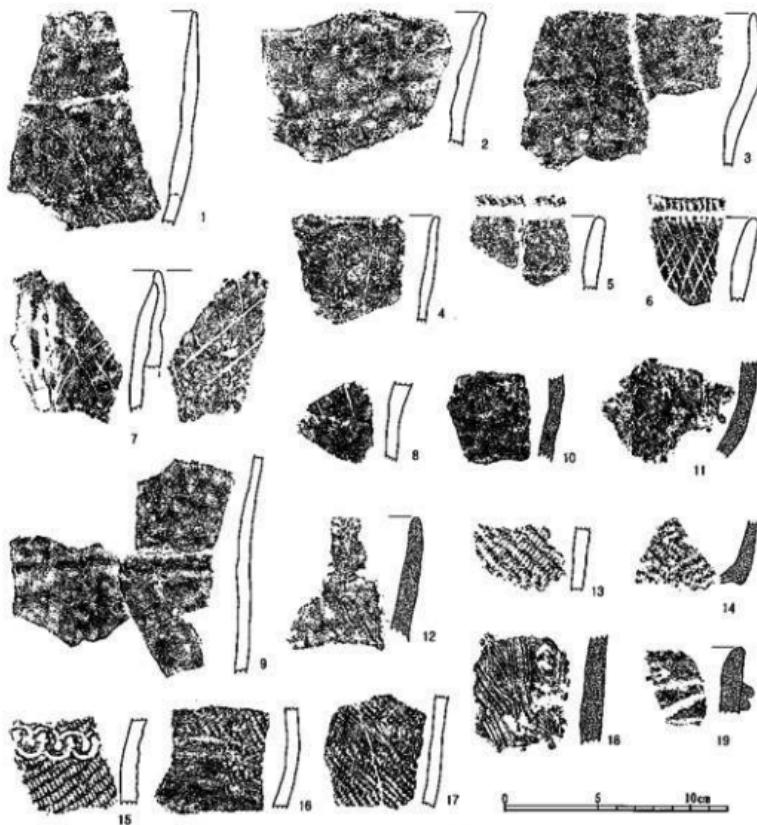
1・2:1号址 3~22:2号址



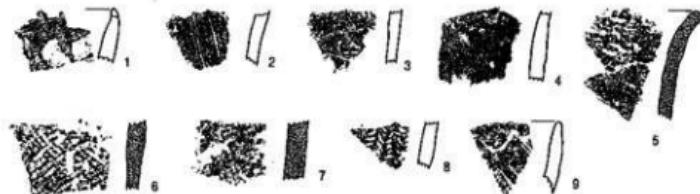
第254図 3号住居址出土の土器 (1/3)



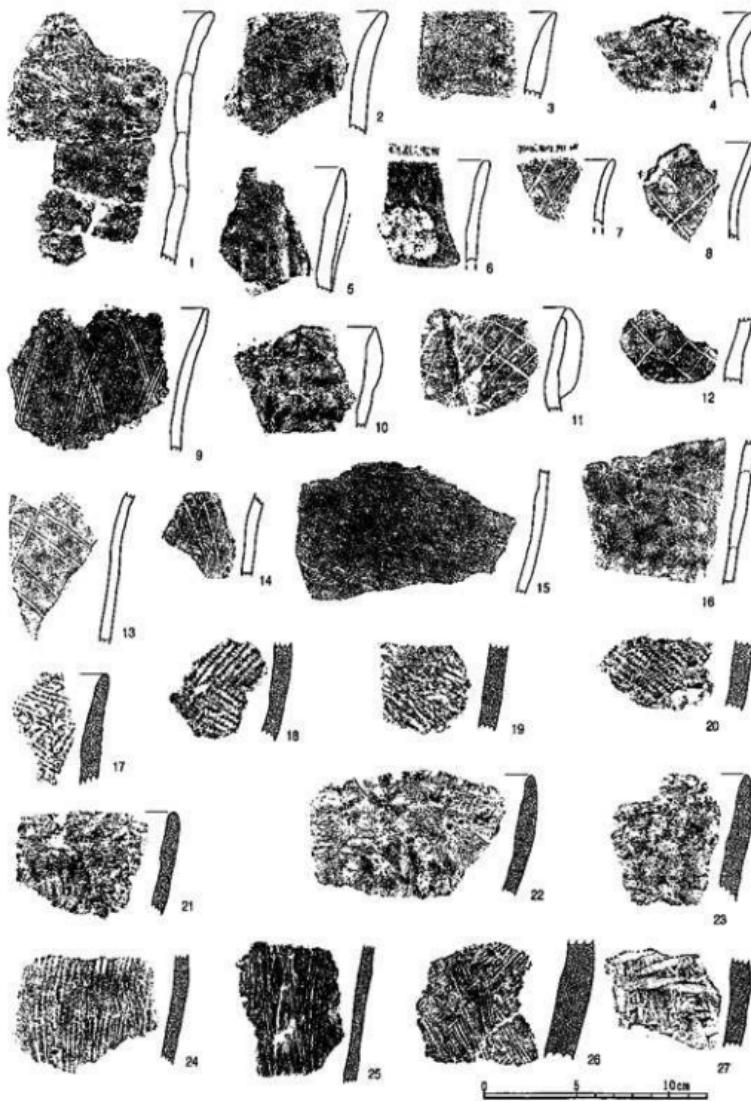
第255図 6号住居址出土の土器 (1/3)



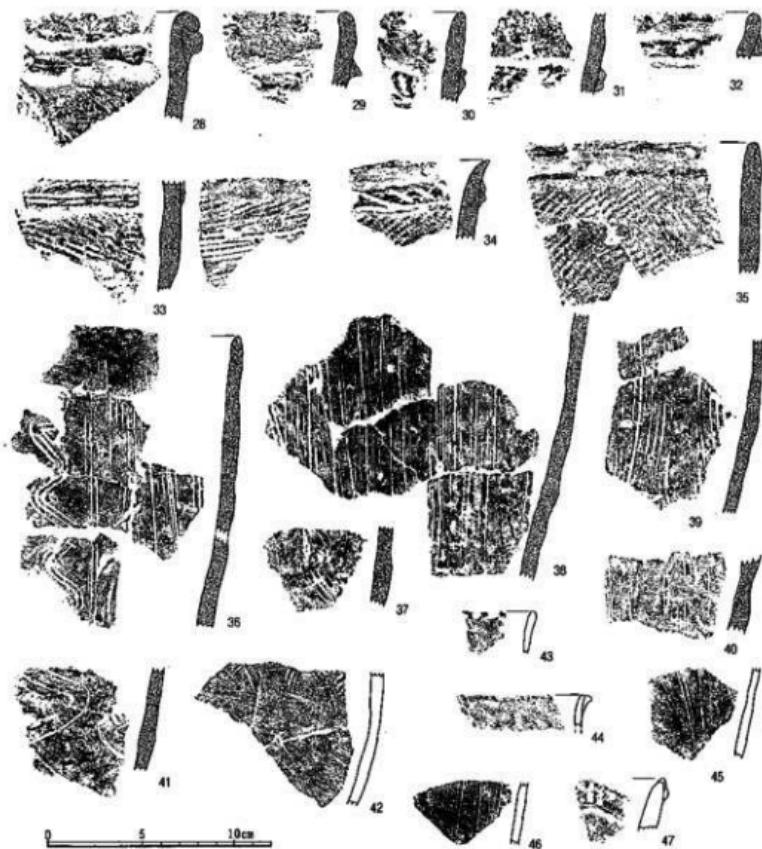
第256図 4号住居址出土の土器 (1/3)



第257図 5号住居址出土の土器 (1/3)



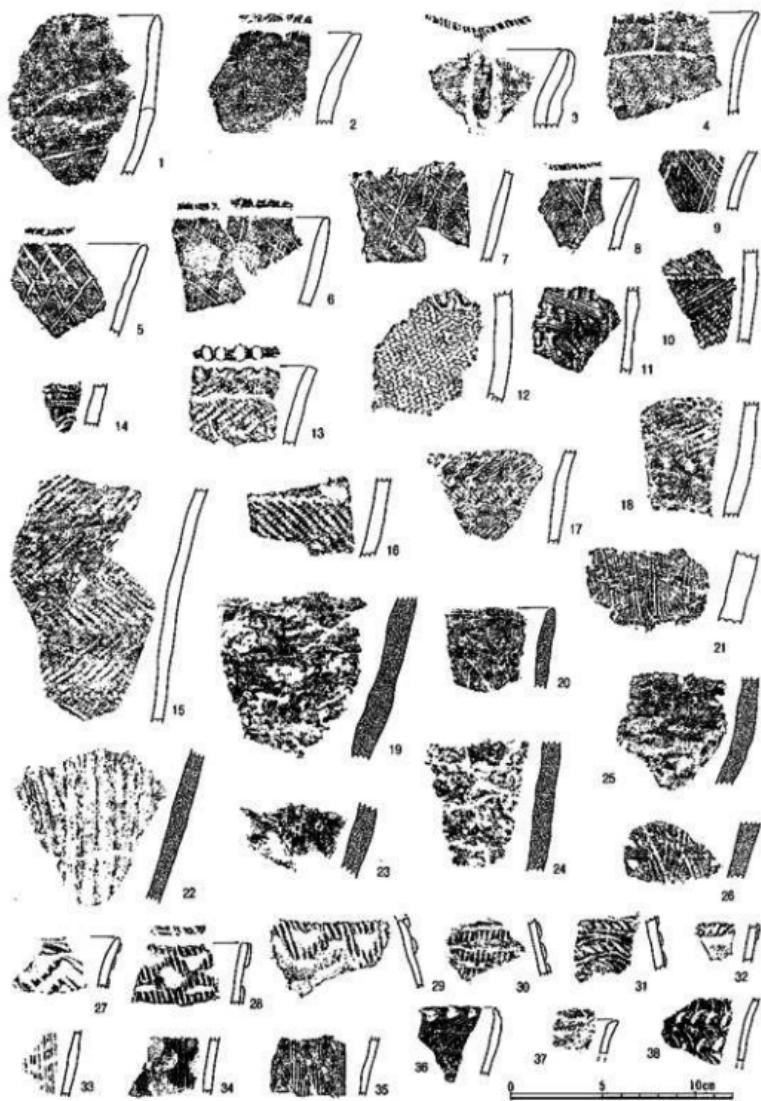
第258図 7号住居址出土の土器 (1/3)



第259図 7号住居址出土の土器 (1/3)



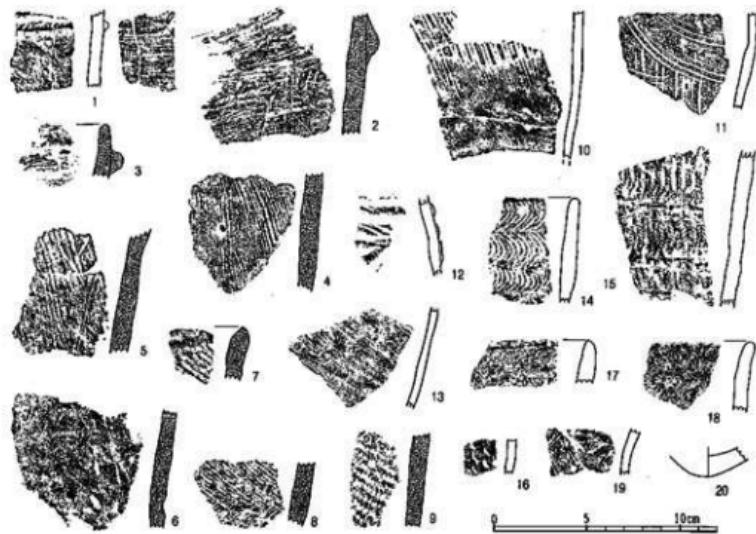
第260図 9号住居址出土の土器 (1/3)



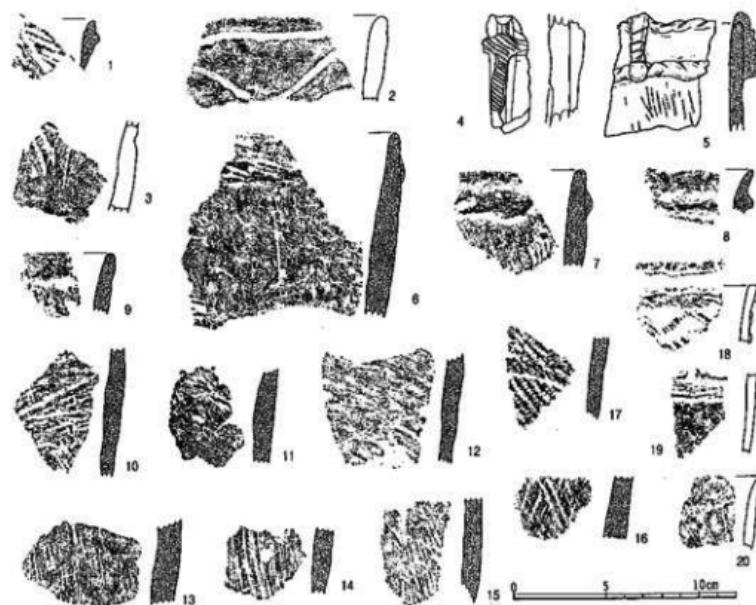
第261図 8号住居址出土の土器 (1/3)



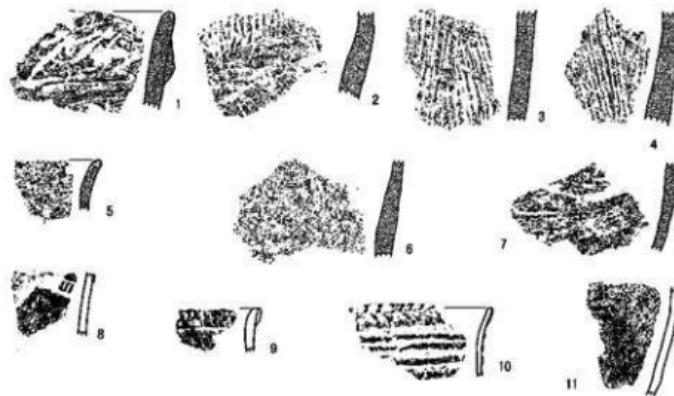
第262図 8号住居址出土の土器 (1 / 3)



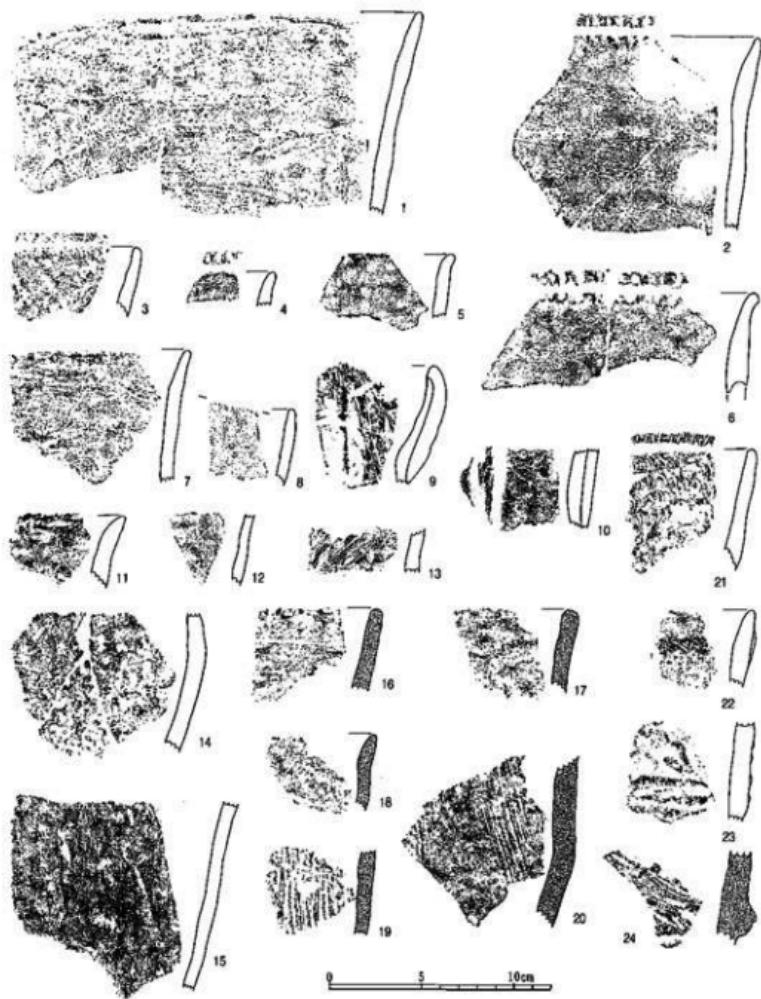
第263図 10号住居址出土の土器 (1 / 3)



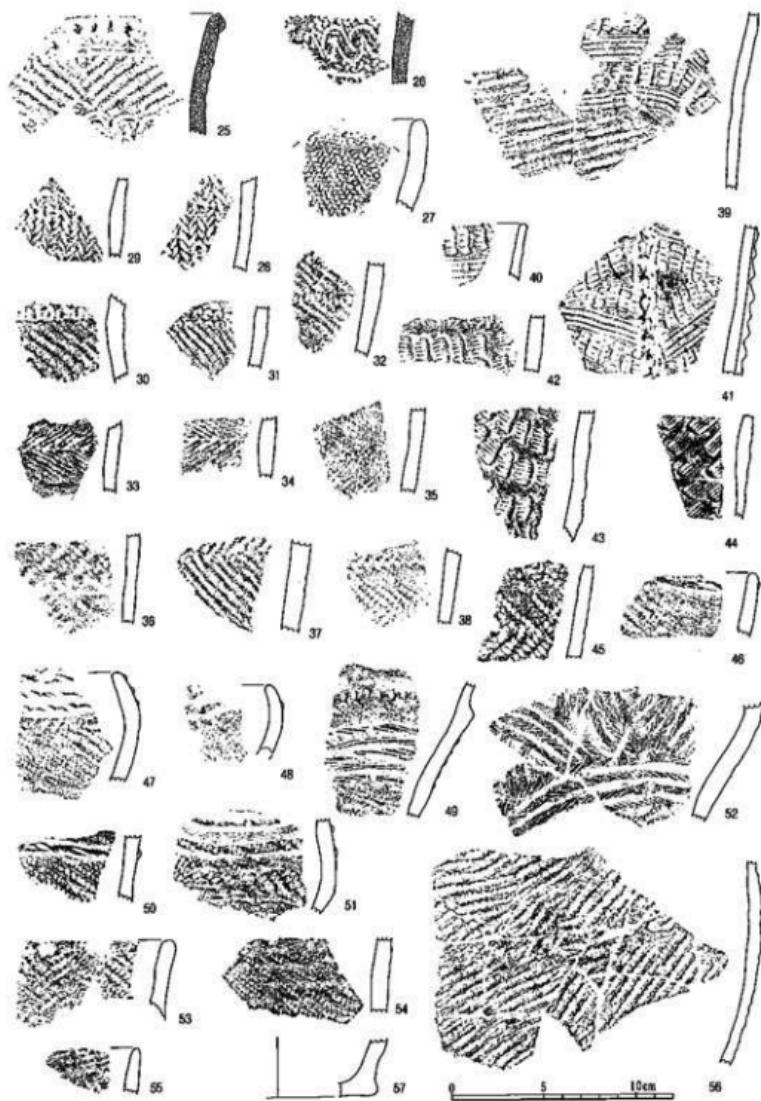
第264図 11号住居址出土の土器 (1/3)



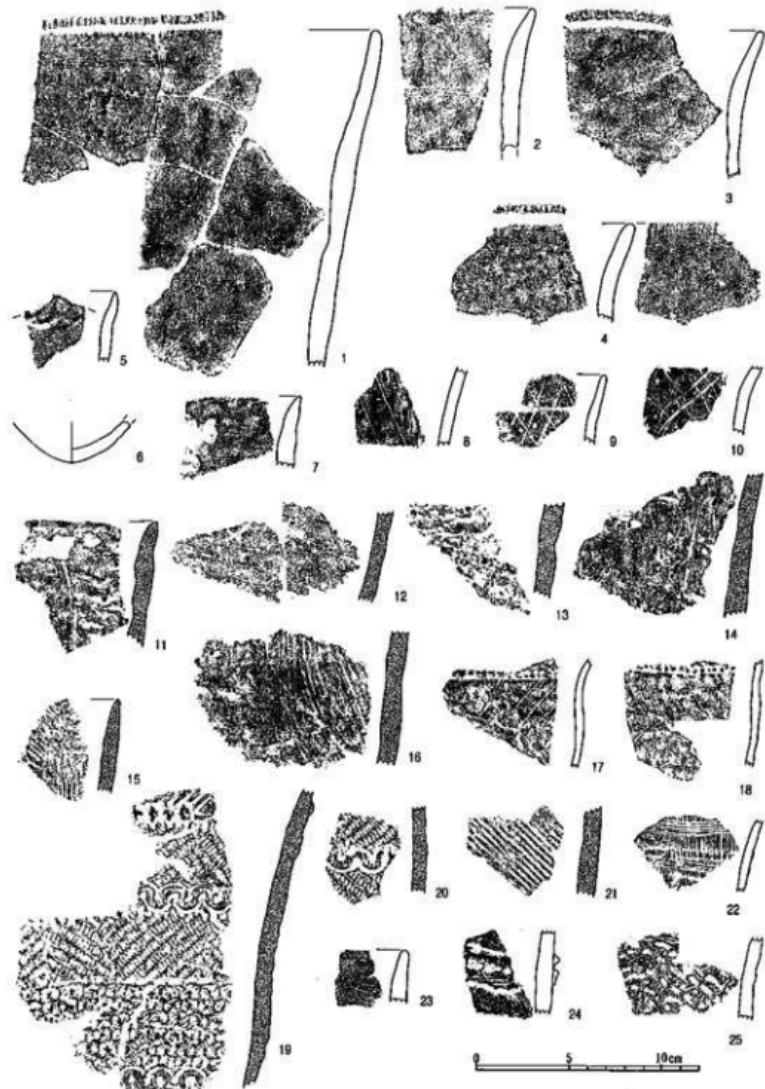
第265図 19号住居址出土の土器 (1/3)



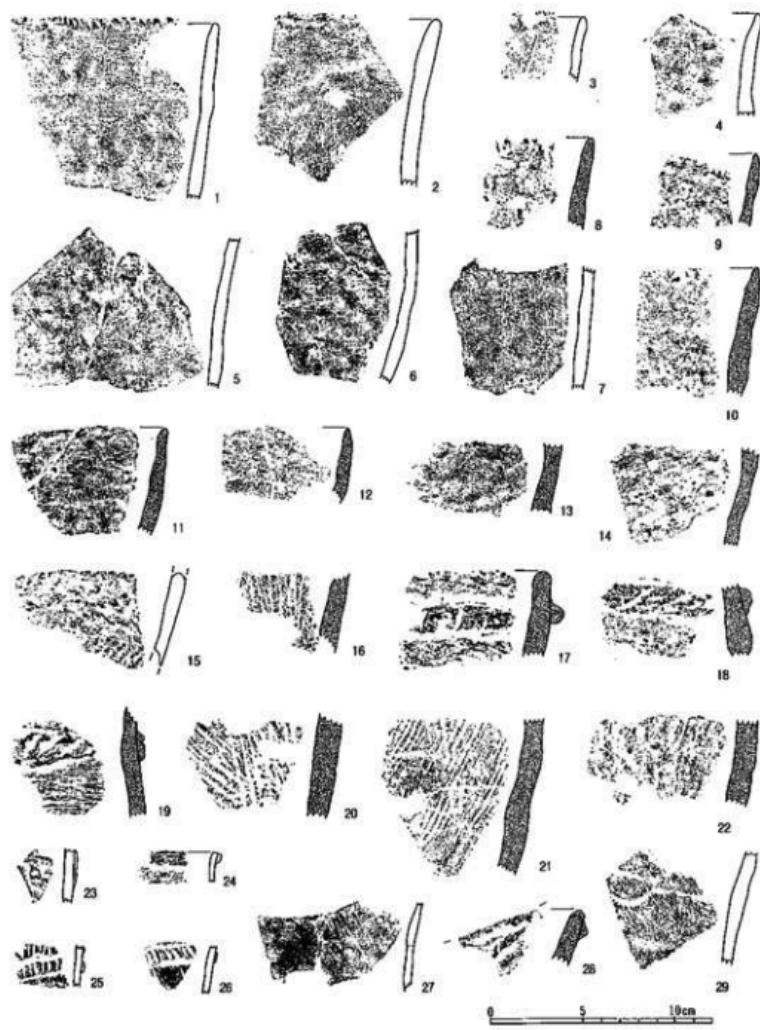
第266図 12・13号住居址出土の土器 (1 / 3)



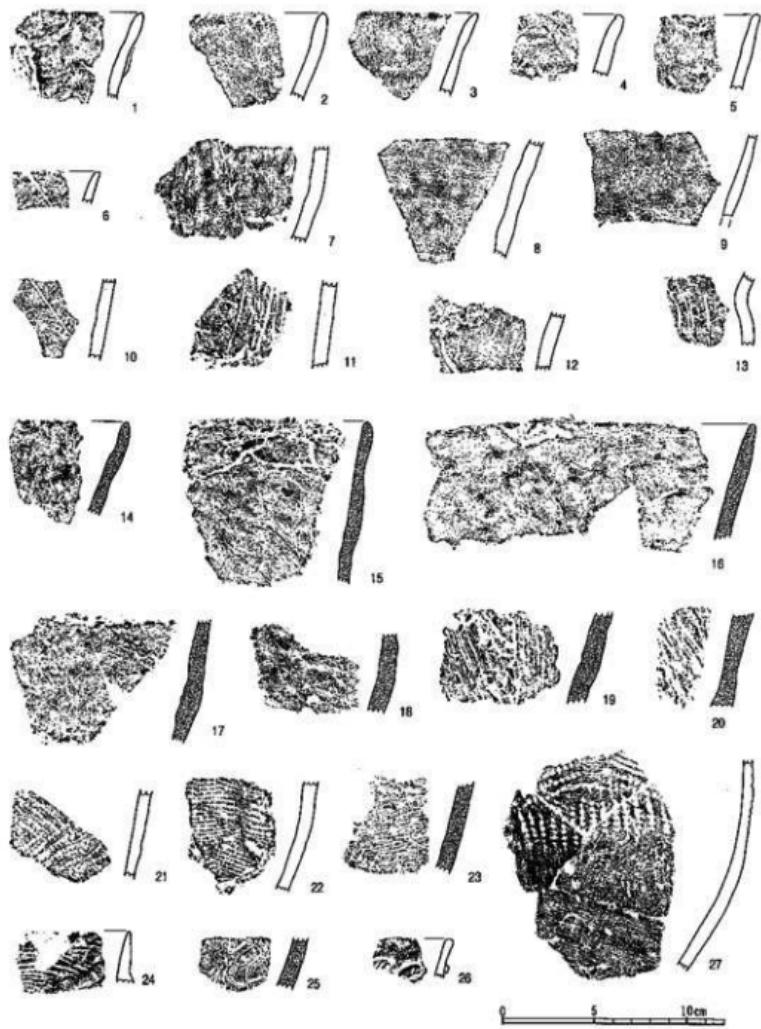
第267図 12・13号住居址出土の土器 (1 / 3)



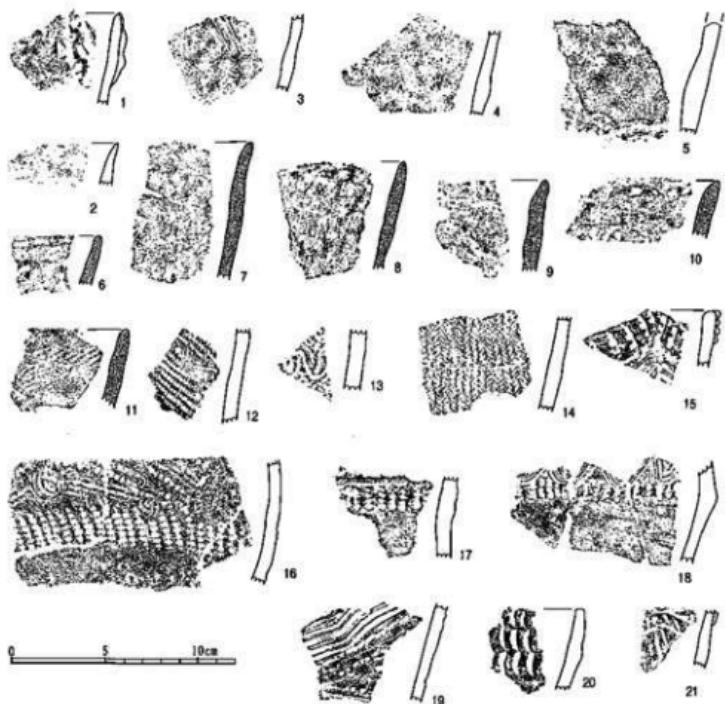
第268図 14号住居址出土の土器 (1 / 3)



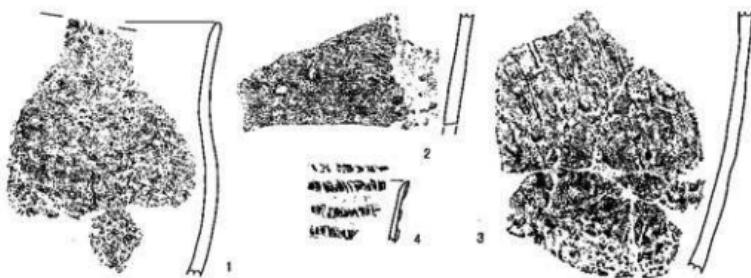
第269図 15号住居址出土の土器 (1 / 3)



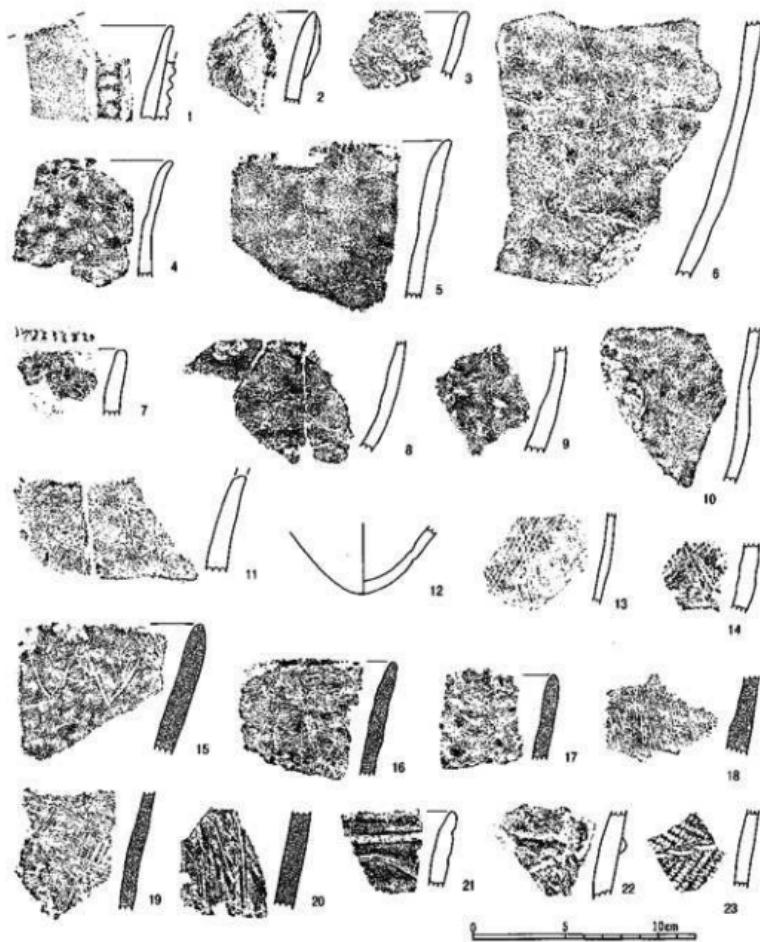
第270図 16号住居址出土の土器 (1/3)



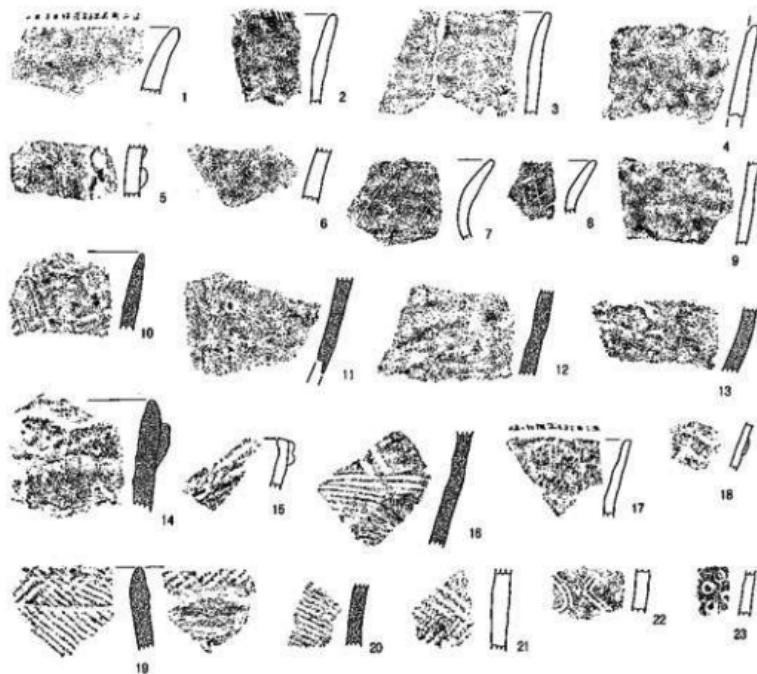
第271図 17号住居址出土の土器 (1/3)



第272図 18号住居址出土の土器 (1/3)



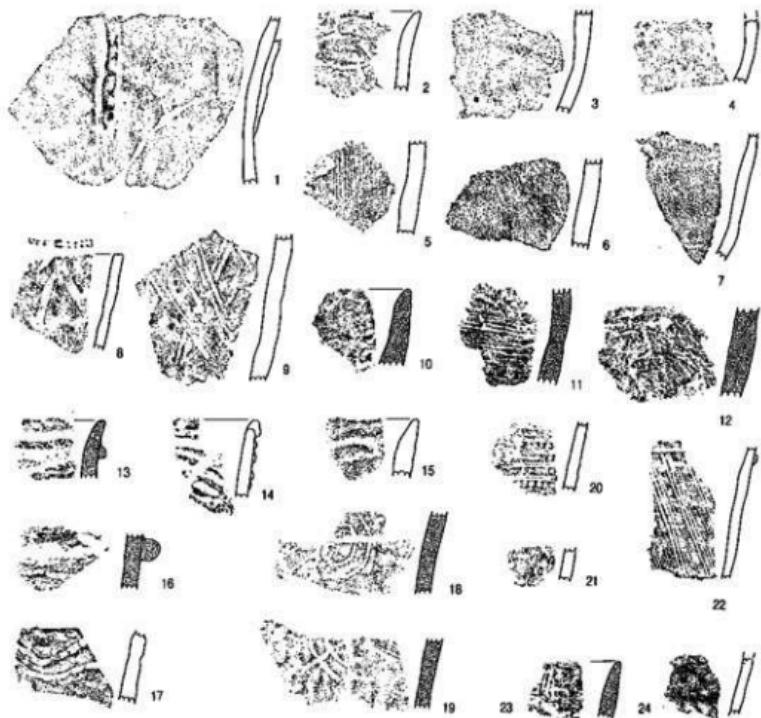
第273図 20号住居址出土の土器 (1 / 3)



第274図 21号住居址出土の土器 (1/3)

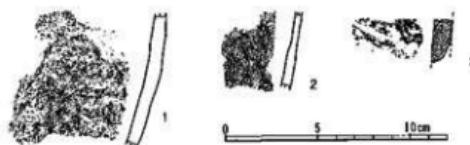


第275図 26号住居址出土の土器 (1/3)

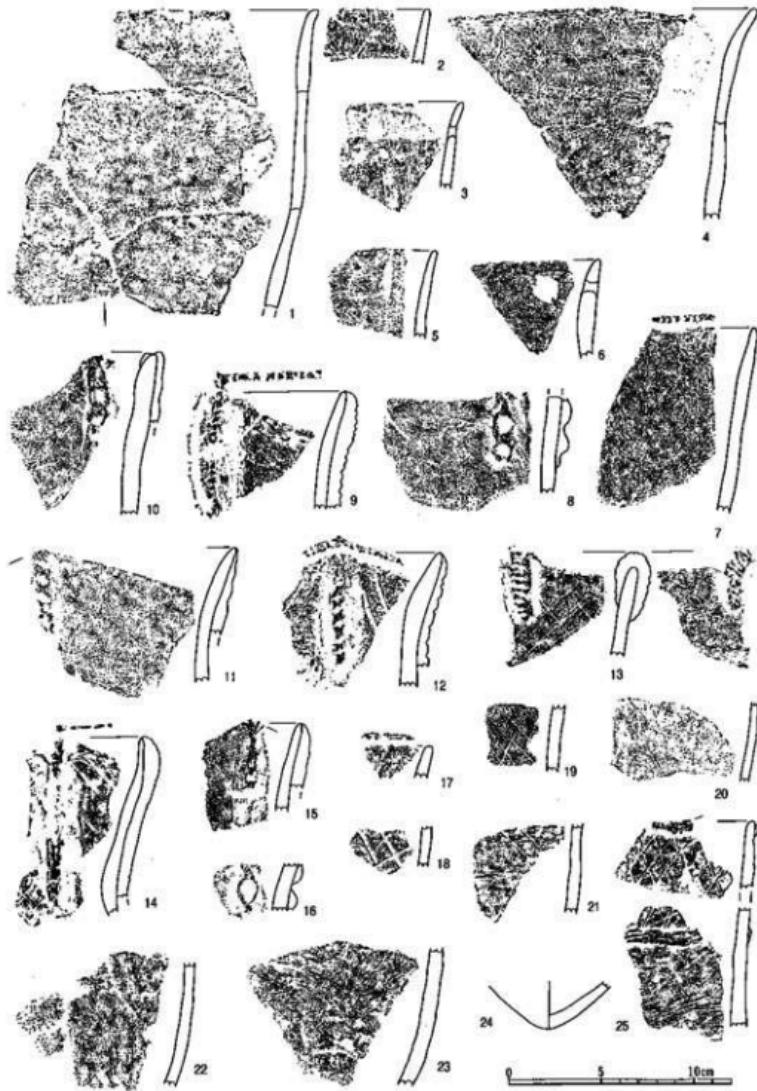


第276図 23、24号住居址出土の土器 (1/3)

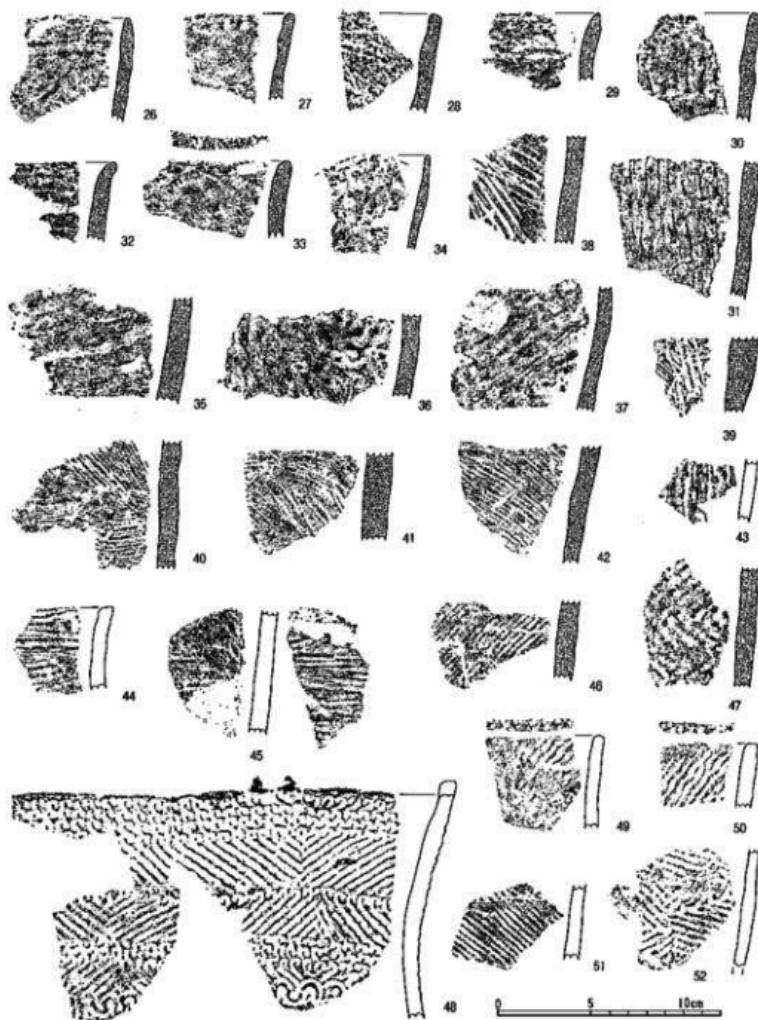
1~22: 23号址 23·24: 24号址



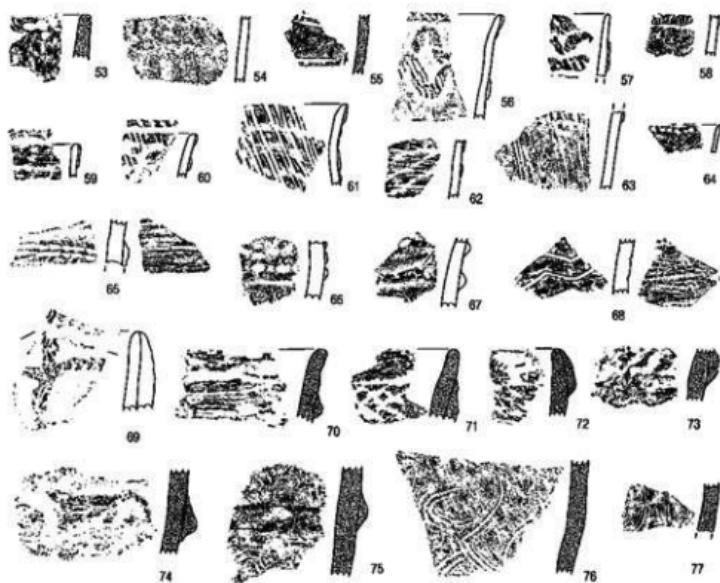
第277図 29号住居址出土の土器 (1/3)



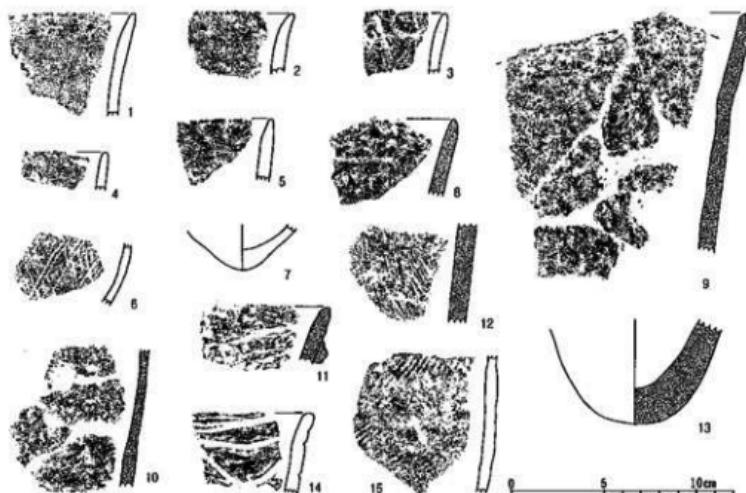
第278図 25号住居址出土の土器 (1/3)



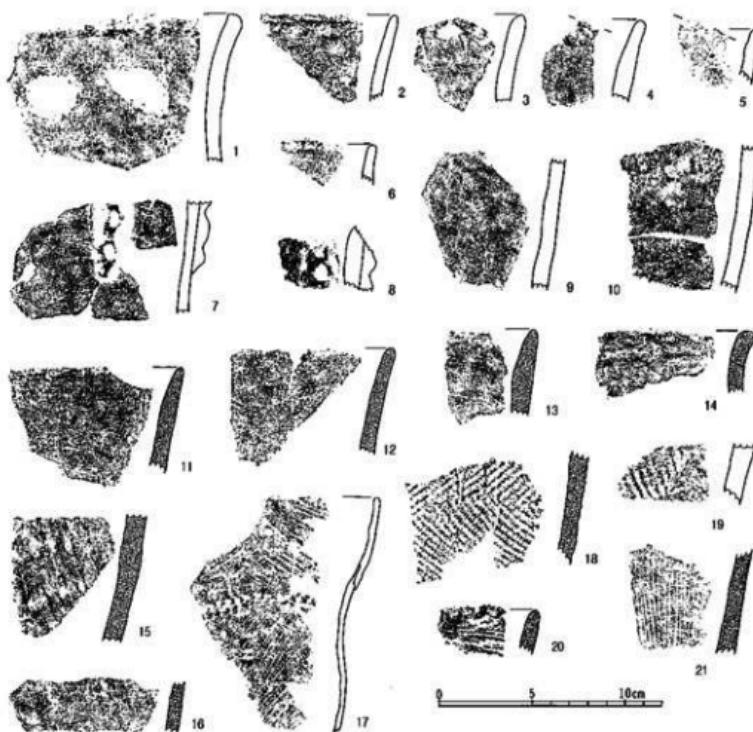
第279図 25号住居址出土の土器 (1/3)



第280図 25号住居址出土の土器 (1 / 3)



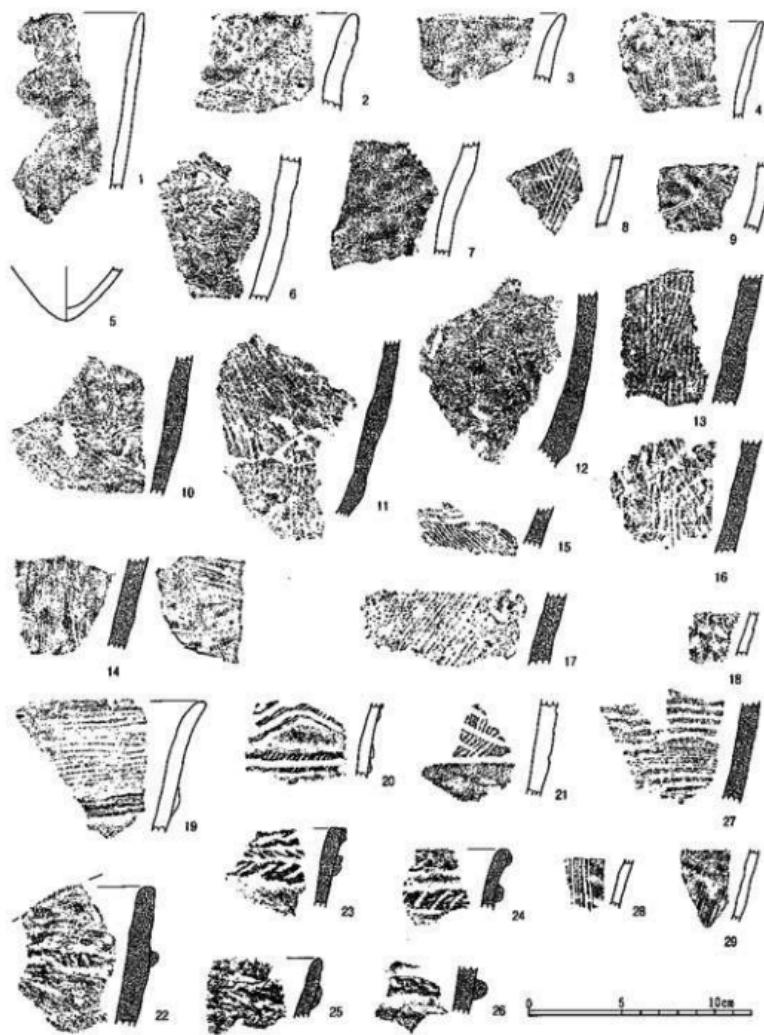
第281図 22号住居址出土の土器 (1 / 3)



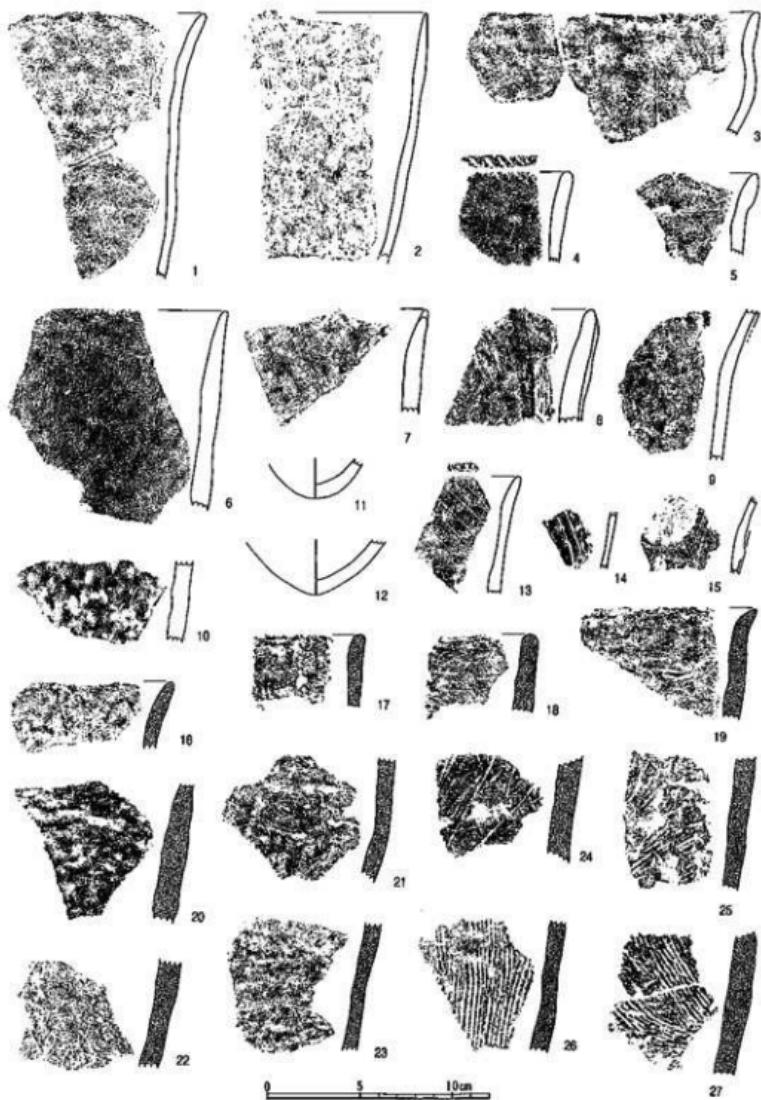
第282図 27号住居址出土の土器 (1/3)



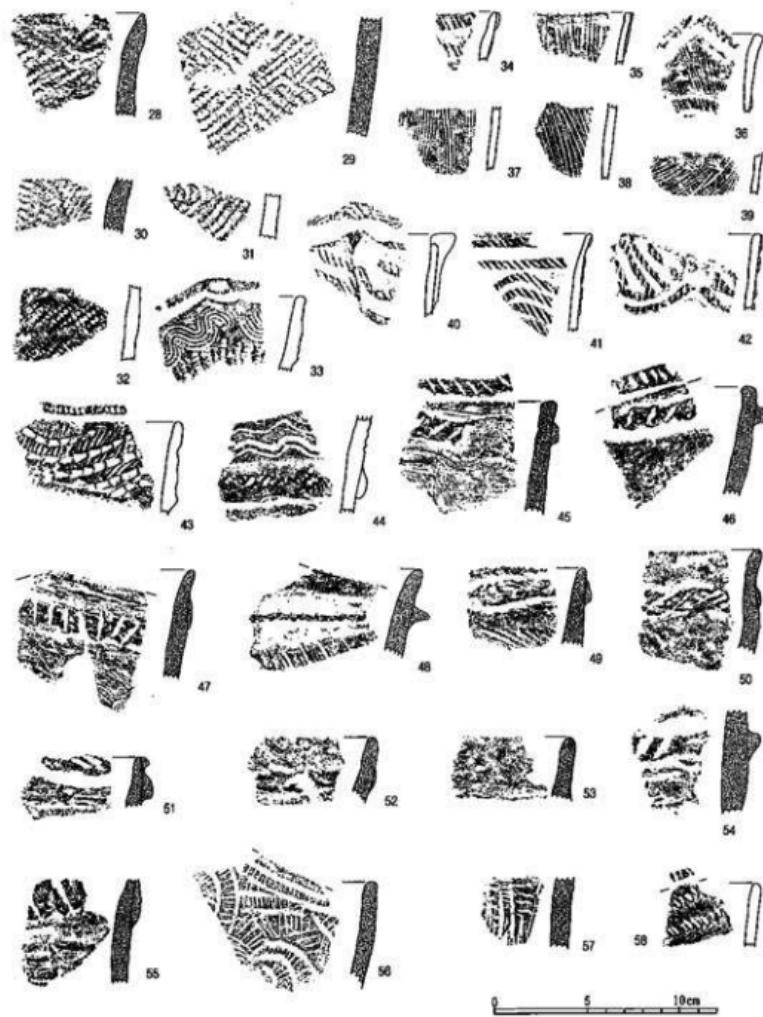
第283図 35号住居址出土の土器 (1/3)



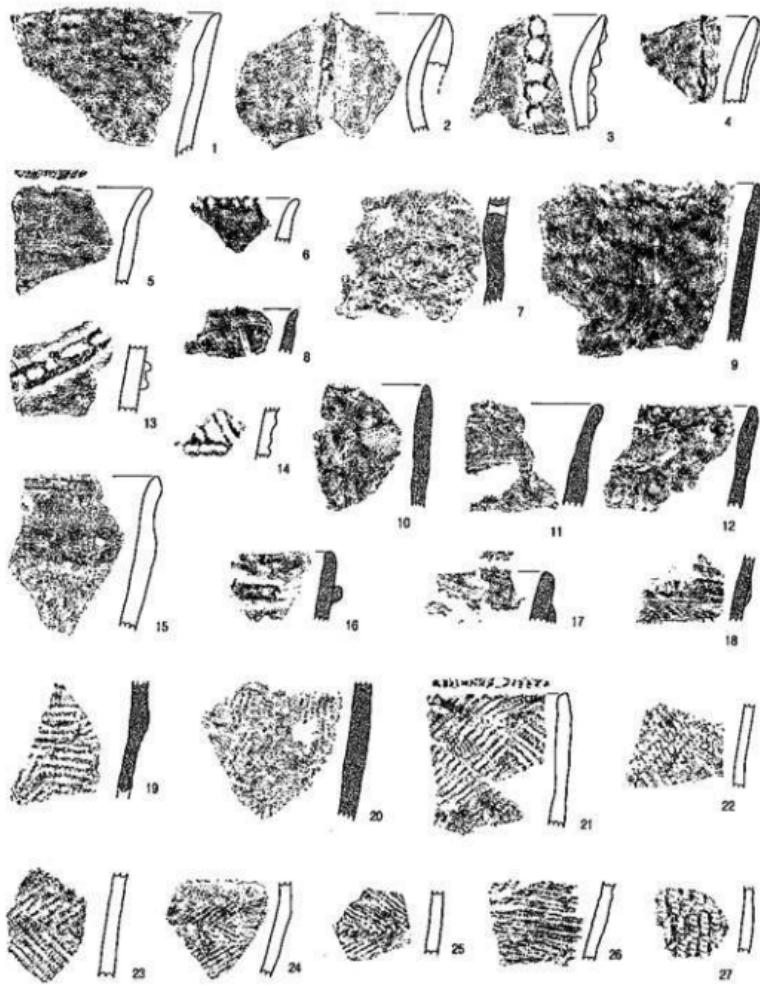
第284図 30号住居址出土の土器 (1/3)



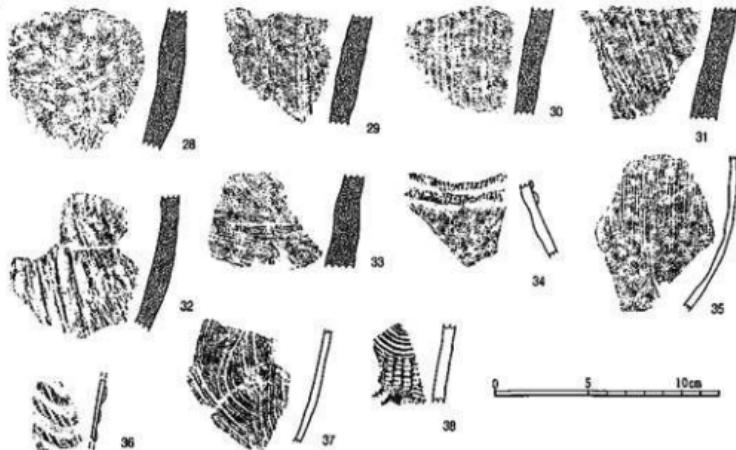
第285図 31号住居址出土の土器 (1/3)



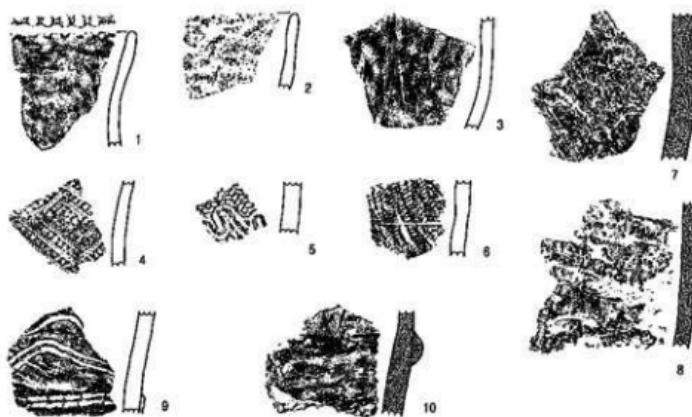
第286図 31号住居址出土の土器 (1 / 3)



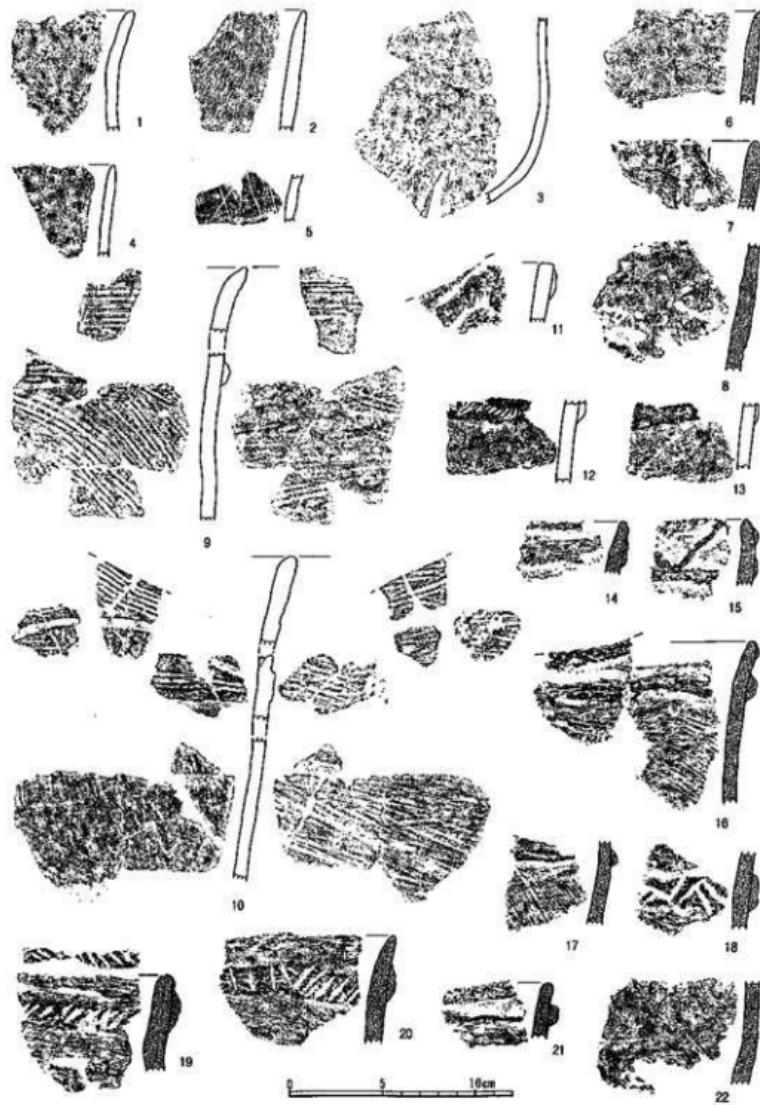
第287図 32号住居址出土の土器 (1/3)



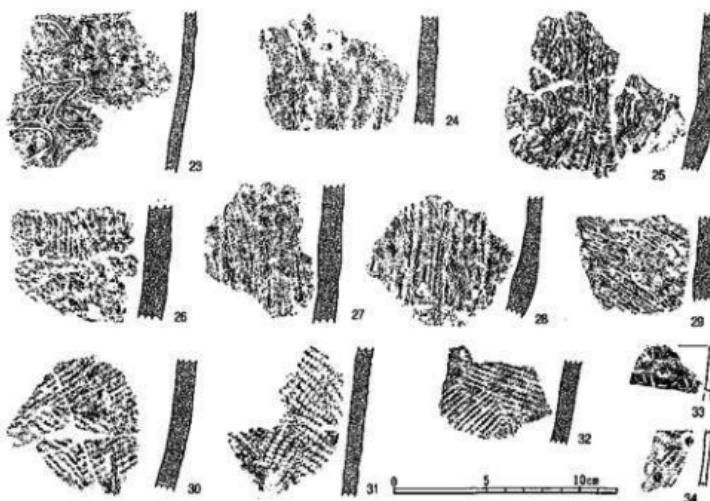
第288図 32号住居址出土の土器 (1/3)



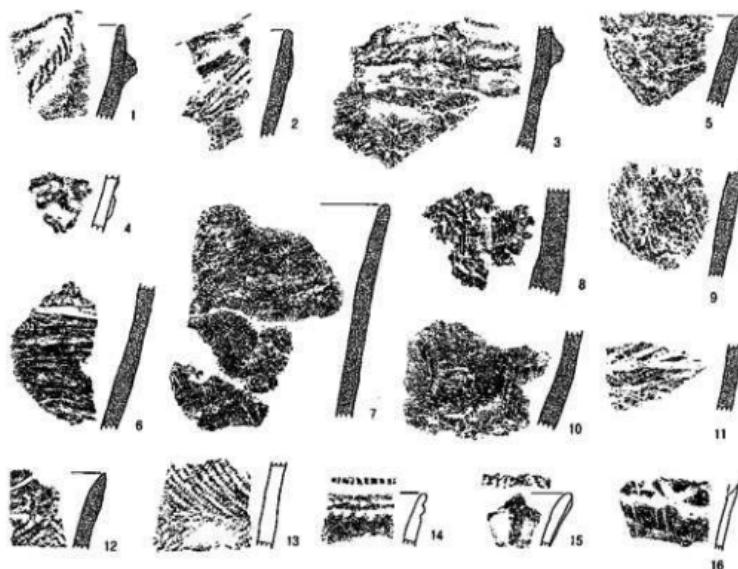
第289図 34号住居址出土の土器 (1/3)



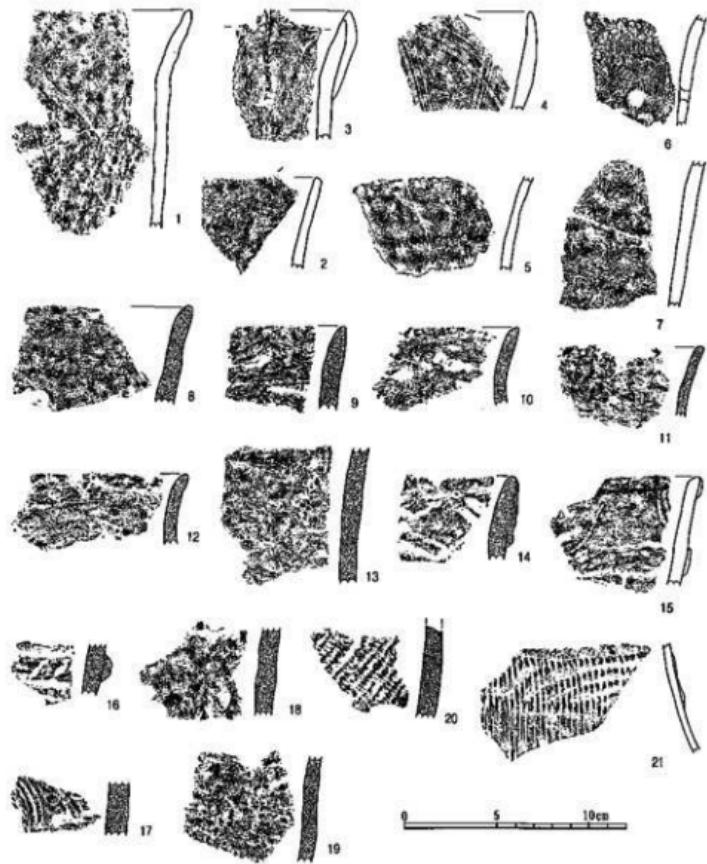
第290図 36号住居址出土の土器 (1 / 3)



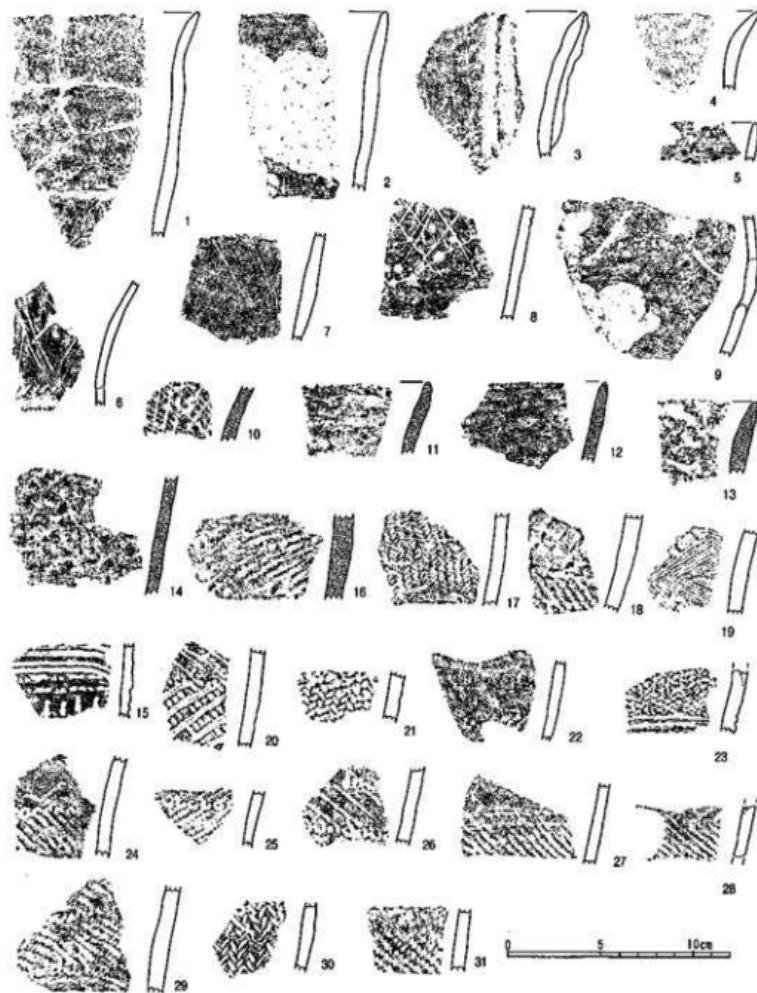
第291図 36号住居址出土の土器 (1 / 3)



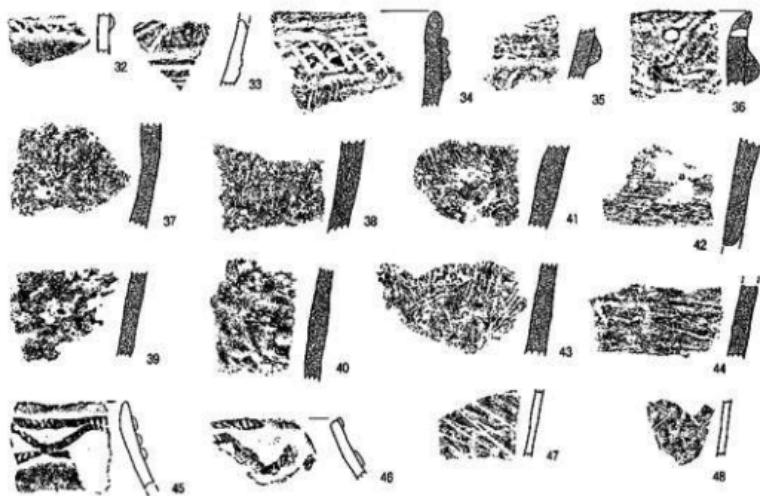
第292図 28号住居址出土の土器 (1 / 3)



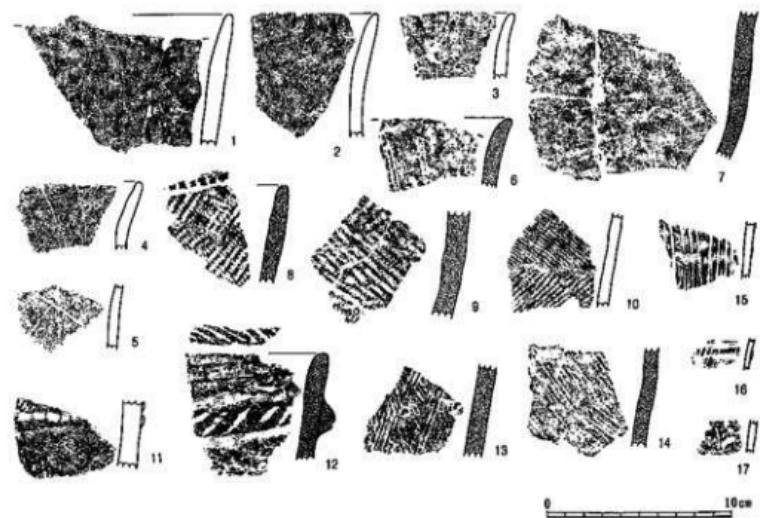
第293図 37号住居址出土の土器 (1 / 3)



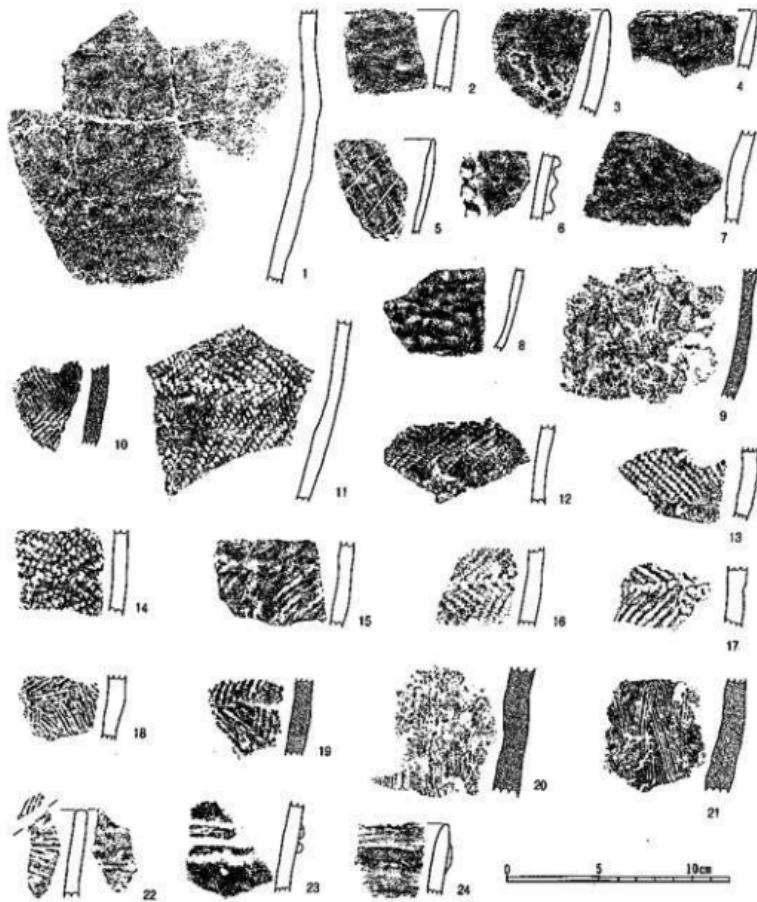
第294図 38号住居址出土の土器 (1/3)



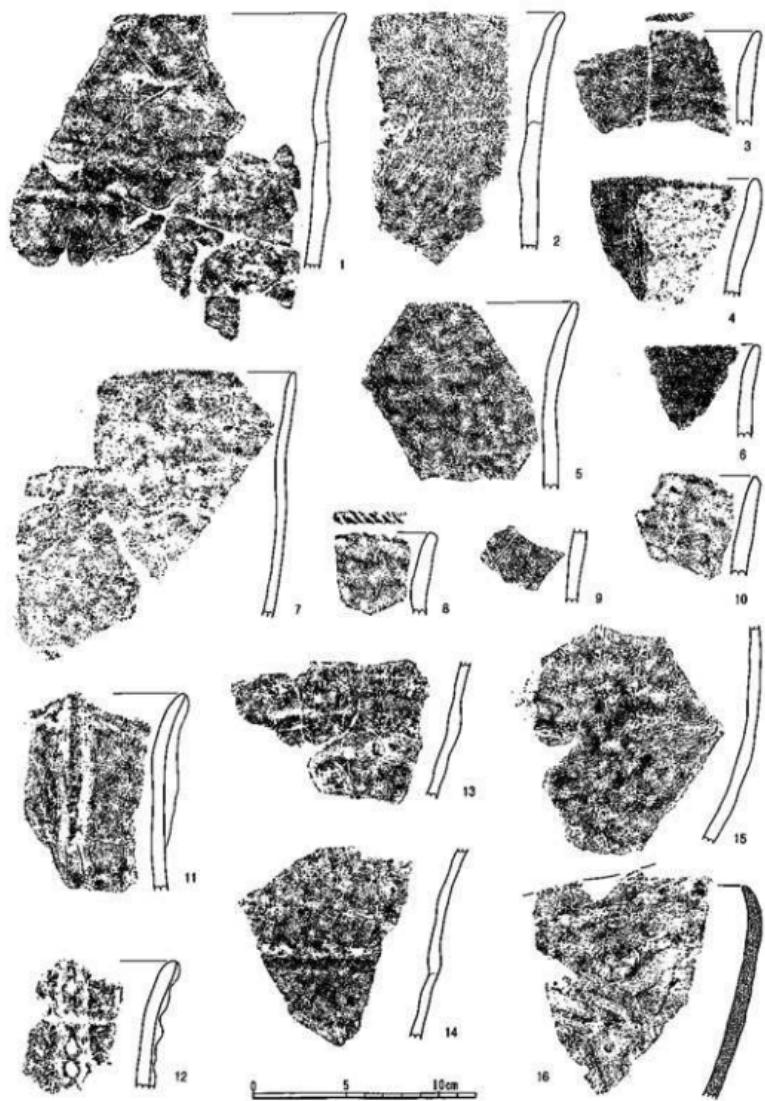
第295図 38号住居址出土の土器 (1/3)



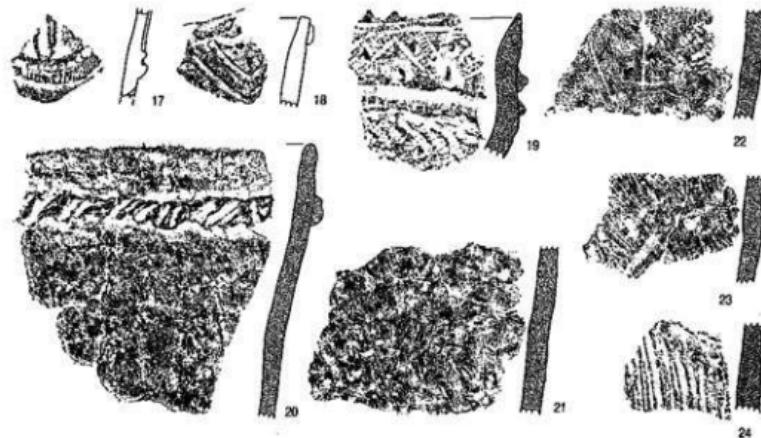
第296図 40号住居址出土の土器 (1/3)



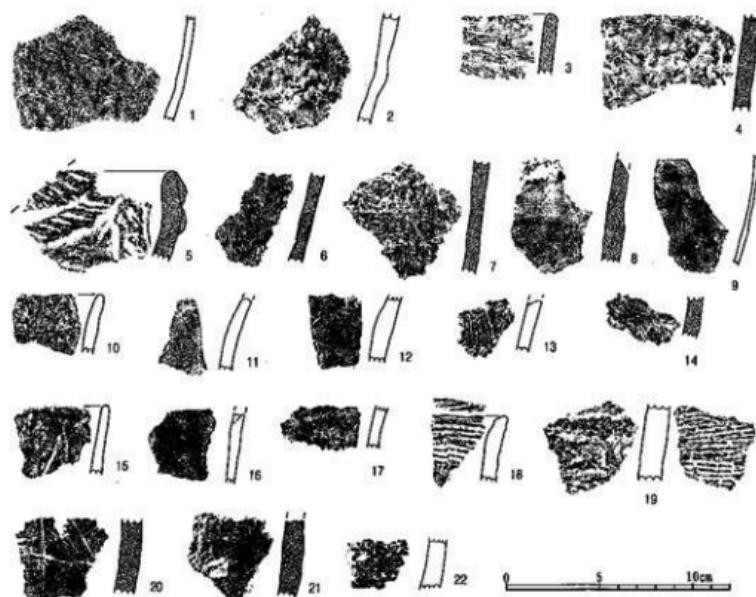
第297図 39号住居址出土の土器 (1/3)



第298図 42号住居址出土の土器 (1/3)

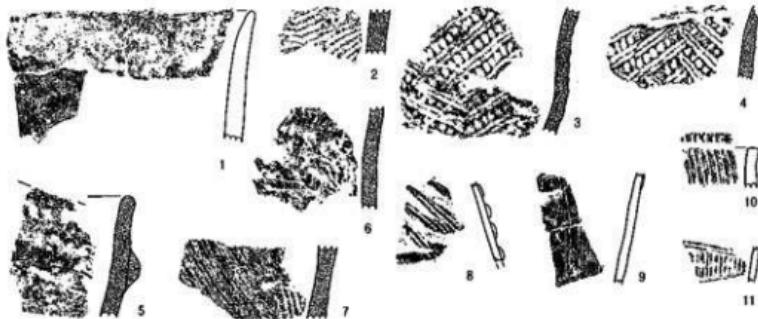


第299図 42号住居址出土の土器 (1/3)

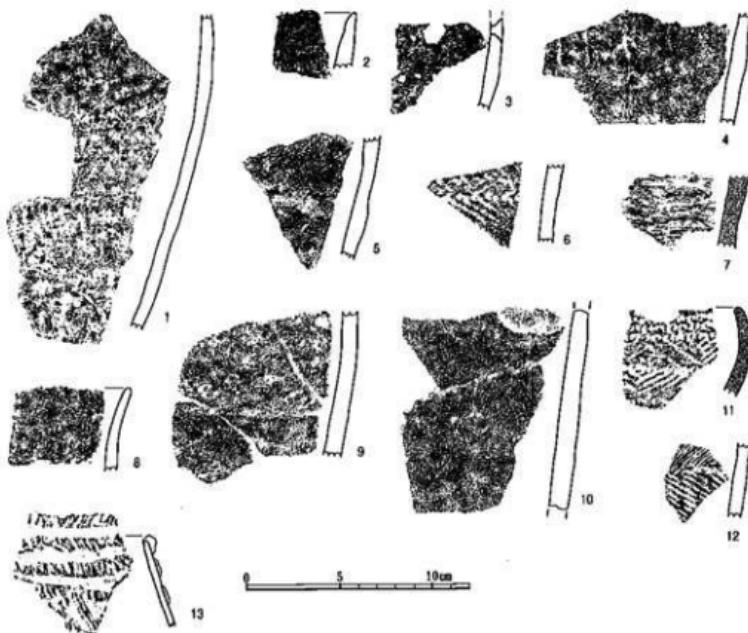


第300図 41, 43, 44, 45号住居址出土の土器 (1/3)

1~9:41号址 10~14:43号址 15~21:44号址 22:45号址

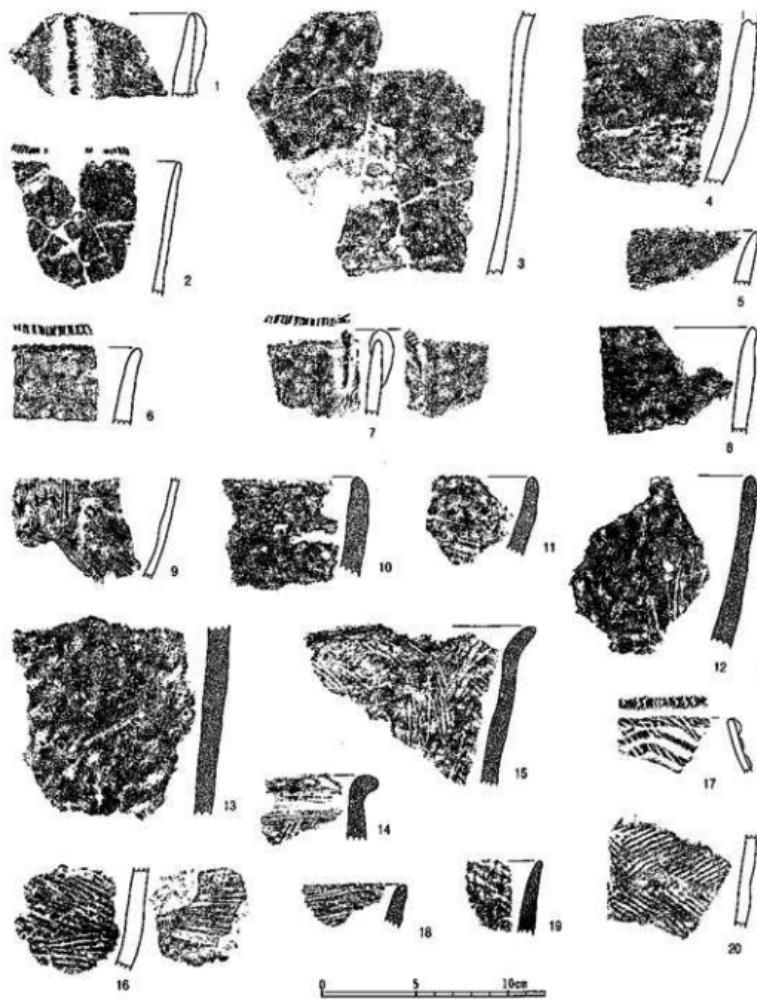


第301図 46号住居址出土の土器 (1 / 3)

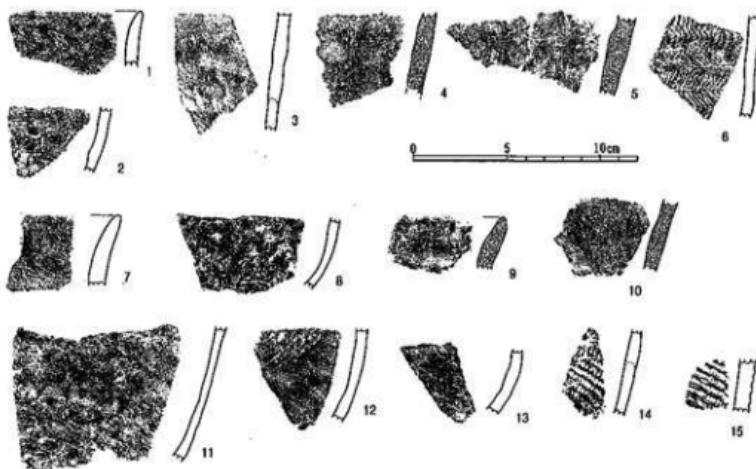


第302図 47, 48号住居址出土の土器 (1 / 3)

1 ~ 7 : 47号址 8 ~ 13 : 48号址

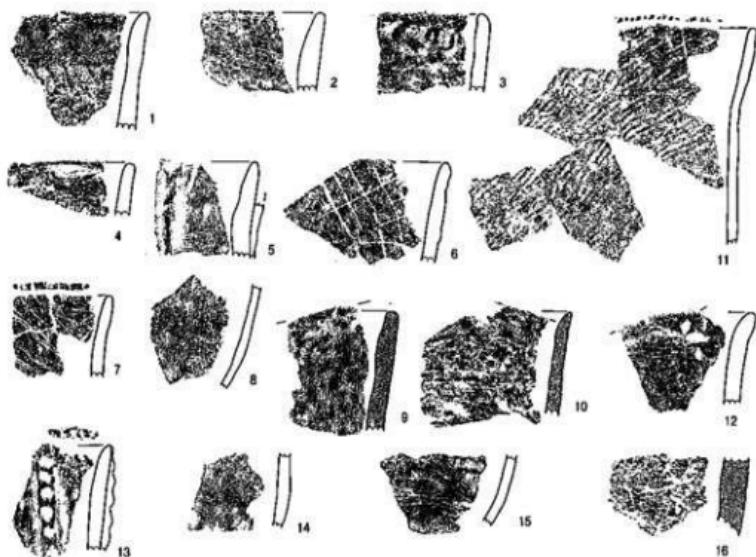


第303図 50号住居址出土の土器 (1 / 3)



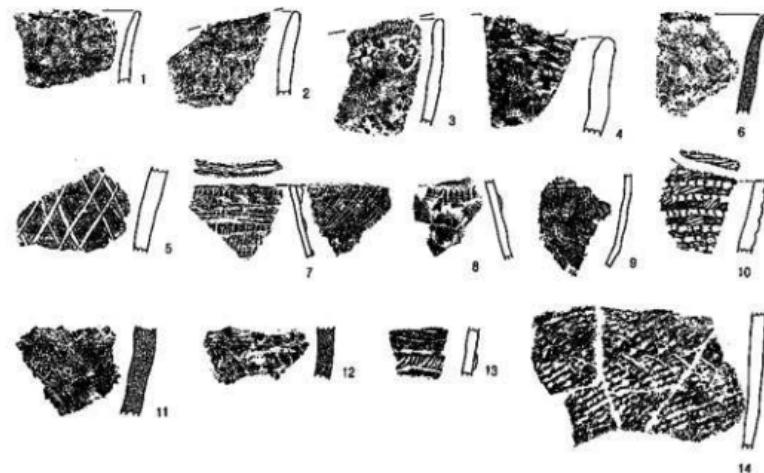
第304図 51, 52, 53号住居址出土の土器 (1 / 3)

1 ~ 6 : 41号址 7 ~ 10 : 52号址 11 ~ 15 : 53号址



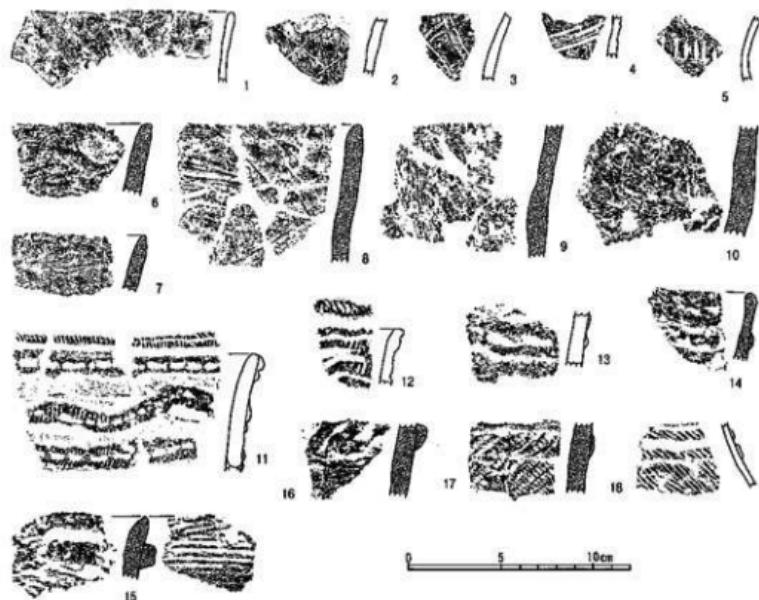
第305図 54, 55号住居址出土の土器 (1 / 3)

1 ~ 12 : 54号址 13 ~ 16 : 55号址

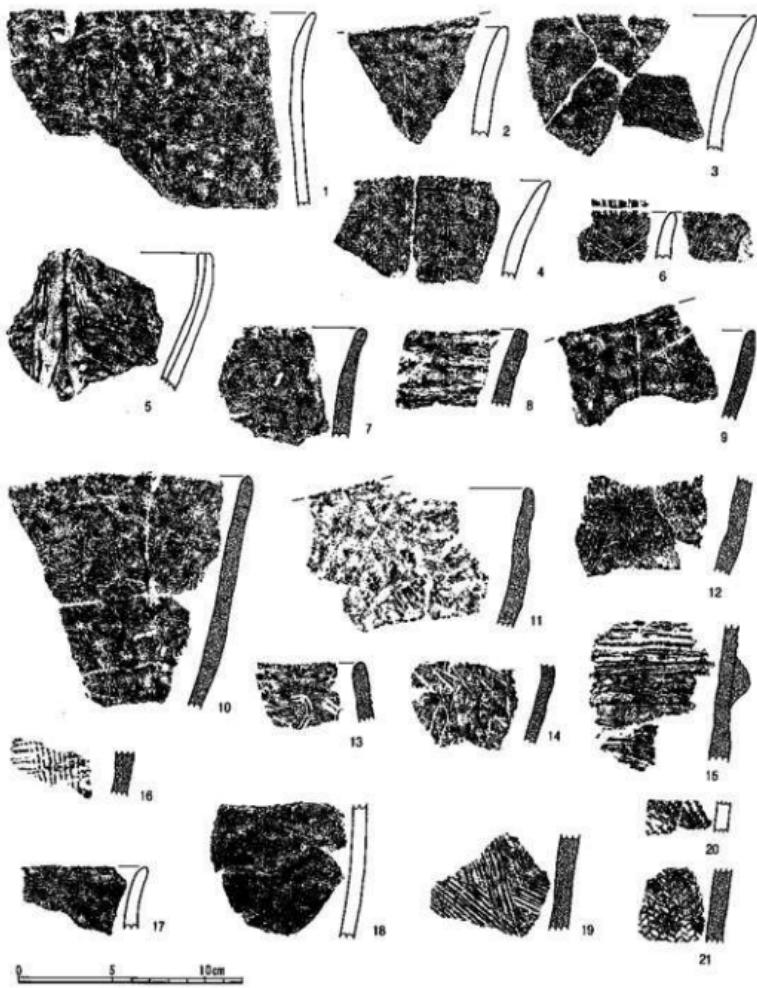


第306図 56、57号住居址出土の土器 (1/3)

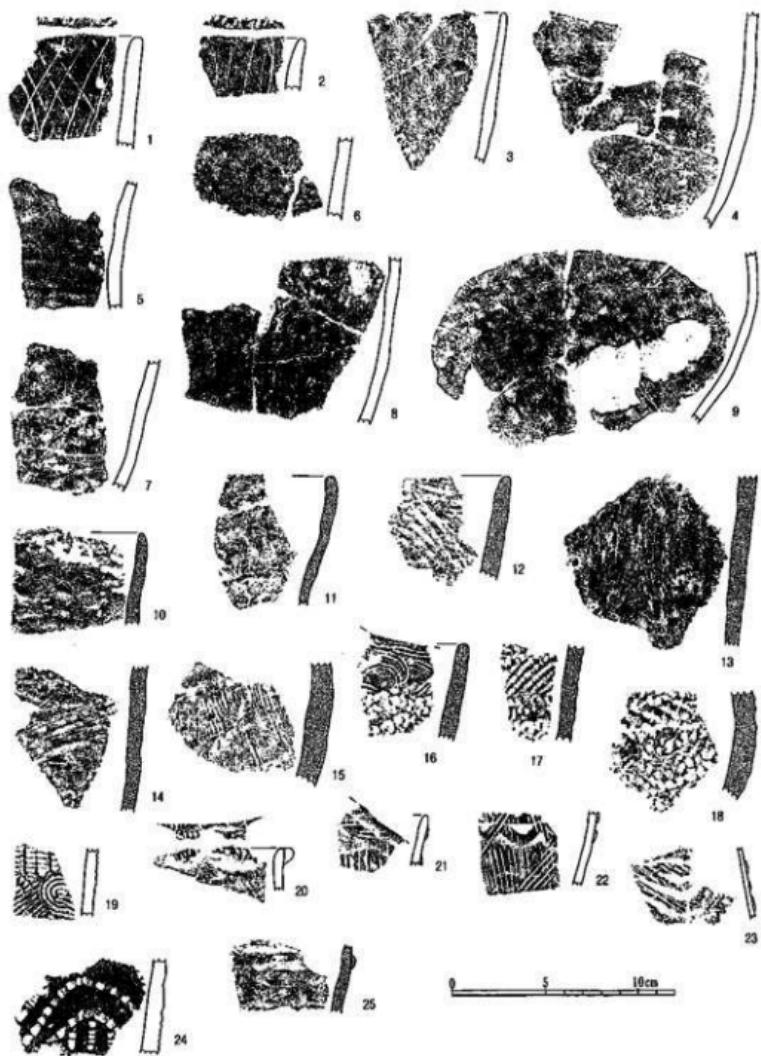
1~10: 56号址 11~14: 57号址



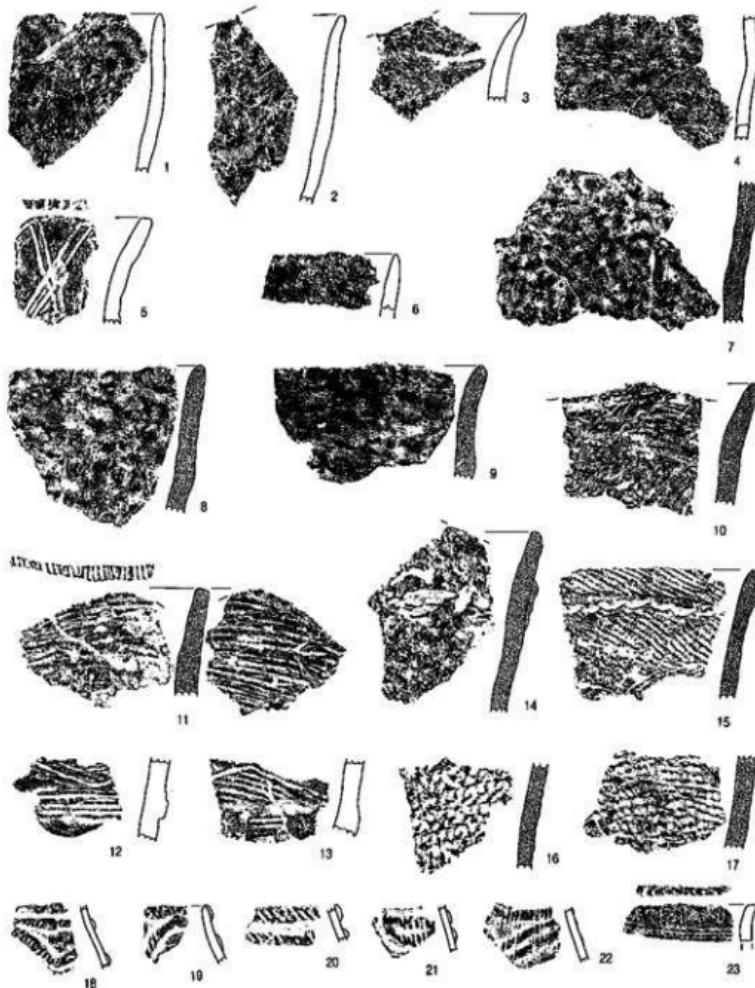
第307図 62号住居址出土の土器 (1/3)



第308図 58号住居址出土の土器 (1 / 3)



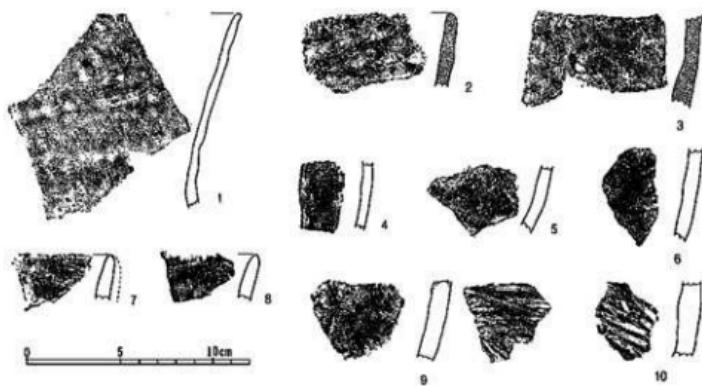
第309図 59号住居址出土の土器 (1/3)



第310図 60号住居址出土の土器 (1 / 3)

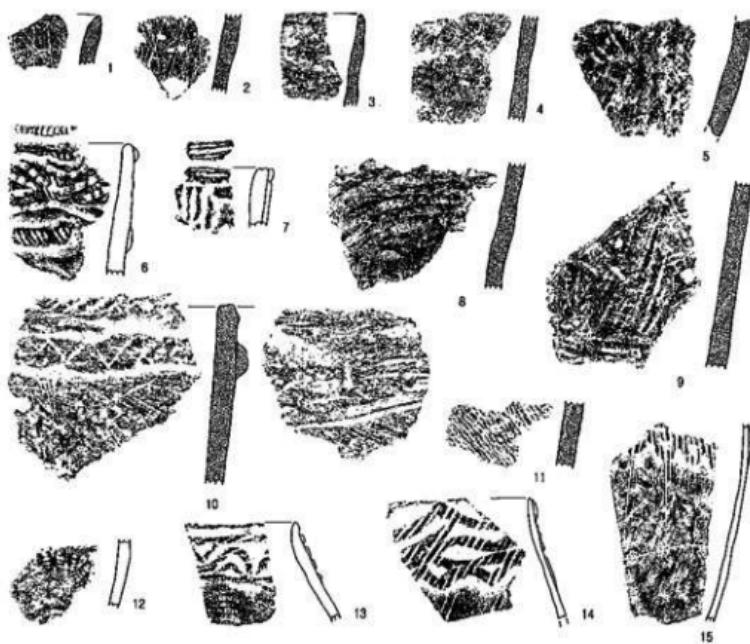


第311図 61号住居址出土の土器 (1/3)

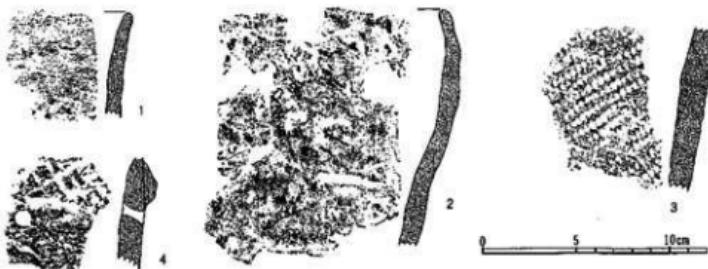


第312図 1、2号建物址出土の土器 (1/3)

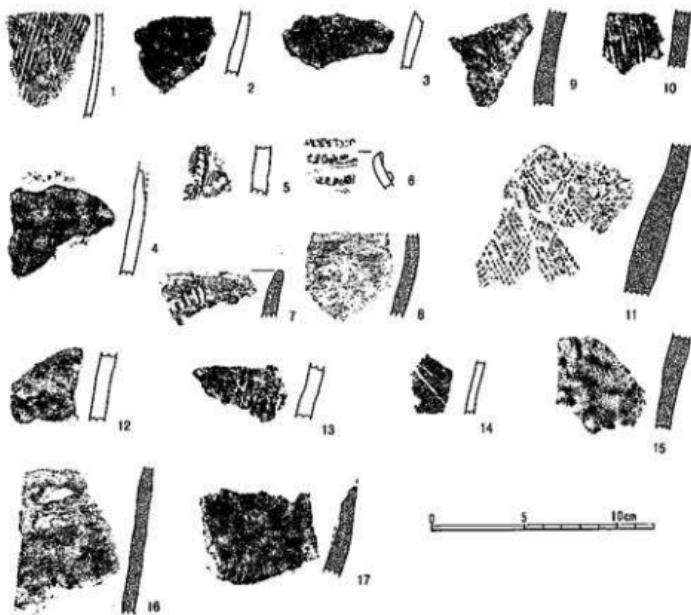
1~3:1号建物址 4~10:2号建物址



第313図 3号建物址出土の土器 (1/3)

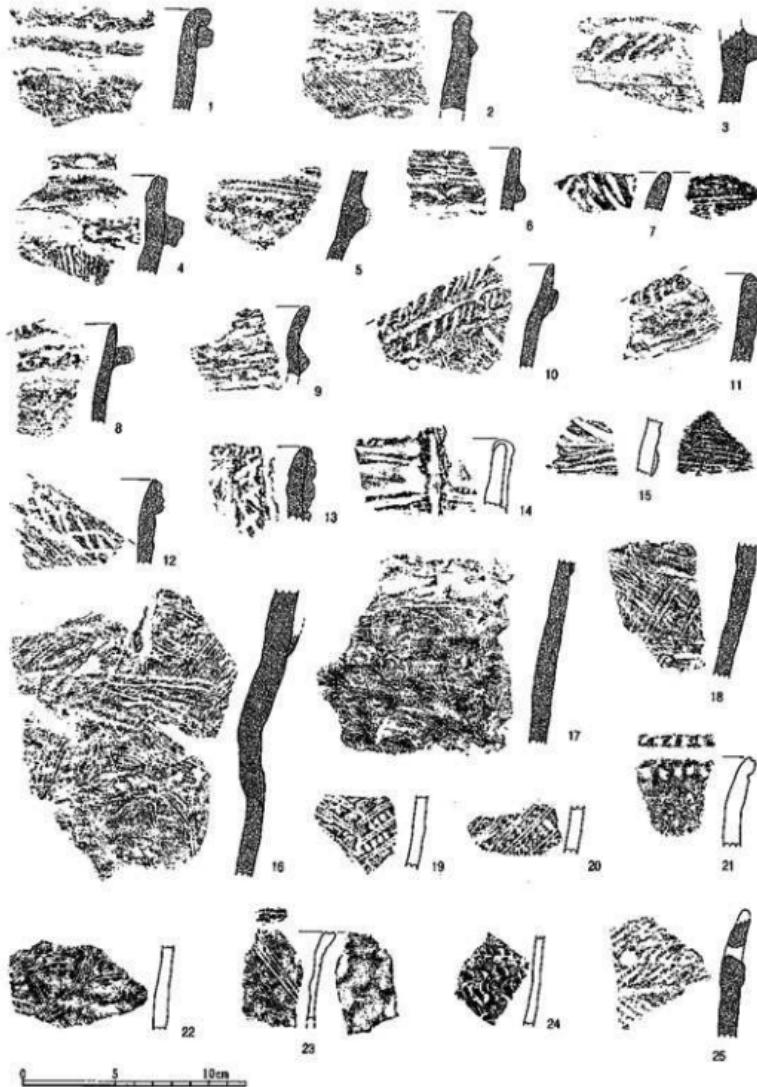


第314図 4号建物址出土の土器 (1/3)

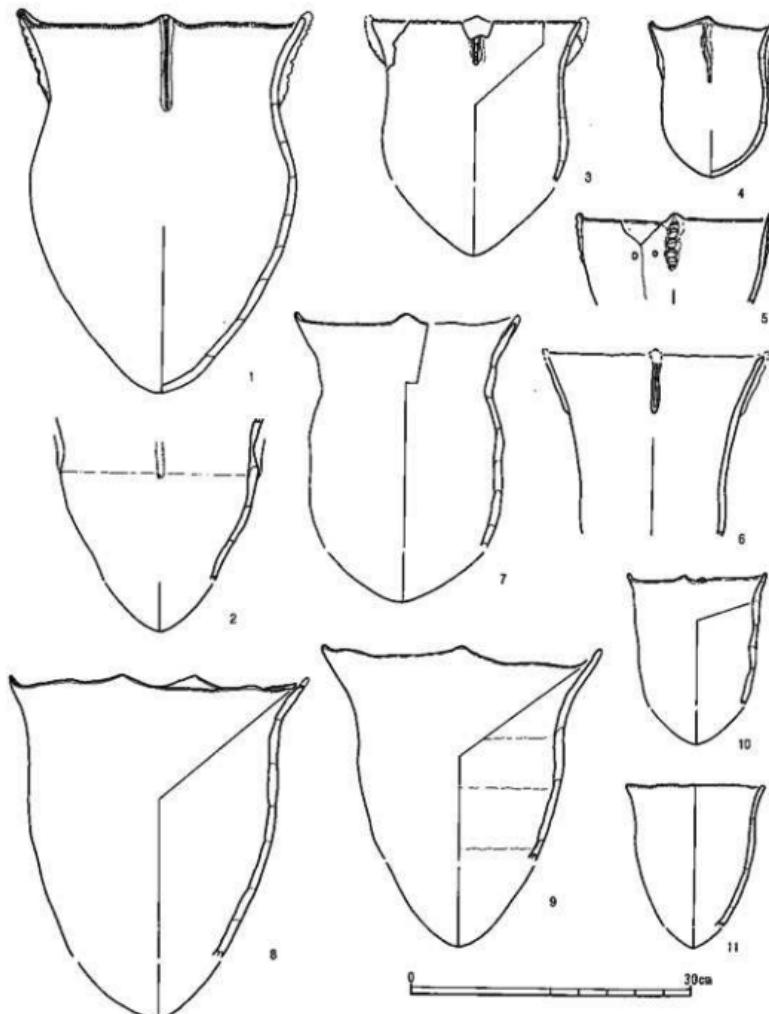


第315図 小型穴出土の土器 (1/3)

1:2号小型穴 2~8:9号小型穴 9~10:10号小型穴 11:11号小型穴  
12~14:9号址南側の小型穴群一帯 15~17:3号小型穴

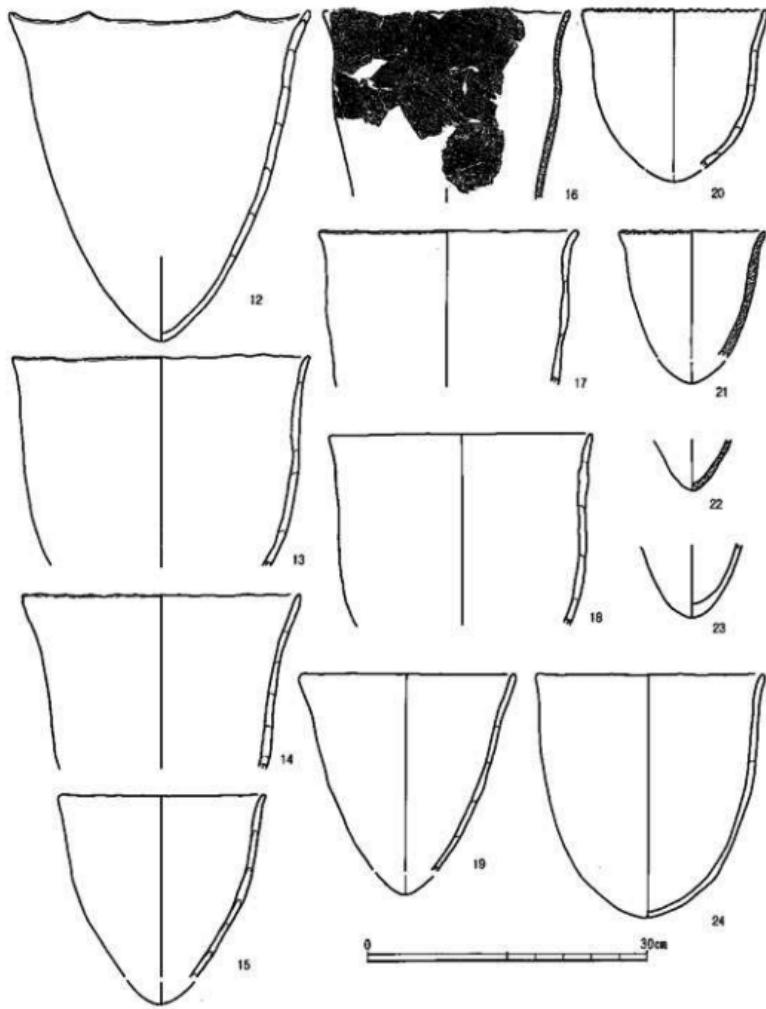


第316図 遺構外出土の土器 (1/3)



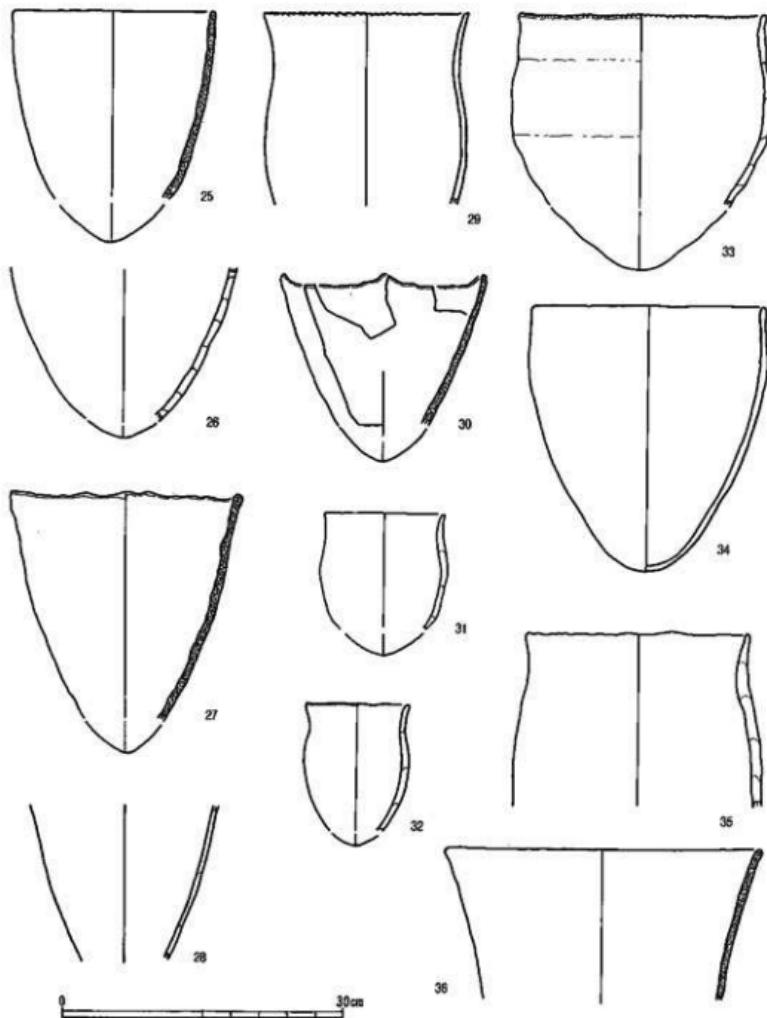
第317図 住居址出土の土器 (1/6)

1 : 58号址	2 : 31号址	3 : 25号址	4 : 58号址
5 : 25号址	6 : 15号址	7 : 31号址	8 : 56号址
9 : 46号址	10 : 62号址	11 : 25号址	



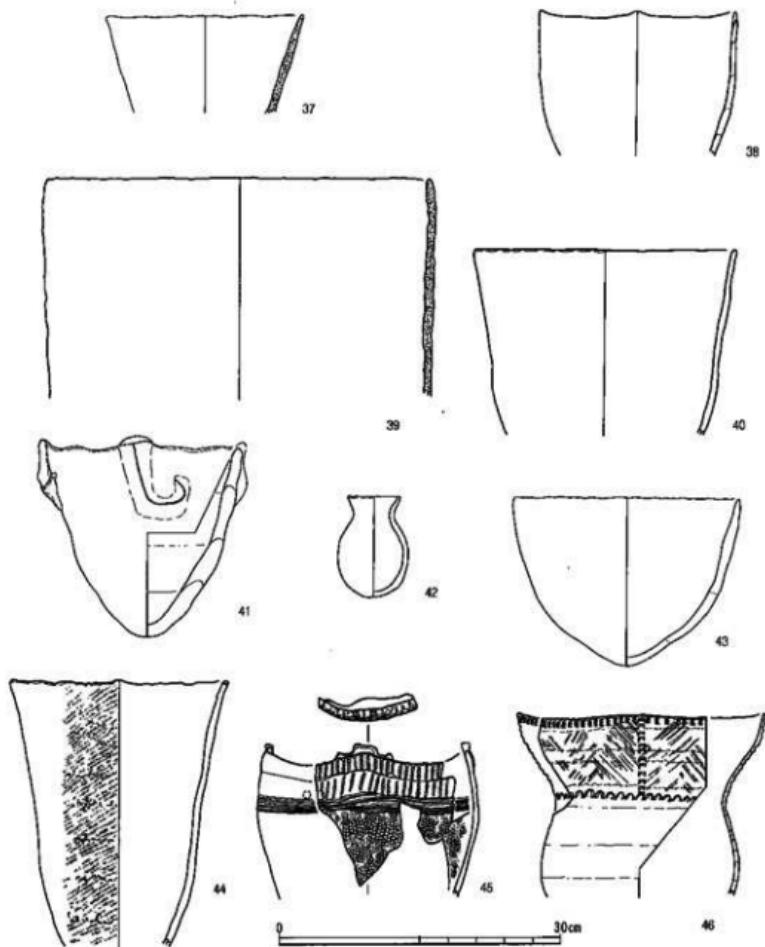
第318図 住居址および小豎穴出土の土器 (1/6)

- |           |           |           |            |
|-----------|-----------|-----------|------------|
| 12 : 31号址 | 13 : 25号址 | 14 : 8号址  | 15 : 20号址  |
| 16 : 8号址  | 17 : 25号址 | 18 : 25号址 | 19 : 4号小豎穴 |
| 20 : 40号址 | 21 : 9号址  | 22 : 31号址 | 23 : 2号址   |
| 24 : 38号址 |           |           |            |



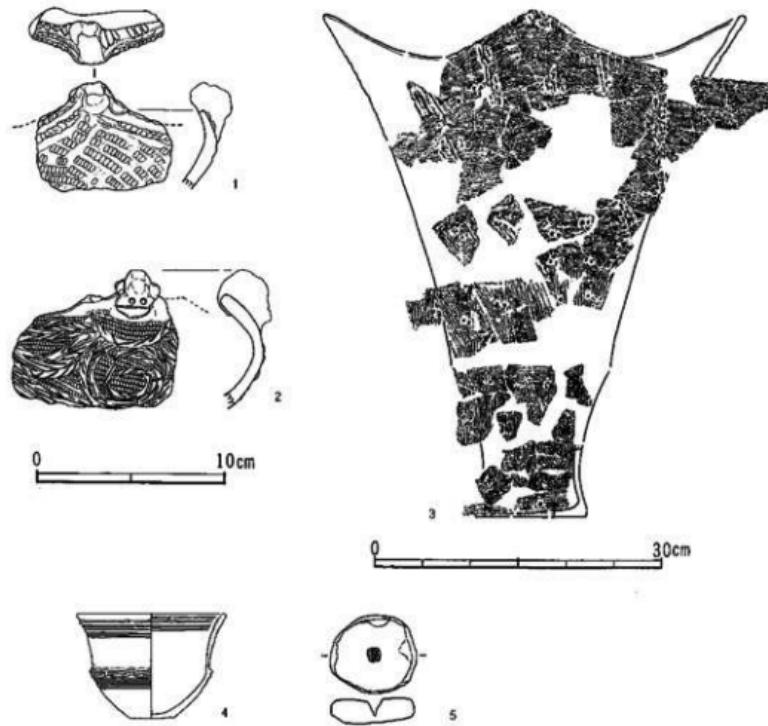
第319図 住居址出土の土器 (1/6)

25 : 17号址	26 : 25号址	27 : 4号址	28 : 9号址
29 : 44号址	30 : 42号址	31 : 25号址	32 : 31号址
33 : 22号址	34 : 38号址	35 : 25号址	36 : 12・13号址



第320図 住居址出土の土器 (1/6 37・41~43:1/3)

37: 9号址	38: 31号址	39: 7号址	40: 25号址	41: 58号址
42: 34号址	43: 31号址	44: 25号址	45: 12・13号址	46: 25号址



第321図 造構外出土の土器および土製品 (1・2:1/3 3・4:1/6 5:1/2)

1～3：12・13号址集塵上面 4：26号址南側発掘境 5：造構外



## 第三章 平安時代の遺構と遺物

### 一、遺構

坂平遺跡では6軒の住居址を発掘した。断面の観察にとどまった住居址を含めても7軒と、その数は決して多くない。これらは一箇所に同まるのではなく、ある程度の間隔を置いて点在している（第322図）。一方、この時期には八ヶ岳の広大な裾野に展開している集落も多く、川筋とも呼べる坂平の集落は、その性格が異なる可能性もある。なお、700mほど北西に、同様な立地で夏焼遺跡があり、ここでもほぼ同時期の住居址が発掘されている。

#### 第1号住居址（第323図）

南西-北東軸の方形だが、南東壁は若干張り出している。開田時に上面を削られて残りは浅い。堆土は黒色の单層で軟らかい。

竈は北東壁ほぼ中央にあり、袖石は抜かれていた。柱穴は中央付近の1と壁の2・3・4が考えられる。床は全体に凹凸が目立ち、一部にバミスが露出している。浅い皿状の穴には灰、焼土で埋まつたものもあり、これらに開まれた床面上には、全体的に薄く焼上がっていた。

遺物は比較的多い。竈の南西の床直上より、刀子（第337図5）刃部、中央付近の堆土最上面から同茎部が発見された。形状から同一個体とみておきたい。土師器は壺、甕とともに多く、塊には内黒のものは少ない。須恵器、灰釉陶器もみとめられた。

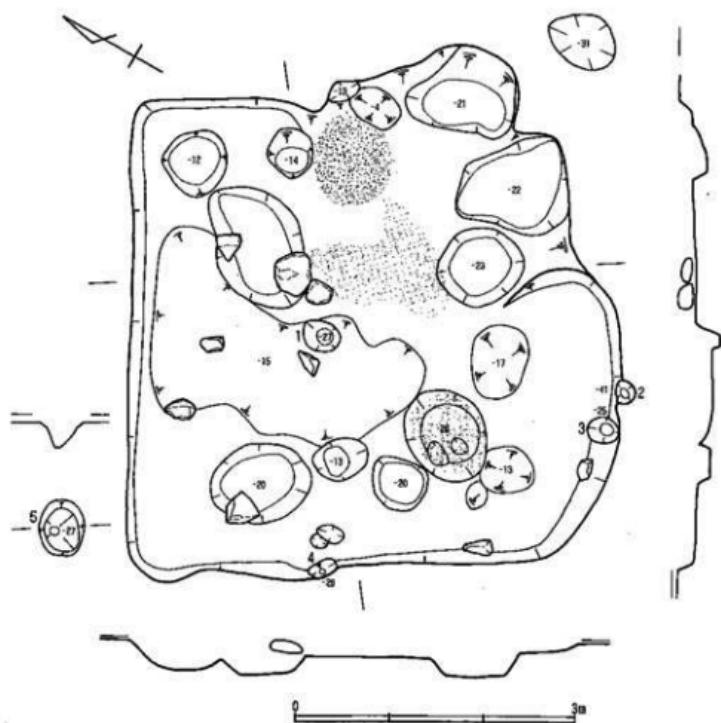
また、住居址西隅外の擂鉢状の穴5は、上面で土師器甕（第330図1）が出土、その下は拳大の礫101個がぎっしり詰まっていた。

本址の北東には時期不詳の小穴と、中・近世の小畠穴24~30号が並び、南西には31号がある。24~31号の穴の並びから推測すると、調査時には堆土の区別はできなかったものの、本址の東角から中程の円形の穴は、同様な小畠穴であった可能性もある。

本址は、遺物から10世紀後半に位置づけられよう。

#### 第2号住居址（第324図）

一辺が6m程の大形の方形住居で、南西-北東軸。竈は北東壁の東角よりにあり、袖石が残されていた。柱穴は床面の1・2・3と壁柱穴の4・5・6・7・8・9・10で、なかでも柱穴2は上面で柱痕が確認された。さらにこの柱穴2から北西方向へ直線的に並ぶ二つの柱痕が検出されたが、柱穴は確認できなかった。床は焼土粒混じりの土できれいに貼られていた。この土を剥がすと凹凸が激しいが、埋めてある様子には3~4段階がみとめられ、住居の南西半



第323図 平安1号住居址 (1:60) 点と線の集合は焼土を示す

壁際では深さ5cm程の周溝も確認された。

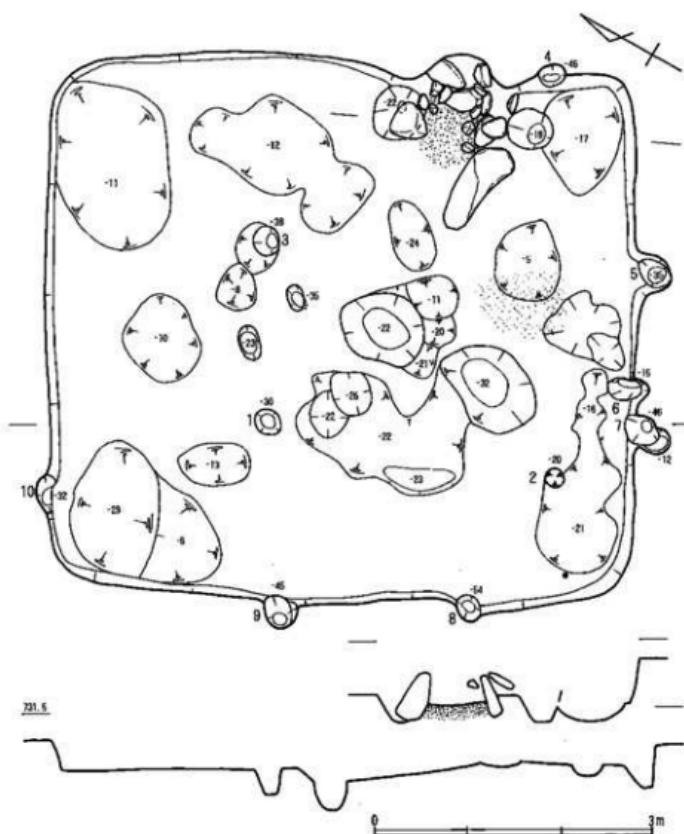
柱穴7の北西床面に砾石（第338図1）が、南角近くの床面には須恵器長頸壺の頸部が逆位で据えられていた（第332図1、324図の黒点）。また竈の南脇の壁際で、土師器皿（第331図26）が逆位で出土している。

なお、本址柱穴5より南東へ2m70cmの地点に、黒色土と礫がつまつた中・近世の貯蔵穴33号が検出された。

本址は10世紀前半から中頃の住居と考えられる。

#### 第3号住居址（第325図）

残存する北東壁で一辺3.5m程の小ぶりな隅丸方形住居で、西南西-東北東軸。縄文時代の10号住居址の北西を切り、南北半は田の土手の石積みと開田の削平によって失われている。



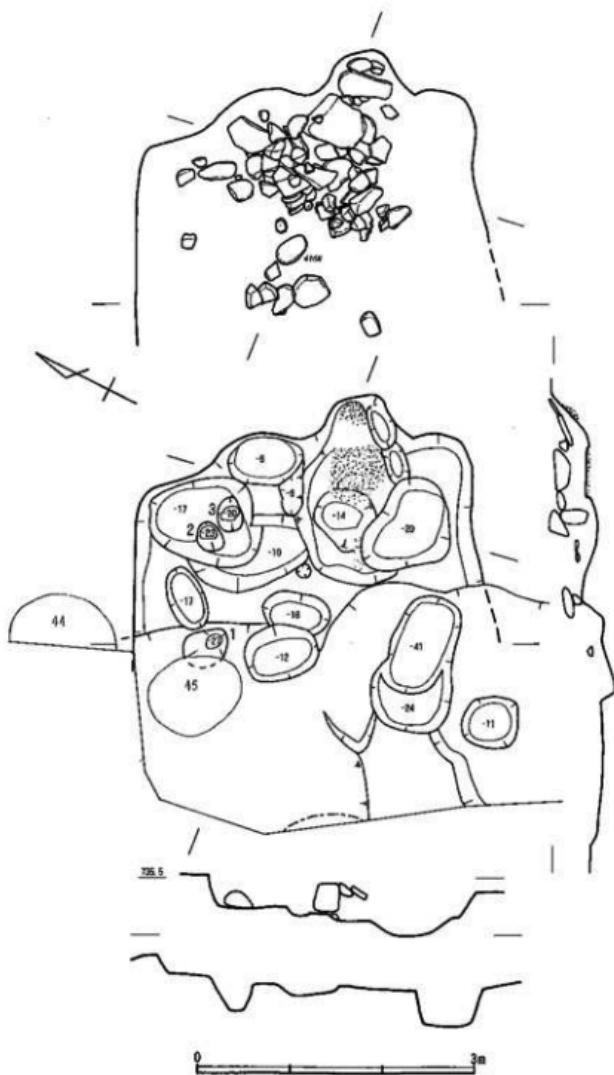
第324図 平安2号住居址 (1:60) 点と線の集合は焼土を、網目は柱痕を示す

窓は北東壁の東角よりにある。袖石は残されていなかったが、袖石の抜き取り痕が確認できた。また、焚き口と思われる焼土と奥壁の焼土の間に赤変していない部分があるので、ここに石が据えられていた可能性がある。窓を中心に上面には礫が集積していた。柱穴は1・2・3があり、柱穴3は上面の礫に覆われていた。床は穴が多く、凹凸が激しい。

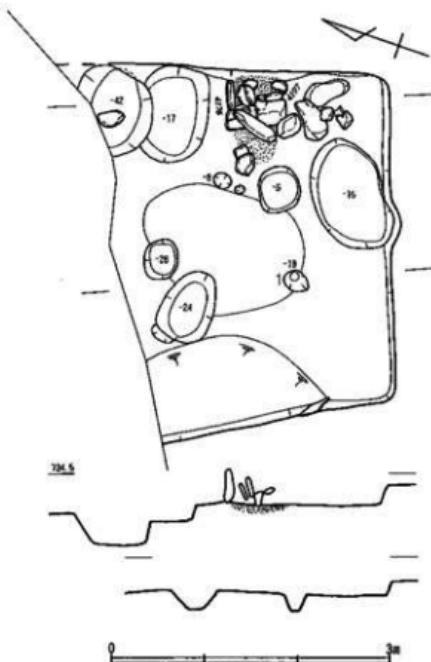
本址は10世紀後半の住居としておきたい。

#### 第4号住居址 (第326図)

南西-北東軸の方形で、縄文時代の9号住居址、17号住居址を切り、1号建物址に重なる。



第325図 平安3号住居址 (1:60)



第326図 平安4号住居址 (1:60)

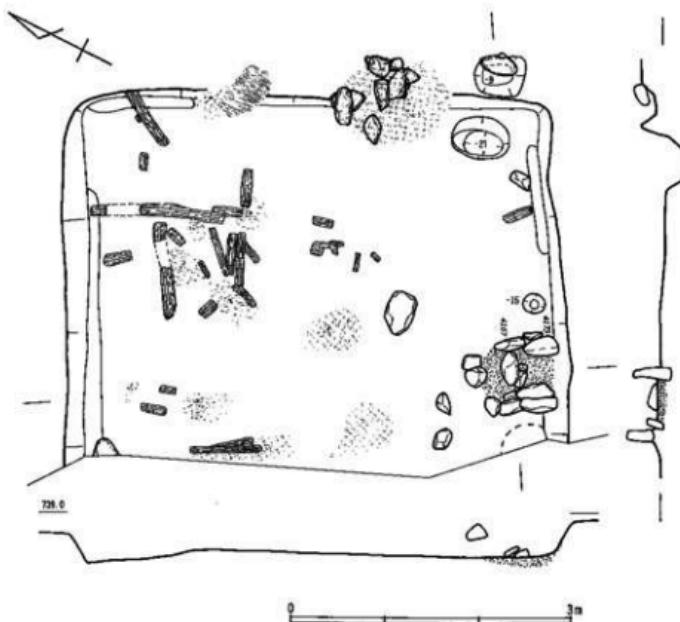
北側は発掘できなかった。3号住居址と同様、南東壁が一辊3.5m程度の小ぶりな住居。堆土は黒色で、最上面では木炭と甕に焼土がみられた。甕は北東壁や東角よりにあり、石組みは解体されていたが、支脚と北側の袖石が残されていた。柱穴とみられるものは1のみで、この北側の床は堅くしっかりした水平の床であった。

甕から輝緑岩の砥石（第338図2）が、それに重なるように鏡餅状扁平石の破片4176が出土した。甕の東南脇には須恵器長颈壺の頸部（第336図5）が横倒して見つかった。また、袖石の抜き取り痕と思われるところから、珪質頁岩製の攝器4197が発見されている。

遺物は少ないが、出土した甲斐型塊から、本址の時期を10世紀第2四半期と考えたい。

#### 第5号住居址（第327図）

整った方形住居で、南西-北東軸。南西壁は発掘できなかった。堆土は黒色で床面より20cm程高いレベルに炭化材があり、このレベルから床面まで焼土がみられた。また北東壁上に焼土



第327図 平安5号住居址（1:60）点と線の集合は焼上を示す

と炭化した茅の束があった。

窓は二箇所あり、新旧がうかがえる。北東壁東角よりの窓は破壊され上部に礫がいくつか置かれていた。南東壁南角よりの窓は袖石がそのまま残されており、こちらが新しいものと考えられる。各壁沿いに周溝が検出されたが、調査できなかった。柱穴と思われるものは竪窓の1しかない。

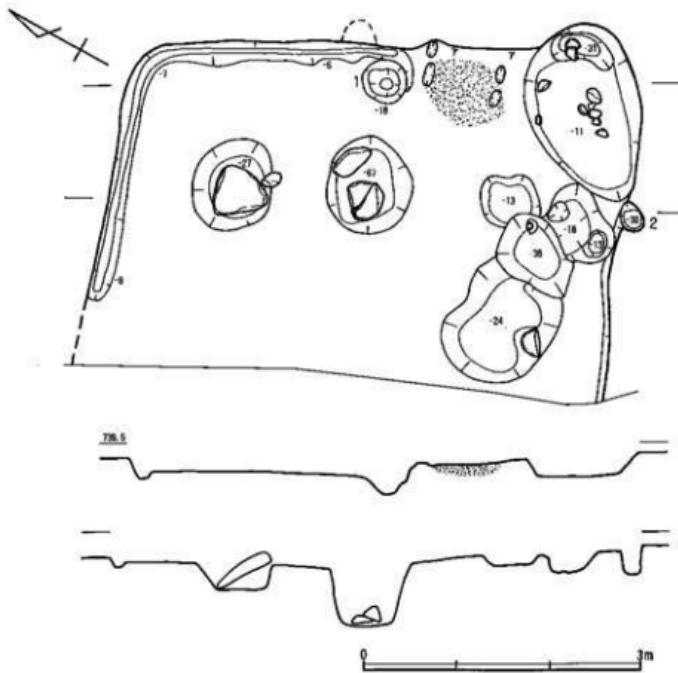
また、東角の外に穴があり、土師器塊片が出土している。本址に伴うものであろう。

本址は坂平遺跡の住居址の中では最も古く、9世紀末から10世紀前半に位置づけられよう。

#### 第6号住居址（第328図）

南西-北東軸の隅丸方形住居で、南西壁は発掘できなかった。住居上部は削られて浅く、堆土は黒褐色。

北側の壁際に周溝がめぐる。窓は北東壁東角よりに築かれているが、袖石が抜かれ、痕跡だけが確認できた。柱穴とみられるのは竪窓の1と南東壁の2である。北東壁外の柱穴は本址堆土と異なる暗褐色土であること、この穴を本址壁上に点々と残されていた黒色の垂木痕が



第328図 平安6号住居址 (1:60)

切っていたことから、縄文時代の51号住居址に属するものと判断された。竈南東脇の穴は焼土、炭を多く含む暗褐色土で埋まり、中から灰釉陶器片や棒状の礫が、またこの穴の西の穴からは上師器皿（第335図4）が伏せられた状態で発見された。

本址の遺物も多くはないが、埴輪の特徴から10世紀後半の住居と考えられる。

#### 第7号住居址

工事で断ち割られた1478-1番田に住居址の断面が確認された。炭、ローム粒混じりの黒色堆土で、平安時代の遺物が数片確認できた。図や正確な地点など記録が取れなかったが、その存在のみ、7号住居址としておく。

## 二、遺物

## 土器・陶器

後の甲信国境に近い坂平遺跡では、いわゆる「信州系」の土器と、「甲斐型」の土器が共存する。これらのうち、現在の山梨県北巨摩郡明野村梅之木遺跡から出土しているものと同じ墨書「峠」が、本遺跡および隣の夏焼遺跡からも出土しており、北巨摩との密接な関係をうかがわせる。このほかには須恵器と灰釉陶器が若干出土している。

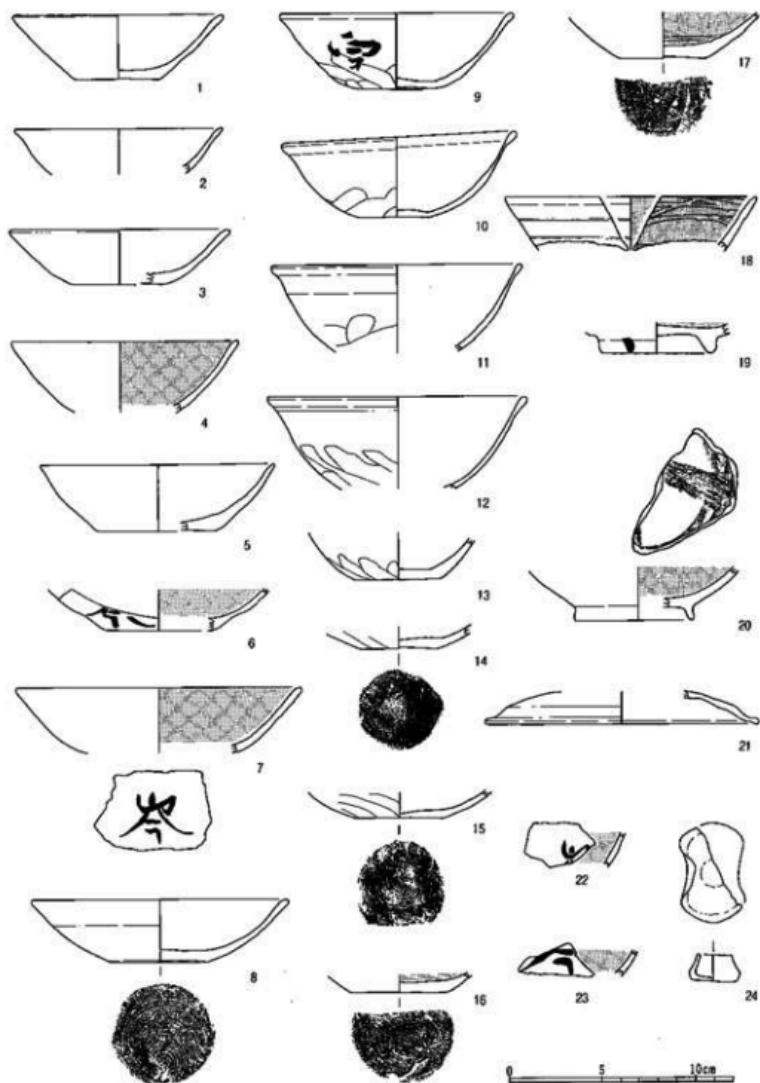
## 1号住居址（第329、330図）

第329図1～20および22・23は土師器の塊、もしくは皿である。このうち4・6・7・16・17・18・19・20・22・23は内黒で、18・20は内面に車輪状の暗文を施している。9～15はいわゆる甲斐型の塊で、下半が削り調整されている。13・14・15の底は回転糸切りのち、部分的に削られていた。9～12は口唇が玉縁化している。6・7・9・19・22・23には墨書がある。このうち6・7・22・23は「峠」だが、9は不明。19も部分であり、判読できない。21は土師器の蓋。24は小型の耳皿で、小型ながら底には回転糸切り痕がある。全体が黒い。

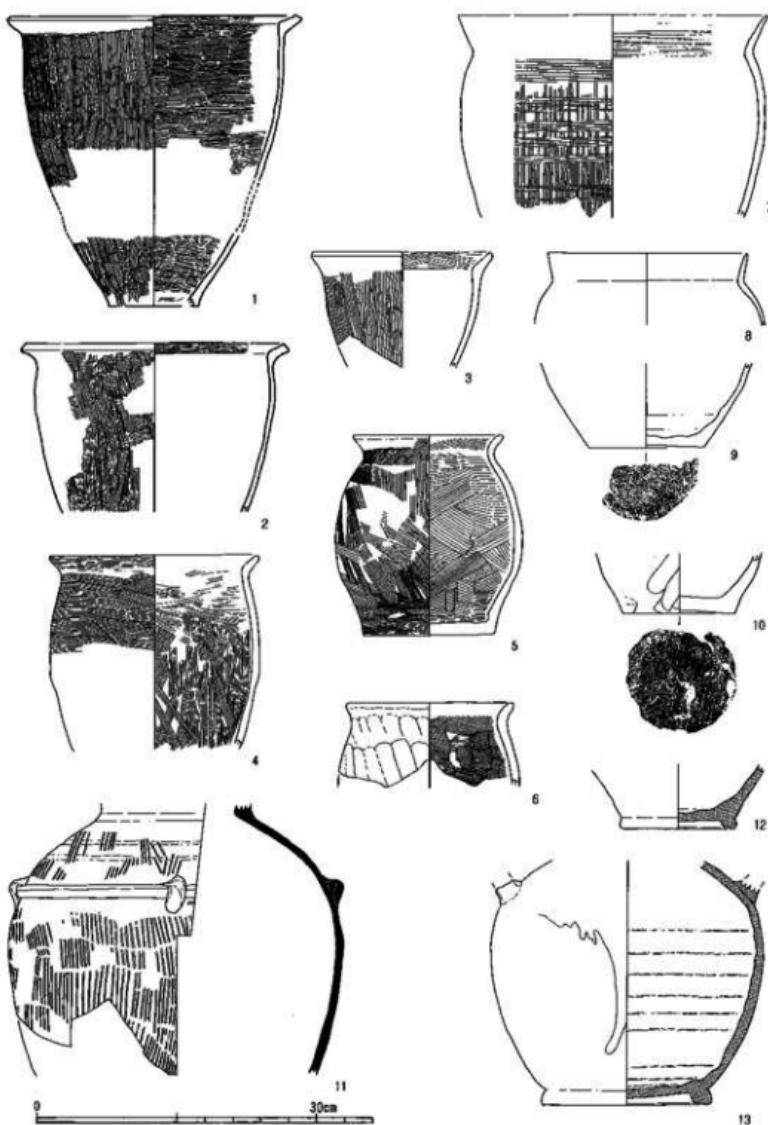
第330図1～10は土師器の壺、11・12・13は須恵器、灰釉陶器の壺である。1・2・3は甲斐型の壺で、3は小型品。1の外表面は継刷毛目、内面は横刷毛目調整だが、2・3は口縁部以外の内面には刷毛目調整は施されない。4は信州系の壺。5は底径が口径と同じくらいの壺。底はきれいになでられている。7・9はろくろ壺。7の外表面は格子状に刷毛目調整されている。9は底部で回転糸切り痕がある。10は壺の底部で、底は箄なでされている。つくりは5の壺と同じなので、同系列のものであろう。11は須恵器の凸帯付四耳壺で、外表面は叩き調整、内面は横方向になで調整され、当て具の痕跡は見られない。12は灰釉陶器の壺で、静止糸切りのち高台を貼り付けている。13は把手の痕跡がある。

## 2号住居址（第331、332図）

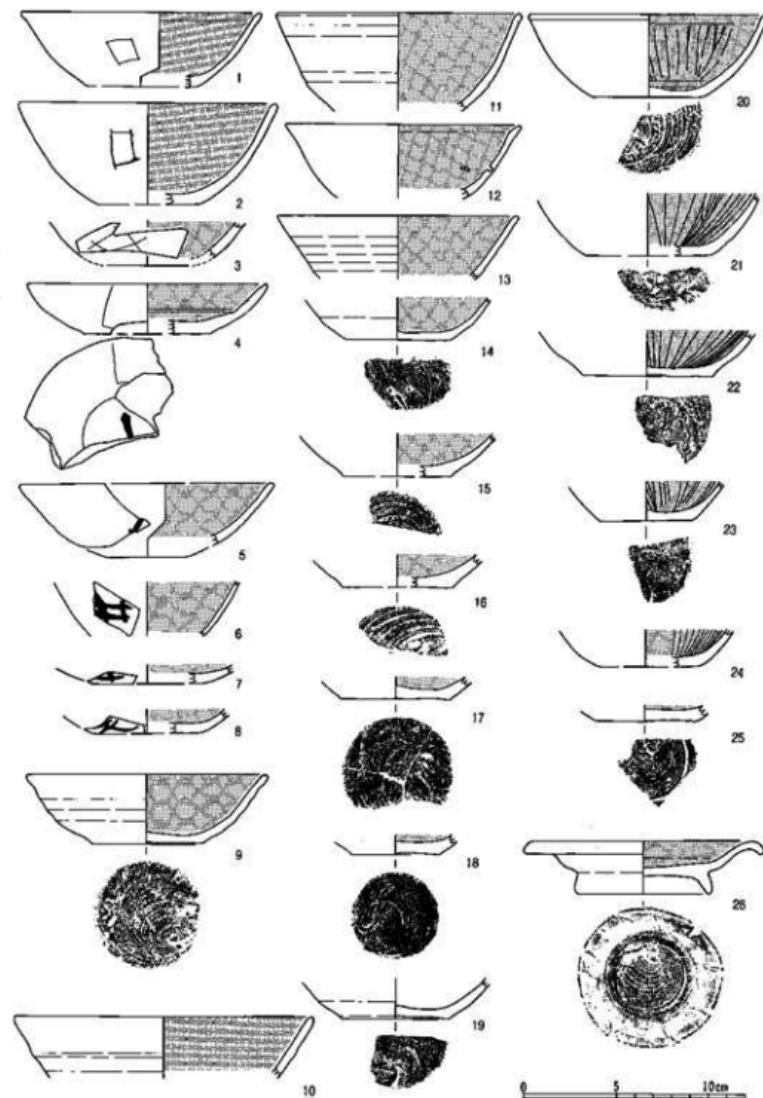
第331図は土師器の塊・皿。1～3の塊は、外表面に「□」あるいは「井」の刻文（刻文）がある。焼成後に鋭い工具によって刻まれている。いずれも内黒ながら色は薄く、やや灰色味がかった光沢がない。4は甲斐型の皿で、内面に段がある。内黒。外表面にはL字形の刻文があり、底には墨書が見られる。5～8も内黒の塊で、いずれも墨書を持つ。5・6・7はその特徴からいざれも「井」とみられるが、8はどのような文字か不明。9～19は塊で、19以外は内黒。内面の磨きは口縁近くが横方向、底近くでは縦方向だが、12は全面横方向。19は内面が部分的に赤い。何か顔料の痕跡か。16は灯明皿に転用されたもので、内面に灯心の油痕がみられる。17は回転糸切りのち窓なでられている。20～25も内黒の塊。20～24は内面が放射状に強く



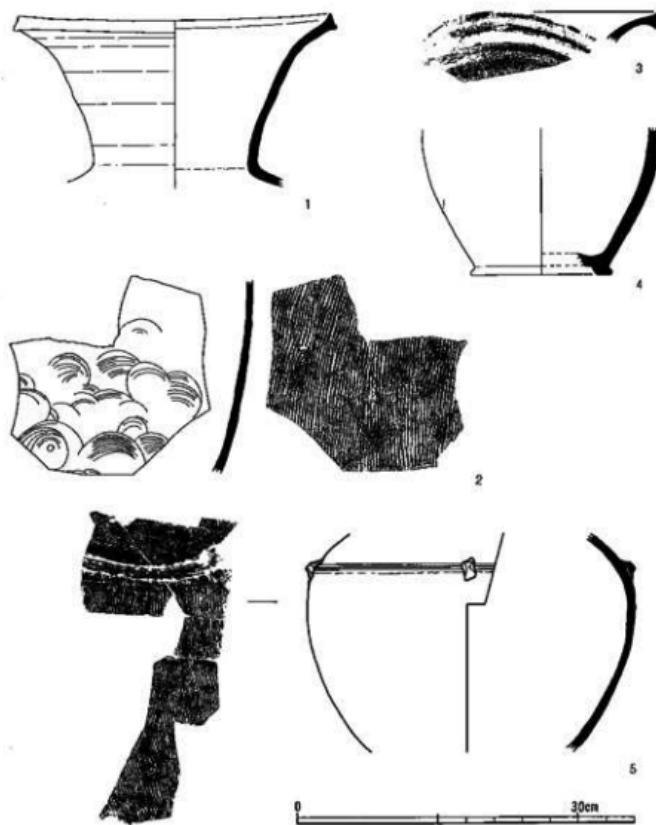
第329図 平安1号住居址出土の土器 (1/3)



第330図 平安1号住居址出土の土器・須恵器・灰釉陶器 (1/6)



第331図 平安2号住居址出土の土器 (1/3)



第332図 平安2号住居址出土の須恵器（1/6）

磨かれ、暗文のような効果を生んでいる。26は竈脇の穴上面に伏せられていた内黒の高台皿。回転糸切りののち、高台を貼り付けている。内面には段を持ち、口縁は大きく外反する。内外面ともに丁寧に磨かれ、特に内面は光沢を持つ。灰釉陶器の段皿を模倣したものであろうか。意図的なものかどうかはっきりしないが、高台の一部が切れている。

第332図1は須恵器長頸壺の頸部で、住居址の南角の床面に伏せて据えられていた。口縁を6分の1ほど欠失する。坂平遺跡では4号住居址で、頸部のみの出土例があるが、同様の事例は町内の他遺跡でも数例が確認されている。2は須恵器壺の胴部だろうか。内面に当て具痕が残っている。3は長頸壺の口縁部破片。4は壺の胴から底部。5は凸帶付四耳壺の胴部であり、内面の当て具痕は横なでによって消されている。

本址の遺物は、他の住居に比べると甲斐型土器の比率が低いことが指摘される。

### 3号住居址（第333図）

第333図1～13は土師器塊で、いずれも内黒である。7は不揃いながら放射状の暗文を持つ。10の底は回転糸切りののち、一部なで調整されている。12は胴部の下半に長さ、方向が一定でない範削りを施している。甲斐型の範削りを模倣したものであろうか。内面は放射状に磨いている。14は壺の底部であろうか。底は範削りされている。15・16はろくろ壺、17・18はいずれも甲斐型の壺の口縁部。17は大型、18は小型の壺である。19・21は甲斐型壺の底部で葉脈圧痕が、20はろくろ壺の底部で回転糸切り痕がある。

### 4号住居址（第336図）

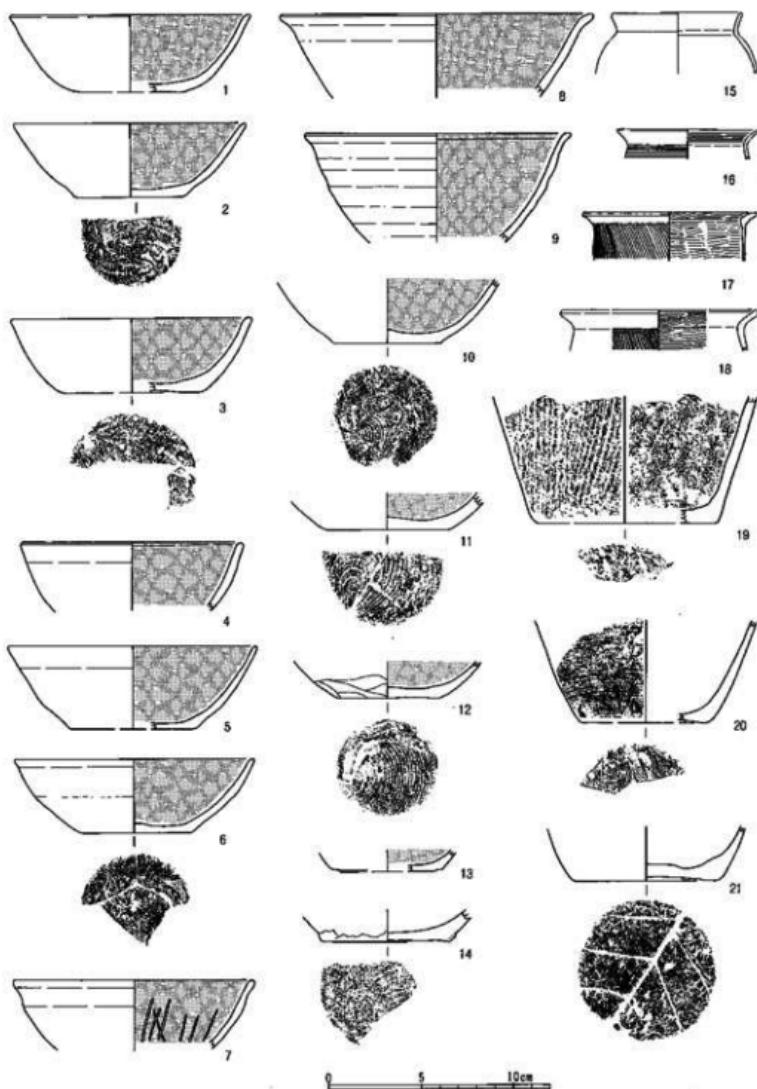
第336図1は甲斐型の壺。体部外面と底は範削り、内面には放射状暗文がみられる。2は甲斐型壺の胴下半。3・4も甲斐型の壺で、3は小型、4は大型。5・6は須恵器長頸壺の頸部と肩部。5は竈脇に横倒しになって発見された。よく焼き締まっており、色も赤みを帯びている。灰の降着が著しい。

### 5号住居址（第334図）

第334図1・2・3・4・7は土師器塊。2以外はいずれも内黒だが、7は薄く光沢がない。2の内面は横方向の磨きで調整され、底も範削りされている。5・6はろくろ壺の底部で、5は内面におこげが残る。8は甲斐型の皿。底部は範削りされ、底部見込みには同心円状の暗文がある。底に「十」の墨書。9は貼り付け高台の塊か皿の底部。破損してからであろう、高台裏を灯明皿として転用している。10は須恵器壺胴下半部。貼り付けの高台が剥落している。11は須恵器小壺の口縁。12は内黒の土師器塊で、墨書きがある。13は土師器蓋のつまみ。14・15は甲斐型壺。

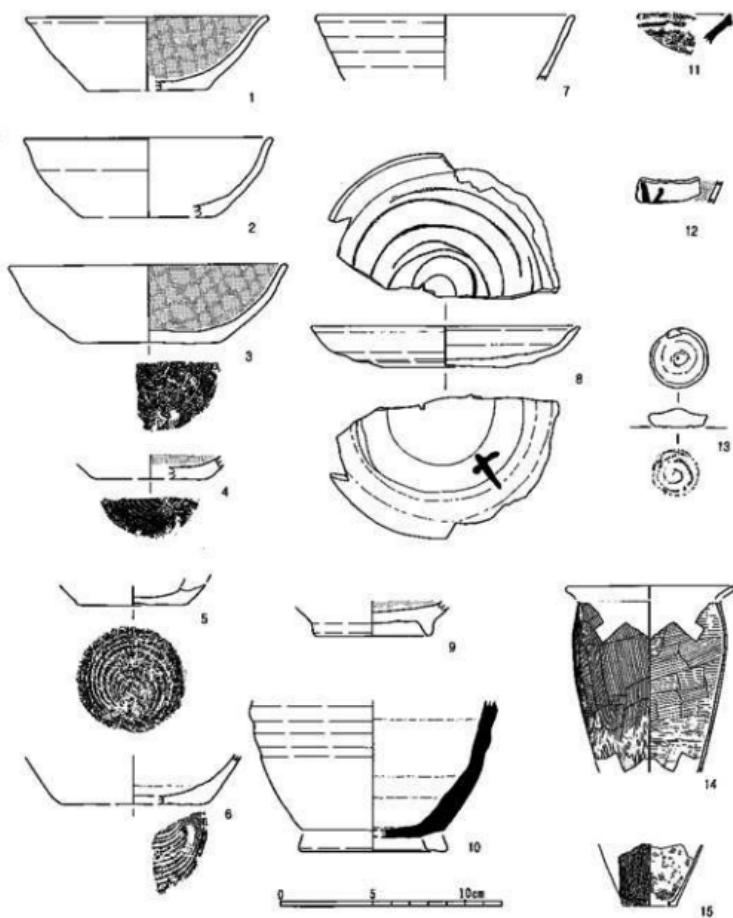
### 6号住居址（第335図）

第335図1・5は内黒の土師器塊だが、5の内面下半分は黒くない。1の外面には墨書きがあり、さらにその上から刻書きされている。「井」であろうか。2・3・4は内黒の皿。4は回転



第333図 平安3号住居址出土の土器

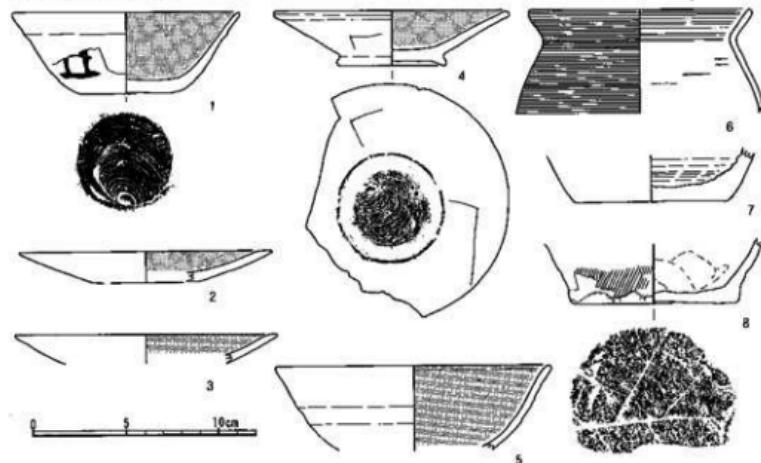
(1~14, 19~21:1/3 15~16·18:1/6 17:1/9)



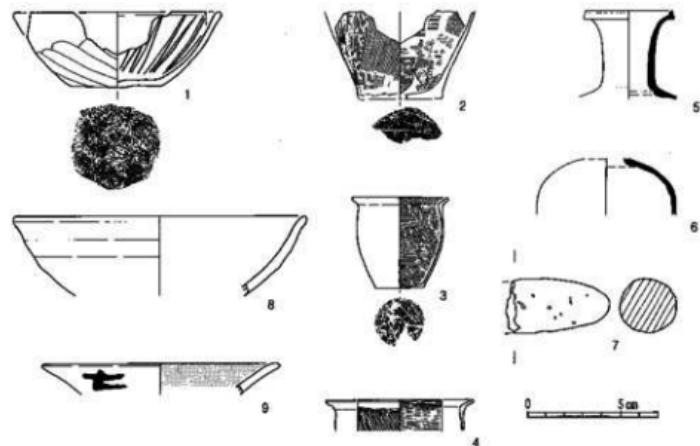
第334図 平安5号住居址出土の土器・須恵器

(1~13:1/3 14:1/9 15:1/6)

平安時代の遺構と遺物



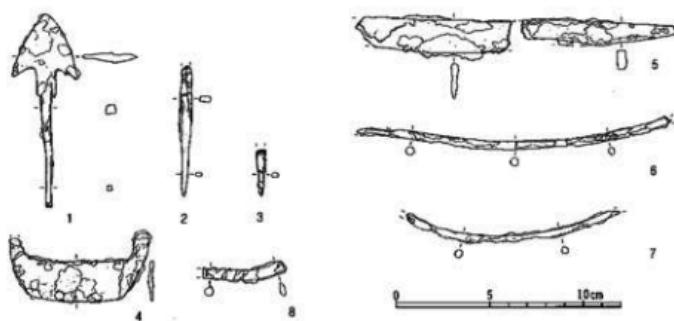
第335図 平安6号住居址出土の土器 (1/3)



第336図 平安4号住居址ならびに遺構外出土の土器・須恵器

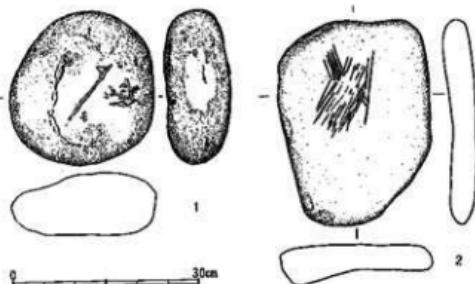
(1・7~9:1/3 2・3・4:1/9 5・6:1/6)

1~6:4号址 7~9:遺構外



第337図 平安各住居址出土の鉄製品 (1/3)

1・6・7:2号址 2・3・5・8:1号址 4:3号址



第338図 平安各住居址出土の石器 (1/9)

1:2号址 2:4号址

### 平安時代の遺構と遺物

糸切りの上に高台を貼り付けた皿で、二箇所にL字形の刻文を施す。その位置と欠損部分から、本来三箇所に刻まれていた可能性もある。高台内に黒色の物質が付着している。灯明皿にしたものか、あるいは硯のように用いたものか。6・7はろくろ甕。8は甕の底部で内面に指頭圧痕がある。

### 遺構外（第336図）

第336図7は性格不明の土製品で、<sup>7-1</sup>瓶の把手とも考えられたが形態が異なるため断定は出来ない。いずれにしても事例がなく、判断のつかない遺物である。それゆえ平安時代ではない可能性もある。8は土師器塊。9は土師器皿で墨書があり、「七」と読める。

## 鉄 製 品

第337図1は2号址出土の鉄鎌。2・3は先端を欠失した鉄鎌の茎だと考えられ、いずれも1号址出土。4は帶引金。一部欠損している。3号址の南東隅の灰溜め穴から出土した。5は1号址出土の刀子。先端と中程を欠損している。6・7は針金状の鉄製品。ともに2号址の出土だが、どのような用途のものかわからない。8は1号址の灰溜め穴出土。性格は不明。

## 石 器

第338図1は輝石安山岩の砥石。2号住居址の南壁際の床面から出土した。この礫は大きさの割に軽いが、その形状から床面に置いて使用したものと考えられる。表面と裏面、さらに側面の一部がよく磨られており、表・裏の砥ぎ面は礫の形状に沿って丸く、側面は平らになっている。また、全面に細かな打痕が、表面には浅く短い溝状の傷（使用痕）がある。

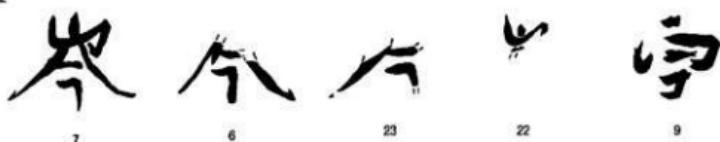
2は4号住居址の竈から伏せられた状態で発見された砥石で、輝緑岩。石材はもともと縄文時代のものであったと考えられ、図の側縁左半分には古い敲打調整痕がある。表面に刃をあてた溝があり、この中は磨れています。

## 坂平の墨書・刻書（刻文）土器

坂平遺跡では大小破片を含む、15点の墨書と6点の刻書（刻文）が発掘された（第339図）。いずれも壺ないしは皿で、そのほとんどが内黒土師器の塊・皿だが、1号住居址の9は甲斐型土師器の塊、5号住居址の8は甲斐型土師器の皿である。

2号住居址の4と、5号住居址の8は底部に書かれていたが、これ以外は全て胴部外面に書かれている。また2号住居址の6のみ、器に対して逆位で書かれている。

1号址



2号址



5号址

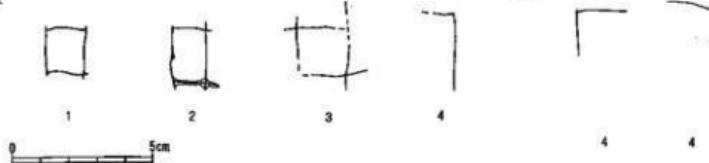


6号址



遺構外

2号址



0 5cm

第339図 坂半の墨書・刻書（刻文）（1/2）

## 平安時代の遺構と遺物

出土場所と量の内訳は、墨書・刻書（刻文）あわせて1号住居址が6、2号住居址が9、5号住居址が2、6号住居址が2、遺構外1である。前述出土数と数が合わないのは、1点に複数書かれたものがあるためである。

1号住居址の墨書6点のうち、4点は「岑」であろう。小高い山の頂だとか切り立った崖を示す文字であり、遺跡の立地の特徴を示していると言えなくもない。なお、この文字は1.5kmほど北西の夏焼遺跡（2002年発掘調査）の1号住居址からも出土しており、両者の関係をうかがわせる。<sup>(1)</sup>また、同じ文字は山梨県明野村の梅之木遺跡や同高根町の湯沢遺跡でも確認されて<sup>(2)</sup>いる。甲斐型の塊9に書かれた文字は「字」のようにも見えるがはっきりしない。

2号住居址からは本遺跡の中で墨書・刻書（刻文）が最も多く見つかっている。6は「井」であり、5・7も同じであろう。

刻書（刻文）は1・2・3が「□」または「井」とみられるが、全て「井」を意識しているのではないだろうか。4はL字形である。

5号住居址の甲斐型皿8には「十」が、内黒塊12には判読できない墨書がある。

6号住居址の1も「井」ではないかと思われる墨書であるが、墨書の上から同じ文字を刻書している。内黒の高台付皿の4にはし字形の刻文が二箇所見られる。その位置と欠損部位から本来は三箇所にあった可能性もある。墨書・刻書（刻文）の内容は2号住居址と共通点が多い。

このほか、遺構外から墨書「七」の書かれた内黒皿片9が出土している。

### 注

(1) 「夏焼遺跡」 長野県富士見町教育委員会 2003

(2) 「梅之木遺跡」 山梨県明野村教育委員会 2002

## 第四章 中・近世の遺構と遺物

### 一、遺構

坂平遺跡では、中近世の掘建柱建物址などは発見されなかったが、調査区のはば全域より、90基をこえる小堅穴を検出した（次頁表）。未調査区域に広がることを考えると相当な数の小堅穴が存在すると思われる。どの穴もほとんど変わらない特徴をもつことと、調査期間の制約から、発掘したのは40基ほどで、大半は位置と大きさの記録にとどめた（第322、340、341図）。

遺跡のはば全域に点在するとはいっても、その分布を詳細にみるとある程度のまとまりがあり、一部のものは列をなしているように見える。これらの穴の平面形は全て円形で、直径は80～150cm。堆土は黒色ないしは黒褐色で、ローム粒やローム塊が混じっており、一度に埋め戻された可能性が高い。いずれも堆土は柔らかく、縮まってはいない。また、いくつかの穴には疊が入っているが、いずれも褐色の被膜が見られ、穴を掘ったときに地山から掘り出した疊であるように思われる。

この小堅穴は縄文時代・平安時代の遺構を切っており、中世以降の遺構であることはほぼ間違いない。しかし、内部よりこの穴の時期、性格を特定できるような遺物が出土しないため、どのようなものか推測することができない。墓とも思えず、中・近世の貯蔵穴と考えて調査をすすめたが、その性格について、何ら手がかりを得ることはできなかった。<sup>(1)</sup>

なお、このような小堅穴は、山梨県白州町上北田遺跡などでは多数見られるものの、坂平遺跡以西の地域では認められない遺構である。このような分布の地域的な偏りがその性格に何か関係するのか、興味は尽きないが現段階では何とも言えない。

またこの他に、遺跡内の何箇所かに集中して、小形の柱穴が検出された。堆土はいずれも黒色～暗褐色上で、遺物は出土していない。堆土の様子から中・近世に属するとみられるが、いずれも並んで建物址となるようなものではなかった。

#### 注

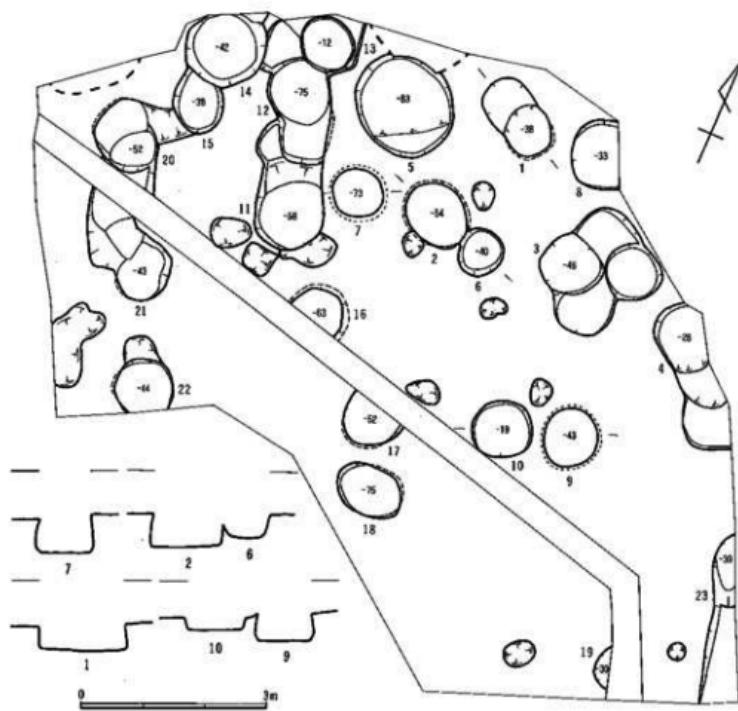
- (1) この遺構が数多く発掘されている山梨県白州町では、出土した遺物の様子などから墓穴と考え、土壤のリン酸含量分析を試みているが、墓穴と確定できるような結果は得られていないようである。

『西之久保遺跡』 山梨県白州町教育委員会 1998

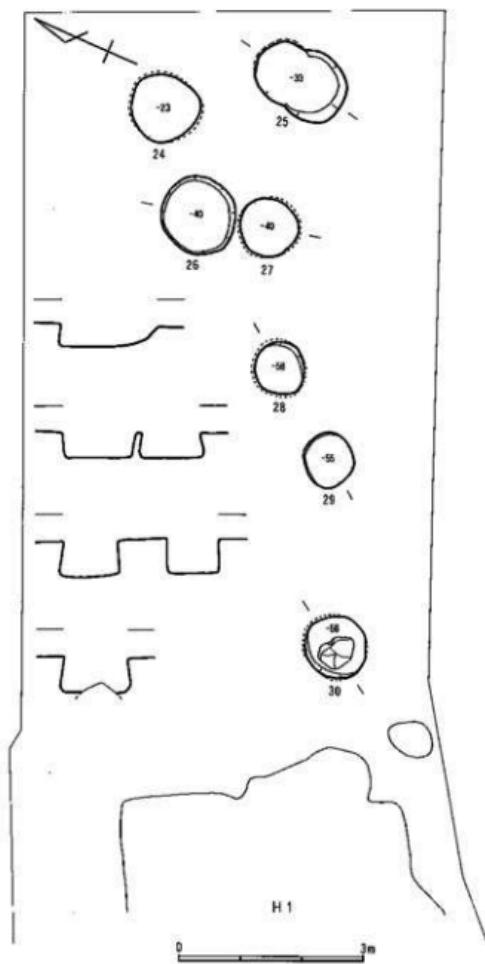
## 中・近世の遺構と遺物

No.	形状	直径(cm)	深さ(cm)	備考	No.	形状	直径(cm)	深さ(cm)	備考
1	円	80	38		51	円	80	-	
2	タ	104	54		52	タ	80	-	
3	×(四連)	90・100	46・52	石詰まり	53	タ	(60)	-	
4	円	110	28		54	タ	90	-	
5	タ	170	83		55	タ	90	-	
6	タ	80	40	石詰まり	56	タ	94	-	
7	タ	80	73	石詰まり	57	タ	98	-	
8	タ	110	33		58	タ	100	-	
9	タ	94	43	石詰まり	59	楕円	104×90	-	
10	タ	90	19		60	円	99	-	
11	タ	120	58		61	タ	94	-	
12	タ	100	75		62	タ	60	-	
13	タ	90	12		63	タ	46	-	
14	タ	135	42		64	タ	55	-	
15	タ	90	28		65	タ	43	-	
16	タ	100	63		66	タ	86	-	
17	タ	100	52		67	タ	98	-	
18	タ	96	75		68	タ	94	-	
19	タ	-	30		69	タ	90	-	
20	タ	120	52		70	タ	84	-	
21	タ	90	43	石詰まり	71	楕円	84×70	-	
22	タ	100	44		72	円	110	-	
23	タ	-	39		73	楕円	103×63	-	
24	タ	106	23		74	円	104	-	
25	円(双子)	100・110	33		75	タ	64	-	
26	円	128	40		76	楕円	120×80	-	石詰まり
27	タ	96	40		77	円?	-	-	
28	タ	85	58		78	円	(80)	-	底面のみ
29	タ	82	55		79	タ	(80)	-	
30	タ	105	56		80	円?	-	-	
31	タ	92	100		81	円	81	-	
32	楕円	160×102	19	石詰まり	82	タ	62	-	
33	円	70	17	発出土	83	タ	105	-	
34	タ	94	64		84	タ	100	-	
35	タ	75	21		85	タ	80	-	
36	タ	105	14		86	タ	70	-	
37	タ	90	-		87	タ	80	-	
38	タ	106	84	石詰まり	88	タ?	-	-	
39	タ	100	-		89	楕円	140×120	-	
40	タ	120	-		90	円	100	25	
41	タ	105	-		91	円?	90?	40	断面確認
42	円(双子)	85・90	-						
43	楕円	125×100	-						
44	円	100	-						
45	楕円	100×83	-						
46	円	85	-						
47	タ	83	-						
48	タ	88	-						
49	タ	98	-						
50	タ	100	-						

中・近世の小豎穴



第340図 1~23号小竖穴 (1:90)



第341図 24~30号小竪穴 (1:90)

## 二、中・近世および近代の遺物

### 陶 磁 器

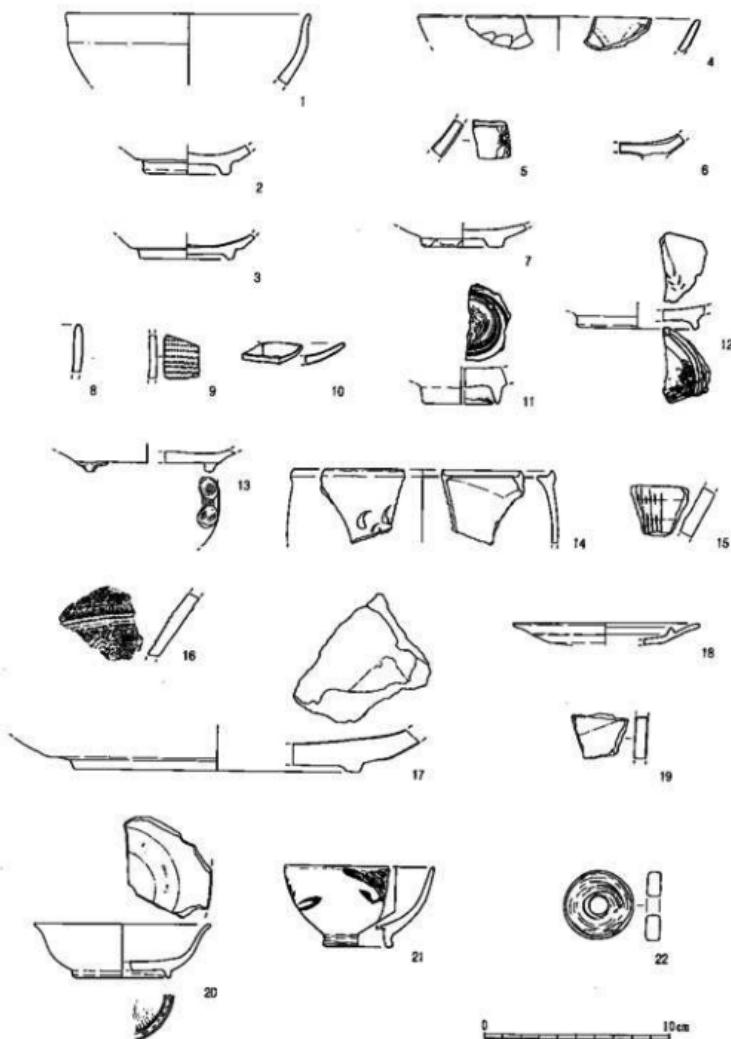
坂平遺跡から出土した中世以降の遺物は、陶磁器89点、金属製品が5点である。何らかの遺構に伴うものはほとんどなく、遺物の量は遺跡の面積からしてもそれほど多くはない。

陶磁器はほとんどが時期不詳の細片。およそ半数近い40点ほどが瀬戸美濃産と考えられる。その多くは近世～近・現代のものであり、中世のものと考えられるのは数点に過ぎない。また、染め付け磁器の小片が3点ほどあるが、時期・産地とも同定できない。志野・織部は見られないが、白天日と思われる小破片が一点出土している（第342図）。

1は天目茶碗で21号住居址から出土。内外面ともに鉄釉で、胎土は黒色。17世紀の美濃産と思われる。2・3も天目茶碗で、2は7号住居址、3は56号住居址のいずれも上面からの出土。18世紀の美濃産と考えられるがはっきりしない。4から6は肥前の青磁であろう。うち4と6は連弁文の碗だと思われる。また、白化粧土の掛けられた5は長方形の小破片であるが、一辺が幾度も打ち欠かれたようになっており、表面に強い線状痕が残る。これらの状況から火打ち石に転用したものと判断される。4・5は表面採集、6は8号住居址上面の出土。7は鉄釉の塊で17号住居址出土。肥前か。8の小破片は瀬戸の尾呂茶碗で、18世紀前半に位置づけられよう。表採。9は瀬戸の鐵茶碗、あるいは徳利かもしれない。19世紀前半と考えられる。46号住居址付近の表採。10は瀬戸のひだ皿。17世紀か。小豎穴が集中する1494番田の黒色土より出土。

11は肥前の皿。灰釉で、底部見込みに渦状の刷毛模様がある。いわゆる刷毛目唐津で19世紀のものであろう。1502-1番田表採。12は肥前の皿だろうか。灰釉だが内面に麦穂のような絵が描かれており、高台が灯明皿に転用されている。1484番田に設定されたトレンチの黒色土内からの出土。13は瀬戸の無釉の香炉であろう。18世紀くらいか。20号住居址付近を精査中に出土した。14は灰釉に白泥のイッチンが施された行平で、表面採集品。胎土や釉の状況から在地産とも考えられるがはっきりしない。15は鉄釉で胎土白色の瀬戸美濃産擂鉢で、17世紀。擂鉢は、この一点が採集されたのみ。16は灰釉の鉢であろうか。3条1単位の横目がひかれている。釉の様子などから瀬戸大窯期の製品と思われる。平安時代の5号住居址出土。

17は白化粧土に灰釉掛けされた大皿。瀬戸美濃産。見込みに四角く斑状になる、重ね焼きのための釉剥ぎがみとめられる。表面採集。18は灰釉の灯明皿で、12号住居址出土。19は器種不明の小破片だが、胎土、釉調から松代の所産（いわゆる松代焼）の可能性があるが、小さい破片であるため断定はできない。19世紀代の代官町窯に似た感じの製品がみられる。表採。20は黄釉の磁器碗で近代のもの。見込みに蛇の目釉剥ぎ。1494番田表採。21は白化粧土、灰釉の色



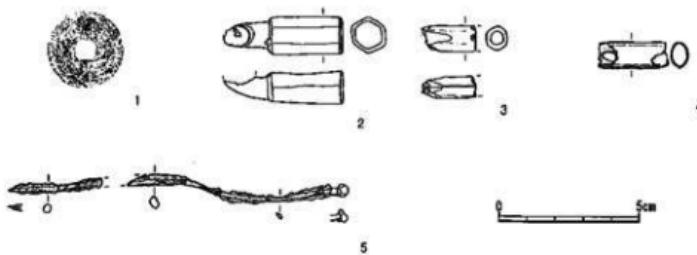
第342図 中・近世および近代の陶磁器 (1/3)

中・近世および近代の遺物

絵塊。3号建物址付近の表探。22は白磁の戸車で、8号住居址上面からの出土。19世紀と考えられる。

金 属 製 品

第343図1は寛永通宝で、1486番田の表探。摩滅が著しく、ほとんど文字を読むことが出来ない。2は煙管の雁首。銅製。中には竹の羅字（3）が残されており、雁首に差し込むために先端を削った痕跡がある。平安時代の4号住居址の西、1500番田の現代の汐中から発見された。4は煙管の吸口であろう。銅製。31号住居址上面から出土。5は19・20・21号住居址確認作業中に出土した鉄製品。とがった先端とつぶれた頭の様子から釘とも思われたが、釘にしては長く、使途不明とせざるをえない。



第343図 中・近世および近代の遺物 (1/2)



## 第五章　まとめと考察

### 第一節　坂平遺跡の土器文化

#### 一、土器型式の在り方と時期区分

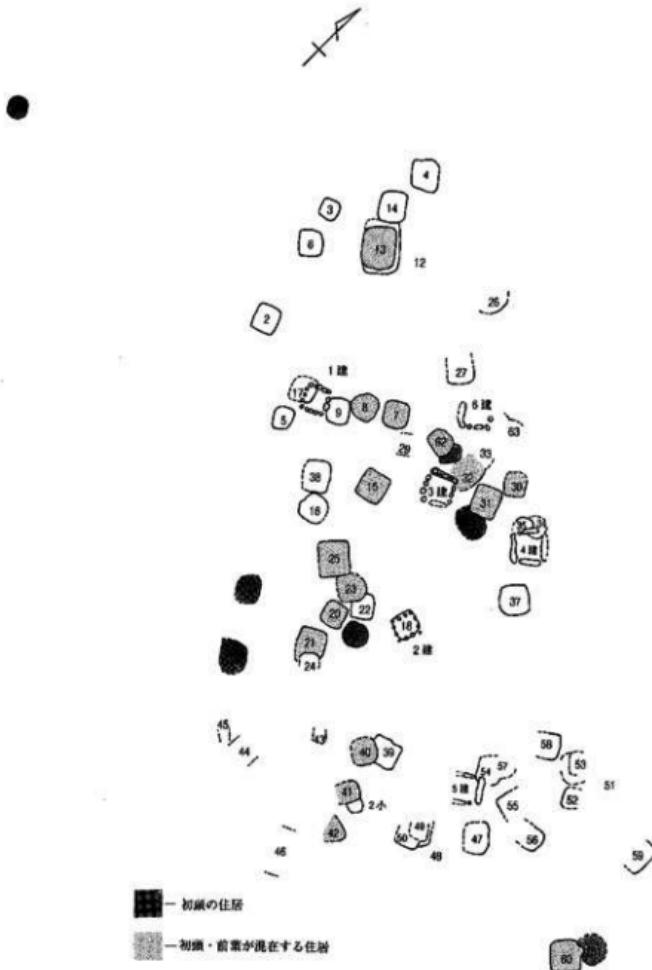
坂平遺跡では、中越式を主として出土する前葉の住居址に、初頭の下吉井式または在地系の下吉井式土器が混在していた。しかも初頭に属する外米系の伴出土器が、意外にも矛盾のない型式的なまとまりを有していた。このような遺物のあり方は、従来の編年観の尺度なり感覚では、到底理解できない現象である。混在が1、2軒なら問題ないのだが、ことに下吉井期の住居址などみの土器量を有する住居址が、集落全体のうち中央部に群集する11軒を中心として、16軒にも及んでいる（第344図）。これらが粉々込んだものか、共存しているものか大きな課題となつた。

はじめに、混在するいくつかの原因を想定してみよう。一つは流れ込みとした場合である。そこは傾斜の殆どない広い場所であること、また上手に初頭の集落が存在しないことから、流入することは、まずありえない。また、なにゆえに集落の中央部に集中しているのか、説明できない。

もう一つは、古い住居をそっくり壊すとか、建て替えている場合である。住居の重複はある、古い住居をそっくり壊したような形跡は一切みとめられない。建て替えのある住居を仔細に見ると、柱穴や周溝、炉の重なりのほか、輪郭の不自然な箇所のあることが知られる。しかしそれらの変化の度合いは少なく、単純で規則的である。こうした状況は、古い住居を明らかに意識していると見なすことができ、限りなく同一家系の住人によって住み続けられたと判断されることから、そこに大きな時間の断絶があるとは考えにくい。無理やりこれらを初頭と前葉に分けるのは、混在している遺物のあり方からしても適当でない。

そこで混在している実態を把握するために、初頭と前葉の混在比率を表にしてみた（表1）。表の基準は以下のとおりである。

- 1 下吉井期の住居址に遺されていた土器片の量は、7軒のうち5軒がおおむね1～2kgの間となっている。そこで、少なくとも初頭か前葉のいずれかの土器片を1kg以上保有する住居址について、その重量比を求めた。そして比率の順序で並べてみた。
- 2 図化した個体のうち、残存率が3割未満のものは破片の扱いとし、その重量を加算した。



第344図 前葉の住居址における初頭土器の混在状況 (1:1000)

## 土器型式の在り方と時代区分

表1 初頭と前葉の土器片の混在比率

住居番号	建替年	切合	初頭土器(kg)	前葉土器(kg)	合計(kg)	初頭(%)	前葉(%)	前葉土器個体
61		<60	2.19	0	2.19	100.0	0.0	
11			1.87	0.11	1.98	94.4	5.6	
28			1.29	0.09	1.38	93.5	6.5	
19			1.41	0.11	1.52	92.8	7.2	
10			1.62	0.2	1.82	89.0	11.0	
36	2期	<31	4.38	0.88	5.26	83.3	16.7	
30			1.84	0.9	2.74	67.2	32.8	
40		39	1.26	0.88	2.14	58.9	41.1	1
23		22	1.2	0.87	2.07	58.0	42.0	1
8			5.21	5.52	10.73	48.6	51.4	2
15	2期		1.39	1.78	3.17	43.8	56.2	
34		<4建 35	0.66	0.91	1.57	42.0	58.0	1
62			1.2	1.82	3.02	39.7	60.3	1
31		>36	4.49	7.09	11.58	38.8	61.2	5
46			0.62	1.04	1.66	37.3	62.7	1
21	有?	24	1.22	2.28	3.5	34.9	65.1	
59			0.83	1.7	2.53	32.8	67.2	
38	2期?		2.09	4.35	6.44	32.5	67.5	2
7	有?		2.72	5.67	8.39	32.4	67.6	
60	2期	>61	1.88	4.31	6.19	30.4	69.6	
27			0.76	1.95	2.71	28.0	72.0	
2			0.45	1.21	1.66	27.1	72.9	1
25	3期		4.85	14.6	19.45	24.9	75.1	3
56			0.36	1.09	1.45	24.8	75.2	1
39		40	0.68	2.08	2.76	24.6	75.4	
32	3期?	>33	1.49	4.78	6.27	23.8	76.2	
50		>48 <49	0.83	2.9	3.73	22.3	77.7	
37			0.67	2.61	3.28	20.4	79.6	
42			1.24	5.1	6.34	19.6	80.4	
20	有?		1.11	4.59	5.7	19.5	80.5	1
4	2期		0.66	3.46	4.12	16.0	84.0	1
16			0.32	1.75	2.07	15.5	84.5	
12・13		<13	1.48	9.08	10.56	14.0	86.0	
58			0.62	4.22	4.84	12.8	87.2	3
22		23	0.28	2.08	2.36	11.9	88.1	
17		>1建	0.22	2.02	2.24	9.8	90.2	1
14			0.66	6.14	6.8	9.7	90.3	
54		>57 5建	0.13	1.77	1.9	6.8	93.2	
3			0.02	1.29	1.31	1.5	98.5	

## まとめと考察

従って前葉の個体数というのは、それを差し引いた残存率の高い個体の数である。その分は重量比から除かれている。

- 3 前葉の破片の量が1kgに満たなくても、残存率の高い個体数のあるものは表に加えた。
- 4 初頭土器は纖維を含み縦状の隆帯を貼り付けた在地系下吉井式を主とし、典型的な下吉井式、花積下層式、木島式の古い段階を含んでいる。他方、前葉土器は中越式を主とし、纖維を含む在地系の中越式、神ノ木式、関山式、木島式の新しい段階を含んでいる。なお、それらの有無については表3に示した。

初頭の比率が高い住居址では、いずれも前葉の土器は流れ込み程度の数値である。変動があるのは36号址と30号址の間で、16%の開きがある。ここからは前葉がおよそ3割に上がる。以下、1割きざみで増え、8号址と15号址の間くらいで比率は逆転し、ここからは小刻みに変わっていく。62号址と31号址のあたりまで混在して拮抗する状況が続いている。そこは前葉が6割を超える位置もある。そして60号址あたりで、中越式が7割近くを占める。さらに4号址の段階に至って、初頭の36号址にほぼ対応する比率となる。

よそ以上が、表から窺い知れる変化の流れである。一箇所を除いて数値に大きな変動がなく、漸移的に変化していることがわかる。切り合いとも矛盾がない。

これを基に、坂平遺跡における時期区分をすれば、開きの最も大きかった36号址と30号址の間を初頭の境と見ることができる。そして前葉が7割を占めて、完全に形勢が逆転する7号址と60号址の間あたりを、前葉との変換点としておくことが順当なところであろう。従ってそれ以前は、初頭から前葉にかけての移行期とができる。

## 二、在地系下吉井式から在地系中越式へ

初頭の上器群は、移行期を経て前葉が7割に逆転してもなお、12・13号址のあたりまで残っている。他方、前葉はその逆であり、漸移的に数値を上げている。何よりもはっきりしているのは、数値の変動が非常にゆるやかなことである。

このことは、遺構の状態が変化に乏しく、継続的な建て替えであることとも合致し、何ら矛盾していないことが知れる。すると混在してかつ拮抗しているという状況は、紛れもなく両者が同時存在、すなわち共存しているとみるほかない。

初頭の段階にあって、纖維を多量に含み、縦状の粘土紐を貼り付けた在地系の下吉井式とされる土器は、坂平において在地の土器としてしっかりと根付いている。典型的な下吉井式は客体的である。そして前葉の中越式土器とも、しばらく共存している。また地文を置換すれば、61号址にみられる在地的な花積下層式土器とも融合できる要素を備えている。

従来、中越式土器は纖維を含んでいないことも、指標のひとつとされてきた。しかし、坂平

## 在地系下吉井式から在地系中越式へ

においては、繊維を多量に含む素文の土器21や27と同様な尖底の土器がかなりの数、出土している。典型的な中越式土器と比較すると、混和材として用いている金雲母を含んでいないこと、粘土が異なっていることが見てとれる。色調は総じて茶褐色から赤褐色で、一見して区別できる。出土している典型中越式には繊維が見られないことから、これらは在地系の下吉井式土器の伝統を直接受け継いだ、「在地系の中越式土器」であるということができる。坂平において、これら繊維を含む「在地系の中越式土器」は、すでに初頭から前葉にかけての移行期に存在しており、初頭との間に断絶はない。

いっぽう阿久遺跡でも、関山式土器が共伴している40号址のほか、繊維を含む素文の尖底土器が固化した中に7点みられる。このことから繊維を含む「在地系の中越式土器」は、中越期を通じて普遍的にあることが知れる。

そして、同じ中越式であっても格子目や垂下粘土紐を有する土器には、繊維を混入しているものは今のところ一点もない。これらの直接の祖先と考えられる古い段階の土器が、宮田村中<sup>(1)</sup>越や塙尻市剣ノ宮にあるが、やはり繊維を含んでいない。これは、典型的な木島式とは趣を異にしている。それは器壁が典型的なものよりもやや厚いこと、頸部に瘤状の隆起を巡らすことである。すると、これらを木島式の影響を受けた、在地化した木島式とすることはできないだろうか。

在地化した下吉井式土器があり、在地化した花積下層式土器があるのに、ひとり木島式のみ在地化した土器がないといふのは、おかしなことである。「在地系の木島式土器」という概念を設定してもいいのではなかろうか。いわゆる中越式の古段階の土器といわれているものが、これに相当するという見方である。

こう考えると、いわゆる新段階の中越式土器には二つの出自があって、一つは「在地系の木島式土器」から誕生した「正系の中越式」、もう一つは在地系の下吉井式土器から誕生した「傍系の中越式」であると考えられる。前者は伊那谷から松本盆地南縁、さらに諏訪湖岸の方面において普遍的であり、後者は八ヶ岳南麓から西麓にかけての地域で前者と混在している。簡略化すれば表2のようになろう。

表2 中越式土器の二系統

地域	伊那谷・松本盆地・諏訪盆地		八ヶ岳西南麓	
	在地系木島式土器	正系中越式土器	傍系中越式土器	在地系下吉井式土器
器形	平縁 尖底	平縁 波状 尖底	平縁 尖底	平縁 尖底
文様	瘤状隆起(指頭押圧の鉄状文) 列点状の刺突 格子目	垂下縫帶・格子目 素文	素文	瘤状隆起 素文 条痕文
胎土・混和材	良質・雲母	金雲母	繊維	繊維

## まとめと考察

こうしてみると、坂平での住居址の重複状況や、土器の混在していた理由が無理なく理解できる。後の三節でみるように、多様な石器の器種系統もまた、このことによく合致している。

## 三、諸型式の様相

前期初頭の下吉井式では、擁状に粘土紐を貼り付けた繊維を多量に含む在地の土器を主として、典型的な下吉井式・木島式・花積下層式といった外米系の土器が混じっている（表3）。このうち61号址は在地的な花積下層式を主体とする住居である。

いっぽう、初頭から前葉にかけての移行期ならびに前葉では、いわゆる薄手の尖底となる中越式に、在地系といえる繊維を多量に含んだ尖底土器、在地系の神ノ木式、外来系の関山式・木島式といった土器が混じっている。

以下、時代の古いほうから順にみてみたい。

### 早期末葉から前期初頭の土器

前期初頭の主体は下吉井式であり、仔細に見ると、このなかには先行する神之木台式が数片みられ、それとは別に、縦方向の文様構成をもつ沈線文系の土器が僅かに含まれる。

神之木台式は9号址—5、10号址—1、25号址—15の3点であり、内外とも器面の調整はきれいで、いずれも繊維を含んでいない。

沈線文系の上器は、横彫または竹管などの腹の側を押し当てて、条線ふうに引いた7号址の36～39、蛇行沈線の7号址—41、17号址—38、21号址—22、30号址—9、36号址—1や、曲線文の23号址—18・19、25号址—24、32号址—11、遺構外—22などがある。器肉の薄い38号址—17と分厚い7号址—36～41の二通りがあり、後者は植物質の繊維を多量に混入している。これらの文様は東海地方の天神山式に遡源すると思われ、縦方向を意識した施文手法を探りながら次第に在地化していくものであろう。中越式の7号址から、下吉井式や花積下層式と混じって見つかっている。したがって、出土状況からこの一群の編年的位置は、前期初頭または前葉の段階までになると考えられる。

### 下吉井式土器

以下にみるように、四つに類別してみた。

(1) 粘土紐を口縁に沿って貼り付けているもの 38号址の14・15のように波状に貼り付けるものと、平行する2本組の粘土紐を貼った11号址—5、25号—17がある。後者は上下の粘土紐を「工」の字につないでいる。11号址—4や遺構外の14も同類の破片。38号址—14・15が木島Ⅱ式とされる土器との折衷と思われるような破片であることから、これらは並行関係にある下吉井Ⅰ式の段階と思われる。

(2) 押引文を有するもの 62号址—11のように粘土紐の真ん中を押し引くもので、13のよう

表3 在地系・外來系土器の様相

往届番号	標識と箇葉の土器片の混在比率			在地系・外來系の土器の有無									
	初頭土器(kg)	終葉土器(kg)	合計	初頭%	終葉%	在地系下吉井	下吉井	木島	花横下解	神ノ木	間山	天神山系	新常土器個体
1	0.04	0	0.04	100.0	0.0	○	○	○	○	○	○	○	○
61	2.19	0	2.19	100.0	0.0	○	○	○	○	○	○	○	○
11	1.87	0.11	1.98	94.4	5.6	○	○	○	○	○	○	○	○
26	1.29	0.09	1.38	93.5	6.5	○	○	○	○	○	○	○	○
19	1.41	0.11	1.52	92.5	7.2	○	○	○	○	○	○	○	○
10	1.62	0.2	1.82	89.0	11.0	○	○	○	?	○	○	○	○
36	4.38	0.88	5.26	83.3	16.7	○	○	○	○	○	○	○	○
30	1.84	0.9	2.74	67.2	32.8	○	○	○	○	○	○	○	○
40	1.26	0.88	2.14	58.9	41.1	○	○	○	○	○	○	○	1
23	1.2	0.87	2.07	58.0	42.0	○	○	○	○	○	○	○	1
41	0.74	0.56	1.3	56.9	43.1	○	○	○	○	○	○	○	○
52	0.04	0.04	0.08	50.0	50.0	○	○	○	○	○	○	○	○
8	5.21	5.92	10.73	48.6	51.4	○	○	○	○	○	○	○	2
16	1.39	1.78	3.17	43.8	56.2	○	○	○	○	?	?	○	○
57	0.16	0.22	0.38	42.1	57.9	○	○	○	○	?	○	○	○
34	0.66	0.91	1.57	42.0	58.0	○	○	○	○	○	○	○	1
6	0.5	0.72	1.22	41.6	58.0	○	○	○	○	○	○	○	○
62	1.2	1.82	3.02	39.7	60.3	○	○	○	○	○	○	○	1
31	4.49	7.08	11.58	58.8	61.2	○	○	○	○	○	○	○	5
46	0.62	1.04	1.66	37.3	62.7	○	○	○	○	○	○	○	1
55	0.05	0.09	0.14	35.7	64.3	○	○	○	○	○	○	○	○
21	1.22	2.28	3.5	34.9	65.1	○	○	○	○	○	○	○	○
59	0.93	1.7	2.53	32.8	67.2	○	○	○	○	○	○	○	○
36	2.09	4.35	6.44	32.5	67.5	○	○	○	○	○	○	○	2
7	2.72	5.67	8.39	32.4	67.6	○	○	○	○	○	○	○	○
60	1.88	4.31	6.19	30.4	69.6	○	○	○	○	○	○	○	○
9	0.14	0.33	0.47	29.5	70.2	?	○	○	○	○	○	○	2
27	0.76	1.95	2.71	28.0	72.0	?	○	○	○	○	○	○	○
2	0.45	1.21	1.66	27.1	72.9	○	○	○	○	○	○	○	1
35	0.07	0.19	0.26	26.9	73.1	○	○	○	○	○	○	○	○
25	4.85	14.6	19.45	24.9	75.1	○	○	○	○	○	○	○	3
58	0.36	1.09	1.45	24.8	75.2	○	○	○	○	○	○	○	1
39	0.68	2.08	2.76	24.6	75.4	○	○	○	○	○	○	○	○
32	1.49	4.78	6.27	23.8	76.2	○	○	○	○	○	○	○	○
50	0.93	2.9	3.73	22.3	77.7	○	○	○	○	○	○	○	○
26	0.06	0.21	0.27	22.2	77.8	○	○	○	○	○	○	○	○
37	0.67	2.61	3.25	20.4	79.6	○	○	○	○	?	○	○	○
42	1.24	5.1	6.34	19.6	80.4	○	○	○	○	○	○	○	○
29	1.11	4.59	5.7	19.5	80.5	○	○	○	○	○	○	○	1
5	0.06	0.25	0.31	19.4	80.6	○	○	○	○	○	○	○	○
4	0.66	3.45	4.12	16.0	84.0	○	○	○	○	○	○	○	1
47	0.09	0.45	0.57	15.8	84.2	○	○	○	○	○	○	○	○
53	0.03	0.16	0.19	15.8	84.2	○	○	○	○	○	○	○	○
16	0.32	1.75	2.07	15.5	84.5	○	○	○	○	○	○	○	○
12・13	1.48	9.06	10.56	14.0	86.0	○	○	○	○	○	○	○	○
58	0.62	4.22	4.84	12.8	87.2	○	○	○	○	○	○	○	3
22	0.28	2.08	2.36	11.9	88.1	○	○	○	○	?	○	○	○
17	0.22	2.02	2.24	9.8	90.2	○	○	○	○	○	○	○	1
48・49	0.1	0.93	1.03	9.7	90.3	○	○	○	○	?	○	○	○
14	0.66	6.14	6.8	9.7	90.3	○	○	○	○	○	○	○	○
54	0.13	1.77	1.9	6.8	93.2	○	○	○	○	○	○	○	○
18	0.05	0.72	0.77	6.5	93.5	○	○	○	○	○	○	○	○
44	0.02	0.44	0.46	4.3	96.7	○	○	○	○	○	○	○	○
3	0.02	1.29	1.31	1.5	96.5	○	○	○	○	○	○	○	○
24	0	0.04	0.04	0.0	100.0	○	○	○	○	○	○	○	○
29	0	0.07	0.07	0.0	100.0	○	○	○	○	○	○	○	○
43	0	0.06	0.06	0.0	100.0	○	○	○	○	○	○	○	○
45	0	0.02	0.02	0.0	100.0	○	○	○	○	○	○	○	○
51	0	0.2	0.2	0.0	100.0	○	○	○	○	○	○	○	○
33	0	0	0	0.0	0.0	○	○	○	○	○	○	○	○
63	0	0	0	0.0	0.0	○	○	○	○	○	○	○	○

## まとめと考察

に列点状に引いているものもある。また59号址—24のように、直接器面に波状文を押し引くものがある。そして11号址—2や20号址—21、22号址—14、30号址—20・21のように、沈線と見紛うほど深い押し引き沈線のものなどがある。さらに単線で引くものと25号址—13や34号址—9など竹管の腹を使って2本組の平行線のものも若干ある。すこし異なるが、8号址—4のように粘土紐の上を列点状に刻んでいるものもみられる。なお本類には、胎土に纖維を含んでいるものは一点もない。これらは、典型的な下吉井式の破片である。

(3) 条痕を有するもの　外側あるいは内外両面に横位の条痕を付している。胎土に纖維を含んでいるものと含んでいないものがあるが、後者が圧倒的に多い。なお該期の土器片に海綿骨針が混入しているものが知られているが<sup>(3)</sup>、坂平のものは含んでいないようだ。30号址—19や36号址—9・10のように、口縁のすこし下手、器形の変換点あたりに低めの隆帯が巡るようである。このあいだが60号址—19のように条痕のままのものと、8号址—1・2や36号址—10のように波状の沈線を引いているものとがある。そして1点のみ25号址—25には格子目の文様がついている。口縁は、1単位の波状をなすものと平縁の二通りがある。

(4) 篦状の隆帯を有するもの　類別した群の中では最も多量に出土している。やはり胎土に纖維を混入しているものと、混入していないものとの二通りがあるが、前者が圧倒的に優勢である。12・13号址—22、36号址—11、39号址—24の粘土紐はみな潰れたように平たく、胎土には纖維を全く含んでいない。いかにも他の土器とは様相が異なっている。やや強引な気もするが、纖維を含んでいないこの3点を最初の一群の下吉井I式に含めれば、すっきりする。

文様はこの篚状の隆帯のみであり、口縁に平行して貼られている。なかには8号址—9や31号址—22、36号址—16など擦痕状の整形痕が残っているものが僅かにあるが、基本的には素文である。11号址—8、31号址—21、15号址—8と42号址—4、11号址—6のように底部から自然に開くものなどがあることから、体形はおよそ樽形で尖底になるとおもわれる。

口縁の形状は平縁と波状の二種類があり、後者には28号址—3のように波頂部からA字形に粘土紐を貼り付けるもの、41号址—22のように「山」の字形に貼り付けするもの、60号址—14のように波状をなすだけのものがある。また口唇は先が細く尖るように整形されているものが多い。

そして篚状の隆帯は多様で、変化に富んでいる。遺構外の8、8号址—15などは「コ」の字形に、33号址—10はカマボコ形、31号址—21は鉗釜のよう先が尖っている。それらは主として口縁から少し下がったあたりに貼り付けられているが、30号址—23・24や遺構外の11は口唇に平行してつけている。7号址—1と遺構外の1は隆帯を2本貼っていて、上手の隆帯が下手に被っている。

また隆帯の多くは無文だが、斜めの刻みが施されているものがある。左下がりの8号址—8や42号址—4、右下がりの11号址—6、鋸歯状の33号址—6、36号址—18、V字状の36号址—

20、格子状の25号址—10、38号址—3など様々である。また退化という言葉が適切かどうかわからないが、8号址—11は、本来縫帯が貼られるべき箇所が僅かに膨らんでいる。また口唇部に刻みを施す36号址—19、40号址—12などがある。細部に至ればどれもみな個性をもつていて、類別するのは意外に難しい。

この類は、かつて「在地系の下吉井式土器」といわれたものである。<sup>(4)</sup> 本遺跡でも典型的な下吉井式土器と併せており、共存していることは確かである。

ところで、該期の7軒の住居には系統の異なる土器が存在する。その一つが木島式で、6軒の住居から出土している。最も古いのは木島Ⅲ式とされる破片で、最も新しいのは19号址—9の木島Ⅳ式とされる段階である。他の地点から出土している並行期の破片も、その頃までであった。

もう一つは花積下層式系土器で、4軒の住居址から出土している。そして在地的な花積下層式では最も古い塚田式の破片が、7号址から出土している。少數ではあるが、これら外來系土器の時間的位置を考慮すると、始まりを木島式の古い段階または塚田式に並行するか、その後に位置付けておくのが、併出している遺物と整合するようだ。そして終焉については、中越期の住居址から併出していることから、前葉の中越期までとしておくのが遺物のあり方と矛盾しないようである。

### 木島式土器

出土した外來系の土器の中では、最も数量が多い。

木島Ⅱ式とされるものは、25号址—4、8号址—32、15号址—3、3号建物址の13の4点で、いずれも前葉の遺構からの出土である。これらは下吉井Ⅰ期と並行関係にあることから、共存している可能性も考えられる。

木島Ⅲ式とされるものは、貝殻の腹縁を粘土紐に当てて条線を引くもので、10・11・19・28・36の各住居址から出土していて、下吉井式と共に併存している。

木島Ⅳ式とされるものは、櫛歯状の施文具を用いて粘土紐の上から条線を引くもので、1号と19号址から出土し、下吉井式と共に併存している。この外は中越期の住居址の堆土中または遺構外から出土していて、Ⅲ式に次いで多い。

木島Ⅴ式とされる土器片は、初頭の住居址からは出土していない。中越期の住居址の堆土中から僅かに出土している。

木島式土器の破片の数量は、下吉井式について多い。前期初頭の住居址では、木島Ⅲ・Ⅳ式は下吉井式と併出していることから同時期であり、並行関係にあると目される。そしてⅤ式とされる破片が少しだけ出土していることから、本遺跡ではⅥ～Ⅸ式とされる段階がすっぱり抜けている。

## まとめと考察

### 花積下層式土器

前期初頭の住居址のうち、3軒から花積下層式系の土器が出土している。このうち61号址からは、およそ3分の1個体分が撿まつて出土した。これらは下吉井式、木島Ⅲ・Ⅳ式土器とされるものと併出している。いくらか散見されるが、このほかは、中越期の住居址の堆土中および遺構外から僅かに出土している。

このうち注目されるのは、7号址—34の土器片である。これは浅間山麓の塚田遺跡で特徴的に見られた花積下層式土器であり、該期のなかでも古いほうに属すことがわかつた。そこで遺跡名を採り「塚田式」が提唱されている。<sup>(15)</sup> 62号址—17も同様の破片で、やはり浅間山麓の下弥堂遺跡<sup>(16)</sup> 14号址に類似がある。

61号址の深鉢は、わりと太い粘土紐を横状に貼り付けていて、その上に縄文を施文している。これは在地の下吉井式と施文手法が同じであること、そして口縁部が無文帯になっていることなどから、塚田式に並行するか、やや新しい段階に位置付けられると考えられる。

7号址—8は微隆起線文といえるような細く低い隆帯が一周巡るもの。28号址—12の口唇は刃のように薄く尖り、やはり口縁部を無文帯にして弧状の沈線が引かれている。これらは塚田式より新しく設定されている土器である。

60号址—15、21号址—19はいわゆる肥厚帯口縁の土器である。38号址—5は瘤の下端にS字状結節文らしいものが付けられているよう、これらと同類と考えられる。小県郡武石村の江戸<sup>(17)</sup> 寧遺跡からは、S字状結節文を施文した全体像のわかる個体が出土している。これらは花積下層期の中ごろに「中越期」として時間的位置付けがされているものだが、器形の変換点を意識していることを考えると、先行することも予想される。

以上特色のある土器のみ見てきたが、下吉井式に並行する段階の個体が多いようだ。

### 前期前葉の土器

該期の住居址の重複については、調査の段階で明確な新旧関係を捉えることはできなかった。また、出土した土器によって新旧を捉えることも極めて困難である。

中越期は、花積下層式や関山式あるいは木島式や清水ノ上式などのいわゆる外来系の土器と、在地系の神ノ木式がそれぞれの段階に共存することが知られている。坂平遺跡でも中越式のほかに、関東地方の関山式、東海地方の木島式など外来系の土器と在地系の神ノ木式土器が併出している。また、標識遺跡である中越遺跡や阿久遺跡にみられたような、古い段階の土器がないことも坂平遺跡の特色として挙げることができよう。ちなみに関山式は13軒、木島式は4軒、神ノ木式は16軒からそれぞれ出土している。図化できたものは46個体で、この中には神ノ木式のものが2個体と木島式が1個体ある。

### 中越式土器

図化したものでは、15号址から出土した格子目のある土器6の1個体を除いて、すべて無文

### 諸型式の様相

である。これ以外の無文のものは、口縁に垂下粘土紐がつくもの6個体、波状または小突起をなすものの8個体である。小突起は4単位が基本のようだが、31号址から1点（土器12）だけ6単位のものが出土している。そして波状をなすタイプの中に、4単位の突起の中間に僅かに盛り上がる小突起を有するものが、8・9の2個体ある。

口縁に垂下粘土紐が貼り付けられているものでは、胴部の上位に最大径を有し、内傾してから口縁に向かって大きく開く1・2、最大径から直線的に立ち上がって口縁が開く3・4・6、U字形にそのまま口縁に開く5などがある。そして垂下粘土紐ではそのままの4・6、細かい刻みの1・3、指で押されたように幅のある5などがある。

波状または小突起をなすものでは、口縁が大きく開く7～9・12、U字形にそのまま口縁に開く10・11がある。7は頸部が絞られて、やや肩が張る感じである。

平縁で無文のものは、最大径が胴の上部にありやや内屈してから開く16、口縁部が僅かに反る17、砲弾形に近い24、U字形にそのまま口縁に開く13・18、緩く外反してそのまま開く15・19・20・21などがある。

そして34号址の小形の壺42、58号址の41と31号址の43の小形土器がある。

以上が坂平から出土した中越式土器の様相である。これらは阿久遺跡や中越遺跡における該期の型式的内容と大きく変わるものではないと思われる。一つだけ気になるのは、垂下粘土紐が貼り付けられた土器以外の器種に、植物質の纖維を含むものがいくつか存在していることである。破片にあっては在地の下吉井式の土器片と区別がつきにくいものもかなりみられる。阿久でも図化されたものの中に、6～7点ほど見受けられる。これまで中越式土器は、尖底で器壁が薄く胎土には纖維を含まないというものであった。いずれにしても、纖維を含む尖底の土器が中越式の新しい段階まで残ることが確認された。

このうち唯一、31号址に頸部が強く縮まる器形のものが2個体ある。この特徴は、明らかに古い段階の要素である。本遺跡では、この土器が古い方に属すと考えられることから、新旧二分できる個体として注目しておきたい。

### 神ノ木式土器

前葉にあっては中越式が常に優勢で、神ノ木式は客体的な存在である。16軒から見つかっている。該期の土器のうち一つは12号の深鉢45で、施文の部位は口縁に限られる。櫛齒状の施文具を用いて列点文をつけ、地文に組紐を転がした典型的なものと、もう一つは25号址の口唇に刻みをつけた深鉢44で、これ以外はすべて破片である。器面は繩文地で、組紐や結束またはきれいな縄目の原体を転がしている。方向を変えて矢羽状に付けているものもある。基本的には纖維を含んでいない。組紐は関山式にもあり、見分けが意外に難しい。

### 関山式土器

神ノ木式と同じで、関山式も客体的な存在である。13軒から見つかっている。みな破片であ

### まとめと考察

る。12・14・15号址からは大きな破片が出土している。纖維を含むものとそうでないものがある。31号址—56は文様を沈線で置換したもので、在地のものかもしれない。

### 木島式土器

前二者と同じで、木島式も客体的な存在である。4軒から見つかっている。25号址から出土した深鉢46は、木島式の新しい段階に比定される個体である。同様な土器片が14・27号址からも見つかっている。そして、25号址と27号址からも同様の土器片が1個体ずつ出土している。前期前葉の中越式の新しい段階に並行し、25号址では関山式土器が共存している。

## 第二節 集落と住居と建物

### 一、集 落

それぞれの遺構については、第二章で述べたように決して満足な調査ができたわけではなく、集落全体で調査できた面積も5分の2弱にとどまる。調査できなかった部分と遺構の密度を勘案すれば、100軒から120軒程度の住居は存在していたかもしれない。しかし、遺構の密集する集落の中心付近が発掘できたこと、遺構の存在しない空白域があることもわかったので、全体像は不明ながらも、おおよその集落の様子をとらえることができそうである。

第一節において、出土した土器から坂平遺跡の時間的な位置づけを行った。その根拠とした初頭と前葉の土器片の混在比率を示す表1に、土器片の出土量が1kg以下の残りすべての住居址を加え、遺構の諸要素を摘出したのが表4である。

#### 集落の変遷

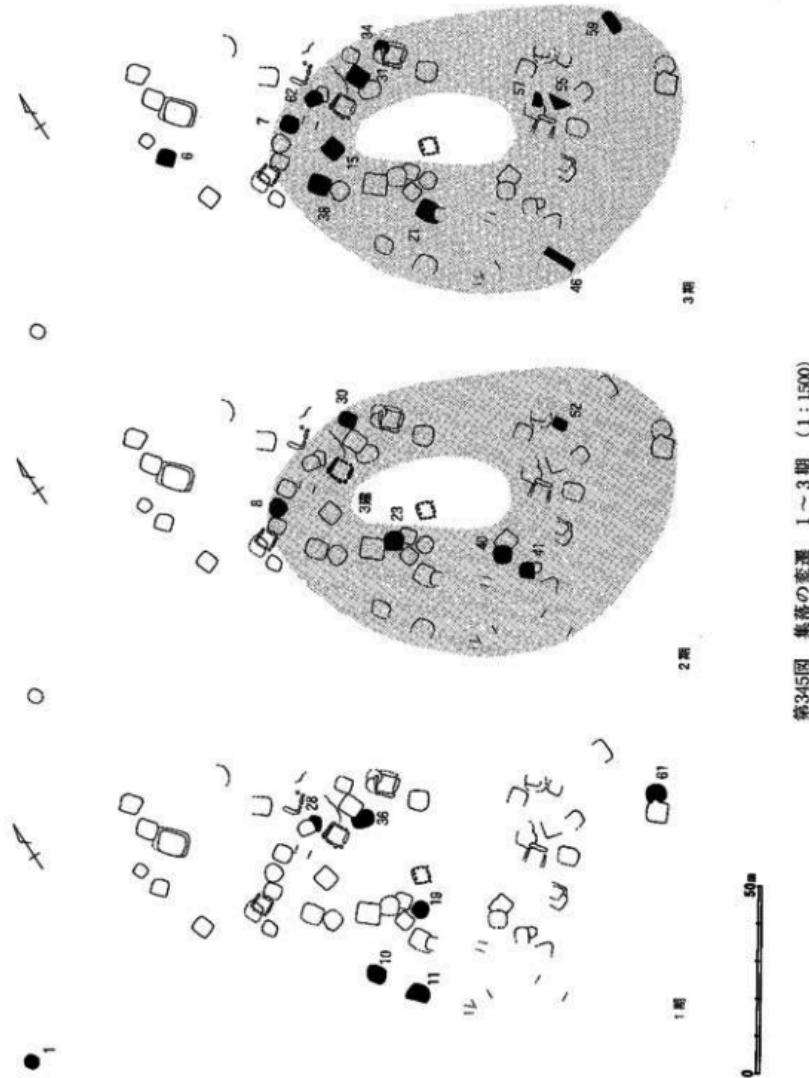
住居址から出土した初頭と前葉の土器の比率を順に並べると、おおむね連続した数値の変移がみられる。そのなかでも何箇所か数値の差に開きのある部分が認められるため、ここを一つの区切りととらえることにする。これにより、以下の5期に区分できる。これは各住居の帰属時期を示すものではなく、あくまでも集落変遷をとらえる上での区分である。また断るまでもなく、この各期に属する住居が同時的に消長したことを意味するものではない。各期において住居が切り合うことはなく、結果的に具合のよい配置になっている。そのことは逆に、こうした時期区分がほぼ適切であることを支持している（第345・346図）。

1期 初頭の土器の比率が8割を超える住居で、7軒。比率の上で2期との差は歴然としている。西端の1号址と東端の61号址（花積下層期）を除く5軒は、中央部にまとまっている。10号と11号址、28号と36号址は、ほぼ等間隔で対をなすようにある。36号址には迷て替えないしは拡張の痕跡が認められるが、他の住居にはみられない。後に詳述するが、円形ないしは不

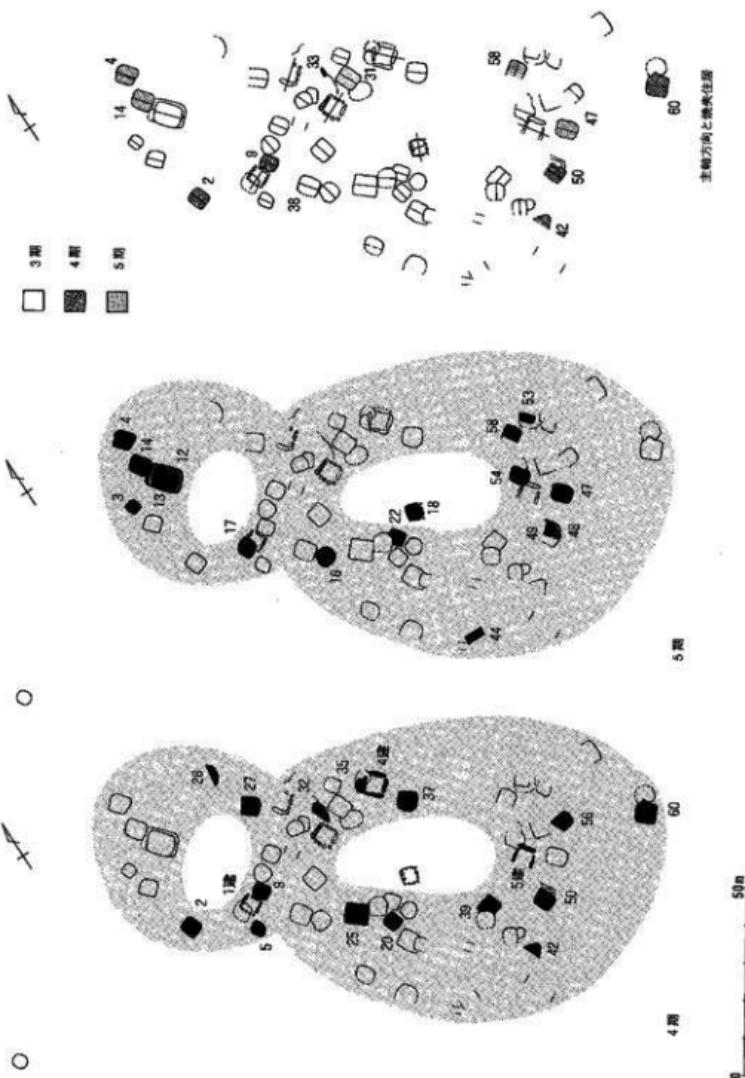
表4 集落変遷の各段階と住居の時期

住居	平面形	面積	北枝	面積	主柱の位置	床	床構造	壁材板張	切合	鳴考	初期土蔵	終業土蔵	合計	初期%	終業%	面積%	圓体	期	時期	
1 円						I	半板石			0.04	0	0.04	100.0	9.0	9.0					
91 不整形								<30		2.19	0	2.19	100.0	9.0	9.0					
15 不整形	4?									1.87	0.11	1.98	94.4	5.6	5.6					
29 平坦形	4?									1.26	0.08	1.38	93.5	6.5	6.5					
19 円 小穴	3?				I					1.41	0.11	1.52	92.8	7.2	7.2					
10 廣丸方	4 ○?									1.02	0.2	1.82	89.0	11.0	11.0					
36 不整形	4					2~7	薪・半板石	2周	<31	4.38	0.08	5.26	93.3	16.7	16.7					
30 複丸長方	部分	4 ○	堅い	1						1.84	0.9	2.74	92.2	32.6	32.6					
40 廣丸方	部分	4		1					39	1.26	0.88	2.14	58.8	41.1	41.1					
23 複廣丸方	4			1	複板石				22	1.2	0.87	2.07	56.0	42.0	42.0					
41 複丸長方	部分	4 ○?	堅い	3の字	うす				2小堅	0.74	0.56	1.3	55.9	43.1	43.1					
92										0.04	0.04	0.06	50.0	50.0	50.0					
8 複廣丸方 小穴	4			1						5.21	5.52	10.73	45.6	54.4	2	2	2	2		
15 方	部分+小穴	4		3の字		2周				1.36	1.76	3.17	43.8	56.2	56.2					
87										0.16	0.22	0.38	42.1	57.9	57.9					
34 複丸長方	1?			1			<4	複35	小形	0.65	0.39	1.57	42.0	58.0	1	1	1	1		
8 方 方+小穴	4			2 背石						0.5	0.72	1.22	41.0	59.0	59.0					
82 複丸方?				2~7						1.2	1.82	3.02	39.7	60.3	1	1	1	1		
31 矢方 ほば全周	4 ○	堅い	3の字	薪石・うす		>36				4.48	7.09	11.58	36.8	63.2	5	5	5	5		
49										0.82	1.04	1.66	37.3	62.7	1	1	1	1		
55 方	4?									0.05	0.08	0.14	35.7	64.3	64.3					
21 方 部分	4 ○?	堅い	2~7	者?	24					1.22	2.05	3.5	34.6	65.1	65.1					
59 複丸方	○?			半板石						0.53	1.7	2.53	32.8	67.2	67.2					
36 複丸長方	4	堅い	1		2周?					2.06	4.35	6.44	32.5	67.5	2	2	2	2		
7 複廣丸方 ほば全周	4 △ 堅い	1	者?							2.72	5.87	8.39	32.4	67.6	67.6					
60 複丸方 全周	4 ○?		3の字	薪石・うす	2周	>61				1.88	4.31	5.19	39.4	60.6	60.6					
9 複丸方 小穴(複複?)	4 ○	堅い	2 背石・うす	7						0.14	0.33	0.47	29.8	70.2	2	2	2	2		
27 複丸方 部分	4 ○?	1	薪石							0.76	1.95	2.71	26.0	72.0	72.0					
2 方 全周+小穴	4		1	薪・複板石						0.45	1.21	1.88	27.1	72.9	1	1	1	1		
35 複丸方	4?		2?			4~34	小形			0.07	0.19	0.26	25.9	73.1	73.1					
25 矢方 全周	4	8の字	薪石	3周						4.85	14.5	19.45	24.9	75.1	3	3	3	3		
56 複丸方	4?		1							0.36	1.09	1.46	34.8	65.2	65.2					
29 矢方 半周	4		1 背石			46				0.98	2.06	2.76	24.6	75.4	75.4					
32 複丸方? 全周	4 ○?	1	薪石	3周?	>33					1.49	4.75	9.27	33.8	66.2	66.2					
59 複丸方 ほば全周	4		1			>48 <49				0.83	2.9	3.73	22.3	77.7	77.7					
26 不整形?							うす				0.06	0.21	0.27	20.2	77.8	77.8				
37 複丸方 半周	4	堅い	3の字	薪石						0.57	2.61	3.28	26.4	73.6	73.6					
42 複丸方 全周?	4?			うす						1.24	5.1	6.34	18.6	80.4	80.4					
29 複丸方 部分+小穴	4 ○	1	薪石	者?						1.11	4.58	5.7	18.5	80.5	1	1	1	1		
5 不整形方 部分+小穴	4		1							0.06	0.25	0.31	18.4	80.6	80.6					
4 複丸方 ほば全周	4 △	2 背石	2周							0.86	3.46	4.12	16.0	84.0	1	1	1	1		
47 複丸長方 小穴	4		1							0.09	0.48	0.57	15.8	84.2	84.2					
53 方形				うす			>51			0.03	0.18	0.19	15.8	84.2	84.2					
16 複廣丸方 部分	4		1 うす	複板石						0.32	1.75	2.07	15.5	84.5	84.5					
12-12 複丸長方 小穴	4						<13			1.45	9.08	19.56	14.0	86.0	86.0					
90 方 全周	4 ○	堅い	1 薪石	者?						0.62	4.22	4.84	12.8	87.2	3	3	3	3		
22 複丸長方 全周	4		1 薪石・うす	23						0.29	2.05	2.36	11.9	88.1	88.1					
17 複丸方	4?			薪石			>13			0.22	2.02	2.24	9.8	90.2	1	1	1	1		
48-49 矢方	4						50			0.1	0.95	1.03	9.7	90.3	90.3					
14 複丸長方 全周	4 ○	堅い	1 薪石							0.56	6.14	6.8	9.7	90.3	90.3					
54 複丸方 部分	4		1 薪石			>57 5連				0.13	1.77	1.9	6.5	90.2	90.2					
18 複丸方	4		1			2周				0.05	0.72	0.77	6.5	90.5	90.5					
44										0.02	0.44	0.46	4.3	96.7	96.7					
3 複廣丸方 部分	4		1 薪石							0.02	1.29	1.31	1.5	98.5	98.5					
24 複丸方	4?					21	小形	0	0.04	0.04	0.0	0	100.0							
29				うす					0	0.07	0.07	0.0	0	100.0						
43									0	0.06	0.06	0.0	0	100.0						
45									0	0.02	0.02	0.0	0	100.0						
51										0	0.02	0.02	0.0	0	100.0					
33 複丸方 ほば全周?										0.02	0.32	0.4	0.0	0.0	0.0					
63						うす				0	0	0	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0		

半板石の薪石は複数状態平石を、うすは複数うすを指す。



第346図 集落の変遷 4～5期 (1:1500)



## まとめと考察

整形の住居は、そのほとんどが1期に属する。

2期 初頭の土器がおおむね5割以上の住居で、6軒。中ほど3軒の8・23・30号址は、それぞれ中央部の三方に適当な距離を置いて位置する。南東には40・41・52号址の3軒がある。

なお3号建物址から出土した土器片の比率は圧倒的に初頭が優勢で、数値的にも2期の各住居に近い。他の建物址はほとんどが前葉の上器であることから、3号建物址をこの段階に位置づけておきたい。そしてその場所は8・23・30号址の内側である。

3期 初頭と前葉の土器がおよそ4：6から3：7未満の住居で、12軒。集落は1・2期の住居域を中心にして東西に拡大する。15・21・31・38号址のように、大きさ、輪郭、軸方向のよく似た住居が存在することも興味深い。このうち4軒に建て替えないしは拡張の痕跡が認められる。また、31号址と38号址の2軒が焼失住居である。ちなみに坂半遺跡の焼失住居は、時期不詳の33号址をのぞいて、全てこの3期以降である。

4期 前葉の土器が7割～8割をしめる住居で、15軒。ほぼ全域に散らばる。5軒に建て替えないしは拡張の痕跡が認められ、5軒の焼失住居2・9・42・50・60号址は、いずれも集落の外縁に近いところに位置する。

出土した土器や住居との切り合い関係から、1・4・5号建物址はおおむねこの段階に属すると思われる。

5期 8割強以上を前葉の土器がしめる住居で、16軒。4期との比率の差が3.4%と上下に比べて値が大きいこと、初頭と前葉の比率が1期と2期の境界の値を逆転させた値に近いことからここを区切りとする。住居はほぼ全域に散らばる。建て替えの痕跡は4号址の他には認められない。焼失住居は4・14・47・58号址の4軒で、いずれも集落の外縁近くに位置する。

こうしてみると、2期から5期にかけて集落が拡大し、最大で東西約150m、南北に約80mほどの広がりを見せ、この集落は最終的に二つの環状を呈することがわかる。

まず1期に中央部にまとまっていた住居は、2～3期にかけて中央から南東側に広がる。4～5期にはこの南東の環にも住居が建てられつつ、今度は北西に新たな環を形づくり。

南東の環は南東～北西方向に長く、長径が約110m、短径が約80mの梢円形になると思われ、50×20mほどの長円形広場が中央に形成される。2期の3号建物址と4期の4・5号建物址は、いずれも住居域の内側、広場に接するあたりに位置する。

造構密度などからみて、南東側が入口であろう。集落に立てば、糸魚川一静岡構造線に沿って北西から南東へ流れる釜無川の谷が開け、富士山を遠く望む方角である。ただし、富士が現在みるような成層火山の山体を整えたのは中期の初めのおよそ5,000年前といわれるから、それより1,000年さかのほるこの時代の富士は、もっと低く異なった山容をして噴煙をあげていたことだろう。

いっぽう北西の環はこれより小さく、直径約60mの円形で、ほぼ中央に径20mほどの広場を

形成する。この環の南隅、2号址と17号址の間あたりが集落の入口だろうか。4・5期には双方の環の重なり合う部分に住居が存在しないので、あるいは一つの長方形の集落であったかもしれない。1号建物址はやはり住居域の内側、広場に接して建てられている。なおどちらの環を見ても、住居域の内側に墓穴と思われるものはない。

#### 集落の時期区分

さてこれまで見てきた1～5期の各段階は、あくまでも坂平集落の変遷をとらえるための区分である。この各段階は、初頭～前葉のどの時期にあたるのだろう。

まず最大の区別は1期と2期の間にある（表4）。出土した土器の初頭と前葉の比率に大きな変化が認められ、他と比べてこの差は歎かしい。ここまでを在地系の下吉井式土器を主体とする、前期初頭ととらえる。

これ以降の時期は、第一節でも述べたように、比率の差こそあれ、初頭と前葉の土器が混在・拮抗する。全体的には前葉の中越式と、繊維を含む在地系の中越式土器が主体をなすが、その変化は1期と2期の差のような明瞭なものではなく、連続している。圧倒的に前葉の土器が優勢な4期と5期は前葉とみてよいだろう。

そのなかで、おおむね2期から3期にかけて、初頭と前葉の土器の比率が逆転する。ここを中心に両者がおよそ7：3から3：7に変化する時期を、初頭の下吉井期から前葉の中越期への移行期ととらえることにする。こうしてみると、1期は初頭の下吉井期、2期と3期が下吉井期～中越期への移行期、4期と5期を中越期とすることはできる。

なお、断面の確認のみにとどまった住居や、数片しか土器が出土しなかった7軒については時期不明とせざるを得なかった。

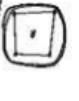
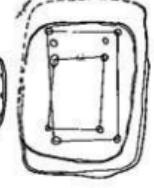
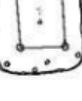
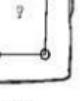
## 二、住居址

発掘された63軒の住居址のうち、何軒かはごく一部分の調査に限られたり、断面のみの確認であったりしたため、全体を知ることができたものは必ずしも多くはない。切り合などもあるが、ほぼ全体を調査できたのは28軒である。しかしながらこの時期の住居址の様相をとらえることはできる。ここでは坂平遺跡にみる前期初頭から前葉の住居址について、その様相と問題点をまとめることにする。

#### 住居の形態

住居址の形態は大きく円形、隅丸方形か隅丸長方形、方形か長方形、そして不整形に分けることができる（第347図）。

**円形の住居址** 1・19号住居址が該当する。いずれも住居内に地床炉を有するが、規格的に配置された主柱穴は認められず、上屋構造を推測することは難しい。両住居址ともに初頭に属

円 形					
不 整 形					
胴の張る 隅丸方形					
隅丸方形 隅丸長方形					
方 形 長 方 形					

0 5m

第347図 坂平の住居形態 (1:300)

する。

**不整形の住居址** 5・11・28・36・61号などの住居址が該当する。5・11・36号址は、主柱穴ははつきりしている。5号址は前葉に位置付けられ、歪んだ隅丸長方形を呈する。また、高い比率で初頭の土器が出土している36号址も、全体は不明ながら隅丸方形に近い形になるかもしれない。11・28・36・61号址は初頭の住居址である。円形の住居址とともに、比較的古い段階の住居形態である可能性が高いといえるだろう。

**胴の張る隅丸方形の住居址** 3・7・8・16・23号などの住居址が該当する。やや胴が張った感じの隅丸方形で、あまり大きくなり、長方形になるものはない。主柱穴はしっかりとしたものが4本そろう。一部には周溝や壁際に連続する小穴も検出されるが、この形の住居址には周溝や小穴が全周にめぐるものはない。

**隅丸方形、隅丸長方形の住居址** 9・12・13・14・18・20号などの住居址が該当する。胴の張るタイプに比べると、こちらの方がやや大ぶりである。また12・13号址のような大形の住居もある。主柱穴はしっかりとしており、なかには側柱というべき柱穴を壁際や角付近にもつている例もみられる。周溝や壁際に連続する小穴は全周には見られず、部分的である。

**方形、長方形の住居址** 2・15・25・31・39号などの住居址が該当する。隅丸方形の住居址に比べ、さらにひとまわり大きい。4本の主柱穴に囲まれた範囲の面積も、隅丸方形住居址に比べて大きいようである。側柱を持つもの、2・15・25・60号址などのようにほぼ全周に周溝がめぐる例も多い。この周溝によって立て替え（拡張）の様子が見てとれる住居もある。

#### 住居の構造

**柱穴配置と上層構造** 円形、不整形、小形住居址の何軒かをのぞけば、ほとんどの住居址の主柱穴は4個で、ほぼ方形ないしは長方形、あるいは台形に配置されている。この主柱4本のみの住居址のほか、壁際に側柱とも呼ぶべき柱穴を有する例がいくつか知られた。住居の四隅にあるものが7・20・60（内側）号址の3軒。四隅と短辺の真ん中にあるものが31号址で1軒。これに加えて長辺の真ん中にもあるものが14・21・58号址の3軒。また、角ではなく、各辺の真ん中にあるものが27号址で1軒、などである。

しっかりした主柱穴を4個有することがもっとも基本的な姿であることから、当該期の住居は4本の柱により上層構造を支えていたことは説明を要しないであろう。いいかえれば、当該期の住居の上層構造は、この4本の柱で支えうるものであったということである。

そこで問題として残されるのは、その他の柱が上層構造においてどのように機能していたのか、という点である。こんにち、短軸の真ん中のものは棟を支持する柱であったという見方、そのほかのものについては壁を支える構造ではなかったかという推測があるが<sup>(5)</sup>、今回の調査において、これが明らかになるような明瞭な痕跡は認めることができなかった。その点で焼失住居であった9号住居址には、壁際の穴から棟の方向に向かって横たわった炭化材が検出されて

## まとめと考察

いる。これらの炭化材は穴の上部に横たわっていることから、穴に立てられていたものが倒れたのではなく、穴に立てられていた柱の上に載っていた可能性が高い。そこにはどのような材質のものがあったのかはつきりしないものの、なんらかの壁構造があったことを推察させるものであった。

また、10軒あまりの住居址は、主柱穴に囲まれた床面が堅くしまっていた。いくつかの例外はあるが、鏡餅状扁平石や磨りうす、個体のまま残されていた土器などは、この主柱穴の外側にあることが多い。とすれば普段、人が活動するのは炉の周辺であり、主柱穴の外側は器物を置いておくところとして機能していた可能性が高い。この結果、主柱穴の内側が堅くしまっているのだろう。<sup>(9)</sup>

**周溝と壁際の小穴** 周溝、あるいは壁際に小穴が連続して残されていることがある。住居の全周をめぐるような周溝は方形・長方形の住居に多くみられる。逆に隅丸方形・隅丸長方形の住居では、周溝があってもとぎれとぎれであったり、小穴が連続していることが多い。全周に巡るものと機能が異なるのかはわからない。また、7・31・37号址など、奥壁側にだけ周溝が無い住居址もある。

**入口施設** 住居址の長軸・短軸の関係と後述する地床炉の様子、方位などから、総合的にその住居の入口方向を推測できるという前提でみると、その入口の施設と思われる痕跡をとどめる住居がある。阿久遺跡の発掘調査報告書では「壁寄りの床面上にある2個並列のピット」と「周溝の在り方」を観察して入口部を特定しようとしているが、これと同じような状況が坂平でも観察できる。11軒の住居址で、「壁寄りの床面上にある2個並列のピット」が検出されている。特に7号址においては内側の周溝の内寄りに一对の小穴が認められ、床の堅くしまった面が主柱穴に囲まれた範囲からこの対の小穴の間を堀まで延びており、この部分が入口であったことを示している。入口のわかる好例であろう。9号址は入口方向とみられる辺の真ん中に側柱が立つが、そこを避けるようにやや寄って床の堅くしまった面が壁まで伸びている様子をみることができた。

このような状況から、この時期の方形を基本とする住居は、妻入りであったことがわかる。

## 炉と炉脇の穴

炉が検出できた住居址は38軒で、いずれも地床炉である。そのほとんどは住居の主軸線上に位置し、主軸方向に長い。住居のほぼ真ん中か、あるいはやや奥壁よりに位置している。火床は半ら、もしくは皿状に若干くぼんでいる。

さらにこれら38軒のうち、27軒の炉に小穴が隣接することが確認できた。実に7割が炉脇に小穴を伴っていたのである。小穴が地床炉と重なるものは、いずれも小穴が地床炉の焼土を切っており、小穴には住居の堆土が詰まっている。これにより、小穴は常に口を開けていたことが知られる。この小穴が前述の要素から判断された入口側にあるものが19例、地床炉の中や長

い地床炉の側縁部に位置するものが8例である。この時期の丸みを帯びた尖底の上器を据えて煮炊きをした、土器設置用の穴ではないかと考えられる。<sup>10</sup> なお、石囲い炉は発見されなかった。

#### 鏡餅状扁平石・平板石と板状の安山岩

遺構ではないが、この時期の住居を考える上で切り離すことのできない遺物であるため、ここでその様子を概観しておきたい。

63軒の住居址のうち17軒より、鏡餅状扁平石ないしは平板石が据えられた状態で出土した。全体を調査できなかった住居址が多いこと、開田の際に削平された部分があることなどを考えると、ほとんどの住居にこの鏡餅状扁平石が存在していたと思われる。詳細は石器の種にゆずるが、これには明瞭な使用痕を持たないものがあること、調整・製粉具としての磨りうすが別に存在することから、必ずしも実用的な存在ではない可能性がある。阿久では「固定式石皿」と呼ばれ、平板状の石が用いられていたが、坂平においては徹底して扁平な円盤が持ち込まれている。

17軒のうち、一つだけではなく複数を所有していたのは7軒を数え、このうち17号址は4個を実際に集積していた。こうなると一箇所に固定して用いていたとも考えられず、なにかこのような躰に執着する理由があったのではないかと考えざるを得ない。床面に据えられていたもののうち、住居の入口方向が推定できるものについてみれば、入口側にあるもの9例、奥壁よりにあるもの6例と大差はない。

もう一つここで触れておきたいのが板状の安山岩である。これは鏡餅状扁平石に類する平板状の石とは性格を異にする。特徴としてはより薄く、いわゆる鉄平石に近いものであり、遺物として取り上げなかったものである。この板状の安山岩が住居内に残されたものとしては、14・16・23号址があげられる。14号址では奥壁ほぼ中央、側柱に接して壁に立てかけられた状態で出土した。16号址ではやはり奥壁際のはば中央、周溝がやや広がったところに平らに据えられていた。これをはずと、直下には中形の磨りうす1118が伏せられた状態で隠されていた。意図的にこの磨りうすを覆っていたものとみていいだろう。23号址では、地床炉の入口側に接して平らに据えられていた。一見、調理台かと思うような在り方であった。第二章第一節で述べたように類例は阿久にみられるが、山梨県中道町の立石遺跡では、前期初頭とされる住居址8軒のうち5軒の炉に、平板状の石皿（磨りうす）が伏せてあった。炉と板状石の関係を考える上で興味深い。

#### 住居隅の小豎穴

15・52号址は、それぞれ住居の南西隅に壺状の小豎穴を伴っている。このような小豎穴が住居址に伴うことについては、茅野市広井出遺跡で報告されているほか、<sup>11</sup> 黒浜並行期の事例が富士見町唐渡宮遺跡で2例知られている。本遺跡の2例も、住居の付属施設である可能性を否定できない。

### 三、建 物 址

#### 概 観

中越期には柱穴が方形に連続する遺構があり、方形柱穴列とか、方形配列土爐と呼ばれてきた。柱痕を有する穴が比較的多いことから、現段階では、まずこれが柱穴であるとして問題はないだろう。柱穴に囲まれる内側に、炉や踏み固められた床、目立った遺物などが検出されないこと、過去に行われた勉強会での成果などから、坂平遺跡においてはこれを高床構造の建物址と考えて調査を進めた。しかし残念ながら、6棟の建物址はいずれも完全な状態で調査することができなかった。

形態、規模については阿久や茅野市阿久尻遺跡のものと差はないが、一辺が2~3mの小形のものは坂平には見られなかった。

布掘状に連結する柱穴、単独で掘られている柱穴のいずれも、その深さはまちまちだが、柱痕が底近くまで確認できた柱穴がいくつかある。長さの異なる柱材を立てる際に、柱の上端の高さを揃えるために、柱穴の深さを変えて調節したのかもしれない。そのなかでも、柱穴まで調査できた3棟でみると、短軸側の柱穴は長軸側の柱穴に比べて浅く、それが独立する傾向が強い。また、一列に並ぶ長軸側の柱穴は両端のものが他より深い。

柱痕の認められる柱穴は多い。平面形は円であったり梢円であったりするが、その直径はおよそ20~30cm程度である。柱痕と柱穴内の土壤について阿久尻で自然科学的な分析が試みられているが<sup>10</sup>、柱痕は柱が立てられたまま腐蝕したものなのか、柱を抜き取った痕跡であるのかという点については、明確な結論は得られていないようである。どのようなものであれ、ある程度の太さを持つ柱をまっすぐに引き抜くことは不可能であるという見方から、ここでは柱の、少なくとも柱穴に埋められている部分がそのまま腐蝕したものであると考えておきたい。

また、一つの柱穴に複数の柱痕を有するもの(1・3・4号建物址)や、柱痕を結ぶ線が歪んだ四辺形をなすもの(4号建物址)もみられる。柱穴は規格的に連続して掘られているが、柱穴に対するこのような柱痕の有り様は何を意味するのだろう。

#### 建物址のあり方

前述のようにいずれの建物も、住居域の内側、広場に接するあたりに建てられている。これは、中期の典型的な環状集落にも通じるものである。

さらに建物の主軸方向は、それぞれ多少のぶれはあるものの、おおよそ二方向にわけられる。住居と同じ方向のものが4・5号で、1・2・3・6号の4棟は、住居の軸とおおむね直交する方向である。ほとんどの住居がほぼ同一方向に軸をとっているのに対して、住居域の内側に位置する建物は、広場を囲んで旋回するように建てられているらしい。このあり方も、中期以

降の建物址と同じである（第346図）。

住居域と建物址の関係がとらえられた阿久、阿久尻においても、この様子はまったく同じである。一方で建物址こそないが、花穂下層期の塙尻市矢口遺跡では中央広場を取り巻く環状の住居域と、その内側に墓穴の可能性がある小豎穴群が発掘されている。<sup>39</sup>こうしてみると、中期につながる集落構造のあり方は、その基本的な部分がこの時期に成立していると考えてよさそうである。

### 建物址の分布

従来、このような遺構は中越式土器文化の広がりの中でとらえられてきた。阿久、阿久尻のほかに、茅野市高風呂遺跡、諏訪市十二ノ后遺跡といった、これまでにもその存在が知られていた遺跡の他には、宮田村中越遺跡<sup>40</sup>で確認されている。今のところ、この形式の建物址は中越文化に属する遺構であると思われるが、この遺構が存在する遺跡と存在しない遺跡があるのはいかなる理由によるものであろうか。

この時期の人々にとって、どうしても必要なものならば、全ての集落にこの遺構が存在してよいはずだが、これまでの発掘例でみると大規模な集落にはあり、中・小規模の集落には見当たらない。ある程度の規模をもった、いわゆる拠点的な集落にのみ建てられる性格のものであったろうか。

またその一方で、集落における遺構の存否を考える際に対照的に注意されるのは、小豎穴、とりわけ墓穴がほとんどみられないことである。坂平はもちろん、阿久尻、十二ノ后などでも墓穴とおもわれる小豎穴の所在がはっきりしていない。一つの仮説として、葬送にかかる遺構と考えることもできるかもしれない。広井出のように複数の小豎穴を有する中規模の集落には建物址が存在しないという事実も、また意味深いこととみるべきである。これまでに考えられていた用途、例えば倉庫など、考えうる他の機能とあわせて検討すべき課題であろう。

### 第三節 石器のすがた

#### 一、大形石器

曾利遺跡の報告書（『曾利』1978）においてわれわれは、中期の主要な石器群を、雜穀農耕の一連の作業過程を担う農具として体系的に把握することができた。それから10年後、報告書『唐渡宮』（1988）において、中期後半の石器群についても同様な認識を深めてきた。これらによって中期の主要な石器群については、石製農工具ないしは生産用具としての石器の大綱を把握できたものと考えている。

前期の初頭から前葉に属する坂平遺跡からは、実に多様にして多量の石器が出土した。そのうち堆積岩や変成岩、安山岩製の大形石器の器種の大半の様相は、中期と基本的に変わることろがない。そこで、四半世紀來の認識の上に立って一通りまとめてみたい。

##### 1 打製石器のあり方

打製石器群には、石鋤、石庖丁または横刃型石器、不定形刃器、それに粗刃器などがある。これらの石質は、硬砂岩36%、粘板岩27%、ホルンフェルス27%、そのほか緑色岩や頁岩、安山岩など10%である。

つぎに素材となった礫の表皮の有無についてみると、石鋤の類では片面の全部または一部分に礫皮を有するもの17%、横刃型石器または不定形刃器の類では片面の全部または一部分に礫皮を有するもの37%、背部に採るもの10%となっている。

これら堆積岩類から素材を取り出す方法については『曾利』以来、扁平円錐打割技法と呼んできている。坂平遺跡でも実際、そのような素材の割り取り方を検証できる資料が見出される。なかでも2574・4119の石庖丁ないし横刃型石器はその典型例で、衝撃点に特有な破碎痕をとどめている。

##### 2 石鋤

65点が出土した。このうち完全品の19点を法量でみると、およそ3つのグループに分けられる。長さ7.3~9.0cm・幅3.6~6cmの範囲に8点、長さ11.4~13.2cm・幅4.4~5.4cmの範囲に7点で、中間に1点だけ長さ10.4cm・幅5cmのものがある。それと幅が7.3~8.6cm・長さ12.0~14.0cmの範囲に3点がまとまっている。長さ9cmまでのものを小形、長さが13cmまでを中形とことができ、後者は形態や大きさなど、中期と変わらない（第348図）。

また、およそ体形のわかるものが26点ある。基部と刃部の幅がほぼ等しい短冊形が12点、「唐渡宮」で基底型と称した基部が狹まるものが11点、残りの3点（664・2569・3481）は斜刃または偏刃の鋤である。このうち1072・1336・4115は身の幅があるもので、撮影に近いとも

いえる。

刃形のわかるものは41点あり、およそ三つに分けられる。左右均整となる弧刃が28点、直刃が7点、斜刃もしくは偏刃が6点である。

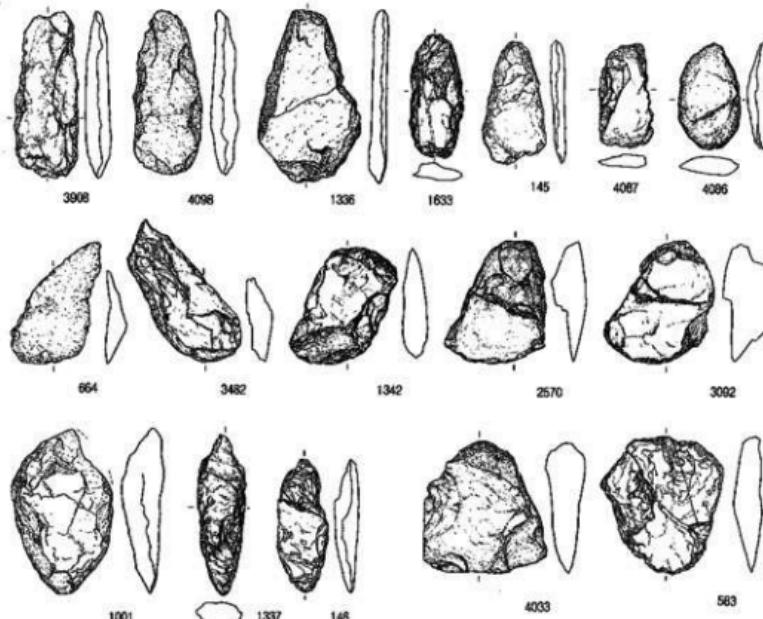
これらには、土擦れなどによる摩耗痕が16点にみられる。刃縁に沿ってつくものが殆どで、3908・4092は身の半分まで及んでいる。そして1割強の石錐が破損していて、基部のみのもの12点、刃部のみのもの15点である。

### 3 偏刃の鉄形石器

身幅の割には寸詰まりで、肉厚な偏刃の石器。1342・3092・2570など11点ある。総じて加工は粗く、天然の蝶面を残す基部側と刃部側との厚みの落差が著しい。その点、粗刃器に通ずるものがある。鉄形石器としておくが、性格は不明である。

### 4 尖葉形の小錐形石器

刃先が尖葉形を呈するもので、6点出土している。ツルハシのように細身の1337や146、肉厚で幅のある183や1001があり、総じてみな小ぶりである。石の刃を持つ掘棒、つまり小錐のように使われた可能性がある。



第348図 石錐・偏刃の鉄形石器・尖葉形の小錐形石器・刃広の鋤状石器 (1/4)

## 5 刃広の錐状石器

身幅はあるが、丈が短く、下辺を刃部とする石器が9点ある。上辺側は肉厚で、刃部が円弧形をなす134や3470、U字形をなす583、直刃の665・4033などがある。

## 6 粗製の錐形石器

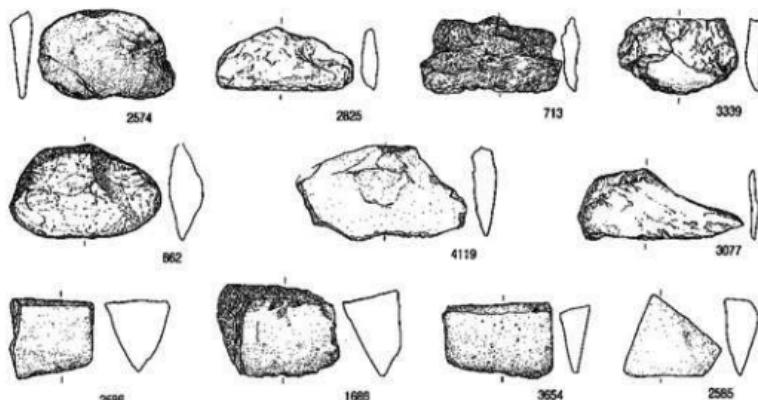
1634・4116など、石鉄に似た形状のものが7点ほどある。縁皮を残しているのが目立つ。刃部の加工はある程度なされているが、側縁の整形がなされていないものである。

## 7 横刃型石器または打製石庖丁

横刃型石器のうち形態がよく整っているものを、中期のそれに倣って打製石庖丁とした（第349図）。24点ほどある。しかし、すっきりと分けられるわけではない。残る横刃型石器は、37点である。

石質は、硬砂岩とホルンフェルスがそれぞれ33点の同数で最も多く、続いて粘板岩が30点であり、石鉄と同様の石材を用いている。素材の縁皮を残しているものが多く、2574はその典型例である。一部もしくは背に縁皮をおくものが27例、背から片面側に残すものが13例ある。また、扁平円縁から素材を取り出す際の衝撃点に特有な破碎痕のみられるものがある。2574・4119などが典型例として挙げられる。

これらには、使用の痕跡をとどめるものがある。その部位は圧倒的に刃縁であり、摩耗しているもの5例（713・1458・1459・3339・4120）、条痕の付いているもの1例（4042）である。このうち特筆すべきは713であり、側端抉入りとなっている。中期ではこうした形式の存在が知られているが、前期では初見であろう。



第349図 横刃型石器または石庖丁および横形刀器 (1/4)

## 8 不定形刃器

横刃型石器の範疇に入るには戸惑う、不定形な刃器を分けた。これもすっきりと線引きできるわけではない。46点ある。

## 9 横形刃器

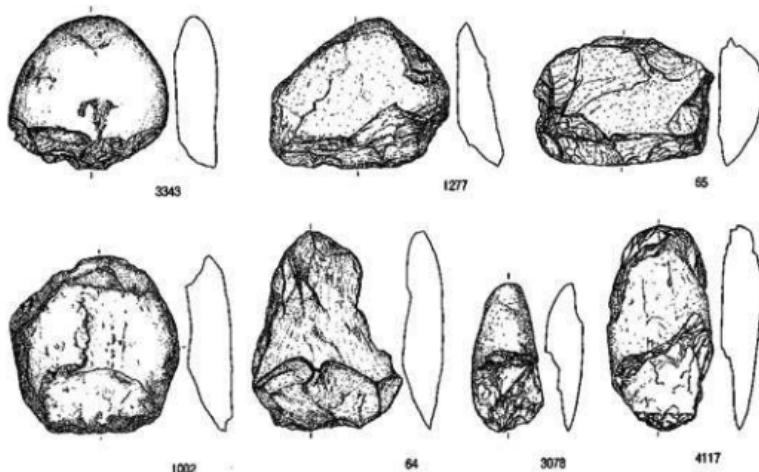
断面が逆三角の楔形をなし、下辺が潰れ気味の鈍い刃をなす石器である。背はおよそ平らな面を成している。1617・2586・3654・4011など16点が出土した。手で挟み持つのに丁度良い大きさであり、意外としきりする。横とするには刃や背の状態からして適当でないことから、しごくとか、なめすといった作業に用いられた石器であろう。

## 10 粗刃礫器

ふつう「礫器」と呼称されることの多い早期以来の石器であるが、天然の礫そのものを用いたのではなく、扁平円錐などの周縁を打ち欠いて粗い刃部を作り出した石器であるから、「粗刃礫器」と呼ぶことにしよう（第350図）。45点が出土している。石質は硬砂岩が19点と最も多く、ついで粘板岩とホルンフェルスが各10点である。

総じて分厚く、1277のように横長に刃をつけるのが一般的で、40点。2528のような縦型のものは5点と少ない。刃の作りは、片面側に打ち欠いたものが35点、両面側へ打ち欠いたものが8点、不明2点である。また刃線の形は、緩く外湾する弧刃が23点、直刃が12点、V字もしくはU字形が7点、斜刃が2点、不明1点となっている。

このうち717・2174・2827・4076の4例に摩耗痕が観察された。多くが手のひらに取めて作



第350図 粗刃礫器 (1/4)

## まとめと考察

業する限界の大きさであり、自重もあることから、直接手に持つて反動をつけて振り下ろすなどして使われたものと思われる。

また別に、長手な扁平礫の一端を打ち欠いて刃とした、早期のいわゆる「蝶斧」の系譜に属するものがある。1455・2913・3077・4117など4点。1455の刃部は摩耗しており、これらは鋸先として用いられたのかもしれない。

ところで早期末から前期初頭にかけての粗刃礫器は、神之木台期の駿遊堂遺跡と、つづく下吉井期の大月市原平遺跡において<sup>20</sup>、打製石器の主体を占めている。<sup>21</sup>中越期では、坂平に近い白州町上北田遺跡においても、通有的である。しかし不思議なことに、阿久・十二ノ后・中越などの八ヶ岳西麓から伊那谷の著名遺跡にあっては、全く報告例をみない。だが、中越期直前と目される豊丘村田村原遺跡で<sup>22</sup>3点が出土している。さらに、田村原より一時期くらい古い木島期の飯島町カゴ田遺跡では、11点が出土している。<sup>23</sup>カゴ田には神之木台式土器も見出されるので、そちらと関連するものか興味を引く。

以上からみて、坂平遺跡の粗刃礫器は、下吉井系の文化要素だとみなされよう。

## 11 棒状礫器

棒状もしくは柱状をした、河原の天然礫を利用している。「曾利」と『唐渡宮』ではこの種の石器をあえて「礫石器」と称したが、従来「礫器」と呼んでいる石器と区別するためであった。本書では、この石器本来の特性を反映させて「棒状礫器」と改めた。

多量に出土しており、その数474点にのぼる（第351図）。大形なものは22cm余、小形なものは5cmだが、10cm前後のものが圧倒的に多い。その石質は硬砂岩が35%と最も多く、次いで輝緑岩が18%、安山岩が14%、粘板岩と砂岩がそれぞれ6%などとなっている。

この石器の特色の一つは、これといった使用痕がついていないということで、実に半数の240点がそうである。いっぽう、使用痕のうち最も目立つものは端部の敲打痕で、128点（27%）に見出される。スレートなど石質によっては、階段状の小剥離痕または欠け痕となっているものがあり、19点（4%）にみられる。また、全体の21%のものが途中から折れている。

つぎに多いのは、凹石にみられる凹み穴のような打痕凹みで、79点（17%）にみられる。石質によって凹みの状態は様々で、深い漏斗状の凹みを有するものや、浅い打痕凹みやあばた状痕、またはねずみがかじったような歯牙状痕などがある。そして片面のみにつくもの45点、両面につくものの32点、3面と4面のもの各1点となっている。これらは凹石のそれと同じつきかたであり、両面のものは多くの場合、表裏同じ位置についている。したがって、なにか凹石との類縁関係がおもわれる。

いまひとつ、礫の稜部がかるく敲かれたように崩壊していたり、逆にすべすべと摩滅したようにみられるものが27点（6%）ある。こうした崩の状態は『唐渡宮』でも注意したように、河原の天然礫にもみられるので、天然か人工的なものかの判断が難しい。

ところで『唐渡宮』では、形態上の特徴と打痕等から、次の四通りの用途を考えた。

(1) 面上に細かなあばた状打痕や浅い打痕凹みを有するもの——クルミなど堅果類を割るのに使ったとみられる。

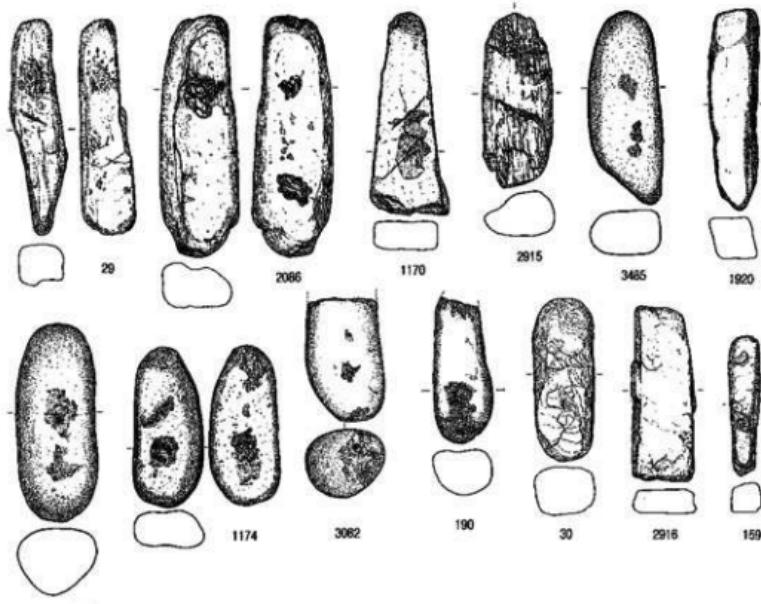
(2) 先端部に敲打潰れや打痕、または欠け傷や打ち欠けがみられる類い——杵状もしくは石槌のような使い方が考えられる。

(3) 後に敲打潰れや打痕または欠け傷がみられるもの——ワラビやクズなどの根茎類を敲き潰したりするのに使われたと考えうる。

(4) 平坦な疊面を有し、さしたる使用痕が認められない仲間——押圧に用いたと考えられる。

棒状礫器の機能・用途を敲き割る、掻き碎く、敲き潰す、押し潰すものと判断したのである。それは多分に採集した木の実や根茎類の加工具としての性格が濃く、そうした「敲き石」とみることが妥当であるとした。

坂平の石器も石質や形・大きさはもとより、使用痕の様態までも基本的に同じであることから、この四通りの用途を基本的に考えてよいと思われる。ただ小形なものについては、使用痕がついていないものばかりで、一律に棒状礫器に含めるのは無理かも知れない。



第351図 棒状礫器 (1/4)

## まとめと考察

また、これらの用途と関連して、台石の存在が考えられているが、本遺跡から出土した鏡餅状扁平石の中には、打痕のついたものがいくつかある。はたして棒状器は、この打痕のついた台石とセットをなすのだろうか。

さて、「唐渡宮」ではこの種の石器は曾利Ⅱ期に至って出現するものとし、中期の後半を特徴づける石器とした。が、その二年後に刊行された中越遺跡の報告書に多数の棒状器が示され、前期初頭から前葉にも存在することを、はじめて知ったのである。<sup>29</sup>さらに、距離的にも時期的にも近い早期末のカゴ出遺跡でも、<sup>30</sup>21点の棒状器が報告されている。

ほか、中越期では上北田遺跡において通有的である。阿久遺跡にもあるようだが、報告書では詳らかでない。

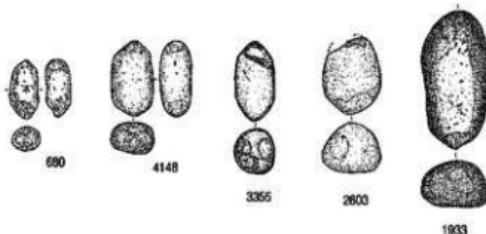
いっぽう、下吉井期の遺跡では都留市中溝遺跡に1点みられるくらいで、大月市原平や駿遊堂では報告例をみない。したがって、これら多量の棒状器はまず、中越文化に特徴的なものといえるだろう。さらにその源は、少なくとも伊那谷の早期末、木島系文化にたどることができる。

他方また、塩尻市矢口、御代田町塚田など在地系の花積下層期の遺跡にも散見され、赤城山西麓の花積下層期の三原田城遺跡では通有的にみられる。

### 12 先端角錐状石槌

680・1933・2603・3355・4148の5点が出土した（第352図）。棒状器の石槌であり、使用的結果その先端がペン先状に尖り、二面体もしくは四面体をなしたとみられる。阿久遺跡で注目された石器の一つで、中越遺跡や十二ノ后遺跡にもあり、特に中越では棒状器との合いの子のような中間形態のものが相当ある。中越文化に固有的な石器といえるだろう。<sup>31</sup>

1933が10cmと最も大きいが、ほかはみな規格品のように揃っている。先端の角度が似通っているのも興味深い。3、4本の指で握り持つほどの大きさであり、あまり力まず、細やかに敲く石槌のようだ。敲かれる相手もさして大きなものではないはずである。となれば、磨り石く



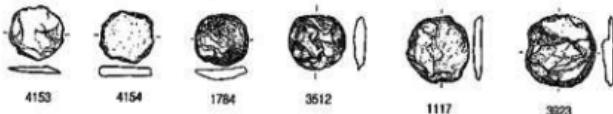
第352図 先端角錐状石槌 (1/4)

## 大形石器

らいしか見当たらない。磨り石には、側縁を敲打面取りして平滑に仕上げているものがかなりある。その面とこれら石椎の角錐面の様態は似通っている。したがって、そうした加工に用いられた可能性がある。

### 13 石製円板

いずれも扁平円盤の周縁を打ち欠いて円く整形したもので、1117・1784・3512・3923・4153・4154の6点が出土した（第353図）。4154の径が3.6cm、3923の径が5.2cmで、ほかの4点もこの範囲におさまっており、まるで規格品のようだ。その様は、中期には普通にみられる土器片円板を想起させる。うち、3点が中越期の住居址から出土したものだが、いまのところ他に類例を知らない。



第353図 石製円板 (1/4)

### 14 天然の礫

住居址からは定形の石器以外に、硬砂岩、輝緑岩、砂岩、粘板岩などの大小の礫が出土している。掌大～躰大的もので、形もさまざまであり、みな河原の転石と目される。その数、およそ150個。ごく僅か火に遭ったものもあるが、これらに共通しているのは使用痕を止めていないということである。しかし、その数の多さからみても何らかの用途または意味をもっていたろうことは疑いない。

これらの中には硬砂岩、粘板岩、輝緑岩、砂岩などの扁平な小円盤が70点余りあって、およそ半数を占める。しかも径7～11cmの3個を除いては、みな径3～5cmのなかにおさまっている。端部が欠けているものも僅かにあり、石錘のようにも思えるが、天然か人工のものか判断できない。

ところで、早期末の木島文化に属するカゴ田遺跡では、342個もの小礫が取り上げられている。径5～15cmの扁平円盤で、加工痕や使用痕は見られないという。

前期初頭から前葉の他の遺跡の報告書には、このような扁平小円盤に関する記述がみえないようだが、この種のものも、棒状礫と並んで伊那谷の木島系文化にたどられることは間違ひなさそうだ。

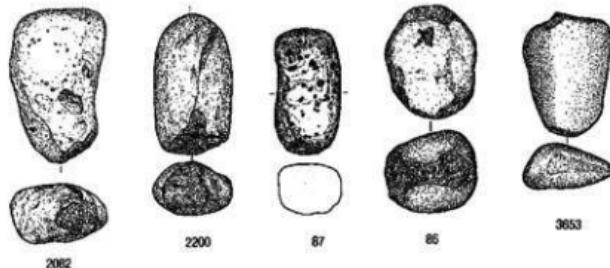
### 15 敲打器

形状は様々であるが、礫の端部に敲打による潰れ痕を有するもので、31点ある（第354図）。

### まとめと考察

2082・3203・3652・3653など。先端の潰れは、2082のように何か硬いものを相手にしたと思われるような状態のものと、3653のようにかるくこつこつ敲いたと思われるものがある。その殆どが安山岩で、硬砂岩や輝緑岩は数点のみである。

この種の石器は、石器の加工に使った「石槌」なのか、全く別なものを対象にした「敲き石」なのか、よくわからない。「敲打器」という通称は適切な言葉とも思われないが、そうした曖昧な呼び方もやむをえないだろう。



第354図 敲打器 (1/4)

### 16 磨り石・凹石・団子状小丸石の類

この類は驚くほど多量に出土しているうえ、種類も中期と変わらない。磨り石が217点、凹石が276点（うち21点は粗形の凹石）、団子状小丸石が294点、鏡餅形石が3点で、これに磨り石大の安山岩砾の107点を加えると合計897点にのぼる。実に大型石器総数の43%を占める。みな安山岩である。ただ、磨り石と凹石のなかに10点の輝緑岩と1点の硬砂岩がみられる。また、全体として目立つのは、火に遭って変色しているものやひび割れているものが多いことである。

坂平では、12軒の住居が火に遭って焼失していた。しかしそのことが原因で変質したと思われる石器は多くない。火熱を受けたものが焼失住居に偏っているわけではなく、どの住居址からも普通に出土している。むしろ、火熱を受けた痕跡のあるものが特定の器種に集中していることに、重要な意味が隠されていると思われる。それらは磨り石・凹石・団子状小丸石の類、磨り石大の安山岩砾、そして磨りうす、鏡餅状扁平石といった調整・製粉具である。中期にはよく知られていることだが、前期にも同様なことがなされていることは注目すべきである。

『唐渡宮』において、磨り石・凹石・団子状小丸石・餅形石の類は一連の類縁関係にあるものとしてとらえた。そして凹穴じたい機能とは無縁な観念の次元に属するものであり、磨り石にみられる側縁の敲打面取りや乱打による変形も、小丸石や餅形石そのものも、火中に投ぜら

されることもみな、団子や餅の類にまつわる観念の具現であると考えた。

前期においても、この種の石器のあり方に変わるところがない以上、そのような基本的な観点を変える必要はないと思われる。

### 17 磨り石

おおざっぱにみて平面の形が微ね円～楕円の船頭形をしたものと、やや縦長な石鹼形をしたものとの二通りがある。前者は中期にごく普通な形態であるのに対し、後者は前期的な形態といえよう。これらの多くが、側縁または周縁を敲打して平坦な面をつくっている。なかには削ぎ取るかのように敲打面取りした結果、平面形が長方形を呈するものや方柱状になったものも見受けられる（第355図）。

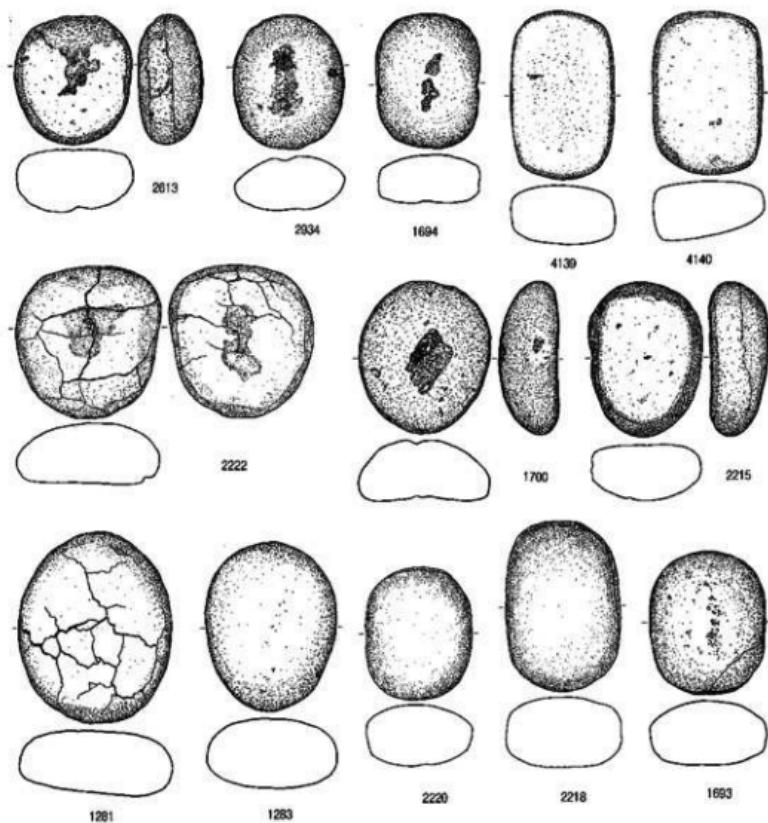
つぎに磨り面について見てみよう。磨りうすの上石である磨り石は、手のひらに取めて使う。だから片面に磨り面ができるのは当たりまえで、裏返して使うことによって、両面にできることになる。片側に磨り面をとるものは122点（56%）、両側に磨り面をとるものは82点（37%）、残り13点（7%）は膚が荒れているなど、磨り面が確認できないものである。

多くは原形を維持したまま小さくなっていくが、なかに亀甲形や舟底形のように減じているものがある。これらは磨りうすのへこみの形に呼応した結果であり、前者は浅くゆったりとした曲面を呈する磨りうすでの回転運動によって、後者は幅狭で深いU字形のへこみをなした磨りうすで、前後方向の運動によって減じたものであろう。使い続けていくに従い、1084・1219のように身が減って薄くなっていくが、その最たるものとして2934がある。ここまで磨り減るとは、よほど愛用されたものにちがいない。

また磨り面の4分の1のいずれかの箇所か、もしくは対角して同じ減り方をしているものがある。対角となるのは持ち替えをするからであり、表裏二面がそうなっていることもしばしばである。右上と左下が対角して減じているのが26点（212・382・559・750・2214ほか）、左上と右下が対角して減じているものが24点（18・135・386・591・1281ほか）あり、二者の存在が明らかとなる。これは、作業をする利き手の差を想定する以外になく、前者が右利き、後者が左利きと思われ、ほぼ同数である。

右利きの場合、たいていは時計方向に回転させて作業を行うだろう。ことに製粉は、前方へ押し出す力によって粉を撒く。作業の後半は手元に引き返すだけだから力は要らない。このとき、力が最も加わるのは親指の付け根のあたりである。当然、力のかかった部分はほかよりも減るのが速いから、その結果が片減りとなって現れると推測される。対角してつくのは持ち替えるからであり、表裏につくのは裏返して用いたからである。左利きはこの逆である。

また、磨り面が凹面を呈するものが14点ある。19・218・1700・2215・2222などである。これらは、鏡餅状扁平石のなかに55・169・569など、磨り面が凸面であるものがいくつかあるが、これとセットをなすものと思われる。



第355図 磨り石 (1/4)

さらに磨り石および凹石には、周縁または左右の側縁を敲打潰して、平坦な面を作っているものがある。5~10mmくらいの幅で原形が変わらない程度に敲いているものから、面を広く取って整形しているもの、左右を直線的に削ぎ落とし大きく変形させたものまで色々である。敲打したままのものもあれば、丁寧に調整して磨り面と区別がつかないほどきれいに仕上げているものもある。磨り石では108点、49%にみられる。この中には、明らかに磨り面を喰っているものが認められる。

## 大形石器

これとは別に、一端もしくは両端に打痕を有するものがある。磨り石では13点に、凹石には45点にみられる。かるく敲いた程度のものから、大きく欠かれたようになったものまで様々であり、2533や1711はその一例である。

### 18 凹 石

この類には、打痕状もしくは漏斗状の凹み穴がつく。片面のみが84点、両面が165点、3面または4面につくものが合わせて5点、不明1点である。凹み穴は一つのもの、二つのもの、連続するものなど様々だが、連続するものがかなり多い。凹みの様態は、点状の打痕から次第に漏斗状になり、最終的には連続して溝状になるという経緯がたどれよう。

こうした凹み痕は磨り石にも多く見られ、その様態は凹石と同じである。片面のみに凹みのあるものは4点、両面にあるものは90点である。

### 19 粗形凹石

形状のいびつな地山礫を用いた凹石で、地山に由来する皮膜を被っていたりする。2417・2418などのほかに21点ほどあるが、これら以外のものは割と形が整っている。

### 20 团子状小丸石

ころころとしていかにも団子や蘭玉のような格好のもの、またはこれらより一回りか二回りほど大きく、磨り石よりも小ぶりな天然の丸石である。294点が出土した。これらの中には敲打したりあるいは磨ったりして球状に仕上げたものが23点、765・2415のように凹み痕をしたものが2点、1383・1506・2415・2635など敲打痕や欠け痕がみられるものが7点ある。また、ロームや錫色をした土がこびりついているものが12点あった。そして火熱を受けた痕跡を止めているものや、ひび割れているものが100点あり、34%を占める。磨り石・凹石の場合を上回る率である。

### 21 鏡餅形石

みるからに半べったく、いかにも鏡餅を勢髪させるような大きさ・形状のものが3点ある。397・3695・4178がそれであり、磨り石・凹石と同様に凹みがしるされたり、敲打や面取りがみられる。これも実用の具とは思えない。

### 22 安山岩礫

磨り石と同等か、またはその前後くらいの大きさの安山岩礫が107点ある。これらの中には、磨り石と見紛うものも少なくないが、磨り面がみられない。そして、地山に由来する赤色の皮膜がついているものがいくつかある。33点は火を受けて焼けていて、うち5点が変色している。また、周縁を敲打しているものや面取りしているものが39点、端部に打痕のつくものが20点みられた。やはり磨り石または凹石の場合と同様であることから、それらの予備品とも考えられる。

## 23 磨りうす

ふつう、考古学で「石皿」と通称される石器を『唐渡宮』では「石うす」と呼び改めたが、本書ではさらに「磨りうす」と改めてみた。調整や製粉の用をなす「うす」は上石と下石とから成ってはじめて「うす」であるが、「磨り石」をその上石に、「磨りうす」をその下石に当てて、こう呼ぼうという考え方である。

住居址からは完全品が24点、破片が13点の計37点が出土した（第356図）。このうち3点（2123・3524・3578）は、非実用品と目される小形のものである。また遺構外から12点が出土した。計49点である。素材となる石は安山岩で占められ、2点だけが輝緑岩である。これらは移行期～中越期の住居址のもので、下吉井期の住居址からは一点も出土していない。

平たい天然礫を用いた4159・4160などは、広くゆったりとしたまるみのある浅い凹面をなす。また、やや長めな天然礫を用いた3120・3089・1991などは、周堤との境が直線的である。これらは該期の特徴を備えている典型的な例といえよう。そして角の取れた円形もしくは小判形の天然礫を用いた570・2879・3896・4161などはやや分厚く、周縁を敲打して整形しているものがある。へこみは縦じて深く、中期のものに最も近い。

仔細に見ると、へこみが左に張っているものと、右に張っているものとの二通りがあることがわかる。これは作業する利き手の違いが反映された結果であり、前者が右利き、後者が左利きとなろう。搔き出し口を手前にして据えた場合、だいたい右利きでは時計回りに、左利きでは反時計回りに回転させて作業を行なうだろう。行きは力が入るので内側に寄る傾向が強く、帰りはそのまま力まずに戻るから、利き手の内側が張ることとなる。

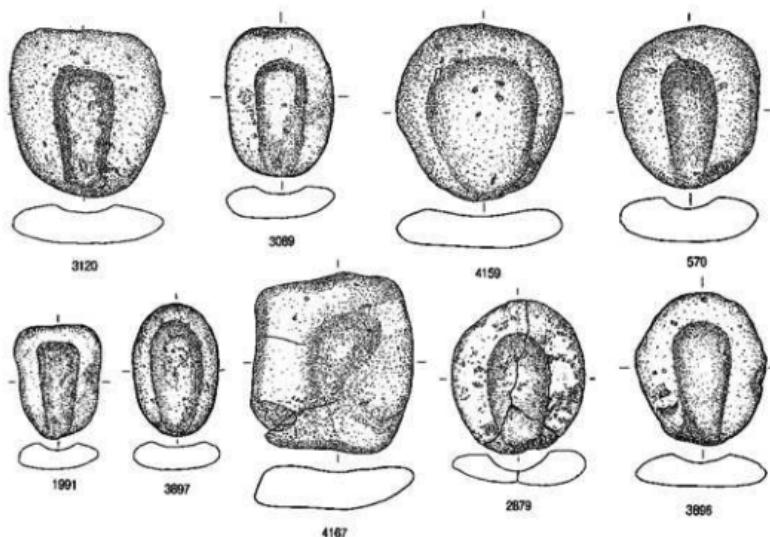
ちなみに右利きは5例（566・567・2269・3696・4162）、左利きは6例（1118・2270・2879・3869・4159・4167）とほぼ同数であり、さきにみた磨り石の結果とも合致する。

また、磨り石や凹石と同様の凹み痕がついているものが5点あった。それらとの類縁関係がうかがい知れる。

そして4点の磨りうすには、火熱を受けた痕跡や変色がみられ、同様なことは、故意に破碎したと思われる13点の破片のうち6点にも認められる。

31号址では、磨りうすが2個とも火に遭って、一部が欠損している。これで使用に耐えたのか疑問も残るが、22号址のように断ち割られたものが床に残されている例もあり、注意される。時期は少し下るが、黒浜並行期の富士見町向原8号址では、入り口の左右に半分に割った磨りうすが、表裏を別々にして割れ口も反対向きにして、意図的に据えられていた。<sup>36</sup>

ふだん磨りうすは、60号址にみると炉の周辺で使用するものらしい。そして使用後は41・42・31号址または9号址などに明らかのように、壁や柱に伏せて立てかけておくものようである。比較的多く出土する中期の住居でも、同様に扱われている。その点で気になるのは16号址の場合で、奥壁よりの平石の下に中形な磨りうすが伏せられていた。いかにも覆い隠す



第356図 磨りうす (1/12)

かのような行為には、磨りうすの別な一面が背景にあると思われる。口元と向かい側の周堤部の2箇所が大きく欠けていることも、無関係ではないようだ。

また別に注意されるのは、輝緑岩の磨りうす3524と4167の存在である。中期でも、磨りうすは安山岩製で、輝緑岩ではつくらない。このことは、磨りうすと鏡餅状扁平石とが極めて深い類縁関係にあることを示している。

31号址には、磨りうすが2個と鏡餅状扁平石が3個も残されていた。坂平遺跡では磨りうすの出土数を住居址数で割ると、ほぼ2軒に1個となる。中期だと3~5軒に1個くらいの保有率であり、それらに比べて、ずっと高い。しかも鏡餅状扁平石の類も加わるのだから、驚異的である。

中越期において、へこみを有する中期的な磨りうすの出土例は、阿久で1例、阿久尻で4例(うち2例は小形)、高風呂と上北田で各1例にとどまっている。坂平の数が抜きん出ていることは、一目瞭然である。

ところで、このような形態の磨りうすは、坂平より一足早く、赤城山西麓の花穂下層文化に登場している。三原田城や五目牛清水田といった遺跡をみると、そこでは中期と同様な磨りうす<sup>98</sup>が、ごく普通に存在する。いま知られている限り、早期末から前期初頭の段階で、磨りうす

## まとめと考察

に意図的なくぼみと搔き出し口を作り出した最初のものであろう。それは浅間南麓方面からこちらの在地系の花積下層文化にも及び、長門町中道遺跡で1例、茅野市高風呂遺跡で2例の完全形のものが出土している。<sup>39</sup>また、花積下層期から関山期に移る頃と目される佐久町後平遺跡でも1例が出土している。<sup>40</sup>中道と高風呂の1例、および後平のものには明確な搔き出し口が設けられないが、残る高風呂の1例には搔き出し口がつけられている。

したがって、坂平の中期的な磨りうすは、赤城山西麓での着想を受け継いだものとみることができる。

### 24 鏡餅状扁平石および平板石

「鏡餅状扁平石」というのは見た目の形状に従った呼び名で、一抱えもある扁平円盤である。<sup>41</sup>また平板石は、角があってやや厚めで、平坦な面を有する石であるが、数は少なく4点ほどである(11・266・2665・2666)。双方あわせて住居址から63点、小堅穴から1点、遺構外から15点の、合計79点が出土した(第357図)。住居址出土のうち堆土中のものを除いて、出土状況を記録したのは33点である。79点のうち完全品は半数の40点であり、あと半数は一部を欠損したり、故意に破碎されたものである。また、火熱を受けた痕跡を止めているものは12点あり、そのうち8点は欠損品や破片である。

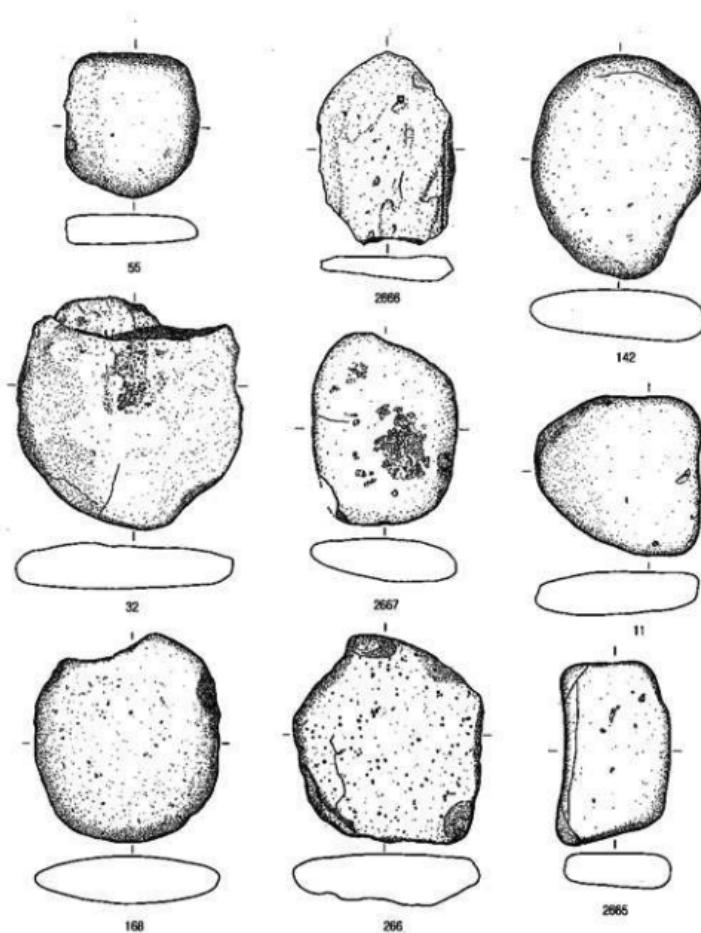
素材となる石は、安山岩のほかは輝緑岩が25点と3分の1弱を占め、磨りうすの場合とは異なった傾向を見せている。

これらのうち4割のものには、何らかの使用痕が認められる。敲打痕のつくもの11点、磨り面をなすものの11点、滑らかな面または光沢を有するもの11点で、その他の6割近くは使用痕を止めないもの、または判定しにくいものである。そこで使用痕ごとに分けてみよう。

(1) 敲打痕のつくもの——その作業面が凸面をしているものが7点(32・947・1188・2267・2272・3377・4179)と最も多い。ついで平坦な面が3点(567・1185・1538)、凹面のものが1点(781)である。32・2667のように打痕が集中しているものと、2272のように疎らなものとがある。敲いた結果できたものであり、「台石」と呼ぶべきかもしれない。棒状器が相手となるのだろうか。

(2) 磨り面をなすもの——その作業面が凸面であるもの4点(55・169・569・1536)、平坦な面であるもの6点(1790・2666・3377・3523・4085・4175)、凹面であるもの1点(2669)である。いずれも石の表面が明らかに磨れていることから、上石と組になって機能した下石であることは間違いない。このうち凸面のものには、先に見た磨り石のうちの凹面を呈する一群がセットをなすと思われる。ただし、組になった出土例はなかった。また、縁の際まで磨られているものがあることから、搔き出し口のある磨りうすとは別な目的の、一種の「磨りうす」と目される。

(3) 滑らかな面または光沢を有するもの——磨り面とは別な滑らかな面、またはにぶい光沢



第357図 鏡餅状扁平石および平板石 (1/12)

を有しているもので、作業面の形状によってやはり三つに分けられる。凸面のもの4点(142・1187・1390・2747)、概ね平坦なもの6点(8・11・780・3272・4172・4174)、凹面のもの1点(1795)である。民俗例の使用痕と酷似することから、砧のように用いられたと推定される。

(4) 使用痕を止めないもの——天然の礫面か人工の面か判断できないもの、また破片のため

## まとめと考察

判断の困難なものを含めると6割近くの49点となる。量的にも多いので、これらが前三者の予備品とは到底考えられない。凸面のもの15点(110・143・168・782ほか)、概ね平坦なもの16点(9・226・780・1292・1792ほか)、凹面のもの5点(31・781・1791・1796・2674)、不明13点である。

こうしてみると、少なくとも機能上の使い分けのあることが知られる。

かつて阿久尻遺跡の発掘現場を見学したとき、多くの住居址に残された平板石に混じって、鏡餅のような形状をした一抱えもある石が2、3あるのを見た。それが、坂平で大量に出土したものである。その後に見学した塩尻市劍ノ宮遺跡でも、輝緑岩の鏡餅状扁平石が3例ほどみられた。先にみた磨りうすと並んで、この種の円盤の保有量も坂平遺跡がすぐ抜けている。

ところで、阿久遺跡では、50cm前後の平板石が11軒の住居址に残されているのが注目された。同遺跡の中越期の住居に固有的なものであり、「固定式石皿」と称された。しかし、「具体的な用途をはっきりと示すような痕跡は見出せなかった」。<sup>40</sup>これらとは別に、住居址には平板石の「石皿」が残されている。

いま記したように、同様な平板石は阿久尻でも何例かみられた。また茅野市広井出遺跡にもあり、上北田遺跡にも見出される。

いっぽう积迦堂遺跡の神ノ木台期の住居址には、「住居付き石皿」と「板状石皿」とが残されている。<sup>41</sup>前者は阿久の「固定式石皿」に、後者は平板状磨りうすに相当するようだ。同遺跡群の下吉井期の住居址でも、同様らしい。また、下吉井期の原平遺跡では板状の「石皿」が、<sup>42</sup>都留市中溝遺跡でははっきりした使用面をもたない「平石」が、それぞれ出土している。<sup>43</sup>

他方、笛吹川左岸の中道町立石遺跡では、前期初頭の木島期の住居址8軒のうち5軒に、平板状の「石皿」が、いずれも地床炉に蓋をするかのように残されていた。実測図では4点のものに磨り面が示されている。

下伊那の田村原遺跡では、中越期直前もしくは木島期の住居址5軒が発掘されたが、そのうち3軒に長径30~40cmの扁平な河原石が残されていた。別な住居址には平板で浅く凹んだ「石皿」が残されていた。<sup>44</sup>中越遺跡でも多くの住居址の床に平石が残されており、平板状の「石皿」は4点が報告されている。<sup>45</sup>

在地系の花積下層式土器を主体とする高風呂遺跡では、6軒の住居址に「固定式石皿」が遺存し、5軒の住居址から平板状の「石皿」が出土している。つづく中越期の住居址でも「固定式石皿」と平板状の「石皿」が見出される。同じく在地系の花積下層期の御代田町下弥堂遺跡でも住居址に平板石が残され、小窓穴からは平板状の「石皿」が出土している。<sup>46</sup>

以上、ずっと眺めてきたとおりで、曖昧な点もあるが、下吉井系・木島系・花積下層系、いずれの文化においても平板状磨りうすと平板石とが共伴しており、明らかな類縁関係をもっている。そして中越期においても、阿久や中越、高風呂で両者が共伴しているのがみられるわけ

である。

このように対照させてみると、坂平において、その形状を共有する鏡餅状扁平石と磨りうすとが共存していることが、実によく胸に落ちる。

では、とりたてて使用の痕跡がみられない平板石や、坂平でも6割を占める使用痕のみられない鏡餅状扁平石とは、何なのだろうか。

その形状において、平板状磨りうすと平板石とは限りなく近く、坂平の磨りうすと鏡餅状扁平石もまったく同様である。実際に、平板石を実用の具として使えば平板状磨りうすとなるし、鏡餅状扁平石を敲打加工すれば磨りうすとなるだろう。さりとて、阿久遺跡で「固定式」と称されたように、でんと住居の床に据えられている様からは、これらが磨りうすの予備品とは到底おもえない。

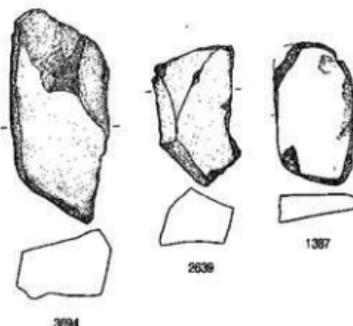
磨りうすが実用の具であるのに対し、これらは表微の具ではないだろうか。両者を結ぶのは、磨りうすによって調整、製粉されて或る形につくられた食べ物、すなわち、餅やおやきのようなものであろう。

先にみた団子状小丸石や鏡餅形石が実用の具ではなく、団子や餅にまつわる観念を具現化したものと考えられるのと、同じことである。こう考えてみると、坂平の鏡餅状扁平石はまさしく円い「餅の石」であり、平板石もまた四角の「餅の石」だということになる。

## 25 砥石

946・1387・2639・3694の4点（第358図）。このうち946は大形で、いわゆる鉄平石を用いているが、他の3点は砂岩や泥岩である。また2639が下吉井期の36号址から出土したほかは、中越期の住居址から出土している。

前期の砥石は、まず初頭にみられ、御代田町塙田・茅野市高風呂・同天狗山・塩尻市矢口な



第358図 砥石 (1/4)

## まとめと考察

ど、軒並み在地の花積下層期の遺跡において出土している。石材はいずれも砂岩または硬砂岩のようである。ほか、花積下層から関山期にかかる頃の佐久町後平遺跡でも、砥石と考えられる砂岩の石器が出土している。これらの例による限り、この時代の砥石というものは、在地の花積下層系の文化に伴うもののように思われる。

だが一方、中越期直前と目される田村原遺跡でも緑泥片岩の砥石が出土している。これまで中越期の報告例は少なく、十二ノ后遺跡から珪質砂岩のものが報告されたにすぎない。<sup>63</sup>

## 26 石斧

磨製石斧は10点が出土している（第359図）。遺構外から出土したものもあるが、すべて前期初頭から前葉に属するとみていいだろう。大形の1点と小形の2点をのぞき、いずれも欠損品であるが、当該期の石斧の様相を知るには十分な資料といえる。そもそも、この時期の石斧は他の石器に比べるとその様相がいま一つはっきりしておらず、遺跡の発掘時において石斧の存在には注意を払っていた。

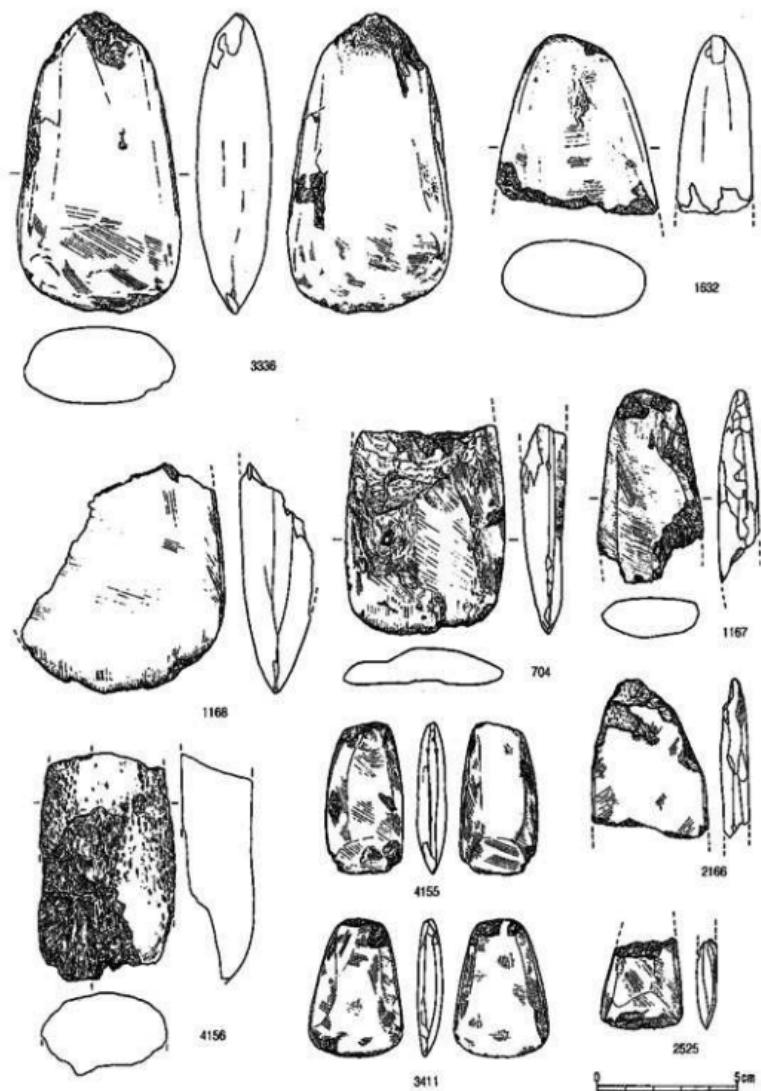
10点のうち、1点は一般に乳棒状石斧とよばれる円柱石斧である。4156は遺構外の出土であるが、宮田村元宮神社東遺跡では早期の、駿迎堂では早期末～前期初頭の出土例が、十二ノ后や阿久では中越期の例が知られているので、本例をこの時期に位置づけても問題はないと思われる。<sup>64</sup>

のこる9点のうち、小形の3点と中形の2点をのぞく大形の4点は、伐採用の斧であるとみておきたい。これらのうち3336のみ、完全な形で発見された。円弧状の刃部は両刃で船状をなし、やや偏刃気味である。基端は敲打して山形に整形している。ほぼ全体を研磨しているが、いわゆる定角石斧というほどには面と角が明瞭でない。断面はどちらかというと梢円形であるが、定角石斧の祖形ともいえる形状で、この特徴は1168・1632にもあてはまる。さらに1168については側縁に若干の面がみとめられる。このような形態は、早期末葉から前期にかけて長野県の大町・白馬方面や富山県の生産遺跡で作られる石斧の特徴であるという。<sup>65</sup> 704は部分的に素材となった岩石の膚が残された薄手の石斧で、刃線は3336・1168とは異なり、やや直線的である。

3336・1168・704の刃部の観察によれば、表裏両面で減りや使用痕の付き方、衝撃剥離の偏りはみられず、基部形状が3336とよく似た1632も含め、大形の4点は縱斧とみて良いと思われる。まず伐採用の石斧であろう。1168と704の使用痕は、線状痕というよりは深く滑らかで、ひだ状を呈している。セミヨーノフは、このような使用痕は素材の違いではなく、対象物の違いであるとして、針葉樹をあげているという。なお、1632と704には部分的に黒色の物質が付着している。着柄・結縛を物語る痕跡かもしれない。

1632は基端を敲打して山形に整形しており、表裏両面の同じ場所がいくらか敲かれている。

中形の1167・2166はいずれも刃部を欠損しており、詳細は不明である。大形品に比べると表



第359図 磨製石斧 (1/2)

### まとめと考察

裏面が平らで、身は薄手である。特徴としては小形品により近いといえるだろうか。ともに刃部を欠損しているので、縦斧とも横斧ともいえない。

2166は基端を敲打して山形をしている。3336や1632にも認められたこの基端の整形は、十二ノ后の中越～黒浜期、また諸磯a期の住居址から出土した小型磨製石斧にも認められることから、少なくとも前期中葉までは続くものであるようだ。

小形の3点は形状がそれぞれ微妙に違うものの、いずれも刃部の片面（圓の表面）のみに減りや使用痕、衝撃剥離がみられることから、横斧だと考えられる。ただし横斧とはいってもいわゆる<sup>わたくな</sup>鎌の柄を着けたものか、あるいは<sup>ひさ</sup>整のように用いられたものは判断できない。いずれにしても、木材加工用の小形の工具であるとみることができる。

4155は短冊形に近く、刃線も直線的である。身の片面はつるつるに磨かれており、光沢はある。あるいは柄の木擦れの結果かもしれない。他の石斧と異なり、身幅のわりに刃の幅が狭い。基端は研磨により整形されているが、いくらか摩耗している。3411は刃の片面が明瞭に減っており、線状痕と衝撃剥離もみられる。基端は數箇所が剥落している。使用的際に刃が加わり、剥げたものであろう。2525は片刃の刃縁が非常に薄く、鋭利に研ぎ出されているが、片面にわずかに減りの痕跡をとどめる。その鋭さ、ならびに衝撃剥離痕の上からさらに研ぎ付けていることから、刃を研いでから間もなく使用されなくなったものとみることができる。

石材は2166が緑色片岩、3411と4156が輝緑凝灰岩、3336と1632がダナイトであるほかはいわゆる「蛇紋岩」である。詳細にみると、1168・704・1167・4155・2525はリザータイトであるとされる。<sup>留</sup>早期～前期の小形の石斧には、よく用いられており、石材産地は前述の大町・白馬など姫川流域が知られている。坂平遺跡にごく近い、富士見町入笠山の「池のトオ」周辺からもリザータイトは産出するが、実際の踏査では石斧を作るのに適した石材を得ることができないでいる。今のところは姫川流域から持ち込まれたとみる方が有力である。

いずれにしても、これまでに見つけたこの時期の斧や木材加工用の工具類、とりわけ伐採に用いられた大形の斧の姿を捉えることができたことは、大きな成果であろう。一方で円柱石斧の在り方や石材などの問題が残されることになった。今後の検討を期したい。

### 27 丸 石

安山岩の丸石が、9点出土している。真ん丸ではないが、砲丸ほどのものから大きいものでは径30cmにちかい2440がある。このうち8例は周縁を敲いている。そして31号址から出土した3点（2251・2252・2253）は、形といい大きさといい、よく似ている。

### 28 花 岩 岩 磨

住居址にはしばしば花崗岩が残されている。腐食が著しく原形を止めていないうえ、崩れてしまって、いずれも取り上げることができなかった。幼児の拳大～人頭大の砾が10軒の住居址から18例見つかっている。

とくに、23号址の炉脇と41号址の磨りうす3089の脇にそれぞれ据えられていた人頭大の砾、ならびに31号址の柱穴3のやや南の床上に、径15~20cmほどの赤と白の花崗岩が並べ置かれていたことは注意される。時代が下って中期後半になると、住居の床に丸石が据えられていることがある、それには花崗岩がしばしば用いられている。時代に大きな開きがあるが、大いに気になることである。

## 二、小形石器

この時代、大形石器に比肩するもう一方の石器群が、黒曜石を主とする硬く緻密な岩石の剝片を用いて作られた小さな利器である。これらを小形石器として、特色のあるものを中心まとめることにする。なおこのような石器には、再生、再調整、再加工による変形が生じていることが考えられる。そのため、必要以上に細かな器種分類は行わなかった。

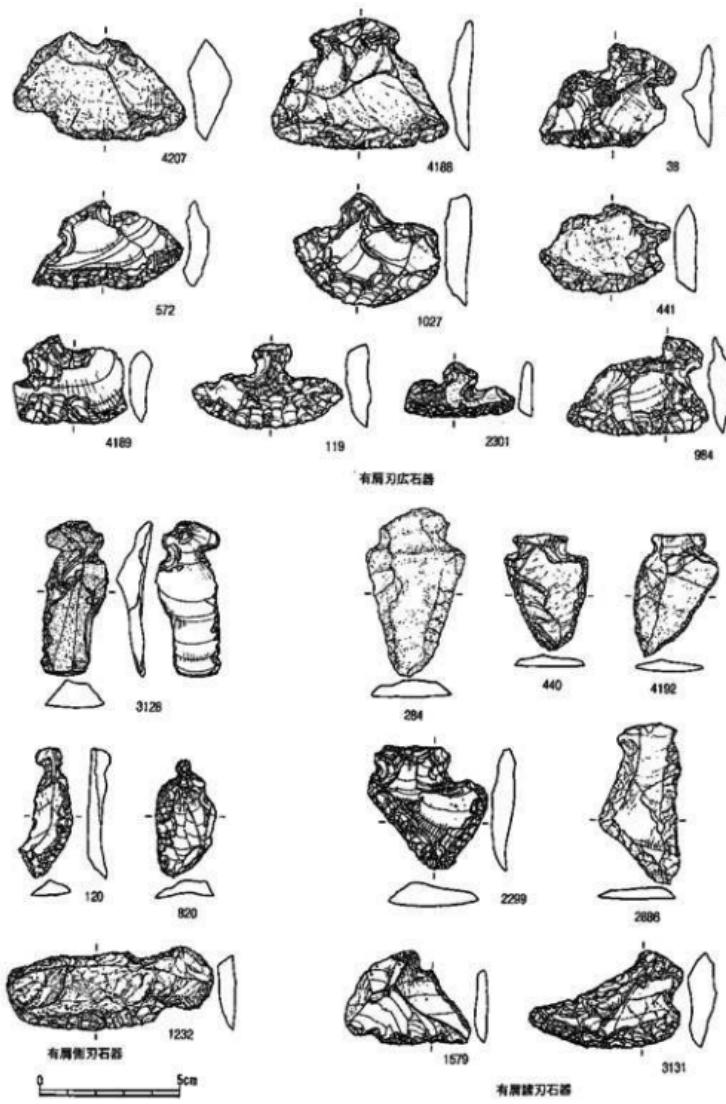
### 1 有肩刃広石器・有肩側刃石器・有肩諸刃石器

一般に石匙と呼ばれている石器の一群で、64点が出土した。この石器を特徴づける点は、向かい合う一対の抉りによってつくり出された茎状の部分と搔器状の刃である。そもそも石の匙でないことは自明のことであるが、この石器の機能、用途についてはその理解やとらえ方に差があるため、まずは形態の特徴を呼称することが適切であると考えた。茎状の部分と身の関係、刃の付け方から、有肩刃広石器・有肩側刃石器・有肩諸刃石器の3種に大別した（第360図）。石材はバラエティに富み、黒曜石35点、珪質頁岩8点、頁岩9点、チャート6点、ホルンフェルス4点、玄武岩と水晶が各1点である。

**形態** まずその形態から、向かい合う一対の抉りを結ぶ線に直交する線を茎状の部分の中軸線とみた場合、この中軸線に対して身もしくは刃線が直交ないしは斜めになるものと、身がほぼ平行になるものに分けられる。これはいわゆる横型石匙、縱型石匙という区分とおおむね合致する。さらに刃が石器の二辺に付けられ、移植鎌のような形になるものがあり、これも他の器種と区別することができる。

縄文時代中期以降の有肩石器や、弥生時代の有肩肩状石器に準じて、一対の抉りによって作られた形状を「有肩」とし、中軸線に対して幅の広い刃が直交ないしは斜交するものを「有肩刃広石器」、ほぼ平行なものを「有肩側刃石器」、移植鎌のように二辺に刃をもつものを「有肩諸刃石器」とした。

有肩刃広石器の形態をとらえる際にもう一点注意すべきは、刃部の消耗による再生の結果、形状に変化をきたしていることが推察される点である。刃部の観察によって、再生剥離がなされていることを知ることができる。当然その行為が繰り返されることで、石器自体の形態が変化する。現在みる形が、当初作られたままの姿でない可能性が高い石器だといえるだろう。



第360図 有肩刃広石器・有肩側刃石器・有肩諸刃石器 (1/2)

**茎状の部分** 「つまみ」「茎」などとよばれ、この石器を最も特徴付ける部位である。しかし、機能的に正しくこの部分の意味をとらえることができないために、ここでは「茎状の部分」としたものである。この部分の形状は幅広で大形のものから、極めて小さく作りだしたものまでみられる。幅広で大形のものは、剥片に小さく抉りを入れた程度のもので、坂平出土の有肩石器の半数以上がこのタイプである。いっぽう小さくつくり出されたものも、前期中葉以降のものに比べると大きめでつくりも粗い。中越期までは幅広で大形なタイプが優勢であり、この後徐々に小形化していく様子がうかがえる。

**使用痕** 黒曜石製の有肩刃広石器には、その刃部に明瞭な線状痕を見ることができるケースが多い。肉眼でもはっきりと認められるのは、刃線に平行する線状痕である。次いで刃線に斜交するものがある。これらの線状痕の中には、刃部剥離の稜線や、素材剥片そのものの剥離によるフィッシャーの凹凸を越えていないものがある(38など)。これは使用の際に石器または対象物が動いた方向に一定方向の規則性があったことを物語っている。すなわち、石器の刃部方向に平行な往復運動による痕跡ではなく、常に一方に向かってのみ石器または対象物が動かされた結果であると考えられるのである。

## 2 石 鑓

318点を数え、不定形の剥片石器をのぞく、定形化された小形石器の中では最も多く出土した。石材は黒曜石が311点、チャートが4点、珪質頁岩が3点であり、坂平遺跡においては基本的に黒曜石で作られるべきものであったようだ。その形態は、基部の形状で凹基、平基、円基あるいは凸基、側縁の形状から外湾、直、内湾、五角形、全体の大きさ・形状から両面剥離の整ったもの、未製品のような粗製鐵または粗大鐵、微小なものなどに大別することができる(第361図)。

最も多いのは凹基の三角形だが、長く鋭いもの(174・786など)からざんぐりしたもの(2675・2982など)まで、バリエーションは多い。平基鐵、円基鐵は凹基鐵の3分の1程しかない。

また、基部の抉りは浅いものが多い。この浅い抉りによってつくり出される石鐵の脚部には、785・1022・2280・2547など、「八」の字状に開くものがある。岡谷市樋沢遺跡などの出土遺物にもこのような特徴を持つ石鐵が多くみられることから、早期の押型文期から中越期にいたるまで、石鐵の一形態として認識できる可能性がある。

**五角形鐵** 全体が五角形を呈する石鐵の一群がある。一口に五角形といつても詳細に見るとその形は様々で、明らかに肩の張った五角形を作りだしているもの(3378・3941など)と、三角形の石鐵の尖端部分が絞り込まれたかのように、緩く丸みを帯びた肩を持つもの(1119・1833など)とがある。また側縁が内湾するもの(2286・2750)も広い意味では五角形だが、ここでいう五角形鐵とは製作意識の異なるものと考えておきたい。

## まとめと考察

五角形鐵は318点の石鐵のうち15点で、基部の残るものうち1点（1295）を除いていずれも四基である。またその基部も1点を除いては、下端が全体の最大幅に広がる形状をなしている。してみると五角形鐵の諸特徴は、側縁の一部が肩のように張って五角形を呈する以外、一般的な三角形鐵と何ら変わることがない。

五角形鐵のなかでも尖端が絞り込まれたような一群は、使用や製作過程で尖端を小さく欠損した三角形鐵の、その尖端だけを再生したものと考へることもできるだろう。表面の様子からその痕跡を見つけ出すことは難しいが、このタイプの石鐵のなかには、側縁部の剝離と尖端近くの剝離の大きさが極端に違うもの（436など）があり、これが時間差、ないしは再調整のための作業の差を物語っているのかもしれない。

視野を広げてみると早期から前期の五角形鐵は、関西地方の、とりわけ早期押型文期の前半、大鼻～大川式期の遺跡に数多くみとめられる。草創期の隆起線文期にすでに五角形鐵がみられる<sup>44</sup>ことから、ほぼ石鐵の初源より五角形鐵は存在していたと考えることができるかもしれない。

中部高地においては押型文期には五角形鐵はみられないが、早期末になると飯島町カゴ田、高遠町宮の原、十二ノ后などで坂平のものとほぼ同型と言つていいような五角形鐵が多くみられる。とくにカゴ田、宮の原のように早期末～前期初頭の土器群に伴う様相は坂平でも確認でき、この地域には早期末に東海地方から入ってきた可能性が高いと考えられよう。

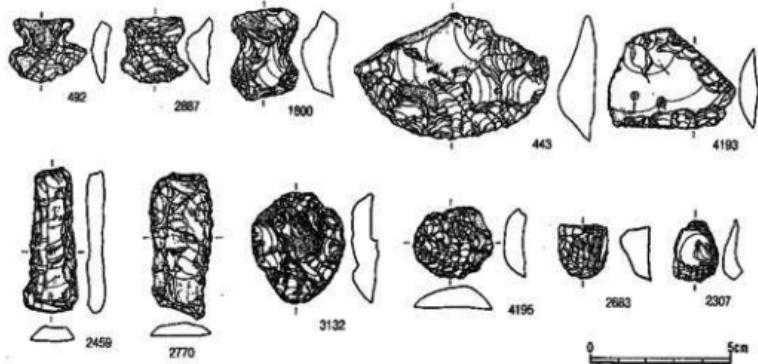
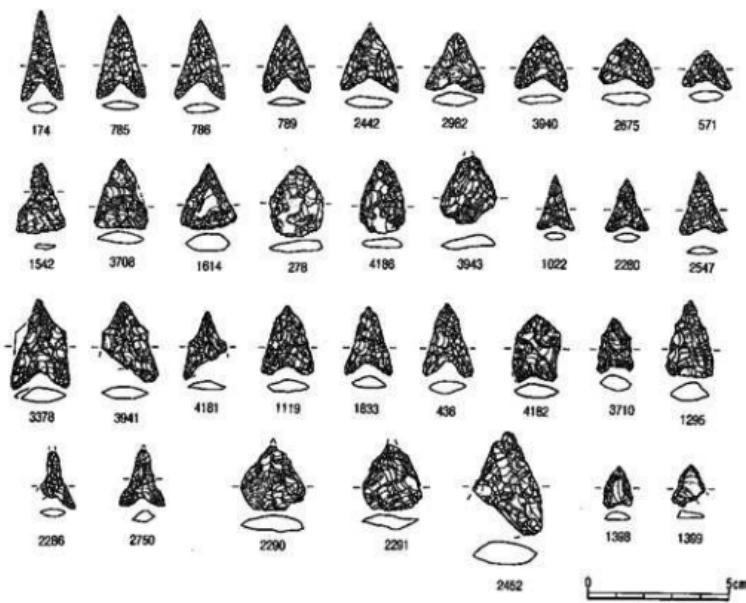
粗製鐵 石鐵のなかには、例えば2290・2291・2452など、分厚くて粗雑なつくりの一群がある。これらの石鐵は、そのつくりの粗雑さゆえに「未製品」とされることが一般的だが、つくりの粗雑なものをなんでも安易に未製品としてしまうことはできないだろう。

これらの尖端は必ずしも銳利でないこともあるが、つくりが粗雑で、時として肉厚でゴロンとした石鐵もまた、早期より存在することが知られている。これらの中には、この後、薄身でバランスの良い石鐵に仕上げるために加工する余地がないものも存在する。すなわち、これらは既に完成されている可能性が高いのである。富士見町机原遺跡（前期後葉、諸磯期）でもこのような一群が認められることをふまえ、本書においては、これらを「粗製鐵」として、完成された石鐵の一形式として認識することとした。なおこれらのうち、大ぶりで身の厚いものについては粗大鐵としてある。

その一方で、この粗製鐵ないし粗大鐵と設定した石鐵の中に、まだ加工の余地を残した、未製品の可能性が高いものが含まれている事実を無視することもできない。これらの多くが、これまでのよう 「未製品」であるとするならば、それがいかなる製作段階でとどまっているものか、製作工程を明示できない現段階では、これを区別することはできなかった。<sup>45</sup>

## 3 搾 器

小形の刃器の中で剝片の縁辺に連続した剝離調整を施し、鈍い刃角の刃部を作りだしているものを搔器とする。178点が出土した。素材剝片の末端に刃を持つものと、側縁に刃を持つも



第361図 石器、様器 (1/2)

### まとめと考察

のがあり、周縁に丁寧な剥離調整を施して円形になったものもみられる。比較的大きな素材剥片を用いたものは、刃部が外湾するものの、直線のもの、内湾するもののいずれも存在する（第361図）。石材は有肩刃広石器と同様、バラエティに富み、黒曜石142点、珪質頁岩14点、頁岩7点、ホルンフェルス8点、チャート5点、玄武岩と粘板岩が各1点である。使用された石材の種類が有肩刃広石器と非常に似ている点も留意されよう。

これらのなかには、ある程度形が整って規格性のあるものと、不定形の剥片に刃を付けたものがあるが、ある程度の規格性を持つものについて触れておきたい。なおこれらのうち、糸巻形搔器、円形搔器、拇指状搔器としたものはいずれも黒曜石製である。石材の使い分けを考える上で興味深い。

**糸巻形搔器** 両側縁より抉りを入れて下端に刃を付け、全体が糸巻きのような形を呈するものである。その形態から糸巻形搔器とした。特に形の整った492は一見すると有肩刃広石器のようであるが、使用痕が刃線に直交しており、有肩刃広石器とは明らかに異なることから、使用法に違いがあるものと判断し、搔器の一器種として認識することとした。なお、同様の石器が豊丘村田原遺跡7号住居址（中越期直前段階）から出土している。

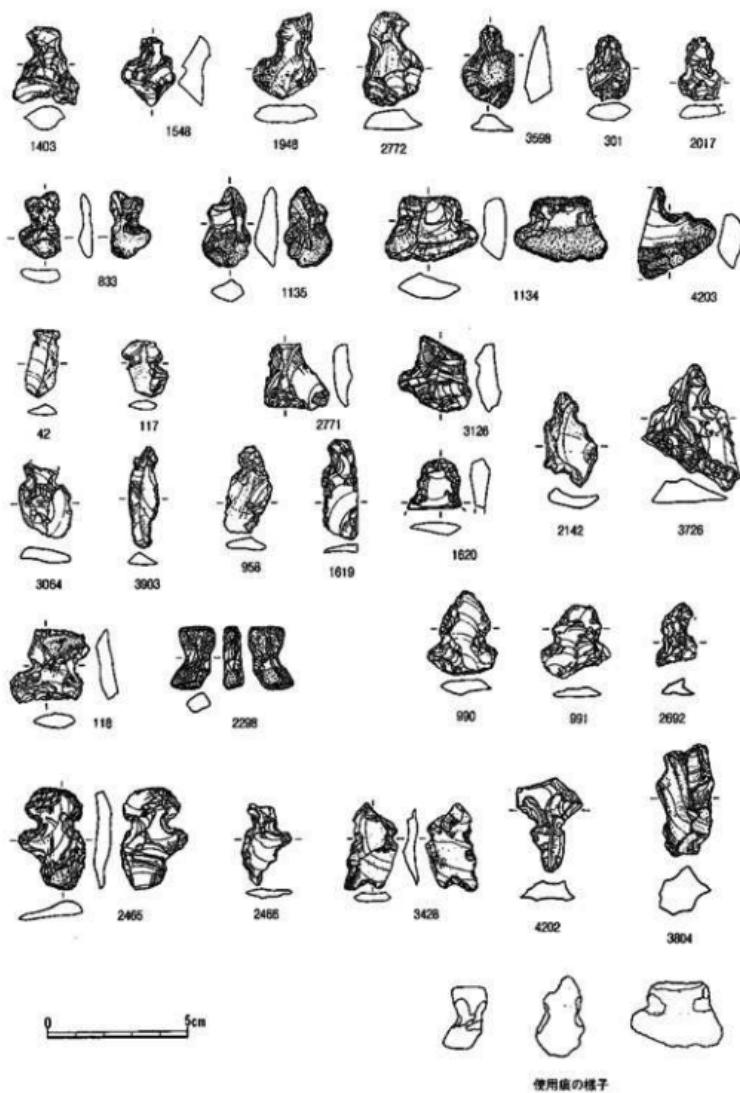
**円形搔器** 周縁に片面から連続する剥離を施し、平面形が円形を呈するものを円形搔器とする。なかには必ずしも全周に調整が及んでいないものもあるが、同じ意図を持って製作されたと考えられるものは円形搔器とした。また小形品もみられる。

**拇指状搔器** ほぼ一方から連続剥離により、刃線は指先のようなゆるいカーブになる。総じて小形であり、2683は刃こぼれが尖端に集中しているが、指でつまんで用いるには小さいうえ丸みを帯びてつまみにくいため、着柄の可能性も考えられよう。

### 4 有抉石器

抉りの付けられた剥片であるが、有肩刃広石器や糸巻形搔器のように刃器として用いられていない、あるいはそうした意図のない石器、もしくは石製品の一群を有抉石器とした。32点が出土し、石材は全て黒曜石である。従来、抉入刺突具、有抉尖頭石器、小型有抉頭磨石器、複数抉入石器などと呼ばれてきたものを内包している。これらのうち小型有抉頭磨石器の用途については、小池孝氏が打製石錐であるとの論考を発表している。<sup>492</sup> またさらに踏み込んで、釣りの疑似鉤ではないかという見方もある。これらの石器はそれぞれ様々な特徴を有しており、有抉石器と一緒にすることは非常に大雑把で曖昧な点もある。しかし、抉りをもつことの他に、非常に特徴的な使用痕を有する例が多いこと、そしてこれらが中越文化に固有な石器であることを重視し、以下にその内容を記す（第362図）。

**有肩刃広石器** 向かい合う一対の抉りを有し、この抉りが剥片の上下どちらかに寄っており、有肩刃広石器のような平面形を呈するものである。有抉石器中もっとも量が多く、22点を数える。この半数近い9点に点状痕、線状痕、摩耗、稜線の潰れなどの使用痕が明瞭に残され



使用痕の様子

第362図 有抉石器 (1/2)

## まとめと考察

ている。この使用痕は一对の抉りを結んだ帯状の部分にはみられず、使用に際してはこの抉りに紐が結びつけられて痕跡が残らなかつたものと推測できる。残りの13点は、形状が使用痕を持つものとほとんど変わらないことから、未使用の製品と考えることができるだろう。

**糸巻形** 向かい合う一对の抉りが、剥片のほぼ中央にあり、糸巻形もしくは鼓形を呈するもの。118と2298の2点あり、うち一点は点状痕などの使用痕がみられる。使用痕のあり方は前述の一群と全く同じであり、同様の使用法が考えられる。

**石鑿形** 石鑿のように三角形の形状で、石鑿でいうところの基部に近い部分に一对の向かい合う抉りを有する。抉入刺突具、有抉尖頭石器などと呼ばれる石器である。990・991・2692の3点が出土しているが、いずれにも使用痕はみられなかった。

**不定形** 複数の抉りを持つものとして2465や3428などがある。そのほか、一定の形状をもない一群である。2466を除き、使用痕がみとめられた。

**無抉形** 明瞭な抉りがないもの。3804がこれである。そもそも抉りがなくては有抉石器という分類には当てはまらないが、剥片のほぼ全体が有抉石器にみられる使用痕と全く同じ様相の使用痕で覆われているために、有抉石器の末席に置いたものである。形態的な特徴より、機能的に近いものと考えてよいのではないだろうか。

## 5 石 錐

穿孔が目的と思われる鋭利な機能部を作りだしているものを石錐とする。103点が出土した。いわゆるつまみを有するものと、棒状のものとの2種がみとめられる（第363図）。剥片を素材として用いた石錐には機能部を長く作りだしたものと、わずかな加工によって剥片の一端を機能部としたものがある。この場合つまみ部は無加工で比較的大きく残されるが、498や953はつまみ部を整形し、一对の抉りを入れている。このほかに石核を素材としたと考えられるものもあり、これはつまみ部が角柱状である。これらの石錐には尖端が折れたり潰れたようになっているものがあり、つづいたり、指でつまんで回転させる際のぶれによるものと考えられる。

石材は黒曜石100点、珪質頁岩3点で、珪質頁岩の3点は全て58号址の出土である。石鑿と同様、坂平においては黒曜石で作られるべき石器であったと考えてよいだろう。

いっぽう棒状の石錐の出土量は、つまみを有するものおよそ半分ほどであるが、3379や4199のように機能部尖端に明瞭な回転痕がみとめられるものがある。非常に安定した回転により残された痕跡であると考えられること、そしてその形状から、着柄されて、現在の錐と同様に両手で揉む使い方が想定されよう。また、3530や4199は両頭で、柄を付け替えて使用したものであろう。

石錐の製作・使用実験において、ある程度の厚みや堅さのあるものに穿孔する場合、指でつまむよりも、柄を着けて両手で揉む方がはるかに効率が良い。つまみを有するものと棒状のものでは、対象物が異なる可能性がある。

## 6 楔形石器

素材の上下両極に一对の打痕を有する一群を楔形石器とした。221点が出土し、不定形剝片石器、石鏃に次ぐ量である。石材は黒曜石だが、36号址の2695のみ、石英であった。

打痕は上下のみならず左右に有するもの、三方向に有するものもある。一端のみに打痕がみとめられるものは欠損品と考えた。表裏が階段状になるほど繰り返し強い力が加わり、打点が鑿の刃のように線状になるものがあるほか、打面を残すもの、小さく潰れて点状になるものがある。その位置も表裏均等なものもあれば裏表でねじれの関係にあるものもみとめられる。観察では、適当な大きさの剝片を無加工で楔や鑿のように使用した結果のように思えるが、むしろ対象物の分割に用いる楔や鑿ならば、ある程度の「刃」を作りだしておく必要もある。この点については今回は明らかにすることはできなかった。

大きさは3～4cmの縦長のものが最も多く、次いで2cm前後の縦長のもので、この二者で楔形石器全体の75%をしめる。そして前者の横長、後者の縦長のタイプがこれに続く。長さ4cmを越える大形品も出土している。また、極端に細長いものがあるが、これについては使用に際して縦に割れたものと理解できる。

特筆すべき事例として、18号址の出土状況があげられる。住居址床面からわずか浮いた状態で黒曜石の集積が発見された。この集積は小剝片とチップを主体としており、石器製作の残滓をまとめて廃棄したような状況を呈していた。この集積中より長さ1cmに満たないような小形の楔形石器が21点、集中して発見されている。18号址からは3～4cm長の楔形石器も4点出土しているが、明らかに出土様相が異なっており、楔形石器の在り方を考える際に重要な意味を持つのではないかと考えられる。

楔形石器については様々な角度から考察されているが、その方向性は大きく二つある。一つはこの石器そのものを作ることを目的とせず、道具として作業に用いた結果できたものであるという見方、もう一つは石鏃などの素材となる剝片を取り出すために、あるいは素材とする石核をつくり出すために意図的に整形されたものという見方である。坂平の楔形石器の観察では、特に後者に属すると思われるような石器を判別することはできなかった。

## 7 不定形石器

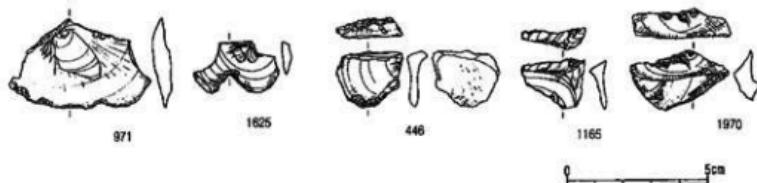
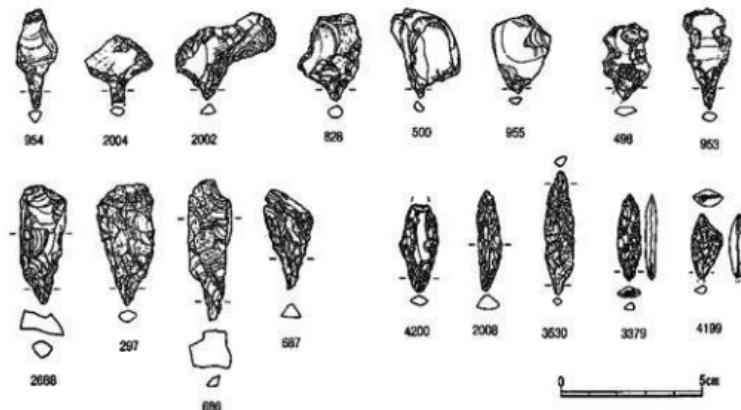
一定の形を持たない、すなわち不定形な石器である。意識的に連続剝離調整を施した「石器」と、鋭い縁辺を刃物として用い、刃こぼれや線状痕、摩耗などの使用痕を有する「剝片」とでは大きく意味合いを異なるが、目的を持って使用したものはその時点では「道具」であり、石の道具、すなわち石器であると定義し、ここでは不定形石器として一括する。なお、この両者の間、特に微小剝離痕の同定については、どちらとも区別しがたいものも数多く含まれていることを断っておく。発掘時の移植鍬やジョレンの傷である疑いのあるものは注意して除いた。

刃部の形態から、外湾刃、直刃、内湾刃と大別できるが、これは素材剝片の形状に制約され

## まとめと考察

るところが大きいと考えられる。連続剥離調整を施しているものについては、片刃、両刃ともにあり、片刃の中には、第二章第二節で搔器状の刃と表現した角度の大きい刃部のものがある。また、片刃の石器については剥片の複数の縁に刃をもつものがあるが、これらの刃は常に同一面にあるわけではなく、むしろ剥片の表裏にあるものがほとんどである。石器を手に持ち、対象物を搔いたり削ったりする際に、切れ味が落ちると剥片を持ち替えて機能させる箇所を変え、同じ方向に動かして使用した結果、表と裏の異なる位置に刃こぼれが形成されたものと考えられる。

このような中にいくつかみられた、特色ある刃の付き方をしたものについて詳述してみよう。  
小さな刃をもつもの 971や1625など、微小剥離がごく狭い部分に集中し、小さな刃を形作っているものである（第363図）。一部分のみが刃とされているため、多くの場合この刃は小さく内湾したような形となる。中には、剥片の縁辺が小さく内湾するところを意識的に用いてい



第363図 石錐、不定形石器 (1/2)

の場合もある。あるいは、一点に強い力が加わって刃こぼれしたようなものもみられる。いずれにしても何か細いものを削ったり搔いたりしたのであろうか。

この小さな刃も、単独、複数のものがある。複数の刃をもつものについては、他の不定形な剥片石器と同じで、刃が表裏異なる面からつくり出されている、もしくは刃こぼれしている例が多い。

**T字剃刀状の刃** 剥片の縁辺ではなく、剥離によって形成された稜線が刃になっているものである。いわゆるT字剃刀の刃の付けられる部分に近い。使い方としてはまさにT字剃刀と同様、搔くようにするほかないと思われる。446・1165・1970がそれである（第363図）。

またこの他に異形石器とも言うべきものが数点ある。剥片の縁辺が剥離されているが、刃としてつくり出されたものではなく、剥片そのものも薄く、実用に耐えないような一群である。

### 8 未製品と加工剥片

未製品について 報告書には、しばしば「未製品」とされる石器が登場する。磨製石斧の生産遺跡などの特殊な性格の遺跡ならば、製作の各工程を示す資料が出土するため、製作途上の石器、すなわち未製品がどの段階のどのようなものか、認識することは可能である。黒曜石の原石、剥片、石核、チップ、そして完成品の全てが残された集落であれば、この集落内で黒曜石の石器が製作されていたと考える根拠にはなる。

例えば、「石鎚の未製品」と言った場合には、「作りかけの石鎚」ということなのであろう。しかし、未製品とされる石器を観察・実測する中で、石鎚をはじめとする小形石器を製作するとき、途中でその作業をやめてしまうことに、不自然さを感じていた。これはあくまでも経験的なものだから、正しく当時の人の間と同じ作業工程を踏んでいるという確証はないが、手頃な大きさの剥片を割り取った段階で作業を中止することはあっても、いったん作り始めれば、それを途中で放棄することはほとんどない。ゆえに、完成された石器に対し、未製品というものを設定することに疑問を感じたのである。例えば、3124や3851のように基部の抉りを入れる際に、その剥離がのびて尖端を欠損したことが推察できるようなものは未製品（正しくは失敗品か）とすることもできるだろう。集落に残された未製品とは、いかなる存在なのだろう。

石器はどのような状態で坂平の集落に持ち込まれたのか。原石や目立った剥片、チップの存在しないチャートや頁岩は、完成品が持ち込まれたものと推察される。その一方で原石や剥片の多量に出土する黒曜石はただちに、原石で持ち込まれ、集落内で石器製作が行われた、と判断されがちである。しかしほかの石材の石器に照らし合わせて考えれば、製品が持ち込まれている可能性もそれなりに高いといえるだろう。この場合、次の3パターンが想定できる。

- 1 完成品で持ち込まれたもの。
- 2 半完成状態で持ち込まれたもの。
- 3 原石で持ち込まれたもの。

## まとめと考察

現段階ではその各パターンの証拠を抽出することは難しいが、未製品といわれるものは、2に該当するものではないかと推察される。半完成状態で持ち込まれることについては、原石から手頃な剝片を取りだす労力と運搬時の労力の軽減、失敗の危険性を少なくする意味があるとみることもできよう。<sup>66</sup>

**加工剝片** 打撃や剥離調整など、明らかに何らかの加工はされているものの、何を製作しようとしているのか、果たして本当に何かを作ろうとしていたのか、その加工意図が判断できないものを加工剝片とした。

## 9 石材

**石材の種類と量** 小形石器に用いられている石材は、黒曜石が圧倒的に多く、次いで珪質頁岩、チャートとつづくが、その差は歴然としている。黒曜石の原石・剝片・石核は数多く出土しており、製品もあわせて重さに換算すると、実に40kgを超える黒曜石が、ここに運び込まれている。もちろん未調査分も含めれば、かなりの黒曜石が持ち込まれたことは想像に難くない。一方、珪質頁岩やチャートなど他の石材は、製品を含めて1kgに満たない。この圧倒的な黒曜石優位からは、原産地が比較的近いこと、ほとんどの石器の素材に適したものとして黒曜石が選択されていたことがうかがわれる。

原石として遺跡から出土した石材、及び石器の製作によって生じるチップや小剝片は全て黒曜石である。剝片についてもほとんどは黒曜石で、チャート・水晶・珪質頁岩は若干みとめられる程度にすぎない。これらのこととは、坂平における小形石器の製作はそのほとんどが黒曜石を用いてなされ、他の石材の石器づくりはゼロとは言えないまでもほとんど行われていなかったことを物語っている。

なお、黒曜石は現在の下諏訪町星ヶ塔産<sup>66</sup>、珪質頁岩は山梨県塩川の上流域に多く産出するものが運ばれているという教示をいただいている。

**器種による石材の使い分け** 先に記したように石鏃と石錐は数点、楔形石器は1点、不定形の剝片石器及び使用痕のある剝片でも19点を除いて全て黒曜石であり、有抉石器にいたっては全点が黒曜石である。これらの石器もしくは剝片は、坂平においては黒曜石で作られる、もしくは黒曜石を用いるべきものであったことを示している。

一方、このような石器と素材の関係がないのが有肩の刃広・側刃・諸刃の各石器と搔器である。用いられる石材の種類は他種類にわたる。特に有肩石器は、総点数に対して黒曜石以外の石材が用いられている比率が高い。不定形剝片石器および使用痕のある剝片も、1,165点中19点と点数には大きな開きがあるが、使用される石材は似たような傾向を示している。有肩石器、搔器についてはその性格上、鋭利ではあるが反面、脆弱な黒曜石ではなく、粘りがあって刃こぼれしにくい石材を好んで用いている可能性は考えられるだろう。

**原石と素材剝片** 黒曜石の原石は、最大のものでも小児の拳大程度、重さにして135gである。

る。主体となるのはこれより一周りから二周り小さい塊のもので、住居址内から出土するもののほか、二箇所でこのような黒曜石の集積が確認されている。

坂平遺跡出土の黒曜石は星ヶ塔産で、「原石を多く持ち込んでいる」「原石は河原を歩いて拾い集めたかのような、転石が多い」との指摘があった。<sup>56</sup> 大きさなどからみて、河原で比較的容易に入手でき、持ち運びに適した大きさの原石を集めたものと考えられるが、石器に加工することが可能な剥片を割り取ることができないような小さな原石もあり、石器製作に適した原石を選んでいたというよりは、「何とか使い物にならないか」くらいの気持ちでとにかく拾えるものを拾ってきた、という感じが強い。

原石と同様に、石核や剥片も非常に多く出土している。中には石刃と見紛うような、見事に剥ぎ取られた剥片もみられるが、どうにも加工のしようがないような、小さく分厚いものが多い。むろん残されていないものは製品に加工され、外に持ち出されているのであろうから、そちらの方が多い可能性もあるが、残された剥片や石核、原石を見る限り、効率よく的確に石器の素材となるような剥片を取り出せていないようである。これは原石の大きさや性質による制約もあったのだろう。そしてまた先に述べたような、完成品、半完成品として集落間を移動した石器が存在した可能性も、決して無視することはできない。

## 第四節 土器の煮炊痕

出土した土器はみな、食物の熱処理加工（煮炊き）具である。したがって外壁は常に火熱を受け、内壁は内容物によるお焦げなどの痕跡がつく。以下、観察した使用痕について見てみたい。

外壁で先ず目につくのは煤の付着である。口縁から胴下半にかけてみられ、中にはかさぶた状に厚く残しているものがある。また胴部下位から中位に帯状につくものも見られる。そして煤の付く部位が、褐色または黒色に変色している個体もある。煤は、焚き火の赤い炎と煙によるものであり、したがって器の上手に付着する。その下端線から下手は、熱を受けて赤色ないし橙色に変色している。またひび割れて、膚が疲れている。炎や煙が当たらず、赤変するほどのこの位置は、燃ができて常に高温が保たれているところである。小片に細かく割れているものや、一部が失われているのはこのことに因る。ちなみにおよそ形に復元できた46個体のうち、底部を消失しているのは38個体でおよそ83%である。

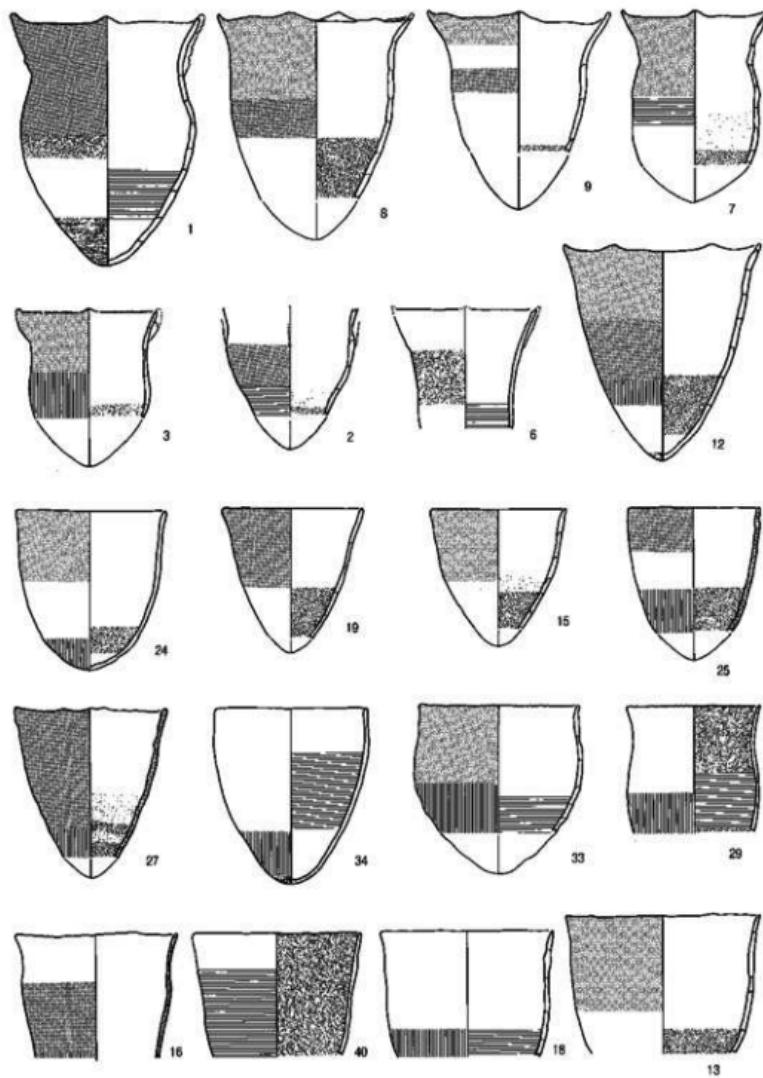
いっぽう内壁のお焦げは、内容物または煮汁が炭化したものである。また吹きこぼれて外壁に垂れてしまっているものもある。外壁同様にお焦げの付着する場所が、褐色から黒色に変色しているものや、膚が荒れてざらざらとしている個体がいくつかある。お焦げの上端線は、器高の3分の1くらいの胴部下位あたりに集中していて、そこは外壁の煤の下端線に当たる。

またお焦げの下端線は、1点を除いてすべて底から2cmから6cmにある。そこから下方にはお焦げが全く付着せず、きれいな膚をしている。われわれは、収穫祭や体験学習の際に「アワ粥」を炊いて食しているが、そのとき使用する平底の土器にも、同様に、底面とのあいだにお焦げの付かない部分が生じることを確認している。そこは灰ができるたまり、焦げつくほど温度が上昇しないことに起因している（第364・365図）。

以上のように尖底土器は、外壁の胴下半から口縁にかけて煤け、内壁の下半が焦げついていて、両者は互に相反し重ならない関係にあることがわかる。このことは『阿久<sup>アグ</sup>』で行った同類の土器の観察結果とも同じであり、「曾利<sup>カタリ</sup>」または「唐渡宮<sup>カラハシノミコト</sup>」で行った中期の土器の観察結果とも変わらないことから、煮炊きの方法に差のないことが知れる。

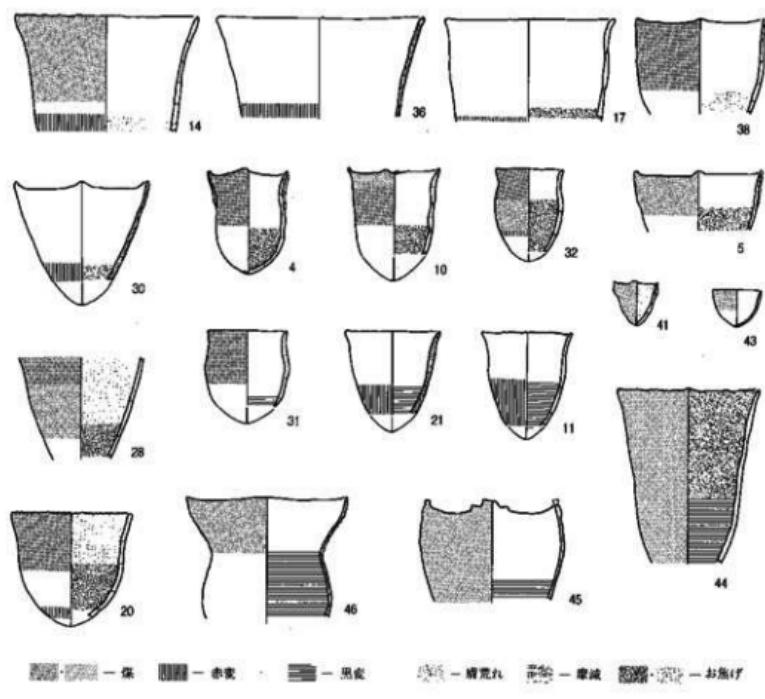
ところで、尖底の容器をどのようにして固定したのだろう。灰は炉に僅かに残っているが、固定できるほどの量ではない。地床炉も土器を据え置くように大きく掘り窪めてあるものは一つも見当たらない。けれどよく見ると、炉の中や付近に小穴があり、その性格がいかにも気にかかる。このことは五章二節で詳述してある。径が20cm前後、深さが8~17cmくらいの大きさで、炉の軸線上にあるものが多く、このうち19例が入り口側に掘られている。

いっぽう土器では、尖底部の接地面がすべすべしているものや、灰が付着しているものが5



第364図 前期前葉土器の煮炊痕 (1/9)

まとめと考察



第365図 前期前葉土器の煮炊痕 (1/9)

個体に見られた。灰の中または小穴に据える際に付着したものと推測される。いま見た内壁に付着しているお焦げの部位はこれらと対応しており、いかにも示唆的である。阿久にも1例だけ、摩減痕のついた土器が確認されている。

## 第五節 坂平遺跡の時代

これまで一通りみてきたように、坂平遺跡の特筆すべき点は、大きく三つある。

- 1 前期初頭から前葉にかけて營まれた大規模な集落であること。
- 2 土器文化が在地系の下吉井式から繊維を含む中越式へ交替したこと。
- 3 多様かつ多量の石器群を有し、とりわけ中期的な磨りうすと鏡餅状扁平石の保有量において抜きん出ていること。

そこで、これらの背景をごくおおざっぱに遠望してみよう。

### 一、交錯する種族文化

こんにち知られている限り、中部高地におけるこの時期の大規模な集落遺跡は、桂川上流で下吉井期の原平、甲府盆地東縁で神之木台～下吉井期の駿遊堂、糸魚川一静岡構造線沿いでは中越期の上北田、下吉井～中越期の坂平、下吉井・花積下層期の斧沢・天狗山、八ヶ岳西麓で中越期の阿久・阿久尻、霧ヶ峰南麓で花積下層～中越期の高風呂、源訪湖の南岸と北岸でそれぞれ中越期の十二ノ后と武店、松本盆地南縁で木島期もしくは古段階中越期の剣ノ宮、花積下層期の矢口、そして伊那谷で木島期～中越期の中越があげられよう。これらのうち、前期後葉の諸磯期まできわめて長期間にわたって継続する集落は、駿遊堂と阿久と十二ノ后的三集落のみである。

これらの集落は概ね並行もしくは相い前後して營まれているわけであるが、初頭期の土器文化はおよそ三通りであって、互いに入り組んでいる。

それぞれ土器の顔つきが異なるように、住居の形態や石器の器種にも違いがみられる。駿遊堂や原平など神ノ木台・下吉井系の集落の住居はおよそ不整梢円形で、柱穴の配置も不規則である。少し凹んだ地床炉を有し、平板状の磨りうすや平板石が残されておりする。大形石器では粗刃櫛器が目立つ。

在地の花積下層系の集落の住居は、およそ小ぶりなざっとした方形ないし長方形で、地床炉や柱穴のない住居もある。やはり平板状磨りうすと平板石が残されたりしているが、注目されるのは、凹んだ磨りうすが一足早く出現していることである。

これらに並行する下伊那の田井座や田村原遺跡、中越、剣ノ宮など在地の木島系の集落では、住居はだいたい不整円形もしくは4本柱の脇張り隅丸方形、または隅丸長方形となっている。田村原の住居址には扁平な河原石や平板状磨りうすが残されていた。またこの時期、大形石器では棒状櫛器や先端角錐状石槍が登場している。

ちなみに、笛吹川左岸の中道町立石遺跡もほぼ同じ頃の木島系の集落であり、住居はおよそ

### まとめと考察

胴張り隅丸方形で4本柱、やや凹んだ地床炉を有する。その炉に蓋をするかのようにして、平板状磨りうすが残されていた。

このように、それぞれ三者三様であって、これはとりもなおさず文化の違いであり、ひいてはそれを担った種族の違いであろう。前期初頭の中部高地においては、三系統の種族文化が交錯していたのである。

さて、以上の大規模な集落遺跡の分布範囲は、後の中期の「井戸尻文化」の中心地帯にはば重なっている。この範囲では地点を変えつつ、つづく前期中葉の黒浜並行期、後葉の諸磯期、そして前期末へと多くの集落が営まれ続け、その果てに中期の集落が誕生する。すなわち中期の井戸尻文化は、この時代に淵源すると言っても過言でないだろう。

## 二、海進と降灰

では、前期初頭から前葉にかけてこのような大規模集落が中部高地に出現した要因は、何だろうか。

まずあげられるのは、海進である。後氷期の気候の温暖化に伴う海面の上昇は、ちょうど6000年前、前期の前葉ころにピークに達したとされる。いわゆる繩文海進であり、関東平野では特に著しく、海岸線が奥深く進入したことが知られている。

いまひとつ、早期末の大異変は、6300年前ころに南九州沖で起こった海底火山の大爆発である。鬼界カルデラから吹き上げた火山灰（アカホヤ）は、東北南部にまで達した。これによって、南九州の早期文化は壊滅する。その影響は東海地方にも及び、愛知ではアカホヤの降下によって早期の集落が全滅したとさえいわれる。

大勢として、温暖化と海面の上昇という気候と地理環境の変動、加えて南九州沖の火山活動がもたらした急激な環境の悪化によって、早期という時代に終止符が打たれたことは、想像に難くない。

これまで、中越式土器の母体となったのは、東海地方から中部高地へ入ってきた木島系文化だと考えられてきている。木島系文化的な潮流を促したのもやはり海進であり、アカホヤ火山灰の降下であったろう。伊那谷に到達した支族は、中厚手の在地化した土器を作るようになり、新たな手法も加える。すなわち、古段階の中越式土器といわれるものである。

いっぽう、南関東から桂川上流域あたりに展開する神ノ木台・下吉井系の文化も、似たような事情の下にあったろう。峠を越えて甲府盆地の東縁に達した支族は、そこで在地化した土器を作るようになる。坂平に到達したのは、その辺から枝分かれした一派であろう。

## 三、中越文化の誕生

いっぽう、中部高地に先んじて新たな息吹に満ちた土器文化の創造が、荒川に沿って形成され

れた深い入江に沿う台地の辺りでなされた。羽状の縄文を地文とする、平底の花積下層式土器の誕生である。以降、前期の関東地方はこの系統の上器文化で覆われる。前期中葉には中部高地の中越式土器文化も終息し、この縄文地系の土器文化に席捲されることになる。

花積下層文化も貝塚を形成した奥東京湾あたりと内陸の赤城山西麓あたりとでは、土器の様相や住居形態、石器の組成を異にしている。赤城山西麓の集落では、平底と尖底の土器が共存している。その花積下層式の尖底土器は、浅間山の南麓あたりに至ると在地化して、千曲川を渡って峠を越え、こちらにまで及んでいる。縄文地を除けば、在地の下吉井系土器とさして異なるところはない。

ちなみに、赤城西麓の集落の住居で整ったものは、およそ隅丸長方形で4本柱。炉は地床か、石組炉、埋甕炉ときわめて変化に富み、しばしば後の二通りが組み合わさる。なかには柱穴や炉のない住居も見られ、浅間南麓からこちらの在地系の住居形態に通ずる。

木島も下吉井も花積下層も、本来は海浜に近い平地民の文化であったものが、ひとたび内陸へ入って中部高地に達すると、すっかり山地民の文化に変貌してしまう。あるいは、それぞれが補完し合って、一つの種族文化をなしている。

こうして、東海系・南関東系・北関東系の三つの種族文化が上伊那から松本盆地南縁、諏訪盆地から八ヶ岳西南麓において接触し、互いに反応し合った結果、中部高地に独自な新石器文化が生成されたと考えられる。すなわち、中越文化の誕生である。

このとき、住居と土器の形式は在地の木島系の制をとったが、土器の作りは木島系の中厚手のものと、在地の下吉井系のスサ入り厚手のものとの、二通りが並び行われることになった。これまで中越式の新段階といわれてきた土器群である。早期來の条痕文尖底土器は、ついに終焉の時を迎えたが、スサ入りと尖底の形質を中越式土器に遺し伝えたのである。

ほんとうのところ、異なった種族文化が混じり合い、融合するとはどのようなことなのか、具体的にも感覚的に理解し難い。だがそこに、なにか新しい気風と大いなる活気が噴出し、時代を画したことは、確かである。中越文化に固有的な方形の掘立柱建物は、その最たる所産であつただろう。そして住居様式においても、阿久尻に典型例がいくつかあり、坂平にもみられるような側柱をもつ形式のものが建てられたのである。

#### 四、表微化された磨りうす

ひるがえってもう一度、赤城山西麓の花積下層期、三原田城や五目牛清水田などの集落にもどってみよう。そこで隠すべきは、中期と同様な形態の磨りうすが、ごく普通に存在することだった。磨り石・凹石類はもちろんのこと、石鋸類も相当にある。ここで、磨りうすは生まれ変わったのである。

坂平の集落が多量に保有する中期的な磨りうすは、赤城山西麓での出来事を引き継いだも

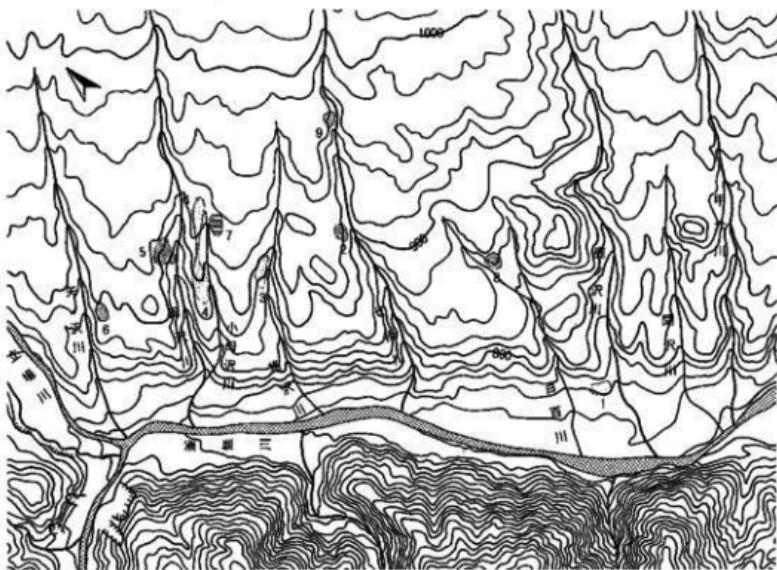
### まとめと考察

のにはかならない。そして、磨りうすとともに坂平の住民が異常なまでに執着したのが大きな「餅の石」であり、勇躍それらの大中心地をなした。そこに、中越文化誕生の一翼を担った坂平の人々の豊かな食文化と活気、そのものの証しを見る思いがする。

ところで、赤城山西麓で誕生したこのような磨りうすの形態は、「唐波宮」で考察したように、女性、ひいては食物女神を表徵している。そして、同時並行して起こった炉の革新、すなわち石を組み、火壺を埋める風習もまた、火に関わる観念世界を表明したものにはかならない。そして、磨りうすやその上石である磨り石類と火との関係は、先にみてきた通りであるから、そこでなされた二つのことは、同一の観念にもとづいている。

ここでは詳しく立ち入らないが、それは、赤城山西麓の花積下層文化において鮮明に確立された「火山的世界觀」<sup>73</sup>であると考えられる。

坂平の集落が大量に保有した磨りうすや「餅の石」の背後には、実に、そのような表徵世界が見え隠れしている。



第366図 前期の井戸尻遺跡群 (1:40000)

- |      |       |          |      |         |
|------|-------|----------|------|---------|
| 1 坂平 | 2 森平  | 3 向原・唐波宮 | 4 中尾 | 5 机原三本松 |
| 6 机原 | 7 小母沢 | 8 井戸尻    | 9 薙畑 |         |

## 五、坂平にはじまる

第一章でふれたように、坂平遺跡は、釜無川の谷筋にあっても八ヶ岳の山麓という、独特な土地感覚の場所に立地している。この糸魚川—静岡構造線に沿う釜無川右岸に、遠くは南アルプス市（旧構形町）長田口（中越期）、近くは白州町上北田、同板橋（木島期）<sup>366</sup>といった遺跡があり、北西に向かえば茅野市芥沢・犬狗山遺跡があり、その先は諏訪盆地に至ることを思えば、糸静線沿いの道が当時の主要な交通路であったことは疑いない。おそらく、在地の下吉井系の人々も駅迎堂あたりから笛吹川沿いに下り、釜無川筋に転じて、この地に至ったことだろう。住居の入口、ひいては集落の向きが糸静線方向をとっているのは、いかにも示唆的である。

そしてこの地で文化的革新をなしとげた人々は、つぎの前期中葉の黒浜並行間に山麓部へ進出する。森平、向原～唐渡宮、中尾、机原三本松へと横並びに集落が築かれる。つづく後葉の諸磯期には机原、机原三本松、中尾、小母沢、井戸尻（日向）の各集落が営まれる。そして前期最末の龍畠、机原三本松の集落をへて、中期の井戸尻遺跡群に引き継がれるのである（第366図）。

鹿ノ沢川と矢ノ沢の間、3キロメートルの範囲で連続と集落は継続し、中期へと引き継がれている。このことは、阿久や十二ノ后、駅迎堂における集落の継続性に匹敵するものである。

ここに至って、井戸尻遺跡群は前期初頭から中期の末まで、二千年にわたって営まれた集落群であることが、実感をもって認識される。坂平こそ、その摇籃の地であった。

## まとめと考察

### 注

- (1) 「中越遺跡 発掘調査報告書」宮田村教育委員会 1990
- (2) 「中部高地に開花した中越文化」長野県考古学会2003年度秋期大会資料 2003
- (3) 長沢宏昌「山梨県における縄文時代早期末の様相—国中地域と郡内地域—」『研究紀要』16 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター 2000
- (4) 谷谷昌彦「土器型式より見た縄文早期と前期との境について」「早期終末・前期初頭の諸様相」縄文セミナーの会 1994
- (5) 下平博行・黄田明「土器型式より見た縄文早期と前期との境について」「早期終末・前期初頭の諸様相」縄文セミナーの会 1994
- (6) 「下弥堂遺跡」御代田町教育委員会 1994
- (7) 原本に当たることができなかつたため、注イを参考にした
- (8) 長野県考古学会源訪地区会「中越文化の集落と住居と建物—阿久尻遺跡をめぐって—」長野県考古学会誌67 長野県考古学会 1992
- (9) 注8の学習会において、松永満夫氏の案として小林公明が紹介しているが、これによれば側柱のある住居は中二階構造が想定でき、主柱穴の内側が吹き抜けになるとされる。すなわち主柱穴の外側が、天井の低い中二階構造となり、この下が器物を置くスペースとして利用されていたと考えられる。この部分は普段は歩き回ることが少ないとために、床面がしままっている。ということになろうか。側柱のある住居と、主柱穴に開まれた床が堅くしままっている住居には相間関係が認められる。(表4参照)  
前掲書注8に同じ
- (10) 佐藤信之「第4章阿久尻遺跡をめぐる諸問題 第1節出土造構の検討 1住居址」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その5—』長野県教育委員会 1982
- (11) 長崎元廣氏は論考の中で、このような小穴について触れている。  
長崎元廣「中部地方における縄文前期の堅穴住居」信濃31-2 1979
- (12) 「立石・宮の上遺跡」山梨県教育委員会 1996
- (13) 「広井出遺跡」茅野市教育委員会 1995
- (14) 「唐渡宮」長野県富士見町教育委員会 1988
- (15) パリノ・サーヴェイ株式会社「第Ⅶ章 方形柱穴列柱旗の土壤化学分析報告」「阿久尻遺跡」茅野市教育委員会 1993  
小林深志「第Ⅷ章 まとめ」「阿久尻遺跡」茅野市教育委員会 1993
- (16) 「矢口・唐沢南遺跡」塩尻市教育委員会 1994
- (17) 中越遺跡では全容が不明ながら「方形柱列」として「3基の大型ピット」が報告されている。このほかに注目すべき造構として、あたかも建物址のような柱穴配置をもつ62号住居址の存在がある。  
前掲書注1に同じ
- (18) 「曾利」長野県富士見町教育委員会 1978
- (19) 注14に同じ
- (20) 「駿遊堂I」山梨県教育委員会 1986
- (21) 「原平遺跡」山梨県教育委員会 1999
- (22) 長沢宏昌氏のご教示による。  
注3に同じ
- (23) 「上北田遺跡」白州町教育委員会 1993

- (24) 「田村原遺跡」 農丘村教育委員会 1974
- (25) 「カゴ田」 飯島町教育委員会 1978
- (26) 注1に同じ
- (27) 注25に同じ
- (28) 注23に同じ
- (29) 阿久遺跡の報告書において、岩崎孝治氏が考察している。  
前掲書注10に同じ
- (30) 注1に同じ
- (31) 這構は中期前葉の新造期を主体とするが、調査区全体にわたって早期の条痕文系土器が出土している茅野市判ノ木山西遺跡で、これに類する石器が6点出土している。また、粗刃縦器もかなり出土している。這構外の出土であり、帰属時期は不明であるが、条痕文系土器に伴うものかもしれない。  
『長野県中央道埋文化財包藏地発掘調査報告書—茅野市・原村その3—』 長野教育委員会 1981
- (32) 注25に同じ
- (33) 阿久遺跡の報告書で「円錐状石器」と分類された自然縦の或るものは、これに相当するかもしれない。  
前掲書注10に同じ
- (34) 注14に同じ
- (35) 桶口誠司「住居址内出土の石皿について」 山麓考古16号 素人考古学研究会 1984
- (36) 『三原田城遺跡 一間越自動車道地域埋文化財発掘調査報告書 第13集一』 群馬県教育委員会 1987  
『五目牛清水田遺跡』 群馬県教育委員会 1993
- (37) 9号出土のこの磨りうすは、すぐ近くに磨り石を伴っていた。また、2個の平板石が残されていた。  
『長門町中道』 長門町教育委員会 1984
- (38) 『高風呂遺跡』 茅野市教育委員会 1986
- (39) その出土状態は、長門町中道の場合とよく似ており、1号住居址の出入口部の側に磨りうすと平板石と磨り石とが並んでいた。  
『後平遺跡』 佐久町教育委員会 1987
- (40) 発掘時からこれらを「石餅」と呼んできた。一足先に小松隆史がこれについて述べたが、整理途上であったため、「石皿」や「石餅」の数量に違いがある。  
小松隆史「绳文前期の石皿」 古代文化53-2 2001
- (41) 前掲書注10に同じ
- (42) 注20に同じ
- (43) 『釈迦堂Ⅱ』 山梨県教育委員会 1987
- (44) 注21に同じ
- (45) 『中津遺跡・揚久保遺跡』 山梨県教育委員会 1996
- (46) 注12に同じ
- (47) 注24に同じ
- (48) 注1に同じ
- (49) 注38に同じ

## まとめと考察

- (50) 注6に同じ
- (51) 「塙田遺跡」 御代川町教育委員会 1994
- (52) 「天狗山遺跡」 茅野市教育委員会 1993
- (53) 「十二ノ后遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—諏訪市その4—』長野県教育委員会 1976
- (54) 「元宮神社東遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—阿智・飯田・宮田地区—』長野県教育委員会 1971  
大森隆志「縄文時代の磨製石斧について」『山梨考古学論集』II 山梨県考古学協会 1989  
前掲書注10および53に同じ
- (55) 2003年5月10日に井戸尻考古館で開いた坂平遺跡遺物検討会における、大町市教育委員会の島田哲男氏のご教示による。
- (56) 下記文献で佐原真氏が紹介している。この2点の使用痕がセミヨーノフのいうものと同一のものは確認していない。  
佐原 真『斧の文化史』1994 東京大学出版会
- (57) 武藤雄六氏のご教示による。
- (58) 五味一郎氏が機能的な側面から分類・考察したものがある。  
五味一郎「縄文時代早・前期の石斧—その農具としての定立—」信濃32-7 1980
- (59) 斎藤幸恵「押型文系土器文化の石器群とその性格」『越後押型文遺跡調査研究報告書』長野県岡谷市教育委員会 1987  
また前期には、抉りの浅い「八」の字状の基部をもつ石鎌は、下諏訪町式居遺跡や源助市十二ノ后遺跡、茅野市広井出遺跡にもみられる。宮田村中越遺跡ではさらにその出現率は高く、G、H、I型と分類された浅い抉りの石鎌で40%にのぼると報告されている。
- 小池 孝「第2節 I. 4. 縄文前期の石器」前掲書注1に同じ
- (60) 久保勝正 2002 「石鎌形態とその変遷 —サヌカイト分布圏からみた様相—」『縄文時代の石器 一関西の縄文草創期・早期一』関西縄文文化研究会
- (61) 河原喜重子氏は石鎌の製作工程を段階別に資料を提示して説明している。このようにとらえることができるのなら、未製品とされるものがいかなるものか説明できよう。  
河原喜重子「第III章 1. 小形石器資料の分析—石鎌製作工程における段階別資料の提示を中心にして—」『越後遺跡』長野県岡谷市教育委員会・塙尻市教育委員会 2000
- (62) 小池氏は「縄文時代のオモリとしては小さいこの石器が、どこでどの様に用いられたかは極めて興味深い問題である。」とし、明晰な使用痕跡の成因を「実験的手法によって明らかにすることが、その第一歩と考えている。」としている。
- 小池 孝 1989 「縄文時代前期初頭の打製石錐—豊富な原材から生まれた特異な黒曜石製石器一」長野県考古学会誌58
- (63) 小林公明の着想であったが、朝香輝朗氏（埼玉県在住）から、骨製の釣り針と苧麻の織維を燃った糸にこの石器の模造品を装着し、餌を付けない状態でイワナを二尾釣り上げることに成功したという実験結果が報告された。明らかに黒曜石片を魚が追うことを確認したとしている。水中で不規則な動きをし、光を反射する黒曜石が、魚の興味を引いていたことは想像に難くない。
- さらにこの場合、おもりとしての効果を期待して針からはなして装着すると、魚がそちらを追って針にかかるので、現在みる「ルアー」のように、針の直前に装着するのが

効果的だという。

- (64) 武藤雄六氏のご教示による。なお2004年2月11日に諏訪市公民館で開催された「第16回 諏訪地区遺跡調査研究発表会」での、下諏訪町教育委員会による星ヶ塔遺跡の発掘調査報告において、黒曜石の採掘坑から石器ブランク（いわゆる未製品）が何点か出土しているという報告がなされた。
- (65) 板平遺跡から出土した黒曜石の総量は、製品が8.195g、原石・石核・剝片32.678gで計40.873gであった。ただし、板平遺跡の発掘面積は、推定される集落のおよそ5分の2弱と考えられることから、さらに多くの黒曜石が持ち込まれていたことは間違いない。
- (66) 注55の検討会における、下諏訪町教育委員会の官坂清氏のご教示による。
- (67) 山梨県明野村教育委員会の佐野勝氏のご教示による。
- (68) 官坂清氏のご教示による。
- (69) 島田哲男「第4章 土器の使用痕」前掲書注10に同じ
- (70) 小林公明「煤とお焦げ」前掲書注18に同じ
- (71) 小林公明「深鉢の煮炊痕」前掲書注14に同じ
- (72) 神奈川考古同人会主催のシンポジウム「縄文時代早期末・前期初頭の諸問題」における山下勝年氏の報告。
- 神奈川考古 第18号 1984
- (73) 「火山的世界觀」については、小林公明「新石器時代中期の民俗と文化」（『富士見町史 上巻』 1991）を参照されたい。
- (74) 保阪太一「長田口・中畑遺跡」2003年度上半期遺跡調査発表会要旨 山梨県埋蔵文化財センター・山梨県考古学協会 2003
- (75) 『板橋遺跡』白州町教育委員会 1989

## 付 記

1995～96年に発掘調査された机原三本松遺跡の資料に、比較検討のために他の遺跡の資料を加え、放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代測定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して行った。このなかで板平からも3点を資料化した。詳細は机原三本松の報告書（『机原三本松遺跡』長野県富士見町教育委員会 1998）に記載されているので、ここでは結果のみ、参考のために記すこととする（表5）。

表5 放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代測定結果

遺跡名	遺構名	時期	測定年代	資料番号	測定番号
机原三本松	37号住居址	縄久保	9,150±100 (7,200B.C.)	1	Gak-19835
板平	58号住居址	中 越	7,120±90 (5,170B.C.)	5	Gak-19840
板平	2号住居址	中 越	5,940±80 (3,900B.C.)	7	Gak-19841
板平	14号住居址	中 越	5,860±80 (3,910B.C.)	8	Gak-19842
原渡宮	17号住居址	黒 浜	6,800±80 (4,850B.C.)	9	Gak-19843
机原三本松	32号住居址	黒 滨	5,700±90 (3,750B.C.)	2	Gak-19836
机原	10号住居址	諸 砧 a	5,040±80 (3,090B.C.)	10	Gak-19844
机原三本松	33号住居址	諸 砧 I	6,110±80 (4,160B.C.)	3	Gak-19837
机原三本松	39号住居址	九兵衛尾根	4,450±160 (2,500B.C.)	4	Gak-19838
机原三本松	穴124		5,480±80 (3,530B.C.)	5	Gak-19839

\*1 年代算出には LIBBY の半減期5,570が使用されている。

2 測定年代は1950年からの年数 (y.B.P.) である。

## あとがき

七年前、この遺跡の存在を察知できなかった。それまで、井戸尻遺跡群とその周辺では前期中葉と後葉の集落遺跡はいくつか知られていたが、それらに先立つ前葉の集落遺跡はどうして空白になっているのか、疑問に思いつづけていた。よもやそれが山麓部ではなく、釜無川の谷筋に所在するとは、まったく考えの及ばないところだった。なによりも、坂平の扇状地に何らかの遺跡の埋もれること自体、それまでの経験と勘では予測できなかつた。

こうして坂平遺跡の内容がわかってみると一層にも、二つとない井戸尻文化括籠の遺跡をむざむざ潰してしまったことが、痛恨の念を越えた重い事実として将来に残されていくほかないのだと思う。

さまざまな事情が加わって手間取った報告書作成だったが、いちばんの難題は、多くの住居址で「古い土器と新しい土器とが混じっている」ことであった。そもそもこの時期の上器に実地で当たったことがないだけに、基礎的な学力を持ち合わせていなかつた。

先学の編年観を離れ、遺跡のなかで遺物があるがままの姿を素直に理解しようとする側に立ち、その方法を思いつき、従来とは異なった結論に至つたのは、執筆期限を大幅に過ぎてからの半月余りの間のことだった。最後の土壇場で逆転劇を演じたようなものだった。いかにも俄か勉強であるが、われわれはこれで行くほかないと確信した。先学諸氏の忌憚のない批判を仰ぎたい。

報告書の作成に着手してからこの間、同時代の遺跡や遺物を見て勉強する機会に恵まれた。とくに坂平の二年後、98年の秋に発掘された塙尻市剣ノ宮遺跡を見学でき、後日、平出博物館で遺物を見せていただいたのは、たいへん参考になった。

昨年の5月10日、坂平の遺物検討会を催し、近隣の研究者の皆さんに石器と土器を見てもらい、いろんな意見をきくことが出来た。充実して楽しくもあり、有り難い一日だった。

また、昨年11月には南アルプス市（旧檜原町）長田口遺跡の住居址と遺物を見せていただき、また同月には茅野市芥沢の遺跡見学の機会を得た。ほか、この間に下諏訪町武居、茅野市阿久尻、同広井出の石器を見せていただいた。

折りしも昨年11月30日には、宮出村で「中部高地に開花した中越文化」をテーマとして、長野県考古学会の秋期大会が催された。坂平遺跡の発表をするとともに、他遺跡の状況をきくことが出来たのも幸いであった。

それにしても、遺跡のもつあまりにも豊富な内容の前で、手の届かない課題をいくつも残してしまった。湮滅してしまった坂平への道程は六千年の彼方、果てしもなく尽きることはないけれど、本書がせめてもの鎮魂となれば、これに過ぎるものはない。

（小林公明）



坂平遺跡附近概観（手前は釜無川 中央左手の水田が坂平地盤 前山より1992年11月撮影）

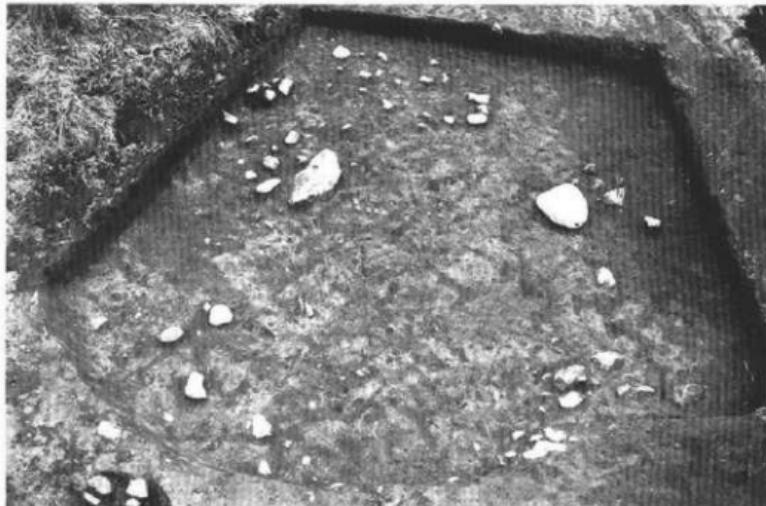
図版 2



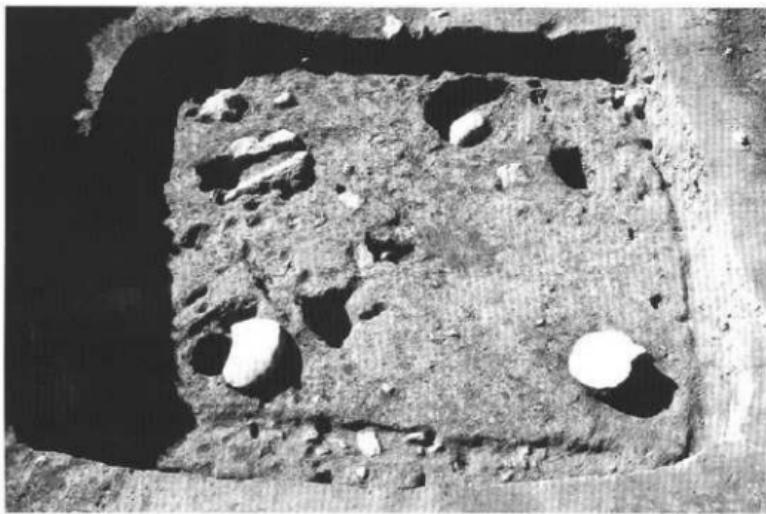
坂平地籍遠景（夏焼より2004年3月撮影）



坂平の扇状地（右手が庵ノ沢川 左上手が発掘地点 2004年3月撮影）

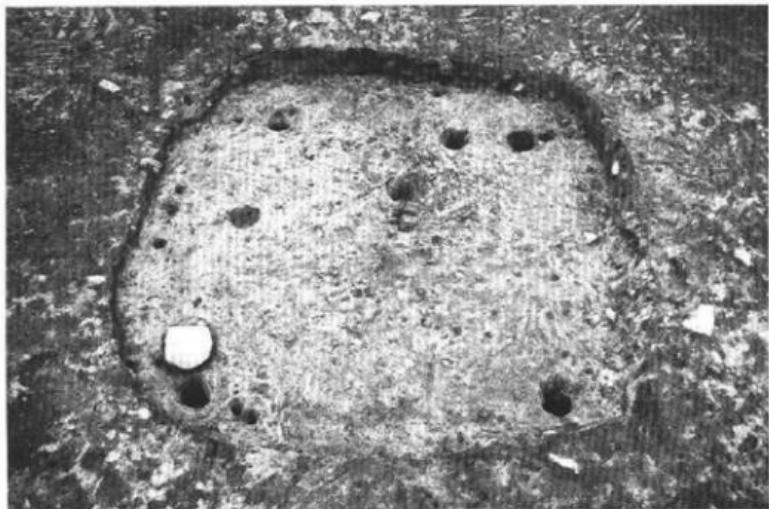


1号住居址

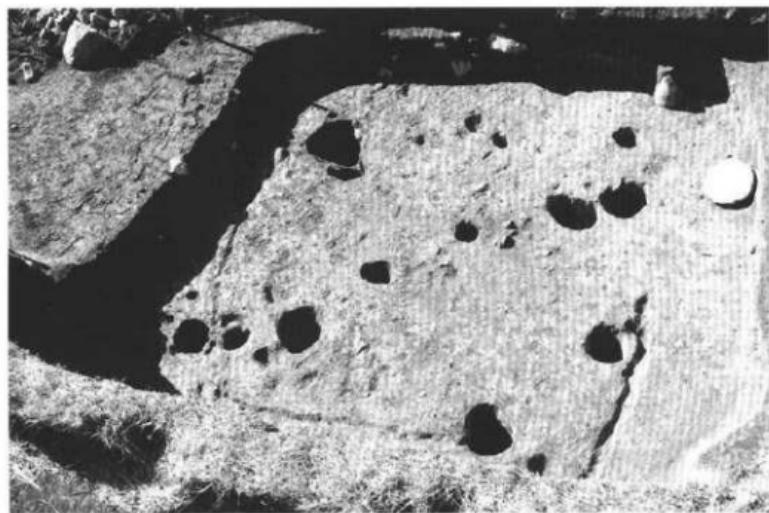


2号住居址

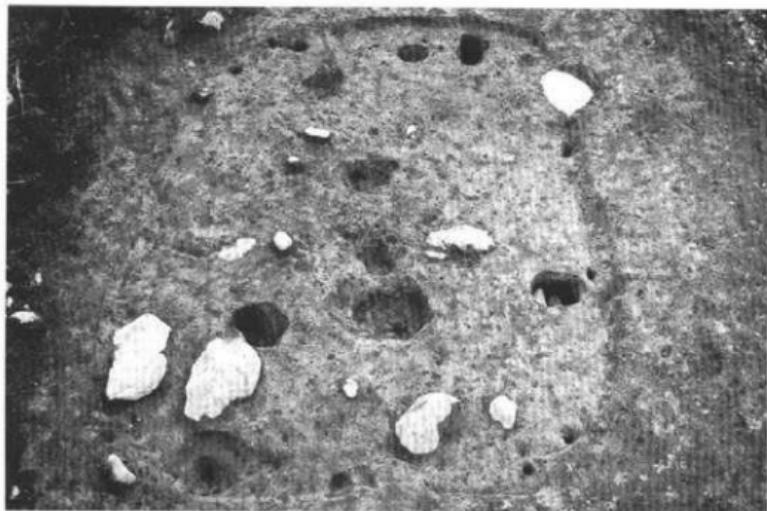
図版 4



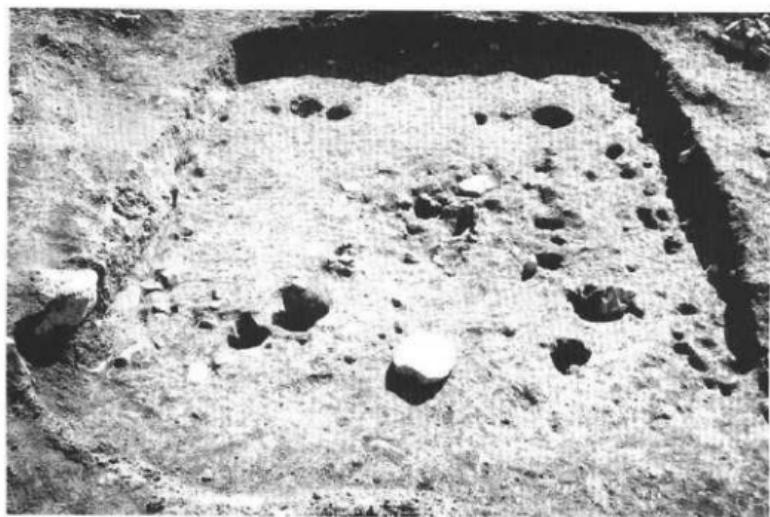
3号住居址



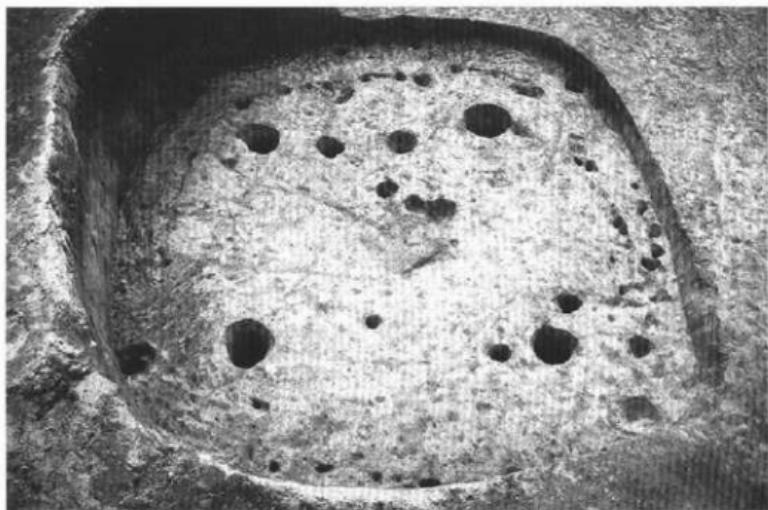
4号住居址



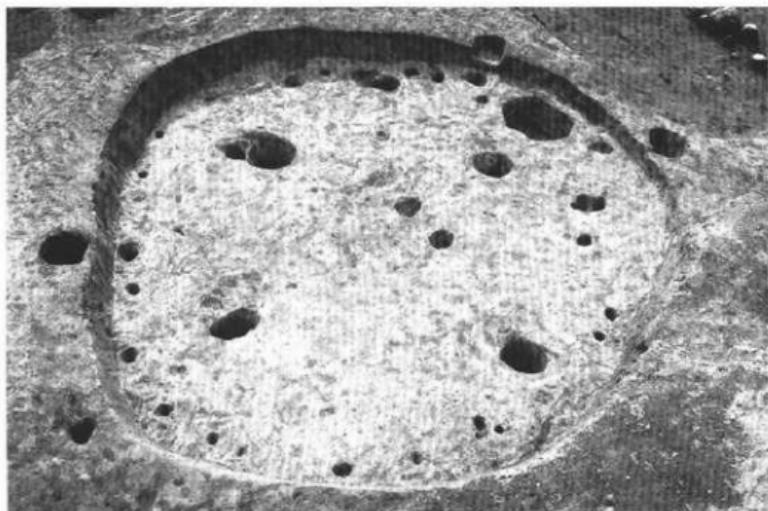
5号住居址



6号住居址



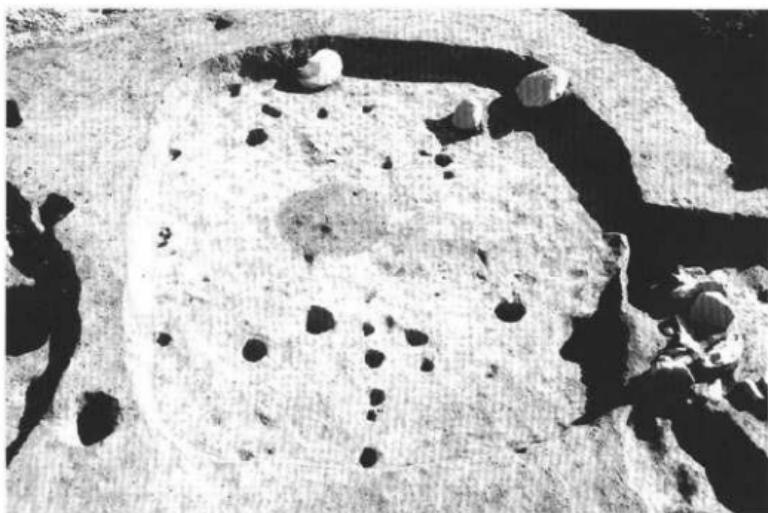
7号住居址



8号住居址



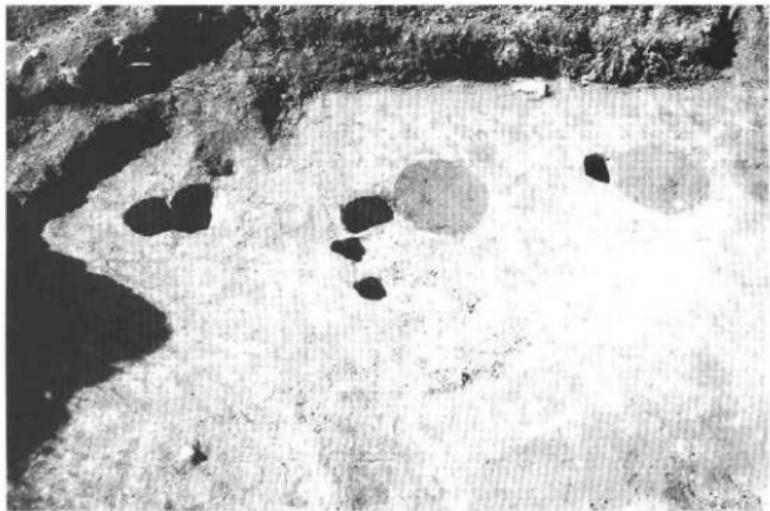
9号住居址 炭化材出土状態



9号住居址



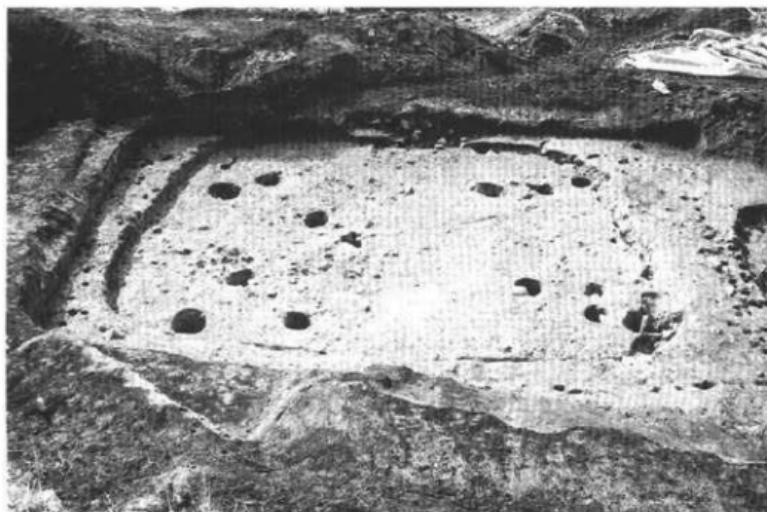
10号住居址



11号住居址

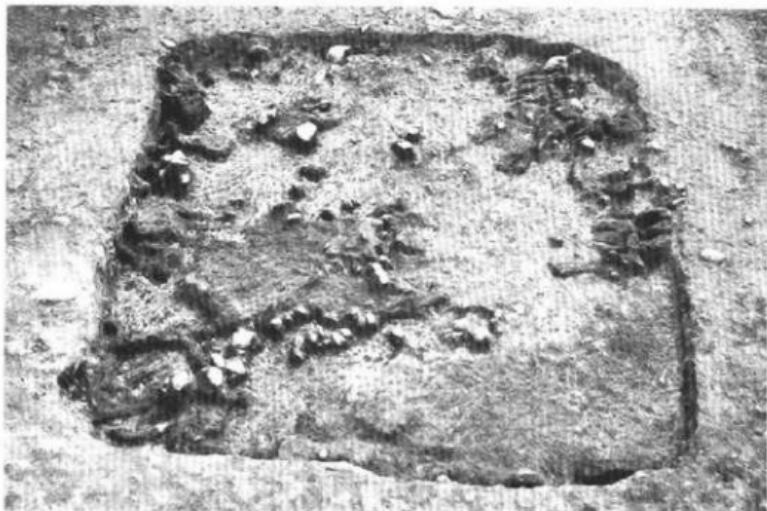


12・13、14号住居址上面（左が12・13号、右が14号址）

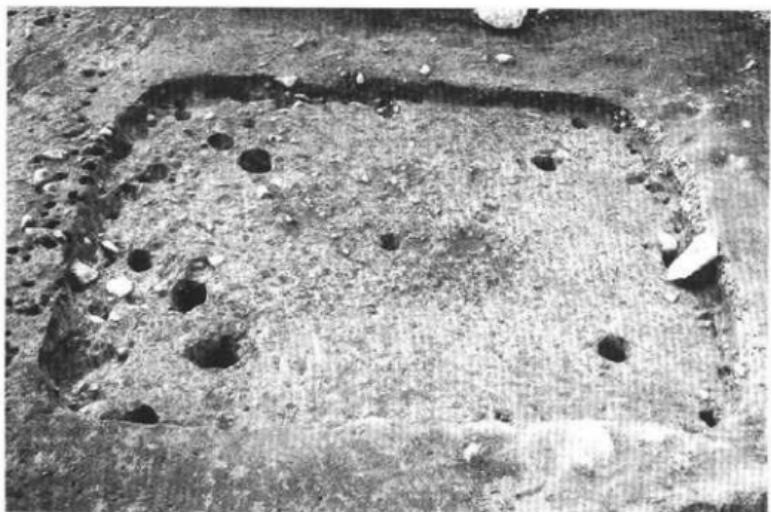


12・13号住居址

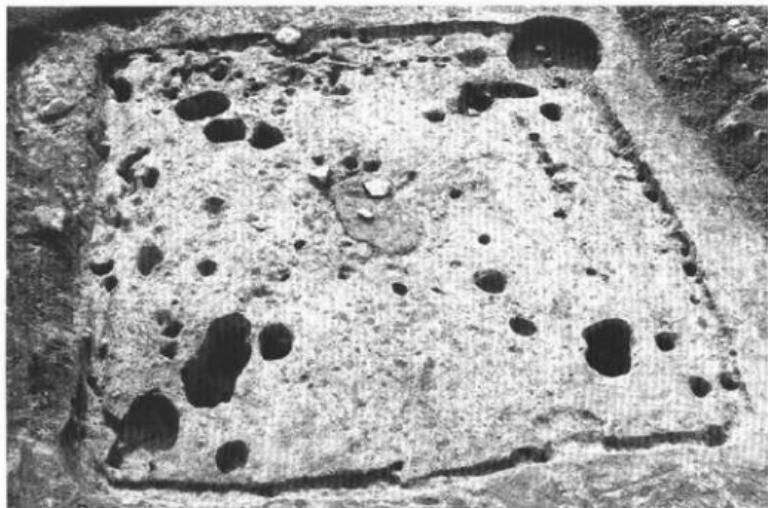
图版 10



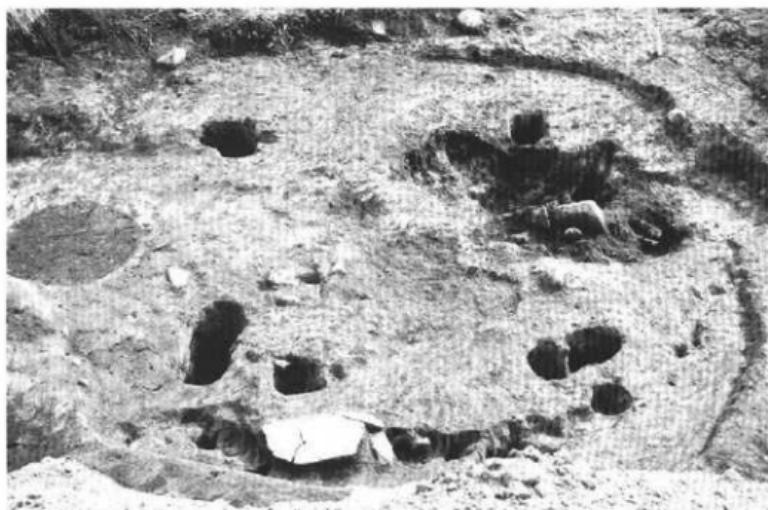
14号住居址 炭化材出土状態



14号住居址

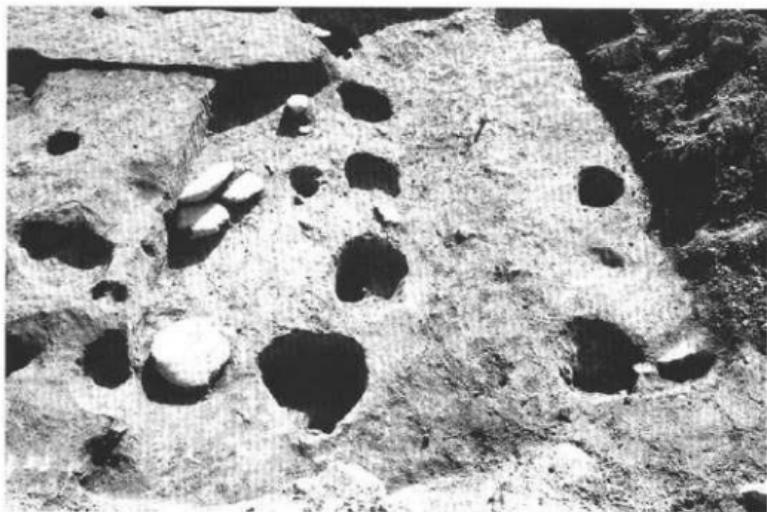


15号住居址、3号小堅穴（右奥の角）

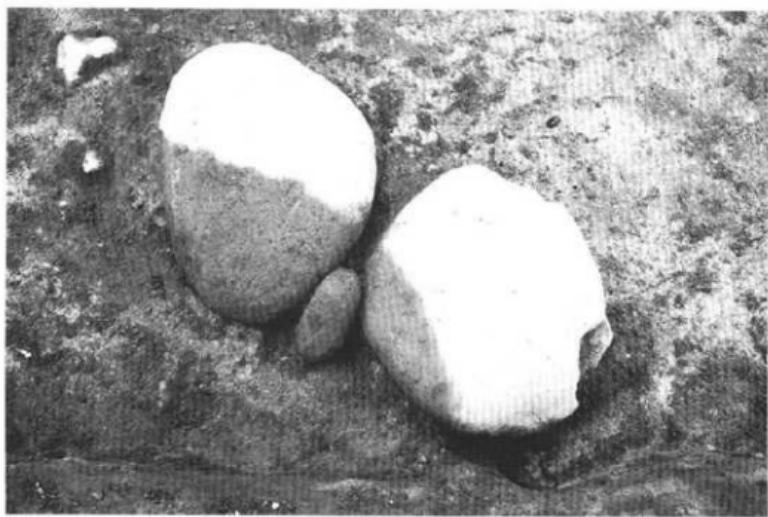


16号住居址、4号小堅穴（右端）

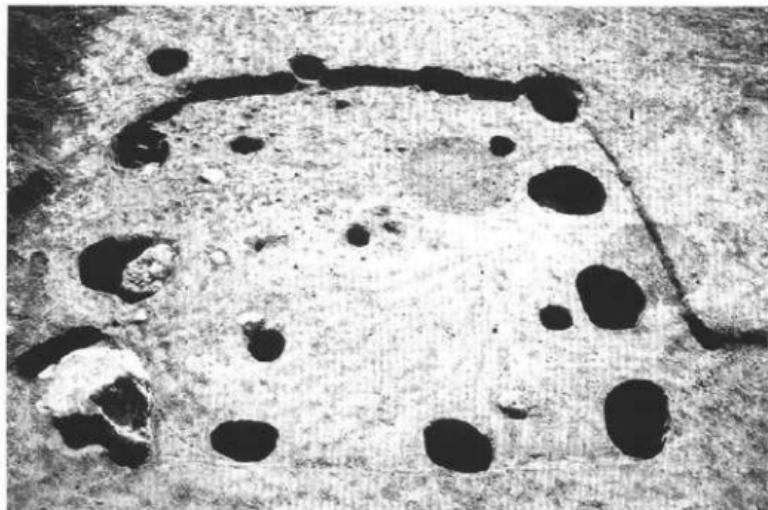
図版 12



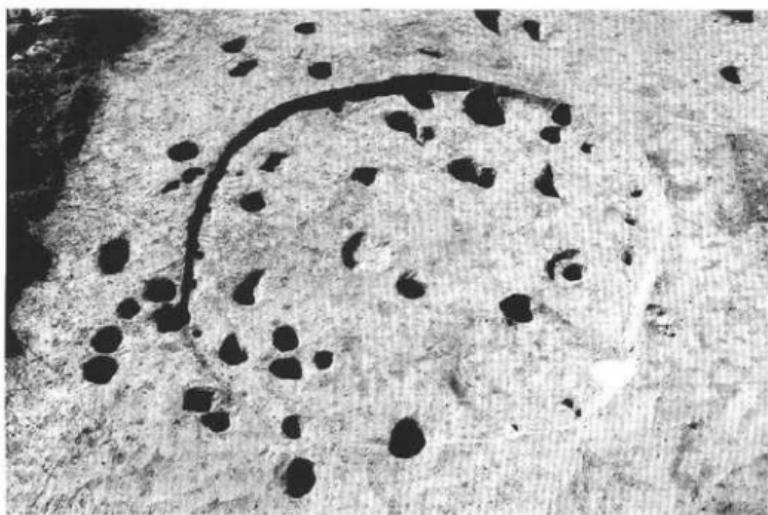
17号住居址（左は1号建物址）



17号住居址 鏡餅状扁平石の出土状態

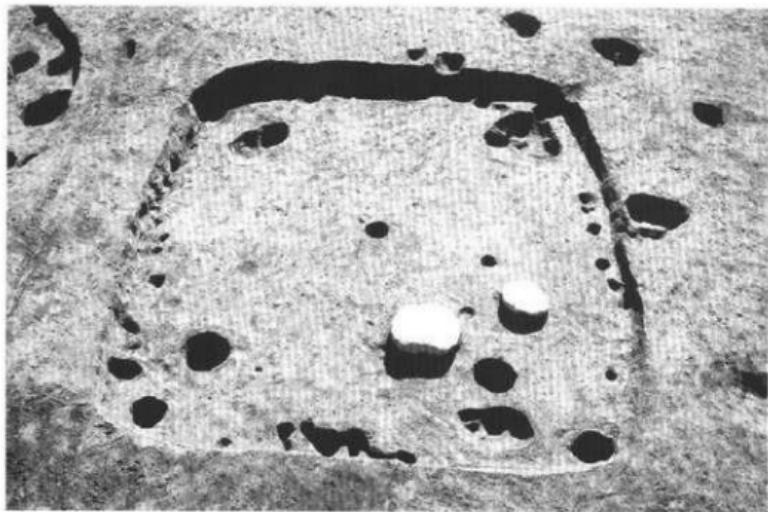


18号住居址と2号建物址



19号住居址

図版 14



20号住居址



21号住居址



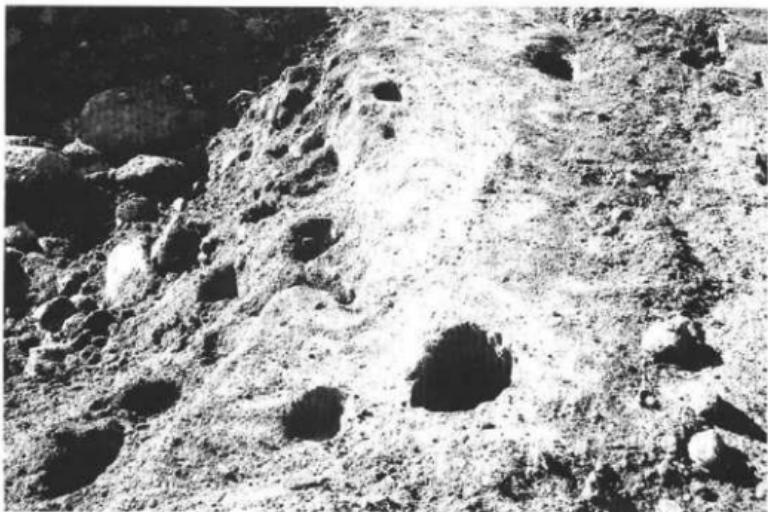
手前が19号、右奥が20号、左奥が21号の各住居址



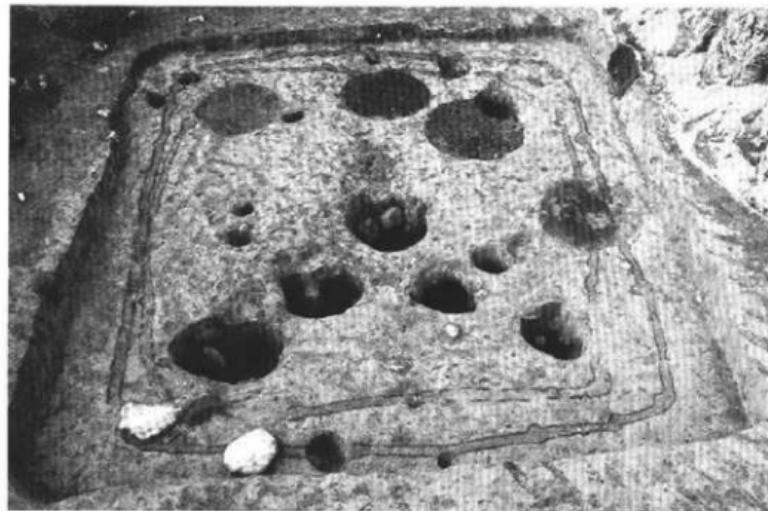
22号住居址



23号住居址（右奥は20号、左奥は22号址）



24号住居址



25号住居址

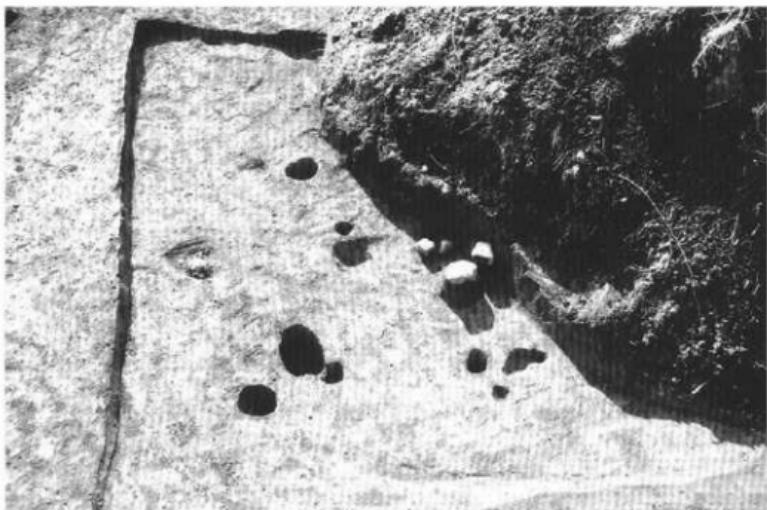


26号住居址

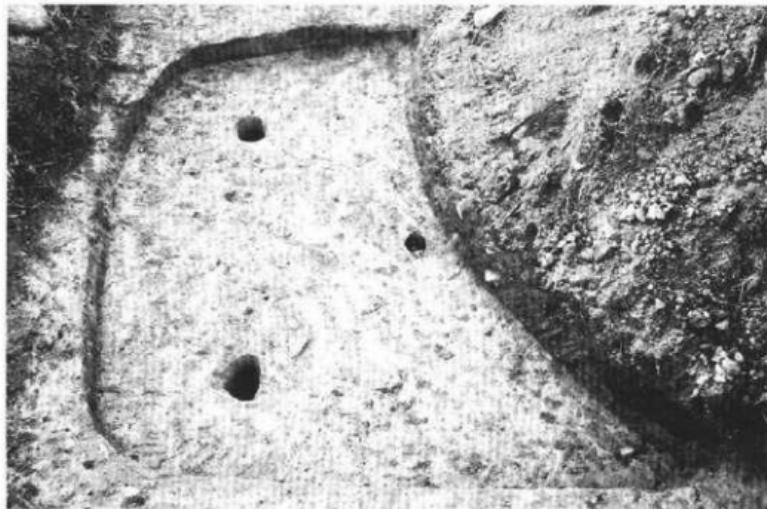
图版 18



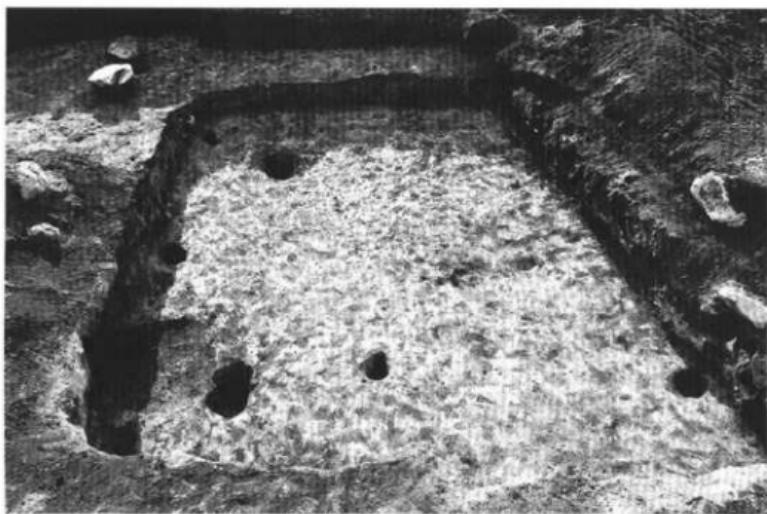
27号住居址



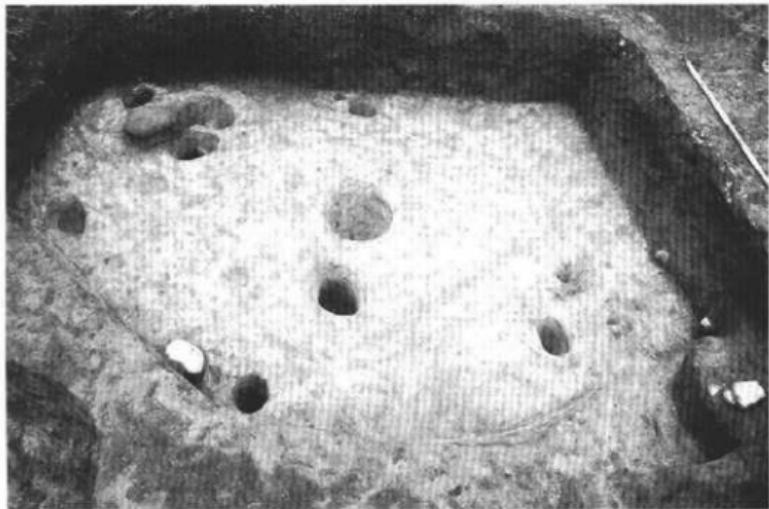
28号住居址



30号住居址



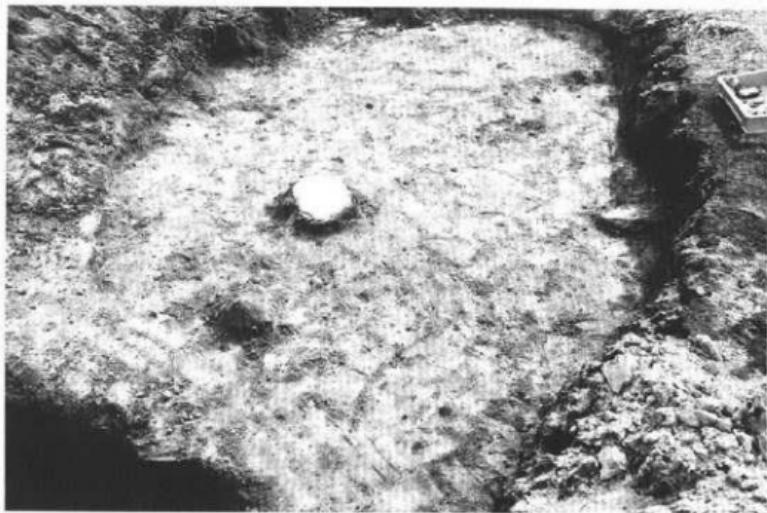
31号住居址（奥は36号址）



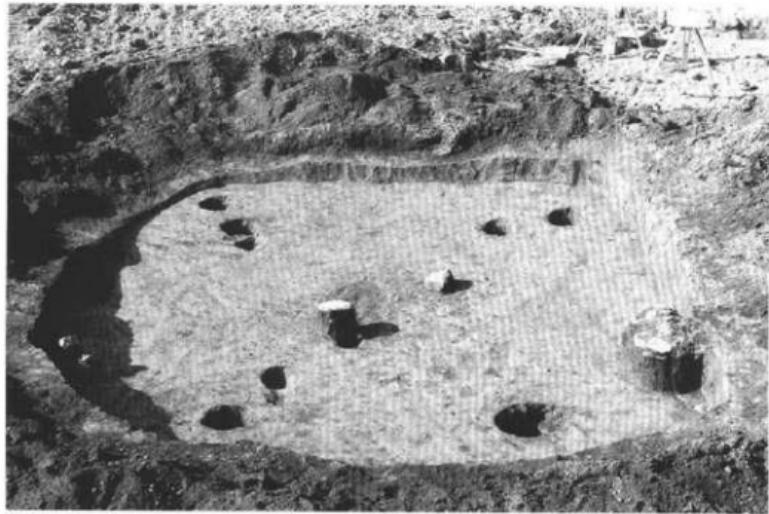
32. 33号住居址（右侧が33号址）



34. 35号住居址（左側が34号址）



36号住居址



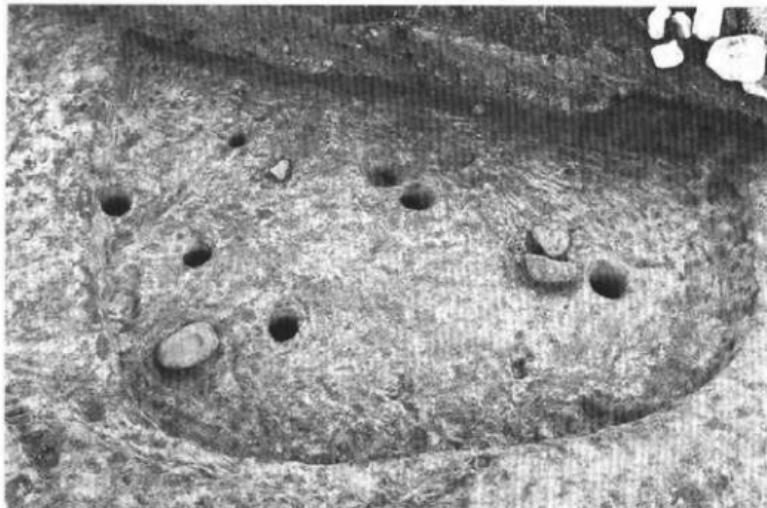
37号住居址



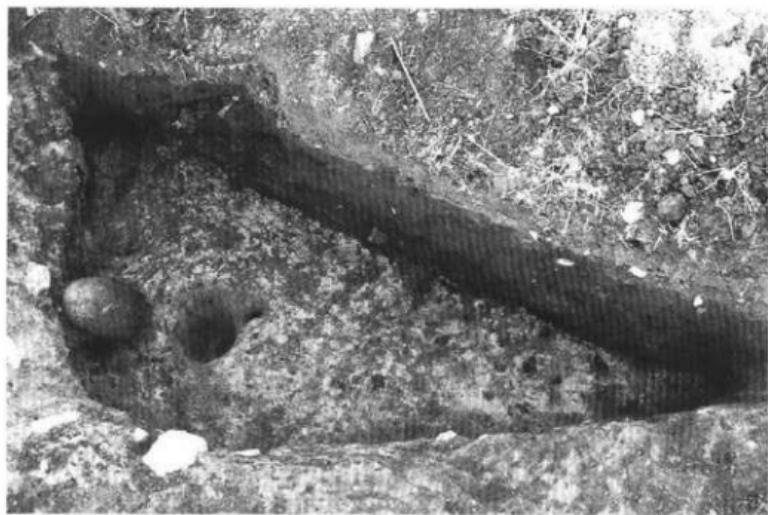
38号住居址



39、40号住居址（手前が39号、奥が40号址）



41号住居址



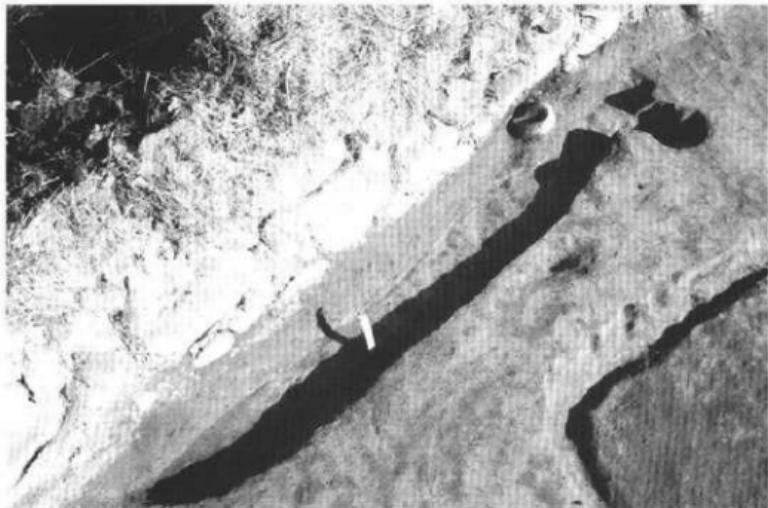
42号住居址



47号住居址



手前が48号、奥が50号、中ほどに49号の各住居址

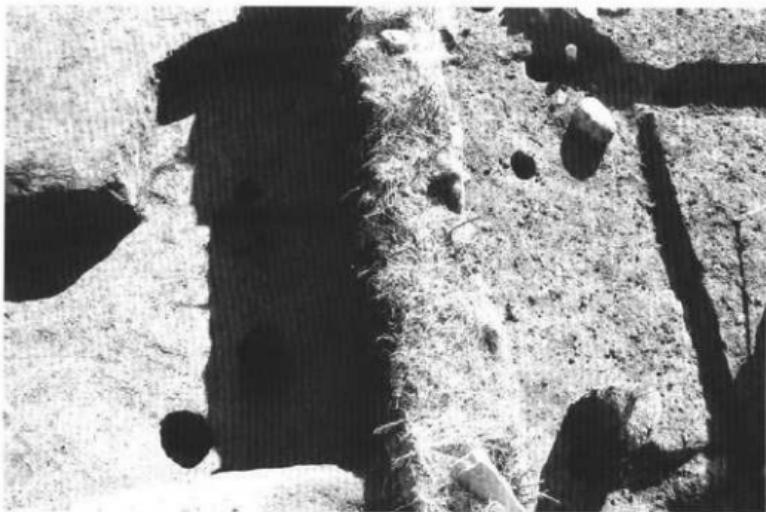


51、53号住居址（外側が51号、内側が53号址。右下は平安6号址）

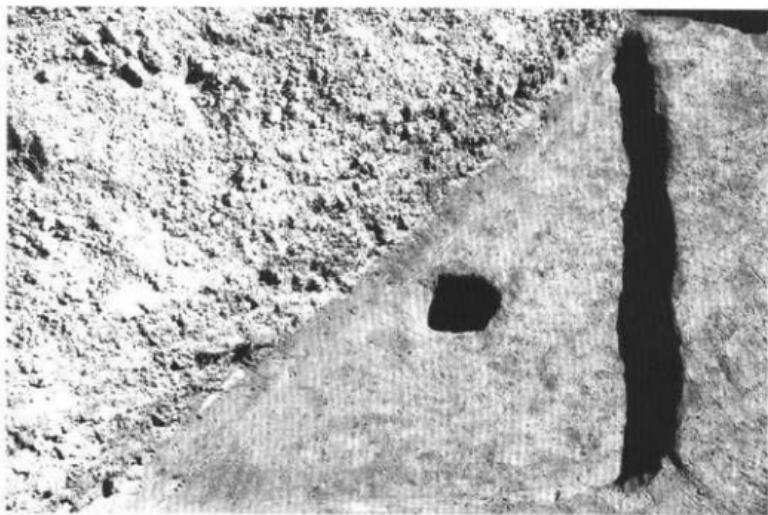


52号住居址。6号小窯穴

图版 26



54、57号住居址（左端为57号址）



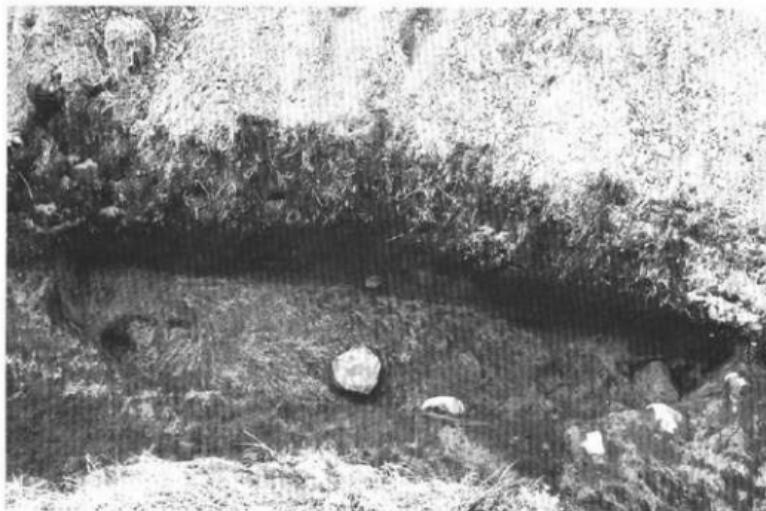
55号住居址



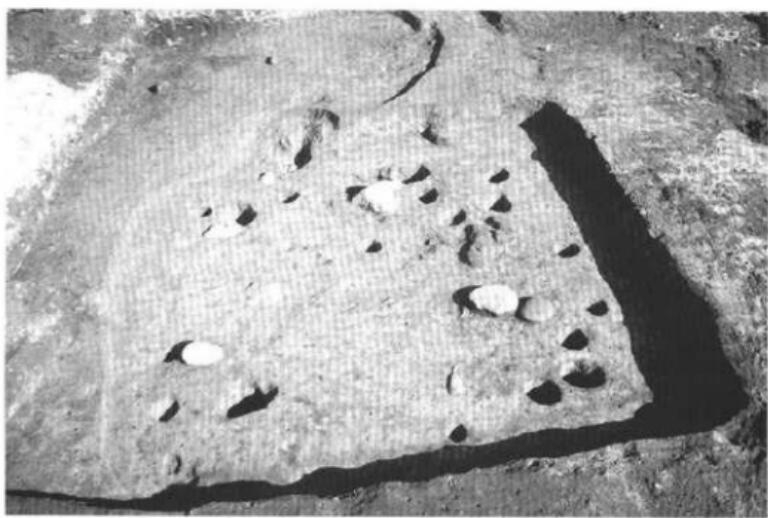
56号住居址



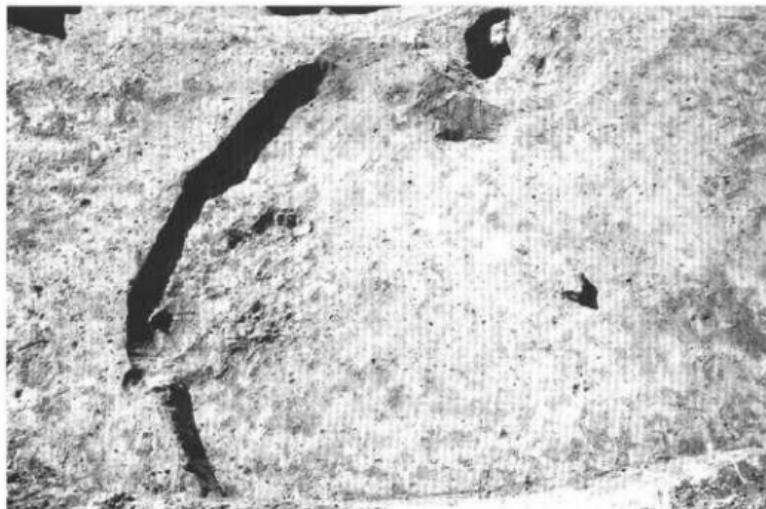
58号住居址



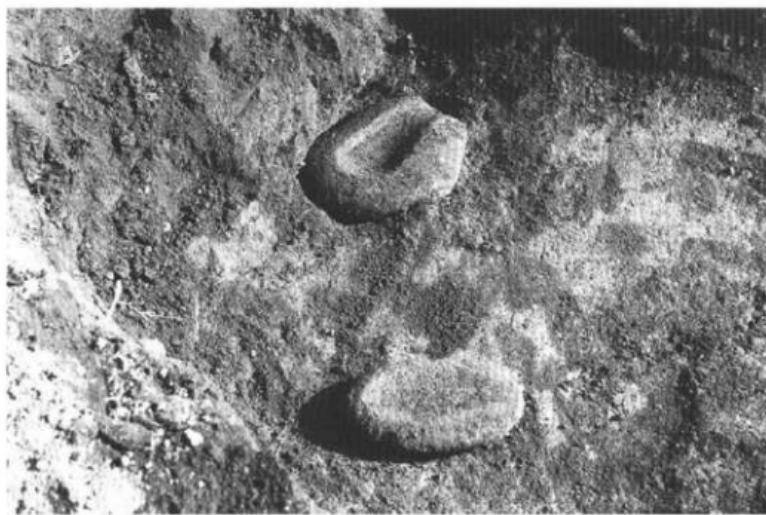
59号住居址



60号住居址（奥は61号址）



61号住居址



63号住居址 磨りうす出土状態

図版 30



1号建物址（奥は17号住居址）



1号建物址